松前町

福山城下町遺跡（2）

―松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書―

令和５年度

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

松前町

福山城下町遺跡（2）

―松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書―

令和５年度

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

遺跡周辺空中写真　国土地理院の空中写真［CHO76-21 C19-4］（昭和 51 年撮影）を使用

遺跡遠景（矢印部分が発掘区）

口絵 2

舟敷　出土状況　D 地区　地番 14-1　北東から

舟敷上位　遺物出土状況

火災面　磁器片出土状況　D 地区　地番 15-2　Ⅳ層　東から

D 炉 1　土層断面　D 地区　地番 14-1　東から

D 炉 2　坩堝出土状況　D 地区　地番 14-1　北から

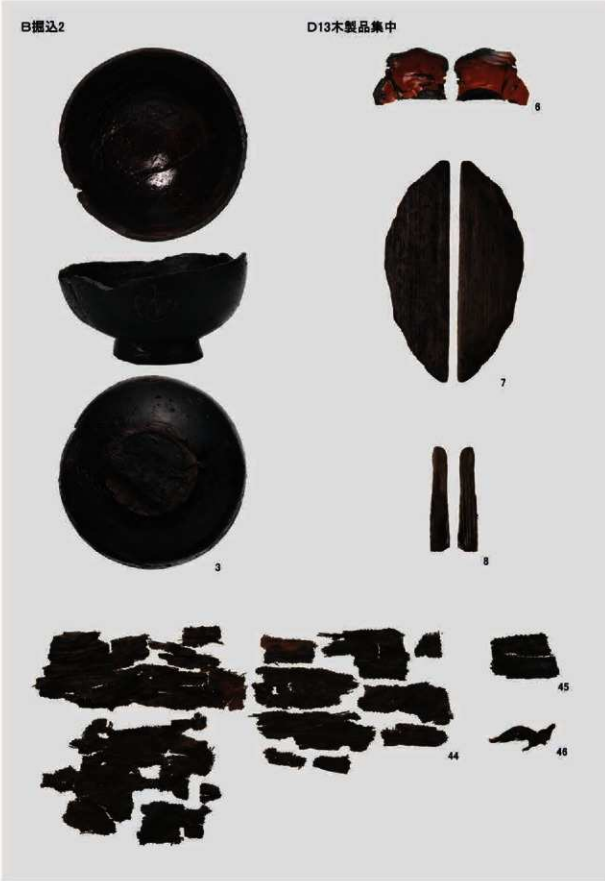
繊維製品出土状況　D 地区　地番 13　南から

舟敷北側　縄出土状況　北東から

口絵 4

漳州窯系磁器

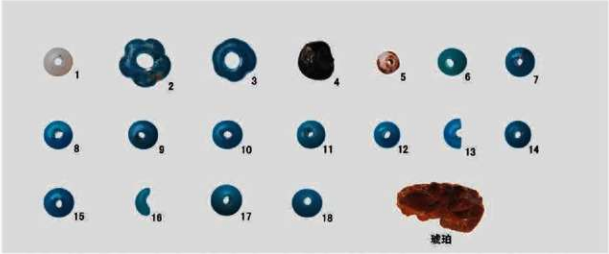
火事場整理穴出土遺物



木製品等 (1)

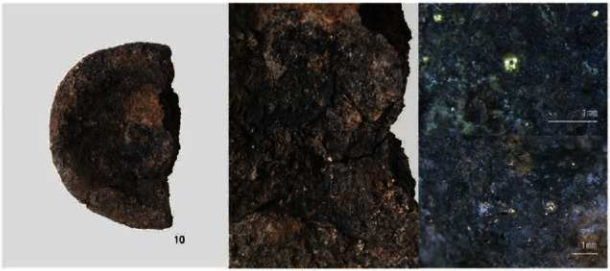
口絵 6

木製品等 (2)



ガラス玉等

骨角貝製品



坩堝

口絵 8

『松前屏風』（唐津内町周辺）

松前町郷土資料館所蔵

『松前分間絵図』（唐津内町周辺）

『松前町史』史料編第二巻付図に加筆

例　　言

1．本書は、北海道渡島総合振興局が行う松前港線改良工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが令和４（2022）～５（2023）年度に実施した松前町福山城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。当センターが調査した福山城下町遺跡においては２冊目の報告書となる。

2．福山城下町遺跡の発掘調査については、当センターが令和５年３月に発行した『調査年報34』・『テエタ49』、同６年３月に発行した『調査年報35』・『テエタ50』、南北海道考古学情報交換会が令和４年12月に発行した『第43回南北海道考古学情報交換会発表資料集』、同５年12月に発行した『第44回南北海道考古学情報交換会発表資料集』に概要を報告しているが、本報告書の内容が優先する。

3．発掘調査は第１調査部第１調査課、第２調査部第２調査課が担当した。

4．整理作業の担当は、新家水奈、山中文雄である。

5．木製品、金属製品の保存処理作業は第１調査部第１調査課主査立田　理（令和４年当時第１調査部普及活用課主査）、主任田口　尚の協力を得た。

6．現地の写真撮影は令和４年度は吉田裕史洋が、令和５年度は中山昭大が行った。掲載遺物の撮影は第１調査部第１調査課長中山昭大、主任菊池慈人が行った。一部吉田裕史洋（第２調査部第２調査課当時）も行っている。

7．本書の編集は新家・山中が行った。執筆者は各項目文末に示した。
　Ⅱ章掲載の周辺の遺跡分布地図は、第１調査部第２調査課主査柳瀬由佳の協力を得た。

8．付編Ⅰ（DVD）の分析・鑑定は以下の機関・個人に依頼・委託または協力を得た。
　1　枝の年代測定：株式会社加速器分析研究所
　2　人骨のC/N比分析、年代測定：株式会社パレオ・ラボ
　3　出土生材、種子の年代測定：株式会社パレオ・ラボ
　4　火山灰同定：アースサイエンス株式会社
　5　土壌中の珪藻分析：いしかり砂丘の風資料館（志賀健司氏）
　6　土陶磁器鑑定：東京大学埋蔵文化財調査室（堀内秀樹氏）
　7　鍛冶関連遺物の分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
　8　坩堝等付着物の化学分析：国立科学博物館（沓名貴彦氏）
　9　木製品樹種同定：第１調査部第１調査課　立田　理、菊池慈人
　10　ガラス玉組成分析：奈良文化財研究所（田村朋美氏）、余市町教育委員会（髙橋美鈴氏）
　11　動物遺存体の鑑定：第２調査部第３調査課　課長　土肥研晶（令和４年当時第１調査部第２調査課）、第１調査部第２調査課　主査　福井淳一
　12　出土人骨の取り上げ・保存・鑑定：新潟医療福祉大学（澤田純明氏）

9．調査に当たっては、下記の諸機関および個人よりご指導、ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。
北海道教育委員会、松前町役場、松前町教育委員会　佐藤雄生、松前町唐津地区町内会、松前町議会、松前町立松城小学校、松前警察署、松前消防署、ほくでんネットワーク福島、NTT東日本株式会社つうけん、函館バス株式会社、河野土建株式会社、恵庭市教育委員会郷土資料館　杉浦正和、北海道大学大学院農学研究院　佐野雄三、北海道立文書館　山田　正、標津町教育委員会　小野哲也、国立アイヌ民族博物館　森岡健治、安土城考古博物館　大道和人、勝山市監査委員事務局　宝珍伸一郎、元興寺文化財研究所　瀬戸哲也、同志社大学　浜中邦弘。

記号等の説明

遺構図・層序図

1．方位記号は座標北（方眼北）を指す。
2．平面図の「・」付きアラビア数字は、その地点の標高（単位：m）を表す。
3．平面図の破線は遺構等の重なりで隠れる（下になる）部分を表す。
4．断面図の一点鎖線は、線の上下が同層であることを示す。
5．平面図・断面図には、必要に応じて、礫の略号「S」、木の略号「W」を付けた。
6．堆積物の粘り・締りの判定には、『土壌調査ハンドブック』（日本ペドロジー学会編1997）に記された「粘着性」・「堅密度」を用いた。両者の判定基準は以下のとおりである。なお、注記では前者を「粘：」後者を「堅：」と略称した。
⑴　粘着性「なし」：土壌がほとんど指に付着しない。「弱」：土壌が一方の指に付着するが、他方の指には付着しない。指を離したときに土壌はのびない。「中」：両指頭に付着する。指を離したときに土壌が多少糸状にのびる傾向を示す。「強」：両指頭に強く付着する。指を離したときに土壌が糸状にのびる。
⑵　堅密度「すこぶるしょう」：ほとんど抵抗なく指が貫入する。「しょう」：指が土層内にたやすく深く入る。「軟」：はっきりと深い指のあとが容易にできる。「堅」：強く押しても指のあとがわずかしか残らない。「固結」：移植コテによってやっと土壌を削れる。
7．白頭山苫小牧テフラについては、略号の「B－Tm」を用いたところがある。
8．遺構の計測値で、欠損部分や未調査部分がある場合は現存長を（　）で閉じて示した。

遺物図

1．遺物の計測値で、欠損部分がある場合は現存長を（　）で閉じて示した。

その他

1．令和５年度の調査工程「１～６期」は、発掘区内の位置を表すため、「①～⑥地区」と呼び替えることがある。
2．D地区地番14－１をD14－１、①地区地番84－２地先を①84－２地先のように、地区地番の語を略することがある。

目　　次

口　絵
例　言
記号等の説明
目　次
挿図目次
表目次
写真図版目次

Ⅰ　調査の経過
1　調査要項…… 1
2　調査体制…… 1
3　調査にいたる経緯…… 1
4　調査の経過…… 2

Ⅱ　遺跡の位置と環境
1　地理的環境…… 5
2　歴史的環境…… 6

Ⅲ　調査の方法
1　発掘作業の方法…… 19
2　整理作業の方法…… 21

Ⅳ　現地調査の状況
1　概　要…… 25
2　A地区…… 27
3　B・①地区…… 28
4　C・②・③地区…… 28
5　D・④・⑥地区…… 30
6　E・⑤地区…… 36

Ⅴ　遺　物
1　概　要…… 63
2　土陶磁器…… 63
3　金属製品…… 118
4　金属生産関連遺物…… 140
5　木製品等…… 144
6　石製品…… 178

7　骨角貝製品…… 182
8　ガラス玉…… 189

引用文献
写真図版
報告書抄録

付編Ⅰ　自然科学分析（DVD所収）
1　福山城下町遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）
2　福山城下町遺跡の放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比測定
3　福山城下町遺跡の放射性炭素年代測定
4　福山城下町遺跡の火山灰同定
5　福山城下町遺跡の珪藻遺骸群集と古環境
6　福山城下町遺跡出土陶磁器の様相
7　福山城下町遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査
8　福山城下町遺跡出土非鉄金属生産関連遺物の科学調査
9　福山城下町遺跡出土木製品の樹種同定について
10　福山城下町遺跡出土ガラス製遺物の自然科学分析
11　福山城下町遺跡出土の動物遺存体
12　福山城下町遺跡から出土した人骨について

付編Ⅱ　カラー図版（DVD所収）

挿図目次

Ⅱ　遺跡の位置と環境

図Ⅱ－１　遺跡位置図……　11
図Ⅱ－２　福山城下町遺跡の範囲と発掘区の位置…　12
図Ⅱ－３　文化年間の福山城下町……　13
図Ⅱ－４　「明治26～27年福山町見取り図」・大正７年「地籍図」……　14
図Ⅱ－５　松前町の遺跡……　15

Ⅲ　調査の方法

図Ⅲ－１　令和４・５年度福山城下町遺跡（字唐津）発掘区……　24

Ⅳ　現地調査の状況

図Ⅳ－１　A地区平面図・断面図……　37
図Ⅳ－２　A地区遺構図……　38
図Ⅳ－３　B・①地区平面図……　39
図Ⅳ－４　B地区断面図(1)・①地区断面図……　40
図Ⅳ－５　B地区断面図(2)・遺構図……　41
図Ⅳ－６　C・②・③地区平面図・C地区断面図…　42
図Ⅳ－７　C地区遺構図……　43
図Ⅳ－８　②・③地区断面図・③地区遺構図……　44
図Ⅳ－９　D・⑥地区平面図(Ⅱ・Ⅲ層)……　45
図Ⅳ－10　D地区平面図(Ⅳ層)……　46
図Ⅳ－11　D地区平面図(Ⅶ層)……　46
図Ⅳ－12　D地区13～14－１断面図……　47
図Ⅳ－13　④地区13地先断面図・D地区13遺構図(1)……　48
図Ⅳ－14　D地区13遺構図(2)・14－１断面図(1)…　49
図Ⅳ－15　D地区14－１断面図(2)……　50
図Ⅳ－16～19　D地区14－１遺構図(1)～(4)　51～54
図Ⅳ－20　D地区15－２断面図・遺構図(1)……　55
図Ⅳ－21～23　D地区15－２遺構図(2)～(4)　56～58
図Ⅳ－24　④地区15－３・15－３地先・17－２・17－２地先平面図・断面図・遺構図…　59
図Ⅳ－25　⑥地区12断面図・遺構図……　60
図Ⅳ－26　E・⑤地区平面図・断面図……　61

Ⅴ　遺　物

図Ⅴ－１　出土陶磁器 産地別構成比……　70
図Ⅴ－２～13　磁器(1)～(12)……　86～97
図Ⅴ－14～27　陶器(1)～(14)……　98～111
図Ⅴ－28～33　瓦・土製品ほか(1)～(6)　112～117
図Ⅴ－34　銭計測位置……　120
図Ⅴ－35～39　鉄製品(1)～(5)……　121～125
図Ⅴ－40～43　非鉄製品(1)～(4)……　126～129
図Ⅴ－44～47　貨幣(1)～(4)……　130～133
図Ⅴ－48・49　金属生産関連遺物(1)・(2)　142・143
図Ⅴ－50～76　木製品等(1)～(27)……　148～174
図Ⅴ－77・78　石製品(1)・(2)……　180・181
図Ⅴ－79　骨角貝製品関連グラフ……　182
図Ⅴ－80・81　骨角貝製品(1)・(2)……　186・187
図Ⅴ－82　ガラス玉……　190

表　目　次

Ⅱ　遺跡の位置と環境

表Ⅱ－１　発掘区地番対照表……　16
表Ⅱ－２　福山城下町遺跡発掘調査歴一覧表……　16
表Ⅱ－３　松前町の遺跡(推文・中～近世)……　17

Ⅲ　調査の方法

表Ⅲ－１　金属製品処理作業項目……　22

Ⅳ　現地調査の状況

表Ⅳ－１　遺構数一覧表……　25
表Ⅳ－２　遺構一覧表……　62

Ⅴ　遺　物

表Ⅴ－１　出土遺物総点数……　68
表Ⅴ－２　土陶磁器点数……　68
表Ⅴ－３　遺構出土 土陶磁器点数……　69
表Ⅴ－４　産地・層位別 土陶磁器点数……　70
表Ⅴ－５～９　掲載磁器一覧(1)～(5)……　71～75
表Ⅴ－10～12　掲載陶器一覧(1)～(3)……　76～78
表Ⅴ－13・14　掲載瓦・土器・土製品・人形ほか一覧(1)・(2)……　79・80
表Ⅴ－15　産地・層位別 陶磁器点数……　80
表Ⅴ－16　産地・層・遺構別 細分類陶磁器点数…　85
表Ⅴ－17　鉄製品等集計表……　134
表Ⅴ－18　非鉄製品等集計表……　135
表Ⅴ－19　貨幣集計表……　136
表Ⅴ－20　掲載鉄製品一覧表……　137
表Ⅴ－21　掲載非鉄製品一覧表……　138
表Ⅴ－22　掲載貨幣一覧表……　139

表Ⅴ－23　掲載金属生産関連遺物一覧表…… 141
表Ⅴ－24・25　掲載木製品等一覧表(1)・(2)
…… 175・176
表Ⅴ－26　木製品等樹種別集計表…… 177
表Ⅴ－27　石製品集計表…… 179
表Ⅴ－28　掲載石製品一覧表…… 179
表Ⅴ－29　骨角貝製品集計表…… 188
表Ⅴ－30　掲載骨角貝製品一覧表…… 188
表Ⅴ－31　掲載ガラス玉一覧…… 189

写真図版目次

図版１　遺跡近景
図版２　Ａ地区
図版３　Ｂ地区
図版４　Ｃ地区(1)
図版５　Ｃ地区(2)
図版６　Ｄ地区地番13(1)
図版７　Ｄ地区地番13(2)
図版８　Ｄ地区地番13(3)
図版９　Ｄ地区地番13(4)
図版10　Ｄ地区地番14－１(1)
図版11　Ｄ地区地番14－１(2)
図版12　Ｄ地区地番14－１(3)
図版13　Ｄ地区地番14－１(4)
図版14　Ｄ地区地番14－１(5)
図版15　Ｄ地区地番14－１(6)
図版16　Ｄ地区地番14－１(7)
図版17　Ｄ地区地番14－１(8)
図版18　Ｄ地区地番15－２(1)
図版19　Ｄ地区地番15－２(2)
図版20　Ｄ地区地番15－２(3)、
Ｅ地区地番10－５・11－６・11－８
図版21　令和５年度①地区
図版22　令和５年度②地区地番17－１地先
図版23　令和５年度③地区地番18－１(1)
図版24　令和５年度③地区地番18－１(2)
図版25　令和５年度③地区地番18－１(3)
図版26　令和５年度④地区地番14－１地先
図版27　令和５年度④地区地番17－２地先
図版28　令和５年度④地区地番15－３地先、
⑤地区地番11地先(1)
図版29　令和５年度⑤地区地番11地先(2)、
⑥地区地番12(1)
図版30　令和５年度⑥地区地番12(2)
図版31　鉄製品(1)
図版32　鉄製品(2)
図版33　鉄製品(3)
図版34　非鉄製品(1)
図版35　非鉄製品(2)、貨幣(1)
図版36　貨幣(2)
図版37　貨幣(3)
図版38　貨幣(4)
図版39　金属生産関連遺物(1)
図版40　金属生産関連遺物(2)
図版41　木製品等(3)
図版42　木製品等(4)
図版43　木製品等(5)
図版44　木製品等(6)
図版45　木製品等(7)
図版46　木製品等(8)
図版47　木製品等(9)
図版48　木製品等(10)
図版49　木製品等(11)
図版50　木製品等(12)
図版51　木製品等(13)
図版52　木製品等(14)
図版53　木製品等(15)
図版54　木製品等(16)
図版55　木製品等(17)
図版56　木製品等(18)
図版57　木製品等(19)
図版58　石製品
図版59　骨角貝製品(1)
図版60　骨角貝製品(2)

Ⅰ　調査の経過

1　調査要項

事　業　名　松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査委託
事業委託者　北海道渡島総合振興局
事業受託者　公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター
遺　跡　名　福山城下町遺跡（北海道教育委員会登載番号：B－02－29）
所　在　地　松前郡松前町字唐津10－5・11－6・11－7・11－8・12・13－2・14－3・15－3・15－4・17－2・18－4・19－2・88－2・85－4・85－5・86－2・87－2・88－2・89－2・90－2・91－2・92－2・92－4・93－3・94－2
調査面積　（令和4年度）　531m^2
（令和5年度）　854m^2
現地調査期間　（令和4年度）令和4年5月12日～9月30日
（令和5年度）令和5年7月11日～9月29日
整理期間　（令和4年度）令和4年10月3日～令和5年3月31日
（平成5年度）令和5年5月22日～令和6年3月29日

2　調査体制

［令和4年度］
理事長　長沼　孝
専務理事　馬橋　功（事務局長兼務）
常務理事　鈴木　信（第1調査部長兼務）
第2調査部　部長　村田　大
第2調査課　課長　新家　水奈（発掘担当者）
主査　吉田　裕吏洋（発掘担当者）
主査　山中　文雄（発掘担当者）
第1調査部第1調査課　主査　坂本　尚史

［令和5年度］
理事長　長沼　孝
専務理事　馬橋　功（事務局長兼務）
常務理事　鈴木　信（第1調査部長兼務）
第2調査部　部長　村田　大
第2調査課　課長　新家　水奈
主査　山中　文雄（発掘担当者）
第1調査部第1調査課
課長　中山　昭大（発掘担当者）
主任　菊池　慈人（発掘担当者）

3　調査にいたる経緯

(1) 道道松前港線工事に関わる過去の発掘調査

道道松前港線拡幅工事に関わる発掘調査は、平成17（2005）年度からすでに松前町教育委員会（以下、町教委）によって数回にわたり行われている。経緯は平成5年6月に松前町が北海道の「歴史を生かすまちづくり」プロジェクトの整備モデル地区に指定されたことに始まる。

これに伴い、福山城下の「商店街ゾーン」のまちなみ整備の一環として道道松前港線（通称「城下通り」）の改良工事が渡島支庁函館土木現業所（当時。以下、土現）によって計画された。整備の対象は「松城工区」、「福山工区」、「唐津工区」の大きく3つの工区に分けられ、平成16年12月、土現から北海道教育委員会（以下、道教委）あてに「松城工区」の工事に関わる「埋蔵文化財保護のための事前協議書」が提出された。道教委は翌平成17年に要発掘と回答、土現は町教委に発掘調査を委託し、

同年11月より町教委により459m²が調査された。うち199m²は「福山城（B－02－53）」、260m²は「福山城下町遺跡（B－02－29）」である。翌平成18（2006）年、町教委によって報告書が刊行された（2006　町教委）。この調査により、城下一帯が「福山城下町遺跡」の名称で埋蔵文化財包蔵地として再認識され、登載されるにいたる。

同年、道教委によって唐津・松域・福山の３工区にわたる試掘調査が行われた。試掘の結果を踏まえ、土現に対し「要発掘調査」の回答がなされた。土現は町教委に埋蔵文化財調査を依頼、町教委はこれを受託し、同年９月より790m²について発掘調査を行った。この調査により、唐津～松域～福山地区まで途切れなく遺跡が包蔵されていることが裏付けられた。調査は平成19年２月まで続けられ、同年発掘調査報告書が刊行されている（2007　町教委）。

同年４月、引き続き土現からの事前協議を受け、道教委は要発掘の回答を行う。６月には町教委が土現との契約により松域地区の60m²の発掘調査を受託している。調査は夏に行われ、発掘調査報告書が同年度内に刊行された（2008　町教委）。

平成24（2012）年北海道渡島総合振興局（以下、振興局）は「松前港線　交付金事業」に関わる「埋蔵文化財保護のための事前協議書を道教委に提出した。事業予定地5,070m²内に「福山城下町遺跡」の所在が周知であったためた、この事前協議書には町教委からの「所在調査及び試掘調査の必要」を記した調書が添付された。翌平成25（2013）年、町教委による試掘調査が行われた。この試掘調査の結果を踏まえ、道教委は要発掘・工事立会の回答を出し、町教委は翌平成26（2014）年７月に振興局から委託された発掘調査を受託、契約を締結した。発掘調査は平成26年９月から開始され、発掘調査報告書が平成27（2015）年に刊行された（2015　町教委）。

一方事業は異なるが、平成22（2010）年、財団法人北海道埋蔵文化財センター（当時。以下、センター）が字福山の一部で「福山城下町遺跡」の発掘調査を行っている（町道朝日豊岡線代行事業改良工事に関わる埋蔵文化財発掘調査　2012　北埋調報290）。また、平成29（2017）、30（2018）年には弘前大学による学術調査が字豊岡、字松城で行われている（弘前大学　2018、2019）。

（2）埋蔵文化財保護のための事前協議

令和３（2021）年、北海道渡島総合振興局函館管理部事業課（以下事業課）より、唐津地区の道道松前港線改良工事（工事面積1855.7m²）に伴う「埋蔵文化財保護のための事前協議書」が道教委に提出された。道教委はこれを受け、同年10月現地で範囲確認調査を行い、工事面積1855.7m²のうち、770.9m²について発掘調査が必要と判断した（その後603m²に変更）。調査は公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（以下、センター）が受託し、令和４（2022）年４月事業課と契約を交わした。

４　調査の経過

（1）令和４年度の発掘調査の経過

令和４（2022）年４月より準備を行い、松前町の桜まつり終了後５月12日から現地調査を開始した。人力調査必要数20名の人工確保が難しく、５月は６名でスタートし、６月１日付で７名の人工を追加し、９月末まで計13名で調査を行った。

令和４年度の福山城下町遺跡の調査は、道道松前港線の歩道部分を海・山両側で行った。範囲確認調査で最も遺物が多く出土した海側のD地区、西側交差点北角にあたるA地区から着手し、６月A地区終了後、東端のE地区に着手、E地区終了後北側（山側）のB地区の調査を東から西へ進めた。９月にはB地区と並行して西側交差点南角のC地区の調査に着手した。D地区は最も包含層が厚く、ま

た残りが良く、遺物、遺構も多く検出されたため５～９月末まで調査が続いた（図Ⅲ－１）。

調査開始後まもなく、発掘調査内に残る信号機、電柱、NTTケーブル、消火栓などの障害物の扱いについて６月16日、道教委、北海道渡島総合振興局函館建設管理部松前出張所（以下、出張所）、センターの３者で現地協議を行った。その際出張所から工事区内の障害物等の扱いや歩道縁石、車道の掘削に関して「24条申請」（道路承認工事申請（道路法第24条））不提出の指摘を受け、強く提出を求められた。これを受けセンターは出張所に７月13日、９月20日の２度申請を行ったがいずれも受理されず、令和４（2022）年度調査が可能となったのは、障害物、歩道縁石、車道部分を含まない範囲、計531m^2であった。結果、９月26日出張所より令和４年度調査分に関しては「24条申請」書不要の連絡があり、障害物周辺、縁石部分、車道部分は次年度以降に調査が先送りとなった。

また調査が進むにつれ、地表面から80cmに満たない深度であっても、部分的に近世の遺物包含層が残存していることが判明し、センターは道教委に報告、８月下旬道教委、事業課、センターの３者で現地協議を行い、立会対象範囲であった車道本線部分も本調査対象となった。事業課は現地調査期間延長により対応するようセンターに要請したが、調査区拡張に必要な積算材料が事業課から提示された時期が遅れ、センター側からの積算資料提出後、事業課から延長の有無の回答があったのは発掘調査終了予定日が迫る９月21日であった。検討の結果、同年の発掘調査期間延長は不可能と判断され、現地調査は９月29日に終了した。

(2) 令和５年度の発掘調査の経過

令和４年度の現地調査の結果、隣接する町道を含む車道下の調査も必要とされ、道教委より提示された面積は当初918m^2であった。しかし未買収地および建造物の移転等が間に合わないなどの理由で126m^2が先送りされ、854m^2が調査対象となった。令和５年度は車道本線の調査であるため、「道路承認工事申請」が必要となることが出張所より前年度から指摘されていた。このため令和５年３月２日に事業課、出張所、センターとの３者打ち合わせ（出席者事業課１名、出張所６名、センター４名）を松前町の出張所にて行い、申請に関する注意事項等を確認した。申請に必要と提示された各方面との協議簿を作成するため、３月16、17日に現地でNTT東日本（つうけん）、福島町ほくでんネットワーク、松前消防署、松前警察署、松前町役場建設水道課、松前町政策財政課、函館バス株式会社の各担当者と協議を行った。

５月22日付で事業課との契約が行われ、道路掘削に際し必要とされた「道路承認工事申請」を提出したが、出張所より数回（４/28、５/23、６/２、６/21、６/22、６/23）にわたる訂正の通達があり、再度松前町水道課、函館バス、松前町松城小学校、松前町中学校、松前町唐津地区町内会と協議した上、協議簿を作成し追加提出した。松前出張所および事業課の審査が完了したのは７月４日、その後渡島総合振興局函館建設管理部より７月10～14日にかけ再三の修正、訂正、質問事項等があり、道路使用許可が下りたのは契約開始から２か月後の７月20日であった。現地での実際の調査開始は７月25日からとなった。

現地採用の作業員は松前町内だけでは確保が難しく、近隣の福島町、知内町からも募集を行った。調査は７月25日から作業員11名で行い、道路の片側交互通行や町道の通行止めのため６期（６地区）に分けて実施し（図Ⅲ－１）、９月29日に終了した。現状復帰は10月31日に完了した。

松前港線の車道部分は集水桝等の設置予定箇所を除き、地表面から80cmの掘削を行った。舗装の路盤・路床やNTTの通信ケーブル、U字構の設置による攪乱のため遺構は確認されなかったが近世の陶磁器等が出土した。地表から190cm掘削した個所からは旧福山街道の造成土、街道造成以前の土坑

を確認した。令和４年度に調査したD地区に隣接する地番14－１地先からは沢状地形が確認され、刀の柄と鞘、曲物、箸、杭等の木製品が出土した。町道部分は80cm掘削の場所でも遺構の残りがよく、唐津ヶ丘線部分では焼土粒や炭の混じる土層が残っており、陶磁器等が出土した。海岸通り４号線下では黄褐色ローム層の上下で火災の痕跡を確認した。また、陶磁器、瓦、金属製品等が多数入っていた火災後の整理土坑と考えられる穴も検出した。

(3) 整理作業の経過

現地での整理作業（一次整理作業）は、雨天時で発掘作業が困難な日などに行った。作業内容は図面の点検、遺物の水洗・乾燥・分類、遺物カード・台帳の作成、注記、仮収納等である。

センターでの整理作業（二次整理作業）は、現地調査終了後の令和４（2022）年10月３日から開始し、令和５（2023）年度は５月～７月の現地調査と並行して整理を続け、令和６（2024）年３月まで行った。

作業内容は、未了の遺物水洗作業、注記作業、遺物台帳の表計算ソフトへの入力、木製品・金属製品のクリーニング・保存処理、土陶磁器片の再分類、台帳・注記の修正、土陶磁器片の接合・復元、木製品の接合・鑑定、遺物実測、遺構図等の調整、各種図面のトレース、写真データ整理、掲載遺物の写真撮影、挿図・写真図版作成、遺物集計、原稿執筆、報告書レイアウト作業などである。

（新家）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

(1) 松前町の位置

福山城下町遺跡は、北海道渡島総合振興局管内の松前郡松前町に所在する（図Ⅱ－１）。遺跡のある松前町は北海道の南端に位置し、渡島半島南西部にあたる松前半島の南端部を占める。町の範囲は東西18.8km、南北31.5kmの広がりをもち、面積は293.25km^{2}を測る。域内は北東端の大千軒岳（1072m）を主峰とする松前山地（宮内2003）が大部分を占め、海岸部を雛壇状の海岸段丘が取り巻く。町の西側から南側は日本海に面し、松前湾西端の弁天島から約60km西北西に渡島大島、同地点から約25km西南西に松前小島が浮かぶ。北海道最南端の白神岬と大千軒岳を結ぶ稜線は、日本海と津軽海峡の分水嶺となっており、同線の東側は松前郡福島町である。北側は大千軒岳から西北西に延びる山稜を境にして、檜山振興局管内の檜山郡上ノ国町と接する。

前出の白神岬は津軽海峡西口の北端にあたり、対になる南端は津軽半島最北端の龍飛崎である。前者から後者までは南東へ20kmほど、前者から津軽半島西部の小泊岬西端までは南へ30kmほどの距離である。なお、好天時には松前半島南岸の各所から、青森県の最高峰である岩木山（1625m）が眺望できる。福山城から岩木山までの距離は南南東へ約90kmを測る。

松前町は半島の先端部に位置するため風が強いものの、対馬暖流と津軽暖流に挟まれた温暖な地域であり、道内では最も早く桜が開花する。1991～2020年にかけての年平均気温は、札幌の9.2℃に対し松前は10.5℃、１月の平均気温は札幌の－3.2℃に対し、松前は－0.5℃である。一方、同期間の年平均風速は、札幌の3.6mに対し松前は4.6mで、12月と１月は６mを超す。（気象庁ホームページ「過去の気象データ検索」https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php 2024年２月16日閲覧）。

(2) 城下町周辺の地形と地質

城下町周辺の地形は、山地、海岸段丘、沖積低地に大別される。山地は城下町の背後、海岸線から1.5～２km内陸に入った辺りに分布し、東から七面山（187m）、神止山（154m）、勝軍山（215m）、御髪山（274m）が並ぶ。海岸段丘は山地と海岸の間を雛壇状につなぎ、秦ほか（1990）は段丘をⅠ段丘（標高40～115m）、Ⅱ段丘（標高20～50m）、Ⅲ段丘（標高15～40m）に区分している。Ⅰ～Ⅲ段丘はいずれも更新世の段丘であるが、海岸部には完新世の海岸段丘（標高３～７m）が発達するという。沖積低地は海岸沿いや河川沿いに形成されている。なお、本書の文中では海岸段丘を台地、沖積低地と完新世の海岸段丘とを合わせて低平地と表現することがある。

河川は東から及部川、伝治沢川、大松前川、小松前川、唐津内沢川が沖積低地を形成しながら南流し、松前湾に流入する。松前湾は東端の白神岬と西端の弁天島の間を緩い弧で結ぶ。湾内は水深が浅いうえに、多くの岩礁が点在し、字唐津の潮間帯では海食台も見られる。松前三湊の一つ福山湊は、城下町に面する湾の西端側に位置し、伝治沢川河口の大淵（大泊淵）、大松前川河口の大松前淵、小松前川河口の小松前淵、唐津内沢川河口の唐津内淵等に船着き場があった。

松前町周辺の基盤岩は先第三系の松前層群である。それを不整合に覆う新第三系が広く分布し、中新世の福山層、国縫層はグリーンタフ変動と関係する。福山層は上部と下部に区分されており、上部の主体をなす凝灰岩（流紋岩質溶結凝灰岩を伴う流紋岩凝灰岩）は淡緑色灰色を呈するものが多い（秦ほか1990）。一方、５万分１地質図『松前』を見ると、下部の主部を占める安山岩溶岩及び同質火砕

岩は、大松前川と唐津内沢川に挟まれた潮間帯に海食台として露岩する。なお、福山城から北北東へ約1km、福山層上部が分布する大松前川右岸側に、神明石切り場跡が立地する（松前町2009）。ここから切り出された緑色凝灰岩は、安政元年（1854）に竣工した福山城の石垣石に用いられた。

松前半島周辺で金鉱脈は発見されていないが、大千軒岳に源を発する知内川流域を中心に砂金が採取されている。元和～寛永年間（1615～43）には、松前町南東部の大沢川、福島町南部の曽津己（旧礼髭村）を皮切りに、知内川流域、さらには東西両蝦夷地で砂金採取が本格化した。また、松前町南西部の赤神川上流では鉛が産出する。明和4年(1767)には赤神村の鉛山が良好であるという報告(「福山秘府」金銀山之例）があるものの、天明年間（1781～89）には廃絶したようである。その後、文政12年（1829）～天保2年（1831）にかけて、鉛山の操業をめぐる記事が残されているが、実際に稼行されたかどうかは不明である。

福山城下町遺跡として周知されている範囲は、松前町字唐津、松城、福山（福山92－8・93－3を含む）の海岸沿いや河川沿いの低平地である（図Ⅱ－2）。今回の発掘区は、字唐津を通る道道松前港線のうち、町道唐津ヶ丘線との交差点西側から町道海岸通り4号線との交差点東側までの区間で、延長124mに及ぶ。標高は6.5m前後で、小松前川と唐津内沢川の間では標高が最も高く平坦である。唐津ヶ丘線との交差点から海岸線までの距離は約90mで、国指定史跡の松前氏城跡福山城跡は、同交差点から北東へ約400m、標高約25mの海岸段丘（「福山台地」）に立地する（上述のⅡ段丘）。発掘区のすぐ北側、松城小学校が建つ海岸段丘（「西館台地」）は標高約15mで（上述のⅢ段丘）、段丘崖によって発掘区の低平地と隔てられている。

2　歴史的環境

(1) 福山城下町の変遷

本節では福山城下町の変遷と構造について、『北海道近世史の研究』（榎森1982）・『松前町史』（松前町1984・1988）に依拠しながら概観する。福山城下町は、松前藩の福山館（福山城）を中心に建設された近世城下町である。城下町の建設は、慶長5年（1600）、福山（松前）の港町に程近い海岸段丘「福山台地」に、藩主松前氏の新たな拠点となる福山館を築くことから始まる。同11年に福山館が完成すると、それまでの拠点であった徳山館（大館）は廃止され、元和5年（1619）には徳山館周辺の寺院や町が福山城下へ移転される。なお、永正11年（1514）に蠣崎氏（後の松前氏）が上ノ国の勝山館より大館に移って以後、大館は徳山館に改称された。大館は道南十二館の一つで、15世紀中葉以降の松前における政治・軍事上の拠点であったが、山城であるうえに、すでに蝦夷地交易の拠点となっていた福山の港町とはやや距離があった。松前藩の経済的基盤は、幕府から認められた蝦夷地交易の独占権にあるので、海岸部の「福山台地」に城郭を移し、港町と密接に結び付くことによって、松前地・蝦夷地における政治・経済の拠点となる福山城下町が建設された。

初期の城下町は、福山館を中心にその北側に寺町が形成され、一部重臣の屋敷が館の周囲に配置されていたに過ぎなかったようである。上級家臣らは商場知行制によって直接商行為に携わるため、海岸沿いの低平地で町人と混住していた。寛文9年（1669）頃の町数は14で、浜沿いの通り町は東西12、13町程の広がりをもち、家数は600～700軒（侍屋敷140～150軒、町屋敷540～550軒）を数える（『津軽一統志』巻第十）。なお、近江商人の進出は寛永年間（1624～44）に本格化する。

享保～延享年間（1716～48）になると、場所請負制の成立によって、上級家臣らは直接商行為に携わらなくなっていく。人口増加に伴い海岸沿いの低平地が過密化したこともあり、同所で町屋と混在していた上級家臣らの屋敷が台地上に移転し始める。その結果、台地は城郭・武家地・寺社地、低平

地は町人地という地区分けが進み、近世城下町の特徴である身分別居住が達成される。なお、城下町周縁部に足軽町が配置されるのもこの時期である。

城下の家数・人口は享保元年（1716）が726軒・3,775人、延享２年（1745）が1,017軒・4,833人、安永６年（1777）が1,448軒・6,004人、文化６年（1809）が2,135軒・7,084人と、右肩上がりに推移する。安永６年における城下町の範囲は、東西19町15間に広がり、39の町が存在していた。なお、松前地と蝦夷地全域の幕領化に伴い、松前藩は文化４年（1807）～文政４年（1821）の間、陸奥国伊達郡梁川に転封され、その間の松前には松前奉行所が置かれた。

(2) 福山城下町の構造

宝暦年間（1751～1763）に小玉貞良が描いた『松前屏風』や、文化３年（1806）制作の『松前市中地図』、文化年間（1804～1818）制作の『松前分間絵図』には、近世城下町としての景観を整えた福山城下町が描かれている。以下では、図Ⅱ－３を用いて城下町の構造を概観する。

城郭の福山館は、城下町の中央、「福山台地」に立地する平山城で、城郭をとりまく段丘崖が総郭の役割を果たす。段丘崖がない城郭の北側には寺院を集中させ、城郭背後の防衛を固めている。武家地は大松前川沿いの蔵町⑬（丸数字は図Ⅱ－３の町名、以下同）の北側や神明町⑫にもあるが、大半は西館（にしだて）・馬形（まがた）・愛宕（あたご）・生符（いげふ）の台地に集中し、町人地と比べて広い敷地を有する。西館・馬形にも寺院が集められ、武家地の防衛を固めている。城下周縁部に多いとされる寺社地、足軽町は、前者が上述したように福山館の北側や西館・馬形の武家地近くに集められ、後者は松前藩の足軽がきわめて少ないこともあり、城下町東縁部の東横町②とトラメキ町①に配置された程度である。なお、福山城下町における武士人口の割合は近世を通じて低く、文化３年（1806）は24.72％である。この値は一般的な近世城下町の半分程度にとどまる。

町人地は、海岸沿いや大松前川・小松前川・唐津内沢川沿いなどの低平地に密集し、海岸沿いの町屋は街村状に展開する。商人町の中心は、福山館大手門の直下で沖ノ口役所のある小松前町㉒、その東西の大松前町㉑、枝ヶ崎町⑰、唐津内町㉔である。これらの町の海岸には、船着き場や荷揚げ場があり、通りには問屋・場所請負人の店が並ぶなど、港町の景観を呈する。

城下に職人町は形成されなかったが、元禄～享保元年（1688～1716）頃には、大工・檜物屋・鍛冶屋（『松前蝦夷記』）等が存在した。天保元年（1830）頃になると、大工・木挽・左官・船大工・畳刺・石工・屋根師・曲師・鍛冶職・銅屋・桶屋・張替師・表具師・経師・塗師・合羽師・仕立職・衣師・袋物師・漆屋・染屋・焼継・佛師等、職種が多岐にわたっている（榎森1982）。

(3) 唐津内町の変遷

発掘区の所在地は松前町字唐津である。字唐津は、昭和15年７月の町名改正及び大字の廃止と字地番の改正によって、福山町から松前町へと町名が改正されたのと同時に、大字唐津内町、大字西館町の一部、大字湯殿沢町の一部、大字唐津内沢町の一部が統合されて成立した。

小松前川と唐津内沢川に挟まれた字唐津の海岸部は、近世に唐津内町とよばれた町人地である。史料上の初出は『津軽一統志』で、寛文９年（1669）頃における城下の町名の一つとして、唐津内町が挙げられている。口絵８上半には、宝暦年間（1751～1763）に制作された『松前屏風』のうち、唐津内町周辺を掲載した。向かって右の河川が小松前川、左の河川が唐津内沢川である。屏風から当時の唐津内町の様子をうかがうと、松前港線の前身である福山街道の両脇に漆喰壁の町屋が立ち並び、小松前川右岸の町屋には、近江商人の大和屋「①」、沢屋「仝」の暖簾が見られる。浜には、緑色凝灰

岩とみられる土台石の上に漆喰壁の蔵が数軒建つ。入江状の海岸線は潤を表現しているのかもしれない。なお、大和屋の出店開設年代は、寛永15年（1638）頃である。

文化年間（1804～1818）制作の『松前分間絵図』（口絵８下半）では、海岸に沿ってのびる街道（福山街道）の両脇が町人地として黄色く塗り潰されている。背後の「西館台地」には、東から「蠣崎時松」、「松前勇馬」、「蠣崎将監」という重臣の武家地がある。同台地の屋敷地は、城郭に近いため比較的早い時期に設置されたようである。屋敷地の奥には赤色で表された寺社地がある。街道から「西館台地」へと延びる坂道のうち、小松前川から西に２本目の坂道が町道海岸通り４号線の延長部分、３本目の坂道が町道唐津ヶ丘線（交差点より北側部分）の前身とみられ、発掘区は両者に挟まれた街道とその周辺に位置する。唐津内沢川に架かる橋付近には、「橋キハヨリ廣小路迠百十二間」（口絵８の「百十三間」は誤転記）と記されていることから、唐津ヶ丘線は「広小路」と呼ばれていたことがわかる。小松前川河口の小松前潤、唐津内沢川河口の唐津内潤には、岩礁（海食台）に設置された係留杭が見られる。なお、唐津内町の家数・人口は、文化６年（1809）の時点で142軒・518人を数える。

弘化４年（1847）に松前を訪れた松浦武四郎は、唐津内町について、「仲買、小宿、請負人にし而伊達、山田、山柚等有て町並美々敷立并たり。南西海ニ面し船懸り潤有。上の方大夫松前内記、蛎崎蔵人邸宅有。」、同町背後の西館町について、「番人支配人等多し。此処ニ大夫蛎崎将監新に屋敷を築き給う。市中の木蔵多し、うしろの方は皆墓所。其うしろに到りては畑計也」（『蝦夷日誌』巻之一）と記す。なお、後述する「明治26～27年の福山町見取り図」（以下、「見取り図」）には、発掘区西側交差点の南東側（「広小路」南端の東側）に「伊達屋」がある（図Ⅱ－４上半）。伊達屋（当主は伊達林右衛門）は寛政８年（1796）にマシケの場所請負人となり、天保年間（1831～45）には、ハママシケ、マシケ、北蝦夷地（栖原屋と共同経営）の各場所を経営した大商人である。

唐津内町における明治元年までの火災記事として、①貞享２年（1685）６月26日、②宝永６年（1709）３月21日、③享保９年（1724）９月５日、④天保４年（1833）７月28日、⑤明治元年（1868）11月５日の５件が知られている（『松前町史』1984・1988）。宝永６年は罹災人家蔵等214戸、享保９年は罹災19戸、天保４年は唐津内町西側を焼き、被災家屋79戸と記録されている。明治元年の火災は、福山城をめぐる攻防戦の末、旧幕府脱走軍に敗れて退却する松前藩兵の放火によるもので、城下町の３分の２を焼失し、唐津内町は全焼した。

明治・大正時代における発掘区周辺の様子については、昭和38年に鎌倉兼助氏からの聞書きによって作成された明治26～27年（1893～94）の「見取り図」と、大正７年（1918）の「地籍図」をもとに述べる。表Ⅱ－１には、現在の地番と上記の図に見える町屋等の名称や旧地番を対照させて示した。

図Ⅱ－４上半は、明治26～27年の「見取り図」に発掘区を重ねたものである。それによると、発掘区西側の交差点より北西側の区画（A地区）には女竈・木材店が、東西２つの交差点に挟まれた北側の区画（B地区）には田川米店・許勢仁七・耶蘇教会・小松屋本店・伊達屋支配人・山田合羽屋・連絡船長・藤田・宮川菓子屋が、発掘区西側の交差点より南西側の区画（C地区）には米屋・大工が、東西２つの交差点に挟まれた南側の区画（D地区等）には伊達屋・関谷酒造・山本古物屋・瀬戸物屋・笠木屋が、発掘区東側の交差点より南東側の区画（E地区）には大滝屋・村山二三郎（呉）の町屋が軒を連ねる。

『北海道實業人名録完』（以下、『人名録』）の「福山港並附近実業人名」（明治26年10月時点）には、唐津内町の実業家18名が掲載されている。発掘区内では、B地区の地番89（旧地番13）に「荒物砂糖商・武田勇作」の名前が見える。ただし「見取り図」を見ると、前者の敷地は「耶蘇教会」となっている。なお、番地の記載はないが、『人名録』の「酒造業・關谷重兵衛」は、「見取り図」の「関谷酒造」（D

地区の地番15－１～３〔旧地番47－１・２〕）とみられる。

図Ⅱ－４の下半は大正７年の「地籍図」に発掘区を重ねたものである。それによると、A・B・E地区はいずれも宅地で、C地区の18－１～３・32は分筆されておらず、地目は宅地（四五ノ一）と畑（四五ノ二）である。D地区とその東西側は、15－１～３の一部が分筆されておらず地目は畑（四七ノ二）、14－１・２も分筆されておらず地目は畑（四八）である。36（四九ノ三）、37（四九ノ四）も地目は畑で、それ以外の地番は宅地である。

（4）過去の発掘調査

松前港線改良工事に伴う福山城下町遺跡の発掘調査は、松前町教育委員会（以下、町教委）によって、平成17～19年度に字松城の旧小松前町、同18年度に字福山の旧大松前町、字唐津の旧唐津内町、同26年度に字福山の旧大松前町と枝ヶ崎町で実施されている。また、町道朝日豊岡線代行事業改良工事に伴い、同22年度に当センターが字福山の蔵町で調査を行っている。このほか、弘前大学による学術目的調査が、同29年度に字豊岡の正行寺北側で、同30年度に字松城の旧小松前町で行われている。なお、弘前大学による字豊岡の調査は遺跡の範囲外であるが、城下町を構成する「馬形台地」の武家地であることから、本項で触れる。以下では、近世の町ごとに過去の発掘調査を概観する。

ア　旧唐津内町

松前港線改良工事に伴う発掘調査が、町教委によって平成18年度に行われた。「H・Iブロック」（図Ⅱ－２のd）では、江戸後期頃の大きな掘り込みや、土蔵土台石の掘り込み地業が検出された。後者については、掘り込みに岩盤層とロームが交互に版築されており、「松前の江戸期特有の積み上げ地業」と評されている。出土した陶磁器は16世紀末から幕末までのもので、特に幕末に近い肥前産の陶磁器が多いという（町教委2008）。なお、「H・Iブロック」（SP1760～1800）は今回の発掘区（SP1636～1760）東側に隣接する。

イ　旧小松前町

松前港線改良工事に伴う発掘調査が、町教委によって平成17～19年度に行われた。平成17年度に調査された「B地区」（図Ⅱ－２のａ）では、天神坂に通じる道路跡のローム層や、土蔵の漆喰とみられる残骸等が検出されている。遺物は同年度に調査した福山城沖之口坂にあたる「A地区」（図Ⅱ－２のｋ）出土のものと一緒に報告されており、陶磁器以外に瓦の出土が多かったようである（町教委2006）。

平成18年度は、「B～Gブロック」（図Ⅱ－２のｃ）が調査された。「Bブロック」では木製開渠と土留板が検出され、開渠側板の一方にはゴロタ石が敷かれる。「Cブロック」では隣地境界の土留石や木製暗渠等が検出され、暗渠側板の下には栗石が敷き詰められる。「Dブロック」では幕末・明治の敷地境界石垣、土台石の可能性がある石列、木製開渠等、「Eブロック」では敷石のある開渠遺構、複数の土留石垣等、「Fブロック」では、幕末・明治の土蔵の土台石垣の根石、明治以降の石列等が検出された。「Gブロック」では、天保以降の火災面、幕末・明治の建物の土台石（もしくは道路の縁石）と敷石が検出された。土台石の下には幕末の道路面と思われるロームが堆積する。これらの地区から出土した陶磁器は、16世紀末から幕末までのものがあり、肥前産が多いとされる（町教委2008）。

平成19年度に調査された「Jブロック」（図Ⅱ－２のｅ）では、幕末・明治の礎石が検出された。礎石は店前の雨よけ庇の土台であった可能性があるという（町教委2008）。

弘前大学による学術目的調査は、平成30年度に旧小松前町の一部（図Ⅱ－２のｈ）で行われた。調査の結果、18世紀前葉頃の火災面と17世紀前葉頃の火災面が検出された。前者の火災は、享保４（1719）年か同14年（1729）のどちらかである可能性が高いようで、火災の後片づけのために掘られた土坑か

ら、緑褐釉刷毛目文大鉢がまとまって出土している。このほか、胎土目積の唐津焼小皿２枚が合わせ口の状態で出土しており、近世初期の地鎮遺構と考えられている（弘前大学2019）。

ウ　旧大松前町

松前港線改良工事に伴う発掘調査が、町教委によって平成18・26年度に行われた。平成18年度に調査された「Aブロック」（図Ⅱ－２のｂ）では、近世後期の石垣遺構（土台石の隅石）が検出されている。大松前町の火災記事は幾つかあるが、その痕跡が見られず、近世後期の盛り土が主体であることから、度重なる水害によって、それ以前の生活面が削平された可能性が指摘されている（町教委2008）。

平成26年度は、旧大松前町から旧枝ヶ崎町に至る256mの区間が調査された。（図Ⅱ－２のｇ）旧大松前町にあたる町道中町線から町道蔵町線にかけての範囲では、遺構は検出されていない。遺物は陶磁器、瓦、金属製品等が報告されている（町教委2015）。

エ　旧枝ヶ崎町

松前港線改良工事に伴う発掘調査が、町教委によって平成26年度に行われた（図Ⅱ－２のｇ）。調査は同年度の旧大松前町における調査と一連のものである。調査の結果、町道蔵町線以東の「１～２地区」で石列、「５～６地区」で石垣、「６～７地区」で土蔵土台石２基と開渠遺構が検出されている。遺物は陶磁器、瓦、金属製品、ガラス玉等が報告されている（町教委2015）。

オ　旧蔵町

町道朝日豊岡線代行事業改良工事に伴う発掘調査が、当センターによって平成22年度に行われた（図Ⅱ－２のｆ）。調査の結果、蔵２棟・溝５条・礎石列17列・掘立柱列１列・井戸５基・埋設樽（桶）８基・木枠１組・桝１基・石組２か所・配石２か所・礫集中８か所・土坑５基・炉７か所・灰集中１か所が検出された。遺構の年代は18世紀後半～19世紀中葉が主体で、特徴的なものを以下に幾つか挙げる。「蔵２」は土台に石垣を用いており、在地産とみられる緑色凝灰岩の切石が２、３段隙間なく積み重ねられる。井戸枠は底のない結桶を積み重ねたものが多いが、「井戸２」には隅柱を縦板で囲った木枠が用いられる。「炉１」は石廟の屋根（笏谷石製）を裏返して炉床としたもので、銅や鉄の小鍛冶が行われたと考えられる。

遺物の大部分を占める陶磁器は、18世紀後半～19世紀中葉を主に、16世紀後葉～17世紀前葉に遡るものもある。特徴的な遺物として、鏡、箸、笄、毛抜、鬢盥、油壺、紅皿といった装身具や化粧道具が目に付く。蔵町は倉庫や遊郭が多いところと伝えられており、検出された蔵の石垣や装身具・化粧道具の多さなどは、それを裏付けるものと考えられる（北埋調報290）。

カ　「馬形台地」

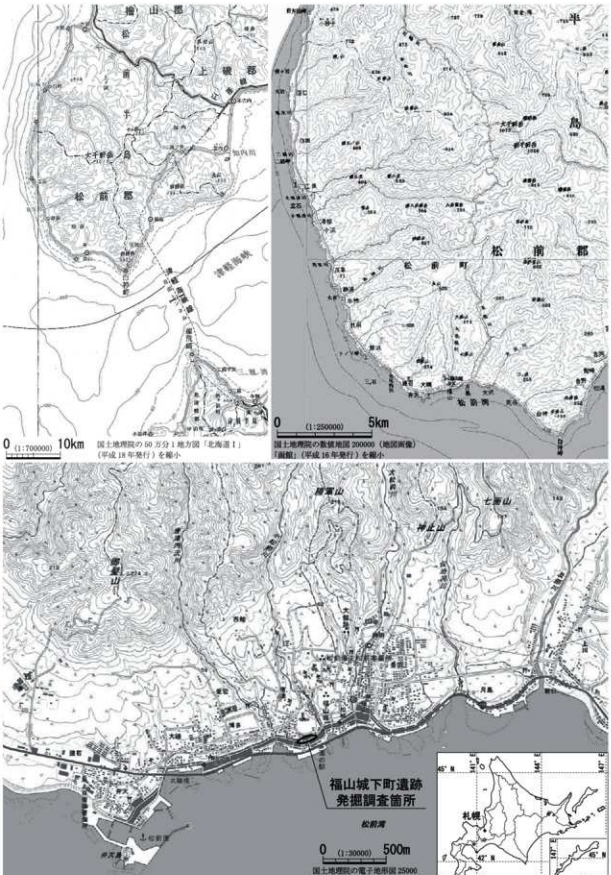
字豊岡の正行寺北側（図Ⅱ－２のｉ）で、弘前大学による学術目的調査が平成29年度に行われた。調査地点は武家屋敷と正行寺の墓地とに挟まれた空閑地であったようで、19世紀中葉の墓１基、江戸後期・幕末の廃棄土坑等が検出されている。遺物は表土・攪乱や廃棄土坑から得られたものが大部分を占め、「土坑３」では19世紀前葉から中葉の陶磁器を中心とする遺物が大量に出土している。特徴的な遺物として、コンブラ瓶、オランダ産の銅板転写軟質磁器、ガラス玉14点等がある（弘前大学2018）。

（山中）

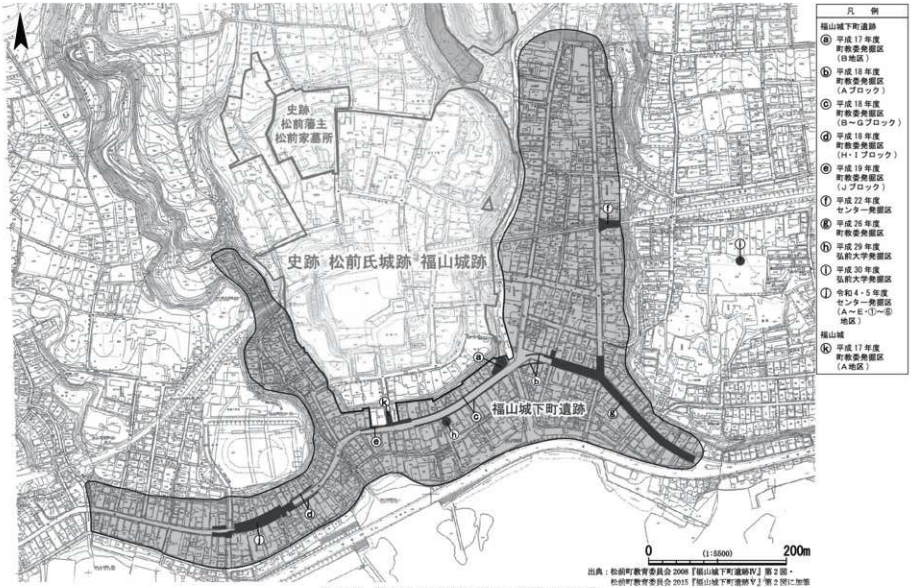
(5) 松前町の遺跡

北海道教育委員会が公開している「埋蔵文化財包蔵地数」（『北の遺跡案内』北海道教育委員会HP）によると、松前町では令和５（2023）年４月現在、122か所の遺跡が登録されている（表Ⅱ－３、図Ⅱ－５）。ここでは擦文文化期・中世・近世に関する遺跡を表と図で掲載するにとどめる。

（新家）

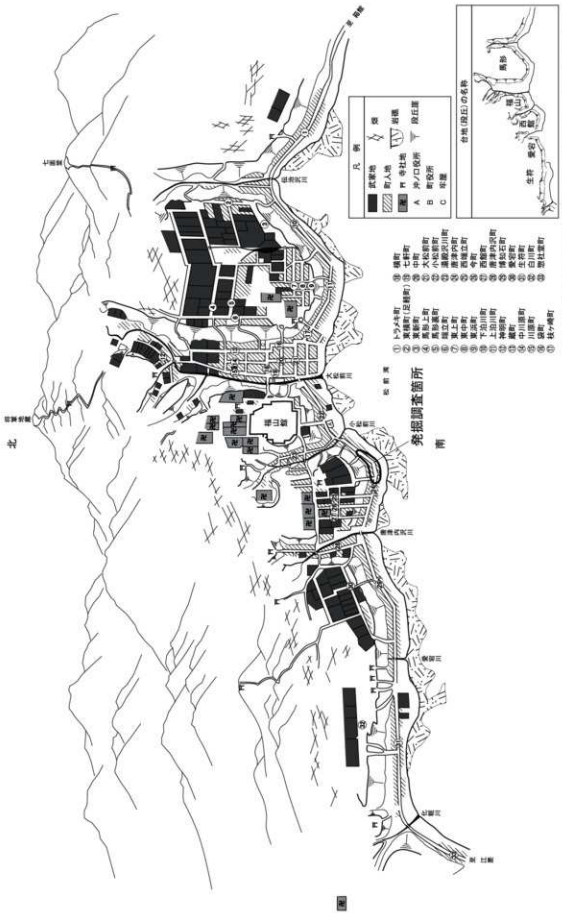

0 (1:700000) 10km
国土地理院の50万分1地方図「北海道Ⅰ」
（平成18年発行）を縮小
0 (1:250000) 5km
国土地理院の数値地図200000（地図画像）
「函館」（平成16年発行）を縮小
福山城下町遺跡
発掘調査箇所
松前湾
0 (1:30000) 500m
国土地理院の電子地形図25000
（平成29年5月調整）を縮小・加筆
札幌
松前
(100 km)

図Ⅱ-1　遺跡位置図



出典：松前町教育委員会 2008『福山城下町遺跡Ⅳ』第2図・松前町教育委員会 2015『福山城下町遺跡Ⅵ』第2図に加筆

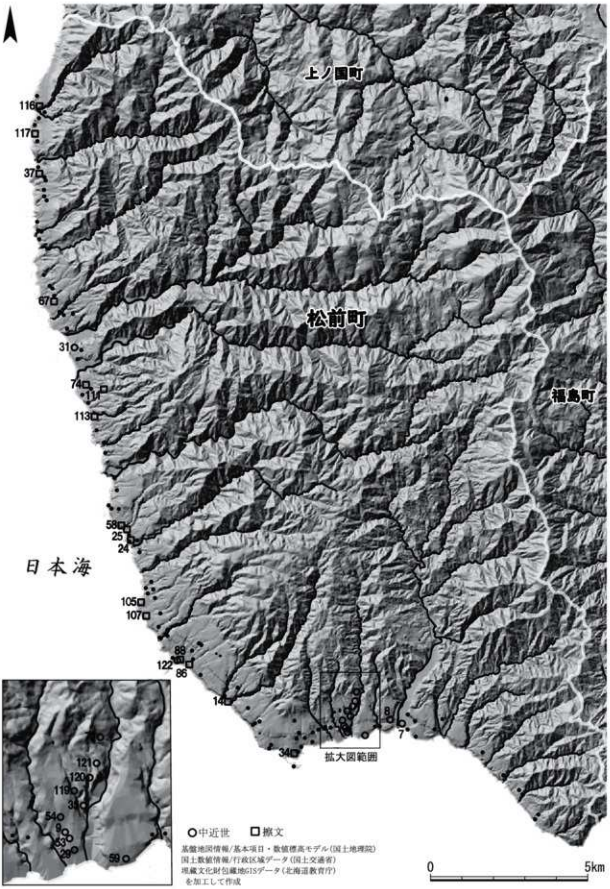
図Ⅱ-2　福山城下町遺跡の範囲と発掘区の位置



図Ⅱ-3　文化年間の福山城下町

出典：上図　「明治26～27年福山町見取り図」（松前町郷土資料館所蔵）に加筆
下図　大正7年「地籍図」第24・25号に加筆

図Ⅱ-4 「明治26～27年福山町見取り図」・大正7年「地籍図」


上ノ国町
松前町
福島町
日本海
116
117
37
67
310
74
11
113
58
25
24
105
107
89
122
86
14
34
8
7
拡大図範囲
121
120
119
54
59
○中近世　□縄文
基盤地図情報/基本項目・数値標高モデル(国土地理院)
国土数値情報/行政区域データ(国土交通省)
埋蔵文化財包蔵地GISデータ(北海道教育庁)
を加工して作成
0
5km

図Ⅱ-5　松前町の遺跡

表Ⅱ-1　発掘区地番対照表

地区	平成28年『基図』	大正7年『地籍図』		明治26～27年『見取り図』	明治26年
	地番(字唐津)	地番(大字唐津内町)	地目	店名・人名等	『北海道實業人名録』
E	10-5	51	宅	村山二三郎(有)	
E	11-6	50	宅	大滝屋	
E	11-8	50	宅	大滝屋	
⑥	12	49-1	宅	笠木屋　瀬戸物屋	
D	13	49-2	宅	笠木屋　瀬戸物屋	
D	14-1	48	畑	山本古物屋	
D	15-2	47-1	宅	山本古物屋　開谷酒造	福山唐津内町　酒造業　開谷重兵衛
④	15-3	47-1・47-2	宅・畑	開谷酒造	福山唐津内町　酒造業　開谷重兵衛
④	17-2	46-1	宅	伊達屋	
C・③	18-1	45-1・45-2	宅・畑	大工	
C	19	44-3	宅	米屋	
B	85-2	10-1	宅	宮川菓子屋　藤田	
B	85-3	10-1	宅	藤田　港湾船長	
B	86	10-2	宅	山田合羽屋	
B	87	11	宅	山田合羽屋　伊達屋支配人	
B	88	12	宅	小松屋本店	
B	89	13	宅	耶蘇教会	福山唐津内町13番地　荒物砂糖商　武田勇作
B	90	14	宅	許勢仁七	
B	91	15	宅	田川米店	
B	92-1	15	宅	田川米店	
A	93-2	17	宅	越後木材　今与衛門	
A	94	17	宅	女竜	

表Ⅱ-2　福山城下町遺跡発掘調査歴一覧表

調査年度(西暦)	字唐津	字松城	字福山			字魯岡	調査目的(開発事業名)	調査面積(㎡)	調査主体者
	旧唐津内町	旧小松前町	旧枝ヶ崎町	旧大松前町	旧蔵町	正行寺北側			
平成17(2005)		○					記録保存調査(松前港線改良工事)	260	松前町教育委員会
平成18(2006)	○	○		○			記録保存調査(松前港線改良工事)	790	松前町教育委員会
平成19(2007)		○					記録保存調査(松前港線改良工事)	60	松前町教育委員会
平成22(2010)					○		記録保存調査(町道朝日魯岡線代行事業改良工事)	277	(財)北海道埋蔵文化財センター
平成26(2014)			○	○			記録保存調査(松前港線改良工事)	5,070	松前町教育委員会
平成29(2017)						○	学術目的調査	50	弘前大学
平成30(2018)		○					学術目的調査	36	弘前大学
令和4(2022)	○						記録保存調査(松前港線改良工事)	531	(公財)北海道埋蔵文化財センター
令和5(2023)	○						記録保存調査(松前港線改良工事)	854	(公財)北海道埋蔵文化財センター

表Ⅱ-3　松前町の遺跡（擦文・中～近世）

登録番号(B-02)	遺跡名	所在地(松前町字)	立地	時代	種別	調査西暦年と調査主体者
7	上川遺跡	上川1、2、4、17～27、762、763、朝日500～505	砂丘	縄文(晩期)、中世、近世	遺物包含地	1976町教委、2019弘前大
8	東山遺跡	東山1～19、48～56、91～125、224～246、254～266、朝日330～396	海岸段丘(低～中位)上舌状台地、及都川西岸	縄文(前・中期)、続縄文、近世	集落跡	1999～2004町教委
9	松城遺跡	松城301～307、320、329、340～352	海岸段丘(低位～中位)	縄文(前・中・後期)、近世	集落跡	1990、1991、2003町教委
14	大尽内遺跡	館浜	大尽内川(河口付近)右岸の小砂丘上	縄文(晩期)、続縄文(前半・後半期)、擦文	遺物包含地	1974町教委
24	静浦A遺跡	静浦267～274	海岸段丘	縄文(晩期)、続縄文(前半期)、擦文	遺物包含地	
25	静浦B遺跡	静浦442～444	海岸段丘	縄文(後期)、擦文	遺物包含地	
29	福山城下町遺跡	唐津、松城、福山(福山92-8、93-3を含む)	低位段丘面	近世	集落跡	2005～2007、2014、2015町教委、2018弘前大、2011、2022、2023センター
31	高野遺跡	高野104～122	海岸段丘	縄文(早・前・中・後・晩期)、近世	墳墓	1973町教委 1981郷土資料館
34	弁天B遺跡	弁天193～195、199、201～209、222～226	段丘縁辺	続縄文(前半期)、擦文	遺物包含地	
35	大館跡	神明、福山	東はパッコ沢、西と南は小館沢を挟んで福山台地と対峙する台地上	中世	城館跡	
37	白坂遺跡	白坂215、216、221、222、225	海岸段丘、緩斜面	縄文(早・前・中・後・晩期)、続縄文、擦文	遺物包含地	1980～1982町教委
53	福山城	松城193ほか	台地	近世	城跡	1980、1983～1999、2003～2007、2009～2011、2013～2016町教委(計31回)
54	松前藩主松前家墓所	松城307、328、329、330-13		近世		
58	静浦D遺跡	静浦362～364、373～381	海岸段丘	擦文	集落跡	
59	豊岡遺跡	豊岡9	海岸段丘	近世	集落跡	
67	江良B遺跡	江良858～863、916	海岸段丘	縄文(中期)、擦文	遺物包含地	
72	神明石切り場跡	神明194ほか	大松前川西岸にある沢地	近世	製作跡(生産地)	2006～2010町教委
74	清部A遺跡	高野408～410	海岸段丘	縄文(中期)、擦文	遺物包含地	
86	館浜B遺跡	館浜193～197	湯ノ沢川左岸	縄文(早期)、続縄文(前半期)、擦文	遺物包含地	
88	館浜D遺跡	館浜286～300、302、303	海岸段丘	縄文(前期)、擦文(後半期)	遺物包含地	
105	札前D遺跡	札前309、355	海岸段丘	擦文	遺物包含地	
107	札前第1地点遺跡	札前368、375	海岸段丘	縄文(前期)、擦文	集落跡	1984、1989、1991町教委
111	清部D遺跡	高野493	傾斜地	縄文、擦文	遺物包含地	
113	清部F遺跡	小浜194～196、206～211	海岸段丘	擦文	遺物包含地	
116	原口E遺跡	神山61、64～78	海岸段丘	擦文	遺物包含地	
117	原口F遺跡	原口330	海岸段丘	擦文	遺物包含地	
119	大館遺跡	西館152～155、171、福山303～311	大松前川支流の大館を挟む河川敷	中世、近世	遺物包含地	2009町教委
120	パッコ沢牢屋跡遺跡	神明69、70、209～212、220	大松前川支流の河川敷	中世、近世	集落跡	2009、2010町教委
121	日枝社通遺跡	神明71、121～128、158～167、178、196、212～219、294	大松前川とその支流(通称パッコ沢)に挟まれた舌状台地	縄文、近世	遺物包含地	2010町教委
122	館浜G遺跡	館浜505	海岸段丘	縄文(早・前期)、近世	遺物包含地	2012町教委

※北海道教育委員会「北の遺跡案内」「松前町属性データ」に加筆。
※調査主体者　町教委：松前町教育委員会、郷土資料館：松前町郷土資料館、弘前大：弘前大学

Ⅲ　調査の方法

1　発掘作業の方法

(1) 基準点等の設置

今回の調査では、平成28年２月に作成された北海道函館建設管理部の「松前港線（地交－86）工事実測実施設計委託平面図」を基図として使用した。座標系は平面直角座標第Ⅺ系である。

令和４・５年度とも、発掘調査に先立って発掘区周辺に仮設４級基準点（以下、基準点）を10箇所程度設置し、発掘区の外周とそこに含まれる各地番の筆界に測量鋲を打設した。基準点測量に使用した既知点は、１級基準点「H20－１－１」、３級基準点「H20－３－１」・「H20－３－２」の３点で、基準点の設置と発掘区の区画等は、トータルステーションを使用した。水準測量は一等水準点「第6370号」の標高を電子レベルで観測し、各基準点に取り付けた。以上の基準点等設置業務は、函館市の株式会社ノース技研に委託した。

(2) 発掘区の地区区分と地番

令和４年度は、宇唐津を通る松前港線の歩道部分531m^{2}を「A～E地区」に分けて調査した（図Ⅲ－１）。「A地区」は松前港線と唐津ヶ丘線との十字路交差点（以下､西側交差点）より北西側の区画で、地番93－２・94の南側が含まれる。「B地区」は西側交差点の北東側から地番85－２（無地番地との筆界線）までの区画で、地番85－２・85－３・86・87・88・89・90・91・92－１の南側が含まれる。「C地区」は西側交差点より南西側の区画で、地番18－１・19の北側が含まれる。「D地区」は西側交差点の南東側から松前港線と海岸通り４号線との丁字路交差点（以下、東側交差点）までのうち、地番13・14－１・15－２の北側を含む区画である。「E地区」は東側交差点より南東側の区画で、地番10－５・11－６・11－８が含まれる。

令和５年度は松前港線の車道部分を中心に、町道唐津ヶ丘線の一部と町道海岸通り４号線の一部、合わせて854m^{2}を「１～６期」に分けて調査した（図Ⅲ－１）。この区分けは、松前港線の片側交互通行や町道の通行止めの際、発掘区周辺の交通に支障を来さないように設定した発掘調査の「順番」であるが、発掘区内における位置を表すために「①～⑥地区」と呼び替えて説明する。「①地区」は松前港線の中央線付近より北側の区画、「②地区」は西側交差点南東部の区画である。「③地区」は西側交差点南西部から発掘区西端までの区画で、地番18－１の北東端が含まれる。「④地区」は松前港線の中央線付近より南側の区画で、東端は海岸通り４号線の中央線延長上にあり、西端は地番17－１地先の西側で「②地区」に接する。地区内には地番15－３・17－２の北側が含まれる。「⑤地区」は松前港線の中央線付近より南側の区画のうち、海岸通り４号線の中央線延長上から発掘区東端までの区画で、地番10－５・11－６・11－８の北端が含まれる。「⑥地区」は海岸通り４号線下の区画で、地番12の北東部とその東側に接する細長い無地番地の西側が含まれる。

なお、①～⑥地区の道路は、⑥地区の海岸通り４号線にかかる地番12を除き、地番のない「無地番地」である。このため、地区内の位置は、付近の地番に「地先」という言葉を加えて表した。例えば、松前港線の北側車道部分にあたる①地区のうち、地番87に面する部分が「87地先」、同線の南側車道部分にあたる④地区のうち、地番14－１に面する部分が「14－１地先」である。

(3) 層　序

層序は地区・地番により異なるが、Ⅰ層が現代の道路造成土（主に路盤）、Ⅱ層が近現代の造成土、Ⅲ～Ⅵ層が近世以前の造成土で、Ⅶ層は自然堆積層が主体である。大局的に見ると、Ⅲ層は17世紀初頭～19世紀後半、Ⅳ層は16世紀後半～17世紀初頭、Ⅴ・Ⅵ層は15世紀～16世紀後半、Ⅶ層は16世紀後半以前の堆積物と推測される。地山は自然堆積の砂礫層で、灰黄褐色（10YR 4／2）を呈し、10cm程度の礫が目立つ。上面付近から擦文土器が出土する。浜側のC・D・③・④地区の一部では、砂礫層の上に、にぶい黄褐色（10YR 4／3）の細粒火山灰が堆積しており、分析の結果、白頭山苫小牧火山灰（B－Tm）に対比された（付編Ⅰ－4）。同火山灰の年代は「AD946の冬」（奥野2018）とされる。

層相の記載にあたっては、『新版標準土色帖（26版）』（小山・竹原2004）の「土色」、『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロジー学会編1997）の「粘着性」・「堅密度」を用いた。

(4) 発掘と記録

発掘区は字唐津を通る道道松前港線のうち、町道唐津ヶ丘線との交差点西側から町道海岸通り４号線との交差点東側までの区間で、延長124mに及ぶ。調査にあたって、発掘区の両脇にある住宅や店舗の出入りに支障を来さないよう、各地区を細かく分けて掘削するとともに、その周りをガードフェンスで仮囲いするなどの安全対策を講じた。掘削で生じた排土等は、発掘区周辺の民有地を数箇所借地して、そこに集積した。令和５年度の発掘区は、道道と２本の町道の車道部分であるため、前者は片側交互通行、後者は車両通行止めにして調査を実施した。片側交互通行範囲の両端等には、安全通行のため交通誘導警備員を24時間体制で配置した。

調査に先立ち、発掘区内のアスファルト舗装をコンクリートカッターで切断・除去し、次いで現代・近現代の造成土（Ⅰ・Ⅱ層）をバックホウで除去した。Ⅰ・Ⅱ層の厚さは、合わせて0.8～１m程度である。表土除去をはじめ、発掘調査に関する一連の工事は、令和４・５年度とも松前町の河野土建株式会社に委託した。

令和４年度のA～E地区では、地山の砂礫層が現れるまで調査を行った。令和５年度の①～⑥地区は、大部分が深さ80cmまでの調査であるが、集水桝等の設置予定箇所（図Ⅲ－１の斜線部分）は、深さ190cmまで調査を行った。調査対象である近世以前の造成土は、礫混じりで固く締まっており、ねじり鎌、ピッケル型の片手鍬、移植ゴテを使い分けて掘り下げた。深掘り部分では、壁面に法勾配を付けたり、アルミ矢板で土止めしたりして、安全を確保したうえで調査を進めた。

遺物の取上げは、出土層位と取上げ年月日を記録したうえで、本節（１）で述べた「基図」に表記されている地番ごとに行った。道路下で地番がない「無地番地」は、同（２）で述べたとおり、地番に「地先」を付けて取り上げた。なお、遺構に関連する遺物や特徴的な遺物には、出土地点を計測して取上げたものもある。

確認した遺構は適宜調査し、平面図と断面図または立面図を作成した。層序断面図は主に各地区の壁面で図化した。但し、深掘り部分の壁面には法勾配を付けているため、垂直の面を図化したものではない。遺構や層序の図化は、手実測、トータルステーション（以下、TS）による観測、写真計測を併用し、作図の際の基点をTSで記録した。なお、写真撮影に使用したカメラはニコンZ６Ⅱである。

(5) 遺構番号の付け方

今回の調査で検出した遺構は、礎石、石積、石列、柱、柵、杭、溝、炉、土坑、掘込、火事場整理穴等である。令和４年度のA～E地区で検出した遺構については、地区名を冠した上記の遺構に１か

ら始まる番号を付けて区別した。すなわち、B地区の礎石１は「B礎石１」、C地区の礎石１は「C礎石１」、C地区の土坑１は「C土坑１」、D地区の土坑１は「D土坑１」が遺構名となる。なお、遺物集中は地区・地番を冠して表し、D地区地番13の木製品集中は、「D13木製品集中」などとした。

令和５年度の①～⑥地区では、③地区（190cm掘削範囲）、④地区（190cm掘削範囲）、⑥地区で遺構を検出した。③地区はC地区に、④・⑥地区はD地区に隣接することから、これらの地区で検出した遺構はC・D地区で用いた遺構名の続き番号を付けることにした。具体的に説明すると、C地区の土坑は令和４年度に「８」まで使用していたので、③地区の土坑は「９」から番号を付け、「C土坑９」などとした。一方、D地区の土坑は「13」まで使用していたが、「10」が欠番となっていたので、④地区で検出した３基の土坑には「10・14・15」という番号を付け、「D土坑10」・「D土坑14」などとした。また、⑥地区の火事場整理穴は、「D火事場整理穴１」とし、同地区で検出した１か所の礎石には、D地区の礎石の続き番号を付け、「D礎石14」とした。

（山中）

２　整理作業の方法

土陶磁器類

現地では遺物の水洗・乾燥、分類、遺物カード・手台帳の作成、注記等の基礎的な整理作業（一次整理）を行った。注記は土陶磁器の色調に合わせ、白色と黒色のポスターカラーを使い分け、保護のため文字の上からラッカーを塗布した。注記項目は遺跡名の略称、字名、地区名、番地、層位、遺物番号で、注記例は以下のとおりである。

令和４年度
遺構出土：フカ・Aド２・フ：１　（遺跡字名・地区名遺構名（土坑）・層位：点取り遺物番号）
　　フカ・Dド３・フ・１　（遺跡字名・地区名遺構名（土坑）・層位・整理遺物番号）
包含層出土：フカ・D15－１・Ⅳ上：５（遺跡字名・地区名番地・層位：点取り遺物番号）
　　フカ・B88・Ⅱ・128　（遺跡字名・地区名番地・層位・整理遺物番号）
令和５年度
遺構出土：フ６カ・12ゴミ１・フ・20　（遺跡工期字名・地区名遺構名（ゴミ穴１）・層位・遺物番号）
包含層出土：フ３カ・18－１地・Ⅳ・60（遺跡工期字名・地区名（地先）・層位・遺物番号）
　　：フ２カ・カラ・Ⅲ・40　（遺跡工期字名・地区名（町道唐津ヶ丘線）・層位・遺物番号）

なお、遺構の追加や遺構名の変更により、以下の地区・層位出土の遺物注記はそれぞれ読み替えが必要である。

B86区　Ⅳ層　→　遺構　B掘込２　覆土
B89区　ゴミ穴、沢　→　遺構　B掘込１　覆土
D13区　Ⅳ層の一部　→　遺構　D13　木製品集中
D13区　Ⅵ層　→　遺構　D掘込５　覆土
D13掘込２　→　D掘込２A
D14－１掘込２　→　D掘込２B
D14区　Ⅳ層の一部　→　遺構　D14－１　木製品集中
D15－２区　Ⅳ層上面・点取り　→　遺構　D15－２　磁器片集中

E11－6・E11－8区　ゴミ穴　→　遺構　E掘込1　覆土
第6期　12区　ゴミ穴1　覆土　→　⑥12　D火事場整理穴1　覆土
第6期　12区　掘込　→　⑥12　D掘込6

台帳のデータ化と並行して接合復元作業を進めた。接着にはセメダインやアロンアルファを用い、さらに補強が必要な部分にはバイサムを使用した。大まかな分類等は鈴木第一調査部長が行い、不明な部分の土陶磁器鑑定を東京大学埋蔵文化財調査室、松前町教育委員会佐藤雄生氏に依頼・委託した。

木製品

水洗後、隔週ごとに水替えを行いながら、分類・台帳作成・掲載遺物の選定を進めた。まず（掲載遺物については実測・写真撮影・樹種同定を行ったのち）EDTA（エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム）で2週間洗浄し、その後トレハロースに6週間含浸した。濃度を数段階で上げ、含浸温度を最高70℃まで上げた。風乾により結晶化を促進させながら乾燥させた後、スチームクリーナーによるクリーニングを数回行い表面の糖結晶を拭き取った。なお、漆製品・繊維製品の工程は上記とは異なり、最高液温を55℃に維持し、最終段階で一瞬高濃度にさらし、皮膜を生成した。

金属製品

ア）出土～台帳作成

出土後、土を落として十分に乾燥させた後、分類・台帳作成・掲載遺物の選択を行った。

イ）保存処理

遺物番号ごとに現況をデジタルカメラにより撮影し、受取順に金属処理番号（金No）を付し、金属処理台帳を作成した。台帳は鉄製品と非鉄製品に大きく分け、非鉄製品は銭、煙管とそれ以外に区分している。銭を除く報告書掲載遺物はほぼ全て、非掲載は一部エックス線撮影を行った。

保存処理は、脱塩→錆落とし→樹脂含浸の順で行った。詳細は、脱塩（鉄＝オートクレーブによる高温高圧脱塩・非鉄＝BTA／エタノール溶液の減圧含浸）→錆落とし（掲載遺物全て、非掲載非鉄製品の一部）→樹脂含浸（鉄＝NAD-10による含浸を3回・非鉄＝BTA、パラロイドB72／ソルベントナフサ溶液の減圧含浸を1回）である。鉄製品の掲載遺物は全て樹脂含浸による保存処理を行ったが、非掲載遺物は一部のみである。非鉄金属は全て保存処理を行っている。以下表にした。

表Ⅲ-1　金属製品処理作業項目

	鉄製品		非鉄製品	
	報告書掲載遺物	非掲載遺物	報告書掲載遺物	非掲載遺物
脱塩	○（オートクレーブ）		○（BTA／アルコール減圧含浸）	
錆落とし	○	×	○	×（一部○）
保存処理	○（NAD-10）	×	○（BTA／B72　SV溶液）	
収納	○（RPシステム）			

以上の処理を行ったのち、RPシステム（三菱ガス化学株式会社）により収納した。なお、鍛冶遺構等から出土した鍛冶関連遺物（鉄滓など）の分析をパリノサーヴェイに委託した（付編Ⅰ－7）。

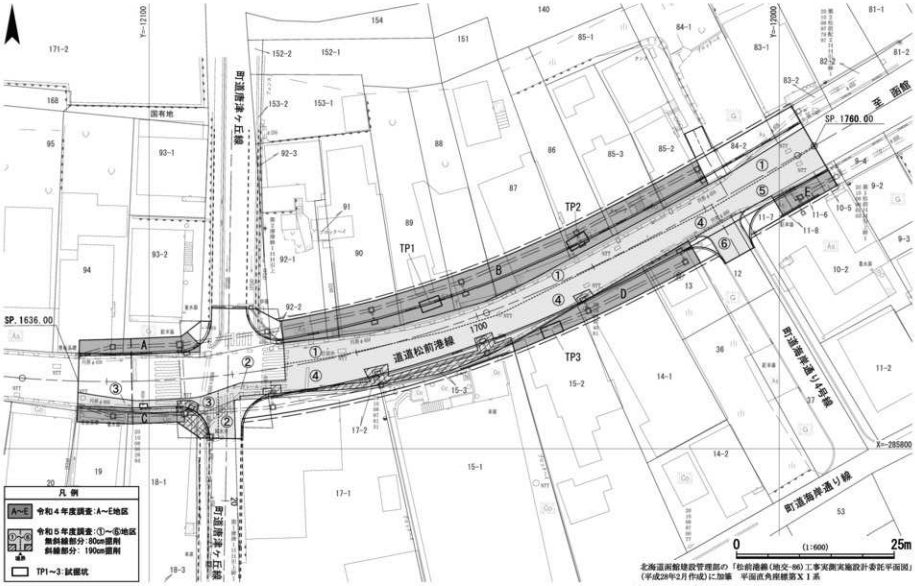
その他の遺物

骨角器・動物遺存体の同定・鑑定は令和4年度は1部2課土肥研晶、令和5年度は1部2課福井淳一が行った。出土人骨の取り上げ・保存・鑑定を新潟医療福祉大学に、人骨の年代測定およびC/N比

分析を㈱パレオ・ラボに委託した。ガラス玉の組成分析は奈良文化財研究所に依頼した。土壌中の珪藻分析をいしかり砂丘の風資料館に、坩堝付着物等の化学分析を国立科学博物館に、火山灰同定をアースサイエンスに依頼した（付編Ⅰ各節参照）。

整理作業終了後の遺物は、種別ごとに「掲載遺物」と「非掲載遺物」に大別し、分類ごと、地区ごとにコンテナにおさめ、「遺物収納台帳」を作成した。調査報告終了後の出土遺物は、北海道教育委員会の指示により松前町教育委員会に移管の予定である。

（新家）



図Ⅲ-1　令和4・5年度福山城下町遺跡（宇唐津）発掘区

Ⅳ　現地調査の状況

1　概　要

令和４年度は、松前港線の歩道部分531m^2（A～E地区）を調査した。検出した遺構は、石積１か所、礎石17か所、石列１条、柱１か所、柵１か所、炉３か所、溝１条、土坑23基、掘込８基、磁器片集中１か所、木製品集中２か所である。

令和５年度は、松前港線の車道部分を中心に、町道唐津ヶ丘線の一部と町道海岸通り４号線の一部、合わせて854m^2（①～⑥地区）を調査した。検出した遺構は礎石１か所、土坑19基、火事場整理穴１基、掘込１基、全年度に調査した木製品集中のつづきが１か所である。現地調査における各地区の概要は以下のとおりである。

A地区

地番93－２で礎石１か所（A礎石１）、94で柱１か所（A柱１）と土坑２基（A土坑１・３）、93－２・94の境界で土坑１基（A土坑２）を検出した。

B地区

地番85－３で礎石１か所（B礎石１）、86で掘込１基（B掘込２）、89で掘込１基（B掘込１）を検出した。掘込はどちらも部分的な検出にとどまるが、上端の幅４～５m、深さ0.6～0.9mを測り、長軸は松前港線と直交する方向にのびるようである。掘込２の覆土から、舵輪板の破片や漆塗椀が出土した。

C地区

地番18－１で礎石１か所（C礎石１）、19で礎石１か所（C礎石２）と土坑８基（C土坑１～８）を検出した。C土坑１・２は中心間距離が1.8mを測り、柱穴の可能性がある。C土坑３～８は、長径20～30cm台の土坑６基が密集し、一部に切り合いが見られる。

D地区

地番13では、Ⅲ層で石積１か所（D石積１）、礎石１か所（D礎石８）、土坑２基（D土坑８・11）を検出した。D石積１は、松前港線と直交する方向に割石が積み重ねられたものである。D土坑８は、

表Ⅳ-1　遺構数一覧表

地区	地番	石積	礎石	石列	柱	柵	炉	溝	土坑	掘込	火事場整理穴	磁器片集中	鉄製品関連遺物集中	木製品集中	立柱	合計
A	93-2		1													1
	93-2・94								1							1
	94				1				2							3
B	85-3		1													1
	86									1						1
	89									1						1
C	18-1		1													1
	19		1						8							9
D	13	1	1					1	3	2				1	3	12
	14-1		9			1	3		2	3			1	1	19	39
	15-2		3	1					7			1				12
E	11-6・8									1						1
③	18-1								8							8
	18・18-1地先								1							1
	18-1地先								5							5
	18-1・無地番地								1							1
	無地番地								1							1
④	15-3地先								1							1
	17-2地先								2							2
⑥	12		1							1	1					3
	合計	1	18	1	1	1	3	1	42	9	1	1	1	2	22	104

※④14-1地先の木製品集中は14-1木製品集中に含めた。

掘込面の位置から近代のものかもしれない。坑内には燃瓦が集積されていた。くぼ地に堆積するⅣ層からは、炉鉤、蓋、箸、編物糸受木、下駄、杭、薄柾目板、樹皮巻、布等の木製品・繊維製品を中心に、陶器、土錘、小刀、釘、棒状鉄製品、銭（天聖元宝等）、骨角製の矢中柄等が出土した（D13木製品集中）。同層の年代は、陶器や小枝の放射性炭素年代（付編Ⅰ－１）から、16世紀後半～17世紀初頭と推測される。木製品集中の下には、上端の幅が約５m、深さが約0.9mの掘込（D掘込５）があり、B地区の掘込２基と形状・規模が類似する。D掘込５の覆土上位に相当するⅤ層からは、小札、釘、銭（治平通宝）、海獣骨、ウマの臼歯等が得られており、骨は掘込内の覆土にも多く見られる。このほか、Ⅳ層上面で溝１条、Ⅶ層でD掘込５、土坑１基（D土坑13）を検出した。なお、D掘込１・２Aは、近現代のものである。

地番14－１では、Ⅲ層で礎石８か所（D礎石４～７・９～11・13）、炉３か所（D炉１～３）、土坑２基（D土坑９・12）、掘込３か所（D掘込２B・３・４）、灰白色堆積物等の広がりを検出した。D炉１で得られた多数の薄板状鉄片は、分析の結果、ねずみ鋳鉄の破片であることが判明した（付編Ⅰ－７）。同炉は、ねずみ鋳鉄破片を脱炭し、鋼として再利用するための鍛冶炉と推測される。D炉２は炉１の約30cm下に位置する。灰層から出土した３点の坩堝は、それぞれ金の熔解、銀の熔解、銅合金のリサイクルに使用されたと推定されている（付編Ⅰ－８）。D炉１・２は、どちらも18世紀前葉のものとみられる。灰白色堆積物は、漆喰の可能性があるため蛍光X線分析を行ったが、漆喰に特徴的なカルシウムが検出されなかった。なお、D柵１は近現代のものと推測される。

沢状地形に堆積するⅣ層からは、板綴舟の舟敷片、櫂、捧酒箸、漆塗椀、曲物把手、杭、薄柾目板、樹皮巻、縄等の木製品・繊維製品を中心に、陶磁器、釘、骨角製の矢中柄等が出土した（D14－１木製品集中）。陶磁器や小枝・クルミ殻の放射性炭素年代（付編Ⅰ－１・３）から、同層の年代は16世紀中葉～17世紀初頭と推測される。なお、Ⅳ層から採取した土壌について、珪藻分析を行っている（付編Ⅰ－５）。沢状地形外のⅣ層では、炉に伴うものではないが、羽口、鉄滓等が比較的まとまって出土した（D14－１鍛冶関連遺物集中）、一部の鉄滓を分析したところ、精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓であることが判明した（付編Ⅰ－７）。

このほか、Ⅶ層で礎石１か所（D礎石12）、人骨の両下肢と右上肢の一部等を検出した。人骨については、放射性炭素年代と炭素・窒素安定同位体比を測定するとともに（付編Ⅰ－２）、年齢・性別等の人類学的所見を得ている（付編Ⅰ－12）。

地番15－２では、Ⅲ層で礎石２か所（D礎石１・２）、土坑７基（D土坑１～７）、Ⅳ層で礎石１か所（D礎石３）、Ⅶ層で石列１条（D石列１）を検出した。Ⅳ層上面（火災面）では、16世紀後葉とみられる中国産磁器（漳州窯系）の破片がまとまって出土した（D15－２磁器片集中）。伴出した唐津焼から、火災が起きた年代は17世紀前葉と推測される。

E地区

近現代に掘削された掘込（E掘込１）が大部分を占める。

①・④・⑤地区・②・③地区北部（松前港線車道分）

①・④・⑤地区・②・③地区北部は松前港線の車道部分にあたり、一部をのぞき深さ80cmまで掘削した。アスファルト舗装の下は、路盤（砕石等）、路床（暗褐色土）によって構成されており、通信ケーブルや配水管が帯状に敷設されている部分もあった。路床の暗褐色土には近世の陶磁器等も含まれるが、近現代のガラス片も散見される。なお、①84－２地先に残存する自然堆積の黒褐色土は、「西館台地」へとのびていた坂道の東側にあたる部分であろう。また、⑤11地先の縁石付近では、深さ80cmでローム層の一部を検出したため、その下位に近世の造成土が残存する可能性がある。

④14－１地先にある190cm掘削部分では、標高約５m以下に堆積するⅣ層から、刀子の鞘、曲物、箸、杭等の木製品が出土した。この部分は、舟敷片等が出土したD14－１木製品集中の北西側にあたる。木製品のほかには、唐津焼、中国産磁器、小刀、骨角製の矢中柄、ウマの頭蓋骨、クジラの尾椎骨等が得られている。

④15－３地先、④15－３地先・17－２地先にある２箇所の190cm掘削部分では、旧福山街道の造成土を確認した。造成土は厚さ30～40cmを測り、礫を多量に含む。このほか④17－２地先等で、街道造成以前の土坑３基（D土坑10・14・15）を検出した。

②・③地区南部（唐津ヶ丘線）

唐津ヶ丘線の80cm掘削部分のうち、②地区南部では、標高5.2m付近に広がる焼土粒や炭の混じる土層から、17世紀後葉の陶磁器、寛永通宝等が出土している。一方の③地区南部は、側溝施工の際に攪乱を受けており、深さ80cmで近世の造成土は確認されなかった。

唐津ヶ丘線と松前港線との交差点南西側にある③地区の190cm掘削部分では、地番18－１を中心に土坑16基（C土坑９～24）を検出した。土坑には長径50～60cmの楕円形や、長径20cm以下の柱穴状・杭状のものなどがあり、覆土から珠洲焼の破片が出土している。

⑥地区（海岸通り４号線）

地番12では、褐色ローム層の上下で火災の痕跡を検出した。同層の直下にある19世紀後半の火事場整理穴（D火事場整理穴１）からは、陶磁器、瓦、金属製品、石製品、礫等が大量に出土したものの、海岸通り４号線部分は掘削深度が80cmであるため、調査は穴の上面付近にとどまる。このほか、ローム層よりも下位で礎石１か所（D礎石14）を検出した。なお、12の東側に隣接する無地番地は、電柱の支線等による攪乱を受けており、深さ80cmで近世の造成土は確認されなかった。

２　A地区

層　序

A－B　A93－２南東側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅲa層とⅣa層はロームが主体の張土で、それぞれが一時期の地表面であった可能性が高い。地山砂礫層の標高は約4.3mを測る。

C－D　A93－２西側の断面で、向きは松前港線と直交する。Ⅰ層は現代の造成土、Ⅱ層は近現代の造成土である。Ⅲ層上面のⅢ１層・Ⅲ１'層はローム主体で、この面からA土坑２が掘り込まれる。Ⅳ１層とⅣ２層は、浜側へ傾斜する地形を平坦にするための造成土とみられる。地山砂礫層は台地側で約4.9m、浜側で約4.4mを測る。

E－F　A94北側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅰ層は現代の造成土、Ⅱ層は近現代の造成土である。Ⅱ２層は焼土塊と炭化物を多量に含んでおり、近現代の火災跡とみられる。Ⅲ１層はローム主体の張土で「A－B」のⅢa、「C－D」のⅢ１層に相当する。地山砂礫層の標高は約4.7mを測る。

遺　構

A礎石１　A93－２のⅢ層で検出した。掘込に張られたロームに大形の凝灰岩がのる。

A柱１　A94のⅢ層で検出した。柱は地山砂礫層に張ったロームに据えられており、根元には根固めの礫がまとまる。形状は角柱状で、長さ45cm、直径14cmを測るが、腐朽が著しい。掘方は確認されなかった。

A土坑１　A94のⅢ層上面から掘り込まれる。坑内に大きさ10～15cmの礫が集中する。

A土坑２　A93－２・94のⅢ層上部で検出した。上部には大きさ20～25cmの扁平礫がやや重なって置かれ、その下に大きさ10cm前後の礫がまとまる。下位の覆土２層には大きさ５cm前後の礫が多く

含まれる。礫と覆土は鉄分の沈着により固結している。

A土坑３　A94の地山砂礫層で検出した。Ⅲ層で検出したA土坑１の下位に位置する。

３　B・①地区

層　序

A－B　B85－２北東側の断面で、向きは松前港線と平行する。１・２は近現代造成土のⅡ層に相当する。３は砂質の黒色土である。地山砂礫層から漸変しており、自然堆積であろう。後述する「K－L」の黒色土に連続すると推測される。地山砂礫層の標高は約5.5mを測る。

C－D　B85－２・85－３の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅰは現代の造成土、１は近現代造成土のⅡ層に相当する。２は自然堆積の黒色土とみられ、「A－B」の３に類似する。地山砂礫層の標高は約5.4mを測る。

E－F　B85－３・86の断面で、向きは松前港線と平行するⅠ層は現代の造成土で、１・２は近現代造成土のⅡ層に相当する。B掘込２の覆土は５つに分かれ、覆土から漆塗椀２点と舷側板の破片１点が出土している。７は砂質の黒色土で、自然堆積と考えられる。地山砂礫層の標高は地番85－３で約5.2m、86で約5.1mを測る。

G－H　B89の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅰは現代の造成土で、１～10は近現代造成土のⅡ層に相当する。B掘込１の覆土は５つに分かれる。12・13は砂質の黒褐色土・黒色土で自然堆積と考えられる。地山砂礫層の標高は東側で約4.9m、西側で約5.1mを測る。

I－J　B90の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅰ層は現代の造成土である。１・８・14はロームの張土で、６・12は焼土粒が目立つことから火災に関連すると考えられる。15は砂質の黒褐色土で自然堆積と考えられる。地山砂礫層の標高は約5.0mを測る。

K－L　①84－２地先の断面である。アスファルト舗装の下は、厚さ約60cmの路盤砕石層である。１の黒色土はK－Lの周囲でしか見られない。地山砂礫層から漸変しており、自然堆積と考えられる。地山砂礫層の標高は約5.5mを測る。１に類似する黒色土は、地番85－２のA－B等でも検出されている。昭和30年代に撮影された写真（図版１上）等によると、A－B～K－Lの間は「西館台地」へのびる坂道があった場所であることから、K－Lの黒色土は、削平された坂道の東脇付近と推測される。この坂道は『松前分間絵図』（口絵８下）で見ると、小松前川から西へ２本目の坂道にあたる。

遺　構

B礎石１　B85－３で検出した。地山砂礫層から漸変した黒色土に大形の凝灰岩が据えられる。

B掘込１　B89に位置する。上端・下端の幅は広いところで前者が5.8m、後者が4.6mを測り、底面はおおむね平坦である。北側は攪乱を受けていたが、松前港線と直交する方向にのびるようである。

B掘込２　B86に位置する。上端の幅5.9m、下端の幅4.3mを測り、底面はほぼ平坦である。B掘込１と断面の規模・形状が類似しており、両者は同種の遺構と考えられる。覆土から漆塗椀２点と舷側板の破片１点（木４）が出土している。漆塗椀のうち１点は、木質部が腐朽しており、塗膜だけが残存する（写真図版３の４段目中央）。もう１点（木３）は内側に円形の蓋（木５）を伴う。

４　C・②・③地区

層　序

A－B　C18－１北東側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅰ層は現代の造成土、１・２は近現代造成土のⅡ層に相当する。３～11は近世以前の造成土で、３はロームの張土である。９は１～

5cmの砂利を多く含み、C礎石1が据えられる。12・13は地山砂礫層から漸変した黒褐色～暗褐色土である。地山砂礫層の標高は約4.2mを測る。遺物は3～8をⅢ層、9～11をⅣ層、12・13をⅤ層として取り上げた。

C－D　C19北東側の断面で、向きは松前港線と直交する。Ⅰ層は現代の造成土である。1・2は近現代造成土のⅡ層に相当する。4には2cm以下の砂利が多く含まれる。地山砂礫層の標高は約3.9mを測る。遺物は3・4をⅢ層、5をⅣ層、6をⅤ層、7をⅥ層として取り上げた。

E－F　C19南側中央の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅰ層は現代の造成土である。1・2は近現代造成土のⅡ層に相当する。3～7は近世以前の造成土で、3はロームの張土である。4は0.5～1cmの砂利を多く含み、C礎石2が据えられる。7には微細な焼土粒やローム粒を多く含む。8は砂質の黒褐色土、9は暗褐色砂である。遺物は3～5をⅢ層、6・7をⅣ層、8をⅤ層、9をⅥ層として取り上げた。

G－H　②地区唐津ヶ丘線下（無地番地）の断面で、向きは同線と平行する。アスファルト舗装の下には路盤の砕石、路床の黒褐色土が堆積しており、後者から出土した遺物をⅡ層として取り上げた。標高5.2m付近に堆積する1の黒褐色土は、上面等に焼土粒・炭が目立ち、火災に関連すると考えられる。2は攪乱より南側では褐色のロームであるが、北側では黒褐色土と混在する。3は砂質の黒褐色土で、焼土粒・炭を含む。4は褐色のローム層である。遺物は陶磁器、釘、古寛永通宝等が出土しており、1～3をⅢ層として取り上げた。出土した陶磁器等から、1の火災は17世紀後葉頃に起きた可能性がある。

I－J　③18－1地先の断面で、向きは松前港線と平行する。最上位の砕石は道路側溝に伴うものである。1は礫を多量に含む黒褐色土で、2との層界に鉄盤層が形成されている。2は暗褐色土である。上面からC土坑23・24が掘り込まれ、後者の底面は地山砂礫層に達する。両者とも覆土にローム粒を含む。3は黒褐色土、4・5は砂、6はB－Tmの上に生成された黒褐色土である。地山砂礫層の標高は約4.1mを測る。遺物は1をⅢ層、2～6をⅣ層として取り上げた。なお、③地区のⅣ層はC地区のⅣ～Ⅴ層に相当する。

遺　構

C礎石1　C18－1で検出した。A－Bの9に据えられる。

C礎石2　C19で検出した。E－Fの4に据えられる。

C土坑1・2　C19の黒褐色土上面（C－Dの5・E－Fの8）で検出した。どちらも同じ程度の大きさで、平面は略円形を呈する。覆土は埋戻しとみられ、ロームと砂が混在し、焼土粒・炭化物粒を含む。両者の中心間距離は1.8mを測ることから、柱穴と考えられる。底面で検出した礫は根固めに用いられた可能性がある。

C土坑3～8　C19のB－Tm上面で、土坑6基のまとまりを検出した。いずれも長径20～30cm台であるが、4と6がやや深い。4は5に、6は7に切られる。覆土は黒褐色または黒褐色でローム粒を含む。検出状況が後述するC土坑9～24と類似する。

C土坑9～24　③18－1の北東端を中心に、B－Tm上面等で土坑16基のまとまりを検出した。B－Tmからの深さはいずれも10cm程度以内であるが、I－Jにかかる C土坑23・24のように、2の下から掘り込まれたと推測される。大きさは、20cm以下のもの（9・12・15・18・19・21・22）、20～40cm程度のもの（13・14・20・23・24）、40cm以上のもの（10・11・16・17）に分けられる。20の底面には、礎盤石とみられる直径約20cmの扁平礫が据えられる。覆土はいずれも砂質の黒褐色土であるが、17にはローム塊が含まれる。11と12の覆土から珠洲焼の破片が出土している。

5　D・④・⑥地区

層　序（D13・④13地先）

E−F　D13から14－1東側にかけての断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅲbの褐色ローム層から下を手掘りで調査した。14－1側のⅢb層は間に褐灰色土を挟む。Ⅲ2層は近世の造成土で、石積1等を検出した。14－1側では薄い砂礫層を挟んで上下に分かれる。Ⅳ層は黒褐色の粘土で、D掘込5の上にあたる部分から木製品を中心とする遺物が多く出土した（D13木製品集中）。Ⅴ層との層界には鉄盤層が形成される。Ⅴ層はD掘込5の覆土上位に相当し、小札、釘、銭（治平通宝）、海獣骨、ウマの臼歯等が出土した。Ⅴ礫層はD掘込5の掘上げ土の可能性がある。Ⅴ1層は貝殻片・骨片を多く含む。Ⅵ層は20cm以下の礫を多く含む造成土である。

G−H　D13東壁の断面で、向きは松前港線と直交する。標高5.7m付近に堆積するⅢ上面ロームから下を手掘りで調査した。D土坑8はⅢ上面ロームより上から掘り込まれている。Ⅲ層は近世の造成土で、間に砂利層を挟む。Ⅳ層の黒褐色粘土からは、E−Fでも述べたように、木製品が多く出土した。層中には焼土の薄層や骨片の集中する部分が見られる。D掘込5の底面は浜側に向かってやや傾斜する。

W−X　④13地先の松前港線中央付近の断面で、向きは松前港線と平行する。アスファルト舗装の下は砕石と砂の路盤で、1は路床の灰黄褐色土である。2は褐色ローム層で、3の暗褐色土を覆う。4は砂である。

遺　構（D13）

D石積1　Ⅲ層で検出した。石積は北側と南側に分かれているが、西側のツラがほぼ揃うことなどから、一連のものとして扱った。現存長は約2.3mを測り、南側はD掘込2によって失われているが、北側は松前港線の車道部分に向かってややのびる可能性がある。北側は凝灰岩の割石が2段、南側は緑色凝灰岩と安山岩の割石が2段に積まれている。安山岩の割石は、南側南端の上下2個である。北側の上端はおおむね同じ高さであるが、南側は浜へと傾斜する地形に沿って石が積まれるため、上端が傾く。石積の無い中央部から南側の石積の東側にかけて、Ⅲ層に10cm以下の亜角礫が集中する。北側の石積のすぐ横には、長軸を縦にした大形礫が据えられており、この部分の割石とc−d2段目の割石が石積のツラよりややずれている。なお、石積下のⅣ層上面で浅いくぼみを確認した。くぼみの内側や外側の所々には薄い焼土や炭が見られることから、くぼみが形成されたのちに火事があり、その後造成土（Ⅲ層）と石積が施工されたと考えられる。くぼみの西端は断面E−Fの13と14－1の地境付近に及ぶ。Ⅳ層上面では、このくぼみとよく似た浅い溝状のくぼみ（D溝1）も検出されている。

D溝1　D石積1東側のⅢ層を掘り下げていたところ、石積と平行する帯状の礫集中を検出した。礫は約10cm以下の亜角礫が主体である。Ⅳ層上面で、礫集中の下に浅い溝を検出したことから、帯状の礫集中は、溝を埋める際に形成されたようである。溝の内側は全体が炭で覆われる。

D礎石8　D石積1の端から約30cm南西側のⅢ層で検出した。周囲には15cm以下の礫がめぐる。地番14－1のD礎石6・7と直線上に並んでおり、隣接するD礎石7との中心間距離が1.8mであることから、これらと同一建物の礎石と考えられる。図はD礎石6・7と一緒に示す。

D土坑8　Ⅲ上面ロームとほぼ同じ高さで、割れた瓶瓦のまとまりを確認した。瓦のほとんどは板瓦である。まとまりの外側にはⅢ上面ロームを切る輪郭が観察されたため、瓦は土坑内に集積されたものと判断した。土坑の約半分は発掘区外にある。坑内の南側では、数枚の瓦が重なって出土しており、坑底には2枚の瓦が敷かれていた。D土坑8の掘込み面は、調査を開始したⅢ上面ロームより約20cm高い位置にあり、掘削時期は近代の可能性もある。

D土坑11　Ⅲ層で検出した柱穴状の土坑である。覆土中に大形礫３点がまとまっていた。

D土坑13　底面に炭の薄層が堆積する皿状の土坑である。B－Tm上面よりやや上の Ⅶ層から掘込まれている。約半分が法尻の奥にある。

D掘込１　覆土にガラス片やビニール片が含まれていたため、近現代のものと判断した。D掘込２Aを切る。

D掘込２A　当初は地番13～14－１にまたがるD掘込２として調査していたが、壁面を糞生する土のう袋を撤去した際に、断面Q－RのⅢ上面ロームより上から掘り込まれていること、地境から14－１側には40cm弱しかはみ出さないことがわかった。このため、D掘込２を地番13が主体の「D掘込２A」、後述する地番14－１東側が主体の「D掘込２B」に分離した。D掘込２Aは近現代に掘削されたもので、D掘込２Bを切り、D掘込１に切られる。

D掘込５　北側から東側が発掘区外にあり、南側はD掘込１により失われている。形状や規模が不明な部分もあるが、西壁と底面の一部のほか、断面E－Fで両側の立ち上がりを確認した。同断面における上端の幅は約5.2m、下端の幅は約4.3mを測る。底面はE－F間が平坦で、G－H間がやや浜側に傾斜する。壁の立ち上がりは急で、Ⅶ層に相当する黒褐色土（Ⅶ'）やローム（Ⅶ"）から掘り込まれる。覆土からは獣骨の出土が目立ち、底面に張られたロームの下から珠洲焼、擦文土器が出土している。また、覆土上位に相当するⅤ層からも、小札、釘、銭（治平通宝）、海獣骨、ウマの臼歯等が得られている。B掘込１・２は、形状や規模がD掘込５と類似することから、関連する遺構の可能性もある。

D13木製品集中　Ⅳ層の黒褐色粘土から、炉鉤、蓋、箸、編物糸受木、下駄、杭、薄柾目板、樹皮巻、布等の木製品・繊維製品を中心に、陶器、土錘、鉄釘、小刀、銭（天聖元宝等）、骨角製の矢中柄等が出土した。集中範囲の下にD掘込５が位置することから、木製品等は掘込が埋没する過程で生じたくぼ地に集積されたと考えられる。集中の西側に立杭３本、東側に薄い焼土や灰の集中が見られた。Ⅳ層の年代は、陶器や小枝の放射性炭素年代（付編Ⅰ－１）から、16世紀後半～17世紀初頭と推測される。

層　序（D14－１）

I－J　D14－１東側の断面で、向きは松前港線と直交する。Ⅲ１・Ⅲ２は近世の造成土で、両者の間にあるⅢ砂利はD炉２の下に敷かれた砂利に連続する。Ⅳ２'は下位の段差を埋めるように堆積した造成土で、鉄滓等が出土している。Ⅴ１は貝殻片・骨片を多く含む。Ⅵロームは台地側からせり出す大形礫の集積（Ⅵ）やB－Tmの上に堆積する黒褐色土（Ⅶ）を覆う。地山砂礫層の標高は約4.3mを測る。なお、火山灰（B－Tm）同定の試料は断面I－Jから採取した（付編Ⅰ－４）。

K－L　D14－１東側の断面で、向きは松前港線と直交する。台地側（L側）にはE－F間にのびるⅢbロームの端が見られる。D礎石４はD掘込３覆土の上に据えられる。３・４はⅢ層に相当し、浜側（E側）にはD炉２に敷かれたロームと砂利がつづく。５上面（標高約5.0m）には炭が広がっており、それより下位の６～８で出土した遺物はⅣ層として取り上げた。７（標高約4.8m）は炭が主体で、下位の８からは羽口片や鉄滓等の鍛冶関連遺物が多く出土した。これらはⅣ２層として取り上げたものがある。９は砂礫を多く含む造成土が台地側からせり出しており、Ⅶ（10～12）と人骨が出土した掘込を覆う。10～12は砂または砂質の堆積物で自然堆積のように見受けられる。間にB－Tmを挟む。人骨を伴う掘込は、Ⅶ上面の10から掘削される。地山砂礫層の標高は約4.3mを測り、浜側にやや傾斜する。

M－N　D14－１中央部の断面で、向きは松前港線と直交する。D掘込３により、M側（浜側）は地山砂礫層以下まで掘削されている。Ⅲ２は近世の造成土、Ⅳは焼土粒を含む黒褐色粘土で、K－LのⅣ上面に連続する。Ⅴの灰黄褐色土は、S－Tの沢状地形掘込に堆積するⅤと同一とみられる。Ⅶは

砂質の黒褐色土である。地山砂礫層の標高は約44mを測る。

O－P　D14－１西側の断面で、向きは松前港線と直交する。ア～オは灰白色土やロームで、Ⅲ１の黒色土に切られる。Ⅲ２a・bは近世の造成土で、Ⅲ２cは小砂利層である。Ⅳ層は沢状地形を埋める黒色土で、木製品を中心とする遺物が多数出土した（D14－１木製品集中）。カより下位では砂質土に変化していき、凸レンズ状の砂層を数枚挟む。沢状地形であるため、地山砂礫層の標高は周囲より低く、約3.7mを測る。なお、珪藻分析に用いた土壌は、Ⅳ層のD１～５で採取した（付編Ⅰ－５）。このうち、D５は舟敷片の底に付着していた土壌を試料としたもので、土層断面から採取したものではない。

Q－R　D14－１南西側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅲ１の黒色土とD炉３がD掘込３に切られる。D炉３が形成されたⅢ２aの上面には小礫がやや目立つ。

S－T　D14－１北西側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅲは近世の造成土で、中位に砂利層を挟む。Ⅳは沢状地形を埋める黒褐色～黒色土で、木製品を中心とする遺物が多数出土した（D14－１木製品集中）。Ⅳ２はⅣ１に比べて砂質で、Ⅴとの層界に鉄盤層が形成されている。S－TのⅤ層からは遺物が出土していない。なお、沢状地形は元々存在したと思われるが、肩にあたる部分が掘り込まれていること、Ⅶの上にのる堤状の砂礫層が地形の維持に関与していることから、同地形は人工的に形成・維持されていた可能性がある。

遺　構（D14－１・④14－１地先）

D14－１灰白色堆積物　D14－１西側のⅢ層掘り下げ中に、灰白色の堆積物やロームの広がりを検出した。これらは建物の漆喰壁や土壁の可能性があるため、範囲等を記録した。D掘込３や撹乱によって失われている部分もあるが、断面O－P・Q－Rにも見られることから、さらに南西側へとのびるようである。堆積物の上面にはD礎石10が、直下にはD礎石11が位置し、前者は堆積物の上面を掘り込んで設置される。なお、灰白色堆積物について蛍光X線分析を行ったが、漆喰に特徴的なカルシウムが検出されなかった。

D礎石４・13　Ⅲ上面ロームの直下で検出した。両者の中心間距離は1.8mを測り、どちらもD掘込３の上に位置する。

D礎石５　D礎石４の上面から約30cm下のⅢ層で、焼土やロームに一部が覆われた状態で検出した。当初は礎石と考えていたが、ほぼ同じ高さで検出したD炉１の金床石の可能性がある。D炉１等と合わせて図示した。

D礎石６～８　Ⅲ層で検出した。松前港線に沿って並ぶ３個の礎石で、三者の中心間距離は1.8mを測る。D礎石６・７は地番14－１、D礎石８は地番13に位置し、後者の上面は前者より約５cm低い。D礎石６・８の周りには15cm以下の礫がめぐる。

D礎石９　Ⅲ層で検出した。列をなす礎石はないが、礎石10・11と上面標高が近い。

D礎石10　Ⅲ層の灰白色堆積物を掘り込んで割石が設置される。上面はロームで覆われる。

D礎石11　Ⅲ層の灰白色堆積物直下で検出した。

D礎石12　自然堆積とみられるⅦ層の黒褐色土に設置される。

D炉１　D14－１東側のⅢ層を掘り下げ中、焼土を含むロームの広がりを検出した。トレンチを入れて堆積状況を観察したところ、ロームの下で焼土と黒色灰を確認した。黒色灰の上面には薄板状の鉄片がまとまっていたことから、鍛冶炉の可能性があると判断した。炉は皿状に浅く掘りくぼめられており、黒色灰が全体に広がる。南端はD掘込２Bの掘削で失われている。断面は１が炉を埋めるローム、２が焼土、３が黒色灰、４が灰黄褐色灰である。２の焼土はロームを含み軟らかい。遺物は板状の凝

灰岩片や肥前系陶器等が２付近にまとまっていた。２～４の土壌を採取して水洗選別したところ、薄板状鉄片、羽口片等が得られている。薄板状鉄片（図版40）は、分析によってねずみ鋳鉄破片と判断され、D炉１では鋳鉄破片を脱炭して鋼としていた可能性が指摘されている（付編Ⅰ－７）。

D炉２　D炉１の約30cm下で検出した。D土坑12の掘削により大部分が失われている。炉の周りにはロームが張られており、その下には砂利が敷かれる。焼土の上に堆積する灰層からは坩堝が３点出土し、灰を水洗選別したところ、釘や骨片等が回収された。３点の坩堝は、それぞれ金の熔解、銀の熔解、銅合金のリサイクルに使用され、未水洗の灰からも金粒子、銀粒子、銅粒子が得られている（付編Ⅰ－８）。

D炉３　Ⅲ層で検出した。D掘込３の掘削で大部分が失われている。灰層を伴う。

D土坑９　D炉１に隣接する皿状の土坑である。覆土２はにぶい黄橙色の粘土である。

D土坑12　D炉２の灰層やローム・砂利を切って掘削される。掘込２の掘削で南側の上部が失われていた。

D掘込２B・４　Ⅲ上面ロームの直下で検出した。D掘込２Bは、D掘込２から分離した地番14－１側の掘込である。上位にはロームや砂礫を切る別の掘込があり、D掘込４として区別した。D掘込４の平面形、およびD掘込２Bと３との切り合い関係は、壁面の崩落により確認できなかった。D掘込２BはD掘込２Aに切られる。

D掘込３　Ⅲ上面ロームの直下で検出した。覆土は４層に分かれる。覆土１上面は砂・炭が多く、焼土粒を含む。遺物が比較的まとまって出土した。壁面の崩落により、D掘込２Bとの切り合い関係を確認できなかった。

D14－１鍛冶関連遺物集中　D14－１東側のⅣ層（Ⅳ２・Ⅳ２'層を含む）で、羽口片や鉄滓等が比較的まとまって出土した。いずれも造成土中に廃棄されたものと考えられる。主な遺物について出土地点を計測して取上げ、分布図を作成した。出土地点を計測しないで取上げたものを合わせると、集中付近から出土した遺物は、羽口片７点、鉄滓38点、鑿１点、釘１点、青磁片２点を数える。

D14－１木製品集中（④14－１地先を含む）

D14－１西側の沢状地形に堆積するⅣ層から、板綴舟の舟敷片、櫂、捧酒箸、漆塗椀、曲物把手、杭、薄柾目板、樹皮巻、縄等の木製品・繊維製品を中心に、陶磁器、釘、骨角製の矢中柄等が出土した。Ⅳ層の層厚は約1.5mを測る。木製品は標高4.8m付近より下位から出土したものがほとんどで、舟敷片を挟んだ上下で特に多い。同層からはアワビの貝殻も多く出土する。Ⅳ層上位にあたる標高4.8m前後では、絵唐津等の陶器が目立ち、完形に近いものも得られている。舟敷は長軸両端と一方の舷側が欠損していた。舟敷西端側の直下から舟材の一部が、舟敷中央南側の下から縄が出土している。

令和５年度に調査した④14－１地先にある190cm掘削部分でも、Ⅳ層から刀の鞘、曲物、箸、杭等の木製品が出土した。この部分は、D14－１で検出された沢状地形の北西側にあたる。木製品のほかには、唐津焼、中国産磁器、小刀、骨角製の矢中柄、ウマの頭蓋骨、クジラの尾椎骨等が得られている。

Ⅳ層の年代は、陶磁器や小枝・クルミ殻の放射性炭素年代（付編Ⅰ－１・３）から、16世紀中葉～17世紀初頭と推測される。なお、④14－１地先のⅣ層上位からは、17世紀後半の仏飯器（図Ⅴ－13－a181）、1636～1659年鋳造の古寛永通宝（図Ⅴ－44－75）が出土した。これらの遺物からみると、沢状地形がⅢ層に覆われる時期は17世紀後半となるが、D14－１のⅣ層では17世紀後半の遺物がないことから、④14－１地先の仏飯器、古寛永通宝は混入の可能性がある。

D14－１人骨出土状況　D14－１東側の掘削で生じた法尻付近で、膝関節が強く屈曲した人骨左下肢が出土した。地表からの深さは約２mを測る。写真撮影後に左下肢を取上げたところ、壁面の内部

にも骨が見られたため、改めてその周囲を精査した。その結果、人骨はB－Tmを切る深さ30cmほどの浅い掘込内にあり、掘込の上は造成土で覆われていることがわかった（断面K－L）。後日、地番14－1中央～西側を掘り下げた際に、B－Tm上面で右下肢の膝関節が強く屈曲した人骨の一部と不整形の掘込を検出した。掘込の覆土は砂質の黒褐色土で、10cm以下の礫を含む。新潟医療福祉大学の澤田純明氏のご教示によると、出土状況図を作成した人骨の部位は、右の骨盤から下肢、右の肘付近から掌の一部ということである。掘込は造成土下のⅦ層から掘削されているので、16世紀のものと推測される。人骨については、放射性炭素年代と炭素・窒素安定同位体比を測定するとともに（付編Ⅰ－2）、年齢・性別等の人類学的所見を得ている（付編Ⅰ－12）。

D柵 1　D14－1西側のⅢ層掘り下げ中に検出した。支柱には枘穴のある柱が転用されており、柱の底はⅣ層中に据えられる。横木は松前港線と直交する方向にのびる。周囲には立杭が1本ある。当初はⅢ層の遺構と思われたが、後に近現代の撹乱内に設置されていることがわかった。参考資料として掲載した。

層　序（D15－2）

U－V　D15－2北側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅱ層は近現代の造成土で、Ⅲロームから下を近世以前の造成土として調査した。Ⅳ層上面（標高4.9m前後）は炭や焼土が広がる火災面で、そこから中国産磁器（漳州窯系）の破片がまとまって出土している。Ⅶ層に含まれるシルト粒はB－Tmと思われる。地山砂礫層の標高は約4.3mを測る。

遺　構（D15－2）

D礎石 1・2　D15－2のⅢ層で、松前港線に平行する礎石を2か所検出した。どちらも上面がやや南に傾く。礎石同士の中心間距離は1.8mを測り、列をなすと考えられる。2は割石である。

D礎石 3　D15－2のⅣ層で検出した。Ⅳ層上面の火災面より下に位置する。

D石列 1　D15－2のⅦ層で、複数の大形礫が並ぶ状況を確認した。大形礫のうち地面と接する3個の礫は、長軸を南南西－北北東に向けて並べられており、現在の松前港線と平行する。石列は北北東側へさらにのびると予想される。Ⅶ層にはB－Tmとみられるシルトが所々に見られる。

D土坑 1～7　D15－2のⅣ層上面で検出した。いずれも火災後に掘削されたものである。D土坑1は断面の様子から柱穴の可能性がある。D土坑2は発掘区の壁面付近で検出した。壁面に残る上部の断面を見ると、本土坑は漏斗状を呈し、掘込面をⅢロームで覆われる。覆土4で出土した有孔礫は、坑外にはみ出ていたため、Ⅳ層の遺物かもしれない。D土坑3は試掘坑（TP1）の掘削で南側が失われている。D土坑4・5は形状が楕円形もしくは隅丸方形に近い。どちらも覆土から金属製品が出土した。D土坑6は断面の様子や底面の礫のまとまりから、柱穴の可能性がある。D土坑7は柱穴状である。

D15－2磁器片集中　D15－2のⅣ層上面（火災面）で、中国産磁器（漳州窯系）の破片約200点がまとまって出土した。磁器片に混じって、唐津焼1点、焜炉片11点、煙管雁首1点、釘3点も得られている。これらの遺物はD15－2の中央部で出土したが、断面U－Vの西側、Ⅳ層上面がややくぼんだ部分で特に集中していた。接合作業の結果、磁器片は20個体程度の碗に復元された。接合関係（図Ⅳ－22・23）は、5mほど離れた東西の破片がよく接合するなど、広範囲にわたるものが多く、集中の西側だけ、東側だけで接合するものは少ない。漳州窯系磁器は16世紀後葉のものとみられるが、伴出した唐津焼から、火災が起きた時期は17世紀前葉と推測される。

層　序（④15－3地先・17－2地先）

A－B　④15－3地先の断面で、向きは松前港線と直交する。1・5は黒色土である。6は砂礫を多

く含み、上位に大形礫が集中する。7には水成堆積とみられるシルトの薄層が2、3枚挟在する。地山砂礫層の標高は約4.4mを測る。A－Bの平面上の位置からみて、6より上位は福山街道の造成土で、1・5の黒色土は踏み付けにより形成された可能性もある。遺物は1～6をⅢ層、7以下をⅣ層として取り上げた。なお、④地区のⅢ層はD地区のⅢ～Ⅵ層に、Ⅳ層はD地区のⅦ層に相当する。

C－D　④15－3地先・17－2地先の断面で、向きは松前港線と平行する。1はローム塊を多く含む黒褐色土で、2・2'は砂礫を多く含む。3はローム粒を多く含む灰黄褐色土で、砂礫をほとんど含まない。4はローム粒を多く含む黒褐色土で、上位に20cm程度以下の礫が目立つ。D土坑15は4から掘り込まれる。5の黒褐色土は自然堆積とみられ、地山砂礫層の標高は約4.3mを測る。C－Dの平面上の位置からみて、砂礫を多く含む2・2'は福山街道の造成土で、1は踏み付けにより形成された可能性もある。3は街道の造成土かどうか、現時点では判然としない。遺物は1・2・2'をⅢ層、3～5をⅣ層で取り上げた。なお、④地区のⅢ層はD地区のⅢ～Ⅵ層に、Ⅳ層はD地区のⅦ層に相当する。

E－F　④17－2地先の断面で、向きは松前港線と直交する。1は標高5.0m付近に堆積する黒褐色土で、C－Dの1とは連続しない。2はC－Dの2よりも砂礫が少ない。4からD土坑10が掘り込まれる。

遺　構（④15－3地先・17－2地先）

D土坑10・14・15　④15－3地先・17－2地先にまたがる190cm掘削部分で、土坑3基のまとまりを検出した。いずれも福山街道の造成土より下の4から掘り込まれている。D土坑10は3基のうち最も大型であるが、半分以上が法面の下にある。D土坑14は底面で礎盤石とみられる扁平礫が出土した。D土坑15は柱穴状である。

層　序（⑥12）

A－B　⑥12の発掘区西壁の断面である。1は近現代の造成土、2～7は皿状のくぼみを版築で平坦にしており、くぼみの中央には別の版築a～dが施工される。9は焼土粒や炭を含んだ砂で、皿状にくぼむ。くぼみの中央部には10cm程度の角礫等が集中する。12は厚さ約10cmの褐色ロームである。上面は被熱により赤色化していることから、火災があったと判断される。皿状にくぼんでいるため、上面の標高は5.6～5.8mを測る。12の直下では火事場整理の穴が検出されており、覆土の陥没によってくぼみが生じたと考えられる。12直下の火災は、穴から出土した陶磁器より、19世紀後半に発生したと推測される。遺物は1～11をⅡ層、12上面で焼土粒に紛れて出土したものをⅢ層上面、14・15をⅢ層、13を火事場整理穴の覆土として取り上げた。

C－D　⑥12の発掘区南壁の断面で、向きは海岸通り4号線と直交する。上部は砕石層が大部分を占めるが、南西端側（D側）ではA－Bから連続する1・3～5・7が残存する。12の褐色ロームはA－Bと異なり水平であることから、火事場整理穴の中心からはずれていると予想される。被熱により赤色化した上面は標高約5.8mを測る。13は火事場整理穴の覆土で、焼けた砂と細礫のまとまり（13'）も見られた。

遺　構（⑥12）

D礎石14　⑥12の松前港線側に位置する。周囲の土層はロームと黒褐色土との版築である。なお、1の上面は標高約5.8mを測り、被熱による赤色化と炭の薄層が見られる。断面A－Bのうち、12上面の火災面に連続する可能性が高い。

D火事場整理穴1　⑥12に堆積する褐色ロームの直下で検出した。直径は4mを超えるようで、穴の南～西部は調査範囲外にのびる。内部には焼けた砂や礫が目立ち、遺物は陶磁器、瓦、金属製品、石製品等が大量に出土している。遺物の多くが焼けていることから、火事場整理の穴と判断した。掘削時期は、出土した陶磁器等から19世紀後半と推測される。なお、唐津ヶ丘線下の⑥地区は、掘削深度

が80cmに制限されているため、調査は穴の上面付近にとどまる。

D掘込６　⑥12に位置する。覆土にガラス片等が含まれることから、近現代のものと判断した。

６　E・⑤地区

層　序

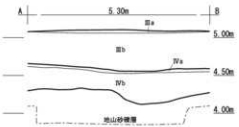
A－B　E掘込１の断面で、E地区南壁の地番11－６中央から11－８南端の範囲を図化した。覆土１は掘込のくぼみを埋める褐色ロームで、遺物や礫等を含まない。覆土２からは陶磁器、金属製品、貝殻片等様々な遺物が大量に出土した。

C－D　⑤11地先の断面で、向きは松前港線と平行する。２は地表から約80cm下、標高5.4m付近に堆積する褐色ロームで、挟在する黒褐色土と薄い互層になる部分がある。３は暗褐色土で焼土粒や炭を含む。４は砂礫質の黒褐色土である。２のロームは、C－Dを中心として松前港線がのびる方向に長さ約４m、C－Dから道路中央に向かって幅約0.5mの範囲が残存する。

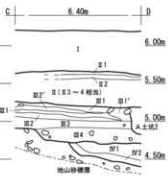
遺　構

E掘込１　大型の掘込で、南側から西側が発掘区外にのびるが、北側は⑤地区の断面C－Dまでは及んでいない。様々な遺物が覆土より大量に出土したことから、廃棄土坑と考えられる。出土した陶磁器からみて、近現代に掘削されたと推測される。

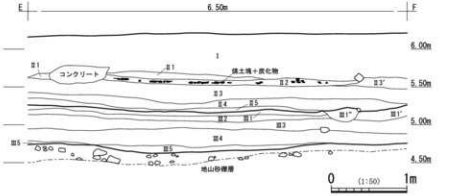
（山中）



A-B 注記
Ⅲa：黄褐色ローム主体　10YR5/6　粘；中～強　堅；堅　損土
Ⅲb：黒褐色土　10YR3/2　粘；中～弱　堅；やや軟
Ⅳa：黄褐色ローム＋黒褐色土　「黄褐色ローム」10YR5/6　粘；中　堅；やや軟　ローム＋炭化物＋焼土粒
「黒褐色土」10YR3/2　粘；弱　堅；やや軟
Ⅳb：褐灰色土　10YR4/1　粘；弱～なし　堅；軟　砂質



C-D 注記
Ⅲ2'：黒褐色土　10YR2/2　堅；堅　ローム粒3%含む
Ⅳ1：褐色土　10YR4/6　堅；堅　ローム主体土
Ⅳ2：黒褐色土　10YR3/2　粘；弱～なし　堅；堅　砂質　ローム含む
※他の層位はE-F注記に記載



E-F 注記
Ⅰ：黒褐色土　10YR3/2　粘；強　堅；すこぶる堅　砂石を多量に含む　現地表の砂石
Ⅱ1：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；すこぶる堅　ローム主体の堅土　焼土粒　炭化物粒散在
Ⅱ2：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；堅　焼土塊＋炭化物多量に混入　焼土面
Ⅱ3：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；堅　直径10～50mmのローム粒を含む　礫7%含む
Ⅱ3'：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　礫混入なし
Ⅱ4：黒褐色土　10YR2/2　粘；中　堅；堅　直径10mmのローム粒を5%含む　炭化物粒散在
Ⅱ5：黒色土　10YR2/1　粘；中～強　堅；堅　直径10mmのローム粒を5%含む　炭化物粒散在
Ⅲ1：黄褐色ローム主体　10YR5/6　粘；中～強　堅；堅　損土
Ⅲ1'：黄褐色ローム主体　10YR5/6　粘；強　堅；堅　炭化物粒・焼土粒を3%含む
Ⅲ1''：黄褐色ローム主体　10YR5/6　粘；強　堅；堅　炭化物粒・焼土粒を5%含む
Ⅲ2：黒褐色土　10YR2/1　粘；弱　堅；すこぶる堅　ローム塊・炭化物粒を7%含む
Ⅲ3：黒色土　10YR2/1　粘；強　堅；堅～やや軟　ローム塊・直径10mmの礫をそれぞれ3%含む
Ⅲ4：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；やや軟　ローム塊を5%含む　Ⅲ3よりローム塊が大粒で混入量が増える
Ⅲ5：黄褐色ローム＋黒褐色土　10YR5/6＋10YR2/3　粘；強　東西両側等では部分的にロームのみとなる
※Ⅱ5・Ⅲ1・Ⅲ1'は盛層上部、Ⅲ1''は盛層上部、Ⅲ2・Ⅲ3は盛層、Ⅲ4・Ⅲ5は盛層下部で遺物取上げ

図Ⅳ-1　A地区平面図・断面図

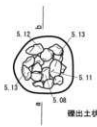
A礎石 1

A礎石1注記
1：褐色ローム　10YR4/6　粘；強　堅；やや軟～堅
2：黒色土　10YR2/1　粘；なし　堅；堅　砂質
3：灰黄褐色ローム主体　10YR4/2　粘；強　堅；やや軟　砂質
　焼土粒・炭化物粒多
4：黒褐色土　10YR2/2　粘；なし　堅；やや軟　砂質
5：暗褐色砂　10YR3/4　粘；なし　堅；しまり

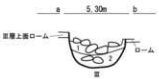
A柱 1

A柱1注記
1：にぶい黄褐色ローム　10YR5/3　粘；強　堅；すこぶる堅
III：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；軟　礫の混入少ない

A土坑 1

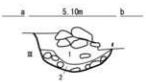


礫出土状況



A土坑1注記
1：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；やや軟　10～15cm大の礫配置
2：黒褐色土　10YR2/1　粘；強　堅；やや軟

A土坑 2

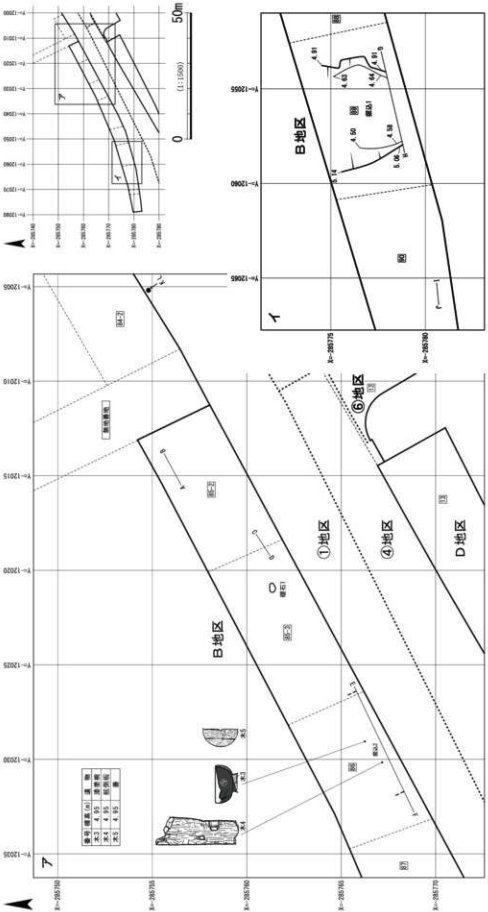


A土坑2注記
1：黒色土　10YR2/1　粘；強　堅；やや軟　上部に20～25cmの扁平礫が折重なって配置
2：黒褐色土　10YR2/3　粘；中～強　堅；固結　鉄分が沈着した礫が密集　ローム粒を含む
III：暗褐色土　10YR3/3　粘；強　堅；やや軟～堅　直径0.5cmのローム粒を30%含む　炭化物粒多い

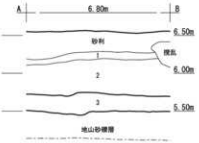
A土坑 3

A土坑3注記
1：黒色土　10YR2/1　粘；強　堅；弱　砂を少し含む　拳大の礫を含む
2：黒褐色土　10YR2/2　粘；弱　堅；なし　砂質

図Ⅳ-2　A地区遺構図

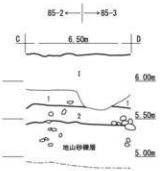


図Ⅳ-3　B・①地区平面図

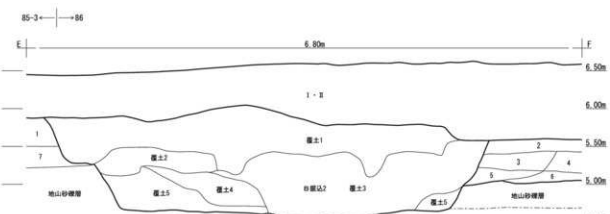


A-B 注記
Ⅱ層
1：黄褐色ローム　10YR5/6　粘；強　堅；堅　ローム＋シルト
2：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；やや堅　ローム＋シルト
自然堆積層
3：黒色土　10YR1.7/1　粘；なし　堅；軟　砂質

K-L 注記
自然堆積層
1：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；軟～堅　15cm程の礫を含む

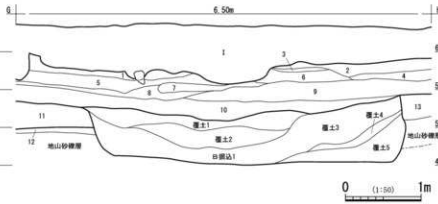


C-D 注記
Ⅱ層
1：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；堅　ローム＋粘土　5～10㎜の焼土塊を多く含む　拳大の礫を含む
自然堆積層
2：黒色土　10YR2/1　粘；弱　堅；軟　砂　拳大の礫を含む



E-F 注記
Ⅱ層
1：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；堅　ローム＋シルト
2：褐灰色土　10YR4/1　粘；強　堅；やや堅　粘土＋シルト
3：にぶい黄褐色ローム　10YR4/3　粘；強　堅；やや堅　粘土＋ローム　炭化物粒を微量に含む
4：黄褐色ローム　10YR5/6　粘；強　堅；やや軟　粘土＋ローム
5：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；やや軟　粘土＋シルト
6：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；やや軟　粘土＋ローム＋シルト
自然堆積層
7：黒色土　10YR1.7/1　粘；なし　堅；軟　砂質
B撹込2
覆土1：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；強　堅；堅　ローム＋シルト　直径5～20㎜の砂利を多く含む
覆土2：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；堅　粘土　礫を少し含む
覆土3：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；堅　粘土＋シルト　直径20㎜以下の砂利を微量含む
覆土4：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；堅　粘土＋シルト　直径10～20㎜の砂利を多く含む
覆土5：暗褐色土　10YR3/3　粘；強　堅；軟　粘土＋シルト　ローム　焼土粒を均質に含む

図Ⅳ-4　B地区断面図（1）・①地区断面図



G-H 注記

Ⅱ層

1：黄褐色ローム　10YR5/8　粘；強　堅；堅　ローム

2：黒褐色土　10YR2/2　粘；中　堅；堅　砂＋土　ローム粒と直径2～5mmの砂利を少し含む

3：黄褐色ローム　10YR5/8　粘；強　堅；堅　ローム

4：黒褐色土　10YR2/3　粘；中　堅；堅　砂＋土　ローム粒と直径2～5mmの砂利を微量に含む

5：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　砂＋土　直径1～10 mmの砂利を多く含む

6：黒褐色土　10YR2/2　粘；中　堅；軟　砂＋土　直径1～10 mmの砂利を多く含む

7：黒褐色土　10YR2/1　粘；強　堅；堅　土＋ローム　直径2mm程のローム粒を含む

8：砂利層　堅；堅　砂利は20 mm以下

9：黒色土　10YR1.7/1　粘；強　堅；堅　5～20 mmのローム塊を含む

10：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；堅　土＋粘土　ローム粒・炭化物粒を均質に含む　直径2～5mmの砂利を少し含む　10 cm程の礫を少し含む

Ⅲ層

11：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；堅　砂＋粘土＋ローム　直径5mmのローム粒を微量に含む　拳大の礫を微量に含む

自然堆積層

12：黒褐色土　10YR2/3　粘；なし　堅；軟　砂質

13：黒色土　10YR1.7/1　粘；なし　堅；軟　砂質

B掘込1

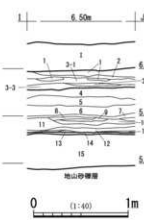
覆土1：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；堅　土＋粘土　5cm弱のローム塊を多く含む　直径10 mmの砂利を微量に含む　拳大の礫を少し含む

覆土2：暗褐色土　10YR3/3　粘；強　堅；堅　粘土＋ローム　直径5～10 mmのローム粒を多く含む

覆土3：暗褐色土　10YR3/4　砂＋粘土　直径5～10 mmのローム粒を微量に含む　直径5～10 mmの砂利を微量に含む　拳大以上の礫を多く含む

覆土4：黒褐色土　10YR3/1　粘；弱　堅；軟　砂＋粘土　炭化材・焼土を含む

覆土5：黒色土　10YR2/1　粘；弱　堅；軟　砂質　直径5mmのローム粒を微量に含む　拳大の礫を少量含む



I-J 注記

Ⅱ層

1：褐色ローム　10YR4/4　粘；強　堅；堅

2：暗褐色土　10YR3/4　粘；弱　堅；軟　砂質

3-1：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；堅　土＋粘土　2～10 mmのロームが塊状に入る

3-2：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；堅　土＋粘土　上面に直径2mmの砂が3cm程堆積

3-3：黒色土　10YR2/1　粘；強　堅；堅　土＋粘土　2cm程のロームが塊状に入る

Ⅲ層

4：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；堅　土＋粘土　3cm程のロームが塊状に入る

5：暗褐色土　10YR3/4　粘；強　堅；堅　土＋粘土　直径2～5mmの砂・ローム粒・焼土粒を含む

6：にぶい黄褐色ローム　10YR4/3　粘；強　堅；堅　ローム＋粘土　1～50 mm程の焼土粒

1～20 mm程の炭化物を均質に含む

7：黒褐色土　10YR2/3　粘；弱　堅；軟　粘土　直径5mmの砂を多く含む

8：褐色ローム　10YR4/4　粘；強　堅；堅

9：黒色土　10YR2/1　粘；強　堅；堅　粘土＋炭化物粒　2 mm程の焼土粒・炭化物粒を少量含む

10：褐色土　10YR4/4　粘；強　堅；堅　粘土＋ローム　直径5～10 mmの砂を多く含む

11：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；堅　粘土＋ローム　直径2mmの焼土粒を少量含む

12：暗褐色土　10YR3/4　粘；強　堅；堅　粘土＋ローム　5mm程の焼土塊を均質に含む

13：暗褐色土　10YR3/4　粘；強　堅；堅　粘土＋ローム　上面に炭化物層が1mm程堆積

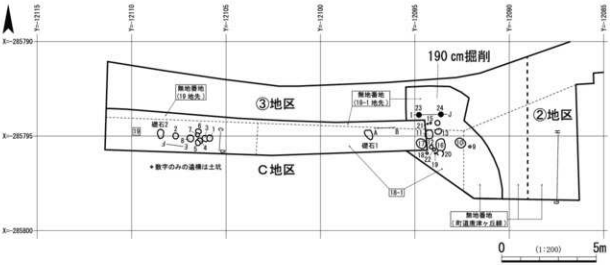
14：褐色ローム　10YR4/4　粘；強　堅；堅

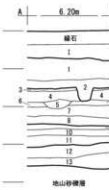
自然堆積層

15：黒褐色土　10YR2/3　粘；弱　堅；軟　砂質　直径10 mmの砂を微量に含む　拳大の礫を少量含む

B礎石 1

図Ⅳ-5　B地区断面図（2）・遺構図





A-B 注記

II 層

1：暗褐色土　10YR3/4　粘；強　堅；堅　粘土＋ローム

2：暗褐色土　10YR3/4　粘；強　堅；堅　粘土＋ローム　直径10 mmの砂利を含む

III 層

3：褐色ローム　10YR4/6　粘；強　堅；堅

4：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；弱　砂＋ローム＋粘土　直径10～20 mmの砂利を多く含む

5：直径10～60 mmの砂利

6：暗褐色土　10YR3/4　粘；強　堅；軟　ローム＋粘土　砂を多く含む

7：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；堅　土＋粘土　直径5mmのローム粒を少量含む

8：暗褐色土　10YR3/4　粘；弱　堅；軟　砂＋粘土＋ローム　直径5mmの砂利を多く含む

IV 層

9：暗褐色土　10YR3/4　粘；強　堅；軟　8よりやや明るい　砂＋粘土＋ローム　直径10～50 mmの砂利を多く含む

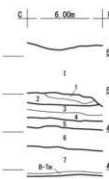
10：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；軟　砂＋粘土　ローム粒を均質に含む　直径50 mm程の礫を多く含む

11：暗褐色土　10YR3/4　粘；強　堅；軟　粘土＋ローム

V 層

12：黒褐色土　10YR3/1　粘；強　堅；軟　砂＋粘土　微細なローム粒を均質に含む

13：黒褐色土　10YR2/3　粘；弱　堅；軟　黒色の海砂に微細なローム粒を均質に含む



C-D 注記

II 層

1：暗赤褐色土　5YR3/6　粘；弱　堅；軟　砂・ローム粒・焼土粒を均質に含む

2：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；軟　微細なローム粒を少量含む

III 層

3：暗褐色土　10YR3/4　粘；弱　堅；軟　砂・微細なローム粒を微量含む

4：黒褐色土　10YR2/3　粘；弱　堅；堅　砂・直径5～20 mmの砂利を多く含む

IV 層

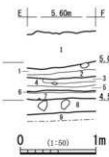
5：黒褐色土　10YR2/3　粘；弱　堅；軟　砂・微細な砂を少量均質に含む

V 層

6：黒色土　10YR2/1　粘；強　堅；軟　微細な砂・ローム粒・焼土粒を少量含む

VI 層

7：暗褐色砂　10YR3/4　粘；なし　堅；軟　微細なローム粒を含む



E-F 注記

II 層

1：暗赤褐色土　5YR3/6　粘；弱　堅；軟　砂＋ローム・焼土粒・直径5mmの砂を均質に含む

2：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；軟　土＋ローム

III 層

3：褐色ローム　10YR4/6　粘；強　堅；堅

4：黒褐色土　10YR2/2　粘；弱　堅；軟　砂　直径5～10 mmの砂を多く含む　微細なローム粒を含む

5：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；軟　土＋粘土

IV 層

6：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅；軟　粘土　直径5～10 mmの砂を多く含む

7：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；軟　粘土　微細な焼土粒・ローム粒を多く含む

V 層

8：黒褐色土　10YR2/2　粘；弱　堅；軟　砂質

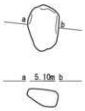
VI 層

9：暗褐色砂　10YR3/4　砂　微細なローム粒を含む

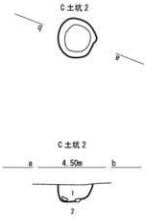
図Ⅳ-6　C・②・③地区平面図・C地区断面図

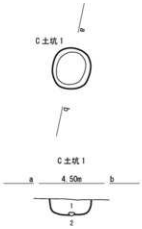
C礎石１

C礎石２



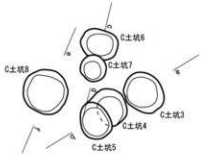
C土坑１・２

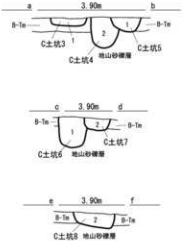




C土坑１・２注記
１：褐色土　10YR4/6　粘；強　堅：堅　ローム＋砂　炭化物粒・焼土粒を含む
V層
２：黒褐色土　10YR2/2　粘；弱　堅：軟　砂質

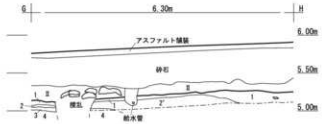
C土坑３～８



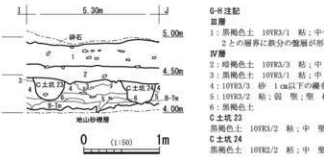


C土坑３～８注記
１：黒褐色土　10YR2/2　粘；強　堅：軟　砂＋粘土　ローム粒を少量含む
２：黒色土　10YR1/2　粘；強　堅：軟　砂＋粘土　ローム粒を微量含む

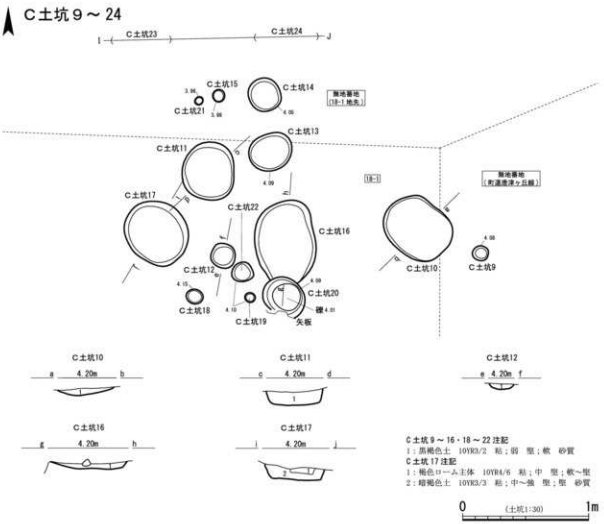
図Ⅳ-7　C地区遺構図



I-J 注記
盛土
1：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　焼土粒・炭を含む
2：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅
2'：ロームと黒褐色土の薄い互層　粘；中　堅；堅
3：黒褐色土　10YR2/2　粘；中　堅；堅　焼土粒・炭を含む
4：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅

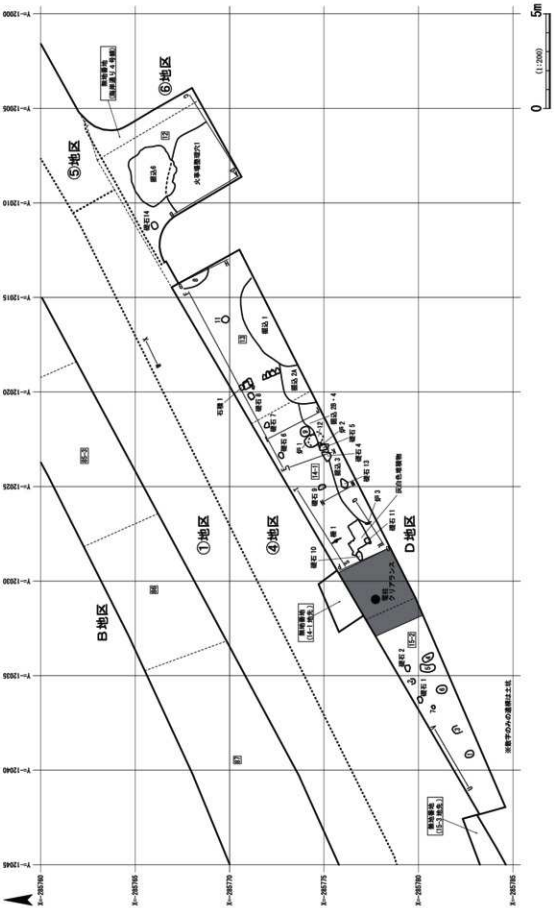


G-H 注記
盛土
1：黒褐色土　10YR3/1　粘；中～強　堅；堅　砂礫質　10 cm以下の礫を多量に含む
　2との層界に数分の盤層が形成
Ⅳ層
2：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；堅　砂礫質　10 cm以下の礫をやや多量に含む
3：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　砂質
4：10YR3/3　砂　1 cm以下の礫を微量に含む
5：10YR3/2　粘；弱　堅；堅　砂
6：黒褐色土
C土坑23
黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　1 cm程度のローム粒をやや多量に含む　10 cm以下の礫を少量含む
C土坑24
黒褐色土　10YR2/2　粘；中　堅；堅　ローム粒を少量含む

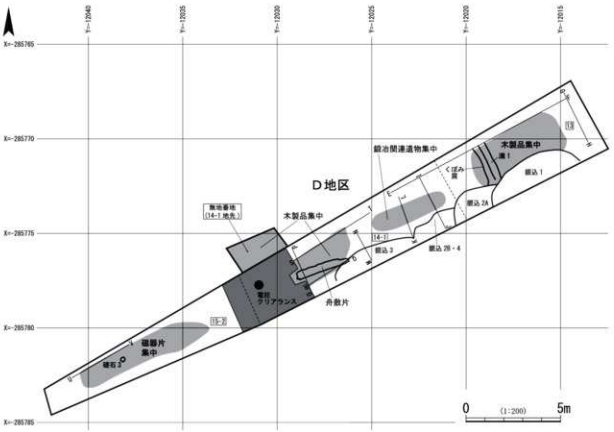


C土坑9～16・18～22 注記
1：黒褐色土　10YR3/2　粘；弱　堅；軟　砂質
C土坑17 注記
1：褐色ローム主体　10YR4/6　粘；中　堅；軟～堅
2：暗褐色土　10YR3/3　粘；中～強　堅；堅　砂質

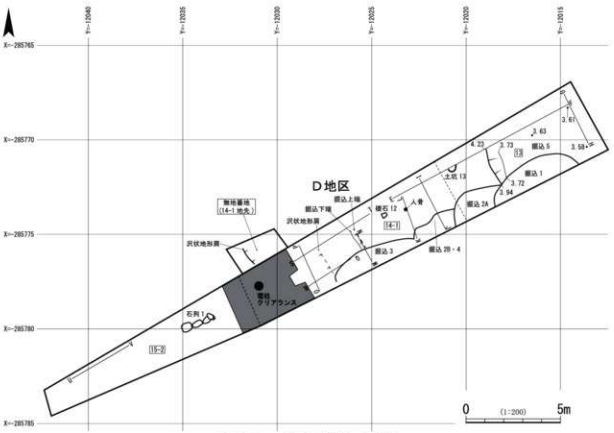
図Ⅳ-8　②・③地区断面図・③地区遺構図



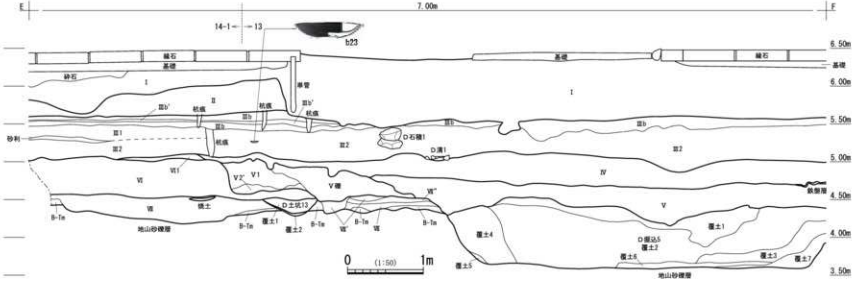
図Ⅳ-9　D・⑥地区平面図（Ⅱ・Ⅲ層）



図Ⅳ-10　D地区平面図（Ⅳ層）

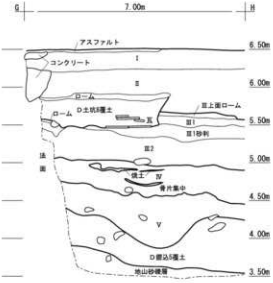


図Ⅳ-11　D地区平面図（Ⅶ層）

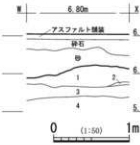


E-F 注記
I：道路・歩道造成土
II：近現代造成土
IIb：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅
IIb'：褐灰色土　10YR6/1　粘；中　堅；堅　砂礫を含む
II1・IIb2：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を多く含む
IV：黒褐色粘土　10YR3/1　粘；強　堅；堅　5cm以下の礫を少し含む
石積1の下から東側で木製品多数出土
V：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を含む　馬歯出土
V'礫：堅　20cm以下の礫主体
VI：黒褐色土　10YR2/1　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を多く含む
貝殻片・骨片を多く含む
VI2'：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
VI：灰黄褐色土　10YR5/2　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を多く含む
VI"：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；軟～堅　砂質
VI"：黒褐色土
VI"：ローム
D土坑13
覆土1：黒褐色土　粘；中　堅；堅　砂質
覆土2：炭
D掘込5
覆土1：砂礫　堅；堅　礫は10cm以下主体
覆土2：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；軟～堅　砂質　10cm以下の礫を多く含む
覆土3：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；軟～堅　砂質　5cm程度のローム塊を多く含む
覆土4：砂礫　堅；堅　礫は10cm以下主体
覆土5：灰黄褐色砂　10YR4/2　粘；中　堅；軟　砂質　B-Tnを含む
覆土6：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅
覆土7：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；軟～堅

G-H 注記
I：道路・歩道造成土
II：近現代造成土
IIa1：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅～すこぶる堅
IIa1砂利：堅；堅　1cm以下の礫主体
IIa2：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を多く含む
砂利直下に焼土・炭が広がる
IV：黒褐色粘土　10YR3/1　粘；強　堅；堅　5cm以下の礫を少し含む
木製品多数出土
V：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を含む
馬歯出土
D土坑8
覆土：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；～すこぶる堅
ローム塊を多く含む
D掘込5
覆土：褐灰色砂質粘性土　10YR4/1　粘；中　堅；軟～堅
ローム粒多く含む　10cm以下の礫が多く含む

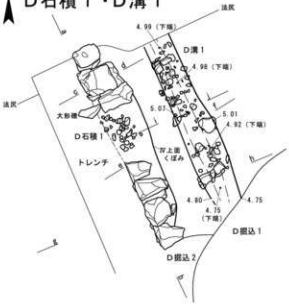


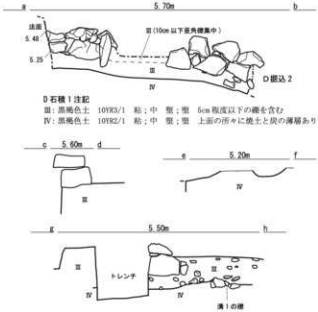
図Ⅳ-12　D地区13～14-1断面図



W-X 注記
Ⅱ層
1：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅
　5cm程度以下の礫を多く含む
2：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅
3：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；堅
　5cm程度以下の礫を多く含む
4：褐灰色砂　10YR6/1　粘；なし　堅；堅
　5cm程度以下の礫を少し含む

D石積1・D溝1

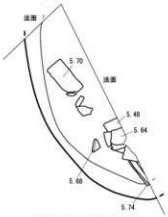




D石積1 注記
Ⅲ：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　5cm程度以下の礫を含む
Ⅳ：黒褐色土　10YR2/1　粘；中　堅；堅　上面の所々に焼土と炭の薄層あり

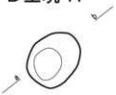
D溝1 注記
1：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　礫の間の土　Ⅲ層
2：炭層　灰黄褐色土を含む

D土坑8

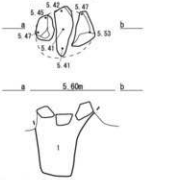


※断面は図Ⅳ-12G-Hに図示

D土坑11

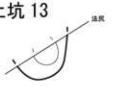


確認面礫出土状況



D土坑11 注記
1：黒褐色土　10YR3/1　粘；中～強　堅；軟～堅
　2cm以下の礫を多く含む

D土坑13

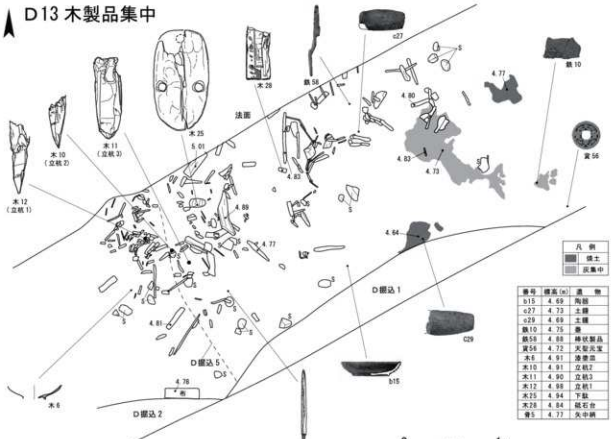


※断面は図Ⅳ-12E-Fに図示

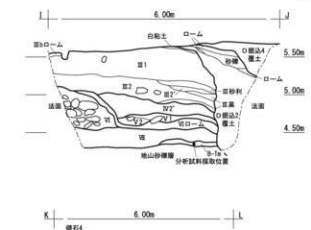
0　（石積・溝 1:40）　1m

0　（土坑1:30）　1m

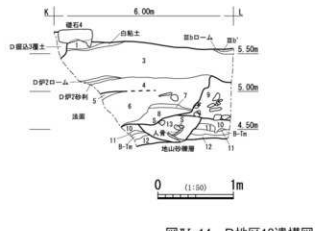
図Ⅳ-13　④地区13地先断面図・D地区13遺構図（1）



番号	標高(m)	遺　物
b15	4.69	陶器
c27	4.73	土器
c29	4.69	土器
鉄10	4.75	釜
鉄58	4.88	棒状製品
貝56	4.72	天狗貝笛
木6	4.91	漆塗皿
木10	4.91	立板2
木11	4.90	立板3
木12	4.88	立板1
木25	4.94	下駄
木28	4.84	祭石台
貝5	4.77	矢中納

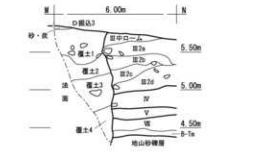


I-J 注記
白粘土：にぶい黄橙色　10YR6/4　粘；中　堅；堅　砂質
Ⅲ1：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を含む
Ⅲ砂利：堅；堅　5cm以下の礫主体
Ⅲ2'　：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
Ⅲ2：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅
Ⅳ黒：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；堅
Ⅳ2'　：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；軟～堅　5cm以下の礫を含む
Ⅴ1：黒色土　10YR1.7/1　粘；中　堅；軟　貝殻片・骨片を多く含む
Ⅴ2：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；軟～堅
Ⅵ：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　30cm以下の礫を多量に含む
Ⅶ：黒褐色土
D盛込2
砂礫：堅；堅　簪出土
覆土：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　砂礫を含む
D盛込4
覆土：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；堅　砂礫を含む

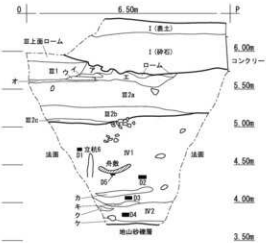


K-L 注記
Ⅲ層
1：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅
白粘土：にぶい黄橙色　10YR6/4　粘；中　堅；堅　砂質
Ⅲ'：褐灰色土　10YR5/1　粘；中　堅；堅　砂礫を含む
3：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　砂礫を含む
4：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　5上面の炭より上
Ⅳ層
5：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　上面に炭が広がる
6：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　砂礫を含む　5上面の炭より下
7：炭土体　粘；強　堅；軟～堅　Ⅳ2層
8：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；軟～堅　砂礫を含む　Ⅳ2層
Ⅵ層
9：にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘；中　堅；堅　15cm程度以下の礫を多く含む
Ⅶ層
10：黒褐色土　粘；中　堅；軟～堅　砂質　腐植層
11：暗褐色砂　10YR3/4　粘；中　堅；軟～堅　粘土質
12：黒褐色砂　10YR3/2　粘；中　堅；軟～堅　粘土質
D盛込第2（人骨出土）
13：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；軟～堅　砂質　10cm以下の礫を含む

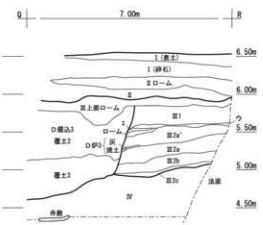
図Ⅳ-14　D地区13遺構図（2）・14-1断面図（1）



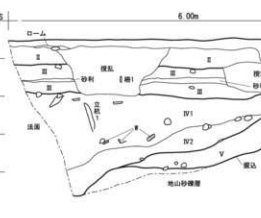
M-N 注記
Ⅲ2a：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；すこぶる堅　5cm以下の礫が多い
Ⅲ2b：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；すこぶる堅
Ⅲ2c：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；堅
Ⅲ2d：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　1cm程度の礫が目立つ
Ⅳ：黒褐色粘土　10YR3/1　粘；中　堅；軟～堅　焼土粒を含む
Ⅴ：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅
Ⅶ：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　砂質
D層3
覆土1：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；すこぶる堅
　10cm以下の礫を多く含む　上面に砂・炭が多い
覆土2：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　5cm以下の礫を含む
覆土3：砂礫　5cm以下が主体　貝殻片を多く含む
覆土4：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；軟～堅　ロームを含む



O-P 注記
Ⅲ1：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を含む
　ローム小塊を少量含む
Ⅲ2a：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を含む
Ⅲ2b：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；堅
Ⅲ2c：灰黄褐色砂利　10YR5/2　堅；堅　5cm程度以下の砂礫
Ⅳ1：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；軟～堅　カの下位では砂質化　木製品出土
Ⅳ2：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；軟　砂質　木製品出土
ア：ロームと黒褐色土が混在
イ：浅黄色土　2.5YT/4　粘；中　堅；堅
ウ：灰白色土　2.5YR/2　粘；中　堅；堅
　イとの間にローム粒を含む黒褐色土の薄層が見られる部分もあり
エ：黒褐色土　ローム・ア・イが混在
オ：ロームに灰白色土が混在
カ：黒褐色砂　2.5Y3/1
キ：褐色砂　7.5YR4/6　3cm程度以下の礫を含む　酸化鉄集積
ク：黒褐色砂　2.5Y3/1　3cm程度以下の礫を含む
ケ：黒褐色砂　2.5Y3/1　地山との層界に鉄分集積
■ D1～D5：珪藻分析試料採取位置

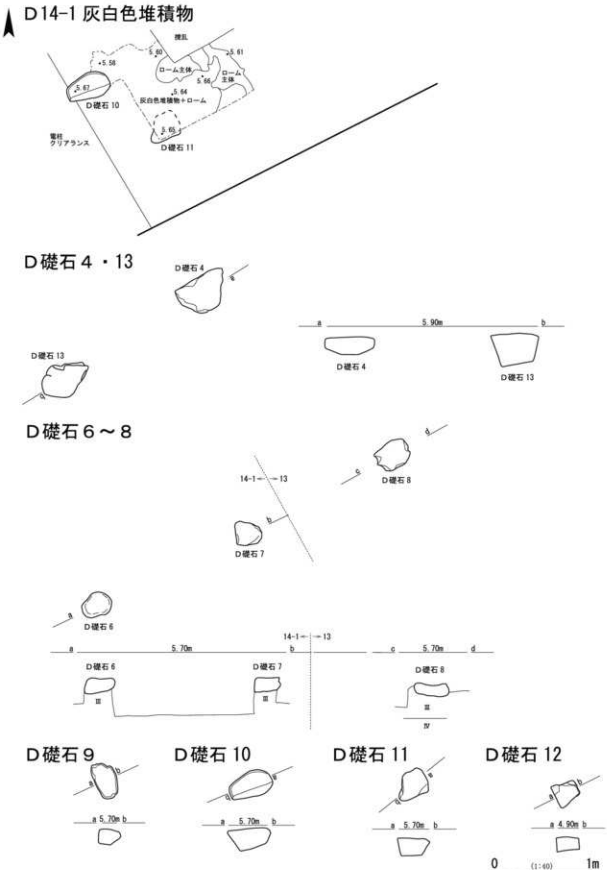


Q-R 注記
Ⅱ：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　砂礫を含む
Ⅲ1：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を含む
　ローム小塊を少量含む
ウ：灰白色土　2.5YR/2　粘；中　堅；堅
エ：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
Ⅲ2a'：褐灰色土　10YR5/2　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を含む
Ⅲ2a：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　10cm以下の礫を含む
Ⅲ2b：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；堅
Ⅲ2c：灰黄褐色砂利　10YR5/2　堅；堅　5cm程度以下の砂礫
Ⅳ：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；軟～堅　木製品出土
D層3
灰：にぶい黄橙色土　10YR6/3　粘；中　堅；軟～堅
焼土：にぶい赤褐色土　5YR4/3　堅；堅
D層3
覆土2：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；5cm以下の礫を含む
覆土3：砂礫　5cm以下が主体　貝殻片を多く含む



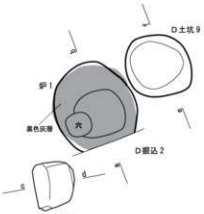
S-T 注記
Ⅰ：縁石基礎下の礫層
Ⅱ：近現代造成土
Ⅲ：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
　砂礫を含む　中間に5cm程度以下の砂利層を挟む
Ⅳ1：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；軟～堅
　粘土質　砂礫を含む　木製品出土
Ⅳ2：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；軟　砂質
　木製品出土
Ⅴ：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；軟～堅
　Ⅳ2との層界に鉄板層形成
Ⅵ層
砂礫：15cm以下の礫主体
Ⅶ層
黒褐色土1：10YR3/2　粘；中　堅；堅　砂礫を含む
砂：5cm以下の礫を少し含む
黒褐色土2：10YR3/1　粘；中　堅；軟　砂質
　自然堆積

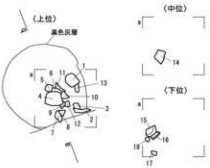
図Ⅳ-15　D地区14-1断面図（2）



図Ⅳ-16　D地区14-1遺構図（1）

D炉１・D礎石５・D土坑９

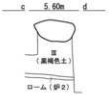


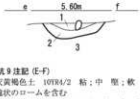


番号	標高(m)	遺物
1	5.46	礫
2	5.45	礫
3	–	礫
4	5.46	礫
5	–	礫
6	–	礫
7	5.43	陶器
8	–	陶器
9	–	陶器
10	5.42	陶器
11	–	陶器
12	–	礫
13	–	礫
14	5.42	陶器
15	5.42	礫
16	5.39	陶器
17	–	礫
18	–	礫

D炉１遺物出土状況

D炉１注記 (A-B)
1：褐色ローム　10YR4/4　堅；軟～堅
2：にぶい赤褐色地土　5YR4/4　粘；中　堅；軟　ロームを含む
3：黒色灰　10YR2/1　粘；中～強　堅；軟
上面に焼土が斑に見られる
3'：黒色灰　10YR2/1　粘；中～強　堅；軟
4：灰黄褐色灰　10YR4/2　粘；中～強　堅；軟　砂質

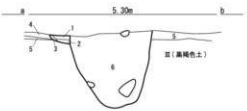




D土坑９注記 (E-F)
1：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；軟
塊状のロームを含む
2：にぶい黄褐色粘土　10YR6/4　粘；中　堅；堅
小礫をやや多く含む
Ⅲ層
3：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；軟～堅　炭を含む

D炉２・D土坑 12

番号	標高(m)	遺　物
1	5.13	焼礫
2	5.12	焼礫
3	5.12	焼礫



D炉２注記
1：にぶい黄褐色灰　10YR5/3　粘；中　堅；軟～堅
2：灰黄褐色砂　10YR4/2　粘；弱　堅；軟～堅
3：にぶい赤褐色焼土　5YR4/4　粘；弱　堅；軟
4：褐色ローム　10YR4/4　堅；堅
5：砂利　5cm以下
D土坑 12 注記
6：黒褐色土　10YR2/2　粘；中　堅；軟
小礫・ローム粒・炭を少し含む

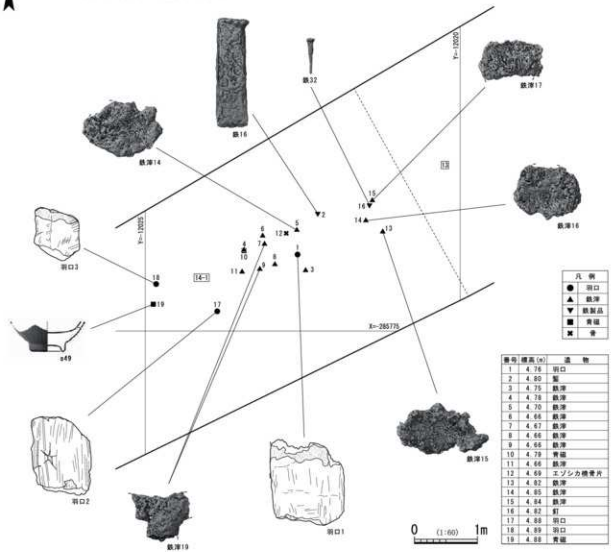
D炉３

※断面は図Ⅳ-150-R に図示

0　(1:30)　1m

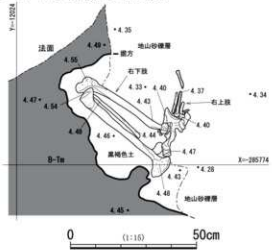
図Ⅳ-17　D地区14-1遺構図 (2)

D14-1 鍛冶関連遺物集中

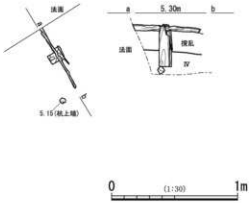


番号	標高(m)	遺　物
1	4.76	羽口
2	4.80	鬚
3	4.75	鉄津
4	4.78	鉄津
5	4.70	鉄津
6	4.66	鉄津
7	4.67	鉄津
8	4.66	鉄津
9	4.66	鉄津
10	4.79	青磁
11	4.66	鉄津
12	4.69	エゾシカ機骨片
13	4.82	鉄津
14	4.85	鉄津
15	4.84	鉄津
16	4.82	釘
17	4.88	羽口
18	4.89	羽口
19	4.88	青磁

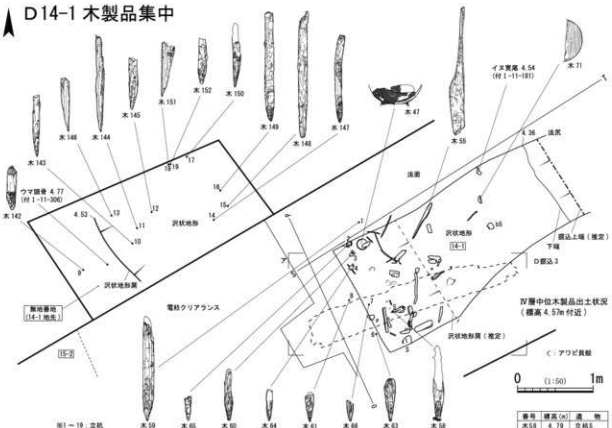
D14-1 人骨出土状況



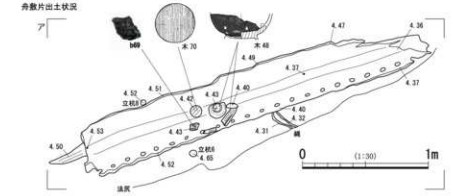
D柵 1



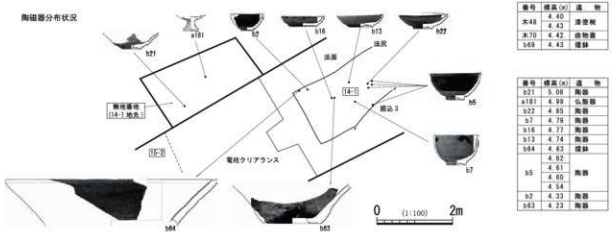
図Ⅳ-18　D地区14-1遺構図 (3)



番号	標高(m)	遺　物
木58	4.79	立柱5
木59	4.89	立柱1
木60	4.77	立柱3
木61	4.52	立柱8
木63	4.65	立柱6
木64	4.72	立柱4
木65	4.67	立柱2
木66	4.57	立柱7
木47	4.57	漆塗椀
木55	4.55	早蕨
木71	4.59	蓋
木142	4.85	立柱9
木143	4.83	立柱10
木144	5.02	立柱11
木145	5.10	立柱12
木146	4.78	立柱13
木147	4.83	立柱14
木148	4.97	立柱15
木149	4.80	立柱16
木150	4.85	立柱17
木151	4.76	立柱18
木152	4.72	立柱19

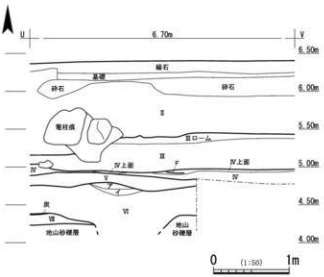


番号	標高(m)	遺　物
木48	4.40 4.43	漆塗椀
木70	4.42	曲物蓋
b69	4.43	櫂鉢



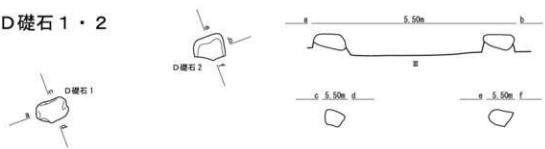
番号	標高(m)	遺　物
b21	5.08	陶器
a181	4.99	弘型器
b22	4.85	陶器
b7	4.79	陶器
b16	4.77	陶器
b13	4.74	陶器
b64	4.63	櫂鉢
b5	4.62 4.61 4.60 4.54	陶器
b2	4.33	陶器
b63	4.23	陶器

図Ⅳ-19　D地区14-1遺構図（4）

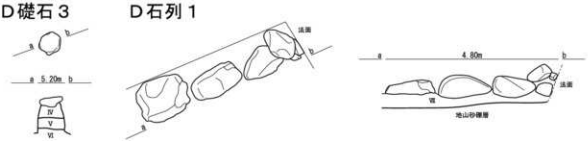


U-V 注記
Ⅱ：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；堅　5cm 程度の礫を多量に含む
Ⅲローム：灰黄褐色　10YR4/2　粘；中　堅；すこぶる堅
　　3cm 以下の礫をやや多く含む　下位で炭がやや目立つ
Ⅲ：灰オリーブ褐色土　2.5Y3/3　粘；中　堅；すこぶる堅　小礫を多く含む
Ⅳ上面：粘；中～強　堅；軟　火災面　炭化物と焼土・砂主体
　　中国産磁器出土
Ⅳ：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；堅　2cm 程度の礫を少し含む
Ⅴ：褐色砂礫　10YR4/4　堅；堅　礫は 10cm 以下主体で亜角礫が目立つ
Ⅵ：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　3cm 程度以下の礫を多く含む
Ⅶ：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；軟～堅　砂質
　　5cm 程度の礫を少し含む　所々に褐色シルト粒が見られる
F：明赤褐色焼土　5YR5/6
ア：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；軟
イ：にぶい黄褐色土　10YR4/3　堅；堅　砂質

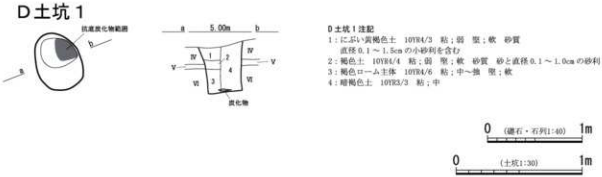
D礎石１・２



D礎石３　D石列１



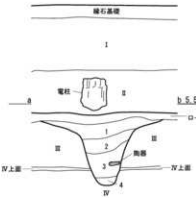
D土坑１



D土坑１注記
1：にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘；弱　堅；軟　砂質
　直径 0.1 ～ 1.5cm の小砂利を含む
2：褐色土　10YR4/4　粘；弱　堅；軟　砂質　砂と直径 0.1 ～ 1.0cm の砂利
3：褐色ローム主体　10YR4/6　粘；中～強　堅；軟
4：暗褐色土　10YR3/3　粘；中

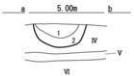
図Ⅳ-20　D地区15-2断面図・遺構図（1）

D土坑2



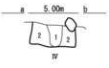
D土坑2注記
ローム：にぶい黄褐色　10YR4/3　粘；強　堅；堅　層層上面
1：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；すこぶる堅　直径0.5mmの小砂利を3%含む
2：黒褐色土　10YR3/1　粘；中～弱　堅；すこぶる堅　直径1.0mmの小砂利を15%含む
3：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；すこぶる堅　直径0.5～1.5mmの小砂利を50%以上含む
　橙色の鉄錆状の粒子混在
4：黒色土　10YR2/1　粘；強　堅；すこぶる堅

D土坑3



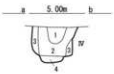
D土坑3注記
1：黒褐色砂利　10YR3/2　堅；軟　直径1～3mmの砂利層
2：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；軟

D土坑4



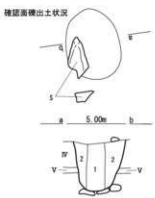
D土坑4注記
1：褐色ローム主体　10YR4/6　粘；強　堅；すこぶる堅
2：黒褐色土　10YR2/3　粘；強　堅；堅　直径0.5～2.0cmの礫と
　直径0.5cmのローム粒を10%含む

D土坑5



D土坑5注記
1：にぶい黄褐色砂利　10YR5/3　堅；堅　直径0.1～2.0cmの砂利層
2：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　直径0.5cmのローム粒を5%含む
　φ0.1～2.0cmの小砂利がやや堅　上面～上部金属製品出土層
3：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　焼土粒・炭化物粒を3%含む
4：黒褐色砂利　10YR3/2　堅；やや軟　直径1.0cmの小砂利層

D土坑6



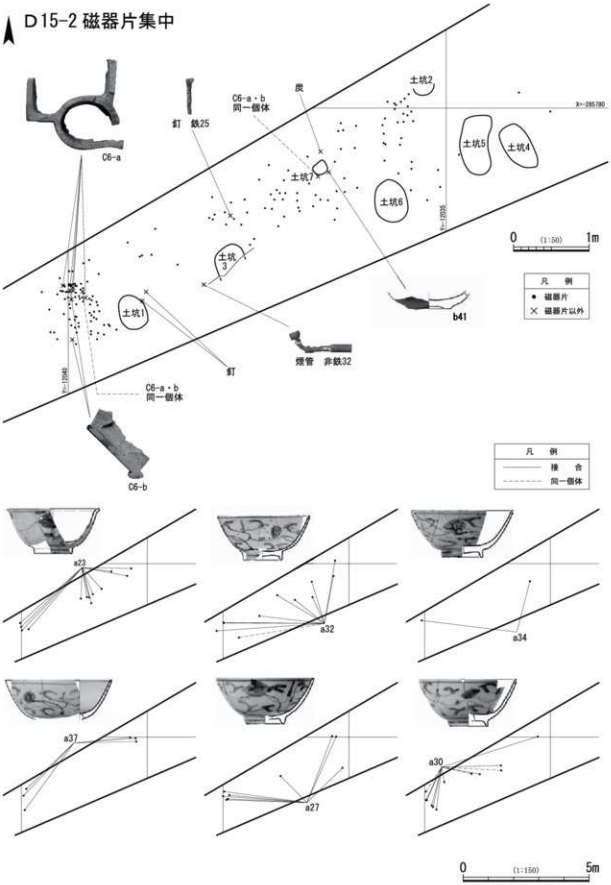
D土坑6注記
1：褐色ローム主体　10YR4/6　粘；中　堅；やや軟
2：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　砂利・礫・ローム粒を多く含む

D土坑7

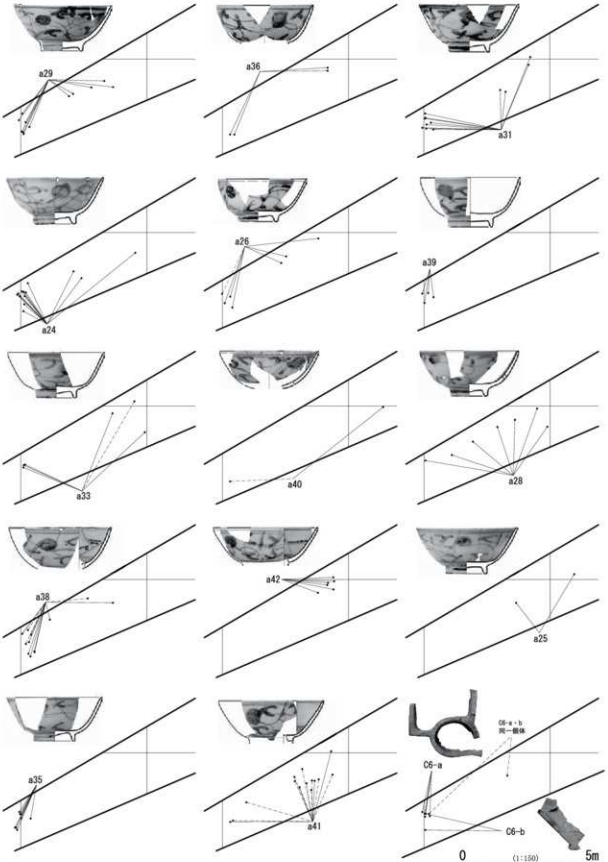
D土坑7注記
1：黒褐色土　10YR3/2　粘；中～強　堅；すこぶる堅　ローム粒を3%含む

0　(1:30)　1m

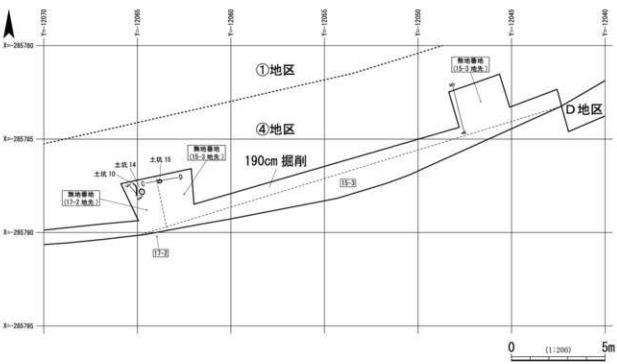
図Ⅳ-21　D地区15-2遺構図（2）

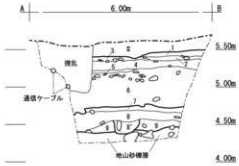


図Ⅳ-22　D地区15-2遺構図（3）

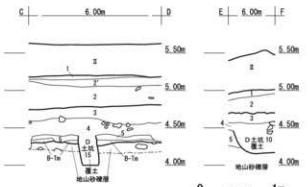


図Ⅳ-23　D地区15-2遺構図（4）



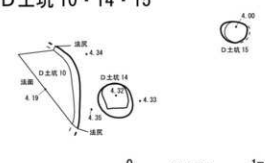


A-B 注記
Ⅱ：近現代造成土
Ⅲ層
1：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；軟～堅
2：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；軟～堅　砂礫を含む
3：砂礫　堅；堅
4：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　1 cm以下の礫を多く含む
5：黒色土　10YR2/1　粘；中　堅；堅
6：灰黄褐色砂礫　堅；堅　10 cm以下の礫を多く含む
大形のものは上位に集中
Ⅳ層
7：黒褐色粘土　10YR3/2　粘；中～強　堅；軟～堅
層中に厚さ 3mm 程度の薄層（灰黄褐色シルト～砂）を 2，3 枚挟む
8：黒褐色土　10YR3/2　粘；中～強　堅；軟～堅
8'：黒褐色土　10YR3/2　粘；中～強　堅；軟～堅　ローム塊・粒を含む
9：黒色土　10YR2/1　粘；中～強　堅；軟～堅　1 cm程度のローム粒を含む

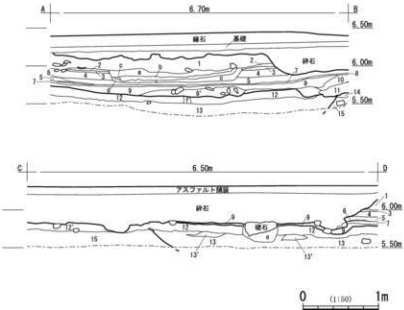


C-D・E-F 注記
Ⅱ：近現代造成土
Ⅲ層
1：黒褐色土　10YR2/2　粘；中　堅；堅　5 cm以下のローム塊を多く含む
2'：暗褐色土　10YR3/3　粘；中　堅；堅　砂礫を多く含む
2：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　10 cm以下の礫を多く含む
Ⅳ層
3：灰黄褐色土　10YR4/2　粘；中　堅；堅　微細なローム粒を多く含む
炭を少し含む
4：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　砂礫を含む 20 cm程度以下の礫が目立つ
5：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
D 土坑 10
覆土：黒褐色土　10YR3/1　粘；中～強　堅；軟～堅　炭とローム粒を少し含む
D 土坑 15
覆土：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅

D 土坑 10・14・15



図Ⅳ-24　④地区15-3・15-3地先・17-2・17-2地先平面図・断面図・遺構図

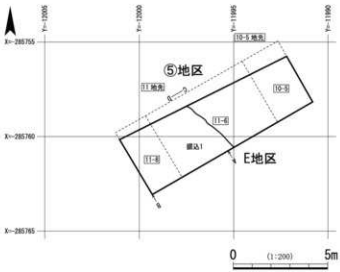


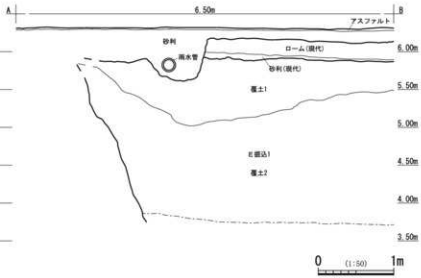
A-B・C-D注記
盲層
1：にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘；中　堅；堅　3cm程度(最大15cm)の礫を多く含む
2：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
3：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅
4：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　3cm以下(最大12cm)の礫を多く含む
5：褐炭色土　10YR4/1　粘；中　堅；すこぶる堅
6：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅
7：灰黄色粘土　2.5YR6/2　粘；中　堅；すこぶる堅　砂質
8：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅
9：灰黄褐色砂　10YR4/2　堅；堅　焼土粒・炭を含む
9'：砂礫敷中部分
10：9と7が混在　粘；中　堅；堅
11：暗褐色土　10YR4/4　粘；中　堅；軟　ロームを含む
面層
12：褐色ローム　10YR6/4　粘；中　堅；堅～すこぶる堅　混入物のほとんどないローム　上面に焼土
12'：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅～すこぶる堅　灰黄褐色土(10YR3/2)と2cm以下の礫を多く含む
14：焼土
15：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；堅　5cm以下の礫を多く含む
火事場整理穴1掘土
13：灰黄褐色砂礫　10YR4/2　焼土・炭を多く含む　30cm程度以下の焼け礫が目立つ
13'：にぶい赤褐色砂　5YR4/4　粘；なし　堅；堅　1cm以下の礫を多く含む
a：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
b：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅～すこぶる堅　1cm以下の礫を含む
c：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
d：細礫　粘；なし　堅；堅　1cm以下の礫層
e：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；軟　焼土粒を多く含む
f：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅

D礎石 14

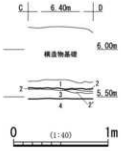
C-D注記
盲層
1：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；すこぶる堅　上面に焼けている部分があり、その上に炭化物の薄層がのる
2：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；すこぶる堅
3：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；すこぶる堅　黒褐色土を挟む(3')
4：黒褐色土　10YR3/2　粘；中　堅；すこぶる堅　1cm程度の礫を多く含む

図Ⅳ-25　⑥地区12断面図・遺構図





A-B 注記
E 盛込 1
覆土1：褐色ローム　10YR4/6　粘；強　堅；堅　遺物や礫等の混入なし　近現代の撹乱層
覆土2：黒褐色土　10YR2/3　粘；中　堅；堅　砂利・貝殻片・陶磁器を含む　焼土や炭はない



C-D 注記
Ⅱ層
1：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅
Ⅲ層
2：褐色ローム　10YR4/4　粘；中　堅；堅
2'：2と黒褐色土(10YR3/1)の薄い互層　焼土粒や炭を少し含む
3：暗褐色土　7.5YR3/3　粘；中　堅；堅　1cm以下の焼土粒や炭を含む
4：黒褐色土　10YR3/1　粘；中　堅；堅　4cm以下の礫を多く含む

図Ⅳ-26　E・⑤地区平面図・断面図

表Ⅳ-2　遺構一覧表

遺構名	地区地番	時期細位	推定年代(C-14含む)	上端長径×短径/下端長径×短径/深さ(m)	備考
A建石1	A93-2	A-Ⅲ	17C～19C後半	0.54×0.29/0.09	縄成岩
A柱1	A94	A-Ⅲ	19C	0.15×0.13/0.44	
A土坑1	A94	A-Ⅲ	18C～19C後半	0.47×0.45/0.28×0.23/0.28	A土坑3より新しい
A土坑2	A93-2・94	A-Ⅲ	18C～19C後半	(0.78)×(0.70)/(0.71)×(0.53)/0.31	
A土坑3	A94	A-Ⅲ	15C～16C？	0.79×0.66/0.63×0.50/0.32	
B建石1	B85-5	B-Ⅱ～Ⅲ?	19以降	0.48×0.31/0.16	縄成岩
B柱1	B89	B-Ⅲ	16C?	(3.46)×5.77/(2.26)×4.56×0.92	
B柱3	B86	B-Ⅲ	16C	(-)×5.66/(-)×4.32/1.30	
C建石1	C18-1	C-Ⅲ	16C～18C	0.57×0.36/-	
C建石2	C19	C-Ⅲ	16C～19C	0.49×0.33/0.17	
C土坑1	C19	C-Ⅴ	15～16C	0.33×0.30/0.27×0.23/0.13	C土坑3→8より新しい
C土坑2	C19	C-Ⅴ	15～16C	0.31×0.31/0.22×0.21/0.14	C土坑3→8より新しい
C土坑3	C19	C-Ⅴ～Ⅵ	15～16C	0.24×0.29/0.23×0.24/0.07	
C土坑4	C19	C-Ⅴ～Ⅵ	15～16C	0.31×0.28)/0.24×0.20/0.24	
C土坑5	C19	C-Ⅴ～Ⅵ	15～16C	0.36×0.24/0.23×0.19/0.10	C土坑4を切る
C土坑6	C19	C-Ⅴ～Ⅵ	15～16C	0.30×0.24)/0.21×0.17/0.24	
C土坑7	C19	C-Ⅴ～Ⅵ	15～16C	0.21×0.21/0.14×0.14/0.10	C土坑6を切る
C土坑8	C19	C-Ⅴ～Ⅵ	15～16C	0.35×0.35/0.29×0.28/0.13	
C土坑9	③無地番地	③-Ⅳ	15C末～16C	0.13×0.12/0.09×0.08/0.05	
C土坑10	③18-1・無地番地	③-Ⅳ	15C末～16C	0.56×0.46/0.54×0.42/0.07	
C土坑11	③18-1	③-Ⅳ	15C末～16C	0.46×0.41/0.39×0.37/0.13	
C土坑12	③18-1	③-Ⅳ	15C末～16C	0.21×0.20/0.17×0.15/0.05	
C土坑13	③18-1・18-1地先	③-Ⅳ	15C末～16C	0.35×0.30/0.30×0.26/0.09	
C土坑14	③18-1地先	③-Ⅳ	15C末～16C	0.27×0.25/0.23×0.21/0.09	
C土坑15	③18-1地先	③-Ⅳ	15C末～16C	0.10×0.10/0.08×0.08/0.03	
C土坑16	③18-1	③-Ⅳ	15C末～16C	(0.66)×0.49/(0.63)×0.42/0.06	
C土坑17	③18-1	③-Ⅳ	15C末～16C	0.53×0.47/0.47×0.39/0.13	C地区内
C土坑18	③18-1	③-Ⅳ	15C末～16C	0.14×0.12/0.11×0.09/0.03	
C土坑19	③18-1	③-Ⅳ	15C末～16C	0.08×0.08/0.06×0.06/0.09	
C土坑20	③18-1	③-Ⅳ	15C末～16C	0.35×(0.28)/0.29×0.25)/0.08	礎整石
C土坑21	③18-1地先	③-Ⅳ	15C末～16C	0.08×0.06/0.05×0.05/0.03	
C土坑22	③18-1	③-Ⅳ	15C末～16C	0.21×0.20/0.15×0.12/0.08	
C土坑23	③18-1地先	③-Ⅳ	15C末～16C	(0.42)×(-)/0.19×(-)/0.29	断面のみ
C土坑24	③18-1地先	③-Ⅳ	15C末～16C	(0.46)×(-)/0.28×(-)/0.30	断面のみ
D石組1	D13	D-Ⅲ	17C	(2.31)×0.43/0.58	
D柱1	D15-2	D-Ⅶ	15～16C	(1.84)×0.46/0.36	
D建石1	D15-2	D-Ⅲ	17C前半～19C後半	0.35×0.24/0.16	頁岩、D建石2と並ぶ
D建石2	D15-2	D-Ⅲ	17C前半～19C後半	0.34×0.26/0.16	頁岩、D建石1と並ぶ
D建石3	D15-2	D-Ⅳ	17C後半	0.23×0.22/0.10	チャート
D建石4	D14-1	D-Ⅲ	19C後半	0.57×0.41/0.18	D建石13と並ぶ
D建石5	D14-1	D-Ⅲ	18C前半	0.57×0.32/0.17	頁岩、D柱1の角度石か
D建石6	D14-1	D-Ⅲ	17C	0.33×0.26/0.17	玄武岩、D建石7・8と並ぶ
D建石7	D14-1	D-Ⅲ	17C	0.29×0.26/0.15	玄武岩、D建石6・8と並ぶ
D建石8	D13	D-Ⅲ	17C	0.38×0.26/0.14	頁岩、D建石6・7と並ぶ
D建石9	D14-1	D-Ⅲ	18～19C	0.40×0.24/0.17	頁岩
D建石10	D14-1	D-Ⅲ	18～19C	0.46×0.29/0.22	頁れい岩
D建石11	D14-1	D-Ⅲ	18C	0.36×0.31/0.19	チャート
D建石12	D14-1	D-Ⅶ?	16C?	0.27×0.25/0.15	頁岩
D建石13	D14-1	D-Ⅲ	19C後半	0.54×0.37/0.34	閃緑岩、D建石4と並ぶ
D建石14	⑥12	⑥-Ⅲ	17～19C後半	0.39×0.31/0.083	頁れい岩
D炉1	D14-1	D-Ⅲ	18C前葉	掘込部分(0.66)×0.64/0.36×0.39/0.25	D炉2と重しい
D炉2	D14-1	D-Ⅲ	18C前葉	灰焼分(0.50)×(0.25)/0.07	
D炉3	D14-1	D-Ⅲ	18C前葉	灰焼分(0.34)×(0.22)/0.05	
D建1	D13	D-Ⅳ	17C初頭	(1.90)×0.40/(1.90)×0.16/0.10	
D土坑1	D15-2	D-Ⅲ	17C前葉～19C後半	0.47×0.36/0.40×0.31/0.42	
D土坑2	D15-2	D-Ⅲ	17C前葉～19C後半	(0.28)×(0.11)/(0.12)×(0.05)/0.52	
D土坑3	D15-2	D-Ⅲ	17C前葉～19C後半	(0.36)×0.40/(0.29)×0.32/0.18	
D土坑4	D15-2	D-Ⅲ	17C前葉～19C後半	0.66×0.32/0.68×0.37/0.20	
D土坑5	D15-2	D-Ⅲ	17C前葉～19C後半	0.79×0.42/0.63×0.31/0.29	
D土坑6	D15-2	D-Ⅲ	17C前葉～19C後半	0.32×0.43/0.34×0.26/0.41	
D土坑7	D15-2	D-Ⅲ	17C前葉～19C後半	0.19×0.17/0.10×0.08/0.12	
D土坑8	D13	D-Ⅱ	19C後半(近代?)	(1.71)×(0.53)/(1.58)×0.45)/0.48	
D土坑9	D14-1	D-Ⅲ	18C前葉	0.52×0.49/0.42×0.38/0.13	
D土坑10	④17-2地先	④-Ⅳ	15C末～16C	(0.71)×(0.41)/0.67)×(0.35)/0.30	
D土坑11	D13	D-Ⅲ	17～19C	0.46×0.38/0.24×0.23/0.50	
D土坑12	D14-1	D-Ⅲ	18C前葉	0.82×0.65/0.58×0.39/0.61	D炉2を切る
D土坑13	D13	D-Ⅶ	16C	(0.47)×(0.21)/(0.21)×(0.13)/0.25	
D土坑14	④17-2地先	④-Ⅳ	15C末～16C	0.30×0.26/0.24×0.22/-	礎整石
D土坑15	④15-2地先	④-Ⅳ	15C末～16C	0.21×0.17/0.20×0.17/0.38	
D水車場柵埋穴1	⑥12	⑥-Ⅲ	19C後半	(3.93)×(3.36)/(-)×(-)/(0.28)	
D柱5.1	D13	D-Ⅱ	近現代	(5.20)×(1.42)/(-)×(-)/(-)	
D柱5.2A	D13	D-Ⅱ	近現代	(2.69)×(1.24)/(-)×(-)/(-)	
D柱5.2B	D14-1	D-Ⅲ	19C後半	(2.64)×(1.08)/(-)×(-)/(1.37)	
D柱5.3	D14-1	D-Ⅲ	19C後半	(4.68)×(0.88)/(-)×(-)/(1.55)	
D柱5.4	D14-1	D-Ⅲ	19C後半	(-)×(-)/(-)×(-)/(0.45)	
D柱5.5	D13	D-Ⅶ	16C	(2.07)×(5.24)/(1.44)×(4.78)/(0.95)	
D柱5.6	⑥12	⑥-Ⅱ	近現代	2.91×2.52/(-)×(-)/(-)	
D柱5	D14-1	Ⅱ	近現代	(0.55)×0.12/0.34	
D15-2福沢石集中	D15-2	D-Ⅳ上面	17C前葉	7.20×1.60	
D13木製品集中	D13	D-Ⅳ	16C末～17C初頭	4.93×2.28	集中内立杭3本
D14-1木製品集中	D14-1・G14-1地先	D-Ⅳ	16C中葉～17C初頭	沢状地形西側斜一面側斜(3.39)×3.67	集中内立杭19本
D14-1鉄泥質遺物集中	D14-1	D-Ⅳ	16C後半	3.85×0.85	
D14-1灰白色埋積物	D14-1	D-Ⅲ	18～19C	(1.45)×(1.20)/0.05(分析のため)層厚)	
D14-1人骨腐泥	D14-1	D-Ⅶ	16C	B-Ⅶ上面(0.72)×0.50)/(-)×(-)/0.35(B-4の深さ)	
F腐泥1	E11-6・8	E-Ⅱ	近現代	(5.03)×(3.30)/(-)×(-)/(2.20)	

Ⅴ 遺 物

1 概 要

2か年度の調査で出土した遺物の総点数は、土陶磁器25,935点、金属製品2,603点、木製品6,021点、繊維製品4点、石製品34点、骨角貝製品64点、ガラス玉18点、動物遺存体417点である（表Ⅴ－1）。

土陶磁器は主に近世の食膳具（碗・皿・坏など）、調理具（擂鉢・鍋など）、貯蔵具（甕・壺など）、仏神具、化粧道具、火道具、喫煙具、遊具類など幅広い器種がみつかっており、357点掲載した。金属製品は鉄製品、非鉄製品、銭を分け、227点掲載した。また、金属生産関連の遺物についても後述する。木製品には舟敷、下駄、木札、漆塗椀、箸などがあり、主な地区ごとに計164点掲載した。石製品は硯、砥石など15点を掲載した。骨角貝製品は31点掲載した。ガラス玉は18点全点掲載し、分析結果は付編Ⅰ－10に掲載した。このほか動物遺存体は魚貝類、鳥類（ニワトリなど）、哺乳類（イヌ、ネコ、シカ、ウマ、アシカなど）などのほか、人骨が半体出ている。動物遺存体の詳細は付編Ⅰ－11、出土人骨についての鑑定結果は付編Ⅰ－12に掲載した。

なお、整理作業中に変更した層位・遺構名は、各文や表、動物遺存体をはじめとする分析結果中では変更前の名称が使われている場合がある。変更についてはⅢ章参照。

2 土陶磁器（図Ⅴ－1～33、表Ⅴ－2～16）

(1) 分類等

「a磁器」、「b陶器」、「c土器・瓦類ほか」の3つに分け、a→b→cの順で掲載した。掲載点数内訳は、磁器185点、陶器116点、土器ほか56点、計357点である。胎土には磁・陶・土・瓦質・半磁半陶（軟質胎土）・土師質などがあり、「土器その他」の掲載一覧にのみ「胎土」の項目を設けた。

a磁器類 陶石に粘土や石灰などを混ぜたものが材料。ロクロや型作りなどで成形後、高温焼成したもの。染付や色絵で彩色されるものが多い。出土している磁器類の主な産地は肥前・北部九州産が最も多い。そのほか瀬戸・美濃産、中国など。形状は碗、皿、蓋物、盤、坏、鉢、瓶・徳利類、水柱、猪口、急須、合子、段重、香炉、火入れ、灰吹き、紅猪口、植木鉢、仏飯器、散蓮華、戸車、碍子、面子など。

b陶器類 粘土を材料とし、たたらづくり、手びねり、型作り、ロクロなどで成形後施釉し、磁器よりもやや低い温度で焼成する。碗、皿、鉢、盤、向付、擂鉢、甕・壺類（須恵器含む）、香炉、火入れ、水柱、土瓶、瓶・徳利類、植木鉢、鍋類（土鍋・行平など）がある。主な産地は肥前・北部九州が主体で、そのほか瀬戸・美濃、京・信楽、堺、備前、丹波、須佐、石見、津軽、珠洲、越前などがある。

c土器・瓦類ほか 低温焼成によるもの。縄文時代・続縄文時代・擦文時代のいわゆる土器のほか、中～近世のかわらけ、灯明皿、焜炉、七厘、管状土錘、人形、飯事道具、箱庭道具、遊具、窯道具、鍛冶道具（坩堝・鞴の羽口など）がある。瓦質製品には風炉、火鉢などがある。なお瓦は胎土が陶質（瓦質）であるが、ここで掲載した。胎土がやや粗くもろい赤茶色の陶製（鉄泥塗瓦・釉薬瓦）のものと、硬質で灰色がかった「瓦質」の主に2種類が出土している。また、素焼きであっても明らかに（中）近世のものは、粘土の精製度合いが粗く焼成温度が低い縄文土器や擦文土器などと区別

するため、胎土を「陶」としたものがある。

掲載した土陶磁器の観察表（表Ⅴ－５～14）の項目は以下の通りである。

器種の記載：500円玉（φ26.5mm）大未満の破片は器種分類を行っていない。主な器種名は以下のとおりである（東京大学1998ほか）。なお法量については既刊の報告書（北埋調報290）を参考にした。

- **碗**　上方が開口する碗形の製品。「小碗（口径が91mm以下のもの）」、「中碗（口径が91mm～120mmのもの）」という呼称を使用している部分がある。
- **皿・盤**　上方が開口する平状の製品。大型（口径258mm以上）のものは大皿または盤。
- **鉢**　上方が開口する碗形、桶形、筒形などの製品のうち、法量・器形から「碗」「猪口」「仏飯器」類などには分類されない製品。
- **坏**　小法量（口径が90mm以下）の高台を有する碗形の製品。
- **擂鉢**　内面に擂目を有する鉢形製品。
- **甕・壺**　胴部と縊れる頚部を有する袋物製品。
- **急須**　注口と把手を有する蓋付の茶器。
- **瓶・徳利**　強くすぼまる頚部を有する袋物製品。内面は無釉が多い。
- **水注**　注口と把手を有する蓋付の製品。通常高台が付く。
- **猪口**　小法量（口径が90mm以下）の高台のない桶形の製品。
- **土鍋・行平鍋**　蓋付で外面下半無釉、上半から内面施釉の鉢形製品。土鍋は両把手、行平は注口を有する片手鍋。
- **土瓶**　蓋付で注口と、別胎質の持手（植物性の弦など）を上に付けるための把手（耳）を有する注器。急須より大きく直火で使用することを前提とする。
- **香炉・火入れ**　多くは内面下半が無釉の鉢形、筒形製品。香炉は足が付くことも多い。
- **仏飯器**　碗形に高い足がつく製品。
- **紅猪口**　小さく浅い皿状の型押し製品（口径50mm以下）。内面～口縁付近まで施釉、しのぎ模様の外側は無釉。
- **かわらけ**　素焼の小皿。
- **灯明皿**　素焼きまたは低火度釉を施した土・陶製の皿状の灯火具。内面に灯芯を支えるための段や欠けを有するものもある。油を受ける「灯明皿受け」を下に敷いて使用することもある。
- **焜炉・七厘**　風口を有する素焼きの火器。焜炉は全体形状が不明なものが出ている。七厘は鉢形で多くは３本脚が付き、内側にサナ（穴の開いた素焼の板）を乗せて使用。
- **火鉢**　瓦質で足付の火器道具。
- **瓦**　湾曲した板状、筒状の製品。屋根を葺く以外に外壁に漆喰で塗りこめて、ナマコ壁に利用する平板状のものがある。
- **植木鉢**　底部に孔が開いた桶形の製品。出土・掲載したものは３脚付である。
- **人形**　人・動物などを象った土・陶製品。
- **遊具**　土玉、土鈴、独楽、面子など。
- **飯事道具**　ミニチュアの碗や鉢など。
- **土錘**　素焼で管状の紡錘形の土製品。漁撈具。
- **土器**　縄文土器、続縄文土器、擦文土器など。
- **坩堝・羽口**　土製の鍛冶道具。

種類の記載：磁器表の項目である。白磁、染付、青磁、色絵、染付青磁、呉須赤絵、瑠璃釉など。
破片点数：掲載遺物の接合点数、同一と思われるが非接合の破片点数を記した。
製作地の記載：磁器の主な製作地は波佐見を含む肥前、瀬戸、京、中国景徳鎮、中国龍泉窯、中国漳州窯、中国福建・広東省の諸窯である。なお中国産のものは窯が複数存在し、周辺地域の類似した磁器類を含めるため、「景徳鎮系」、「龍泉窯系」、「漳州窯系」、「中国南方系」という表現を使用した。

陶器の主な産地は肥前、瀬戸・美濃、京・信楽、石見、丹波、堺、越前、備前、珠洲、越後、須佐などである。土器や瓦、遊具等で産地が明確なものは乏しい。近現代のものと思われるものについては産地特定をあえて行っていない。

年代の記載：おおむね世紀を、まれに西暦を使用し、1世紀内の細分は以下のように表記した。

2分割する場合は「前半」「後半」または「1/2」「2/2」を世紀の数字の後に付けた。
3分割する場合は「前葉」「中葉」「後葉」または「1/3」「2/3」「3/3」を世紀の数字の後に付けた。
4分割する場合は「1/4」「2/4」「3/4」「4/4」を世紀の数字の後に付けた。
5分割する場合は「1/5」「2/5」「3/5」「4/5」「5/5」を世紀の数字の後に付けた。
例：$16_{2/2}$＝1551～1599年ごろ、$17_{3/4}$＝1651～1675年ごろ　$15_{5/5}$＝1481～1499ごろを示す。
また、世紀数字の後に「初」や「末」を付して表現したものもある。

計測値：口径・器高・底径を記した。土製管状土錘は、底径の代わりに穴径を記した。口縁部の破片がある場合は、図上で推測した口径を記した。（　）で記したものは残存計測値である。
残存部位：口縁部、頚部、胴部、底部、脚部、完形などの名称で表記した。
備考：胎土、形状の特徴、目積み跡、格子目タタキ痕、高台の特徴、文様・釉薬の記述、被熱、海あがり※（野上2010、佐藤2014）、漆継、分類型式名、出土地点や層位の特徴などを記入した。成形については、ほとんどがロクロ成形であるため、それ以外の「型作」、「木型打ち込み」、「型押し」、「手づくね」、「輪積み」などを追記した。

※海あがり（海揚がり、海上がり）品とは陸上からの廃棄や積載船の沈没など何らかの理由で海中に入ったため全体が摩耗した土陶磁器片のことである。中近世では城下の火災後の整地に海砂や海砂利が客土として利用されており、整地層・撹乱層などで多く出土する。また松前町内の海岸には現在も多くの海あがり土陶磁片が打ち上げられている。製作地、年代、器種などがバラバラで、摩耗・摩滅により接合・復元も難しく、遺物本来の情報を調査に反映できないことが多い。

実測図・展開写真について

断面図は、破片の残存部を最大限合成し器形を反映できるように作成した。遺物の写真図版ページは設けず、遺物実測図・展開図内にカラー写真を合成し、写真図版と実測図を兼ね合わせた。図・写真の縮尺はページごとにスケールを付した。おおむね3分の1大で掲載し、紅猪口は2分の1大、土製品のうち、人形と飯事道具、遊具等は3分の2大で掲載した。

(2) 磁器

185点掲載した。出土量の割合は陶器に比べ、2か年の調査とも磁器が圧倒的に多い（表Ⅴ－2、図Ⅴ－1）。現唐津地区が単なる町人地であっただけでなく、城下で武家もあった福山城下町の性格を表している。今回部分的ではあるが中世の層まで調査を行った結果、中国各地で生産された磁器が国産の陶器とともに数多く出土していることも、城下町成立以前からこの地域がそれなりの需要を持っていたことを表している。

製作地は肥前が多く、ついで中世の中国産、近世の瀬戸、京となる（表Ⅴ－4、図Ⅴ－1）。肥前

産の磁器には複数個体の揃えで利用されていたと思われるものも多く、同一の模様が施された同形の破片が複数個体分存在することがわかる器もある。器種は碗・皿がほとんどで、瓶・徳利、その他容器類が続く。

中国産磁器には産地が龍泉窯系、漳州窯系、景徳鎮系、南方系と多数ある。出土層位はⅠ・Ⅱ層や攪乱層からも出土するが、C区やD区のⅢ層以下Ⅳ・Ⅴ層からの出土が顕著である（表Ⅴ－４）。併出する国産品は珠洲産や越前産の擂鉢、瀬戸・美濃皿、唐津皿などである。

碗（碗の蓋も含む）（a１～a66）66点掲載した。a23～a61は中国産である。a23～a42は16世紀後葉の漳州窯系の青花碗で、D15－２地区Ⅳ層上面（火災面）で出土した一括資料である。接合状況から、掲載した20個体相当があったと思われる。ほとんどの破片が被熱し、表面の光沢が失われている。基本の唐草（折枝花）文様は共通するが、内外の圏線文は、一重あるいは二重のもの、圏線文がないものなど個体ごとに異なる。呉須の色合いや濃さ、高台の高さなどもそれぞれで違う。特にa23は端反り口縁で、呉須の色合いも他の個体と趣を異にする。a28は施釉以前から胴部に５mmほどの穴が１か所開いていた（図中の↑か所）。これらの碗と共に陶b41の瀬戸の丸皿、土c６-a、bの焜炉？が併出している。a９、a12はいわゆるコンニャク判で施文されている。器生産の効率化を図り、絵付けを簡易化した江戸中～後期に肥前で採用された染付技法である。実際にコンニャクが使われたかは不明であるが、コンニャク様の軟らかい素材を用い、スタンプのように使用して施文した。筆で直接手描きするよりも輪郭が滲み、内側は薄色になる。

皿（a67～a143）出土量は碗よりも多く、77点掲載した。a102～a143は中国産である。a142の漳州窯皿はa23～a42の漳州窯碗と併出したものである。a84、a92は道道を挟んだB区とD区で、a110は町道を挟んだD区とE区でそれぞれ出土したものが接合した。

鉢（a144～a148）完形品はなく、破片を５点掲載した。a146～a148は口径が20cm以上ある大型のものである。

その他（a149～a185）掲載青磁盤３点（a149～a151）のうちa150とa151は龍泉窯系である。a149は、令和４年度調査B区出土品（-b）と令和５年度調査D区地先出土品（-a）で、同一個体と思われる盤である。掲載杯（a152～a162）のうち７点が中国産である。a169･a170の瑠璃釉植木鉢は19世紀のものであるが、瀬戸の陶工三代目川本治兵衛の作とのことで（付編Ⅰ－６参照）、a169の底部には墨書がみられる。

（3）陶器

116点掲載した。出土点数の割合は土陶磁器全体の29.3％である。主な製作地は肥前、瀬戸･美濃、京･信楽で、擂鉢や甕・壷では肥前・北九州（上野・高取系）、珠洲、越前、堺、備前、丹波、須佐、瀬戸などがある。擂鉢や甕・壷は大型な個体が多く、必然的に破片数も多くなるため、集計表の数値はそのまま個体数の多さを反映しているわけではない。また、過去の松前町内での報告等で見られる悪戸焼（津軽）や箱館焼（函館）の破片は出土していないことは今回の調査の特徴の一つである。

碗（b１～b10）天目碗４点は16世紀の瀬戸・美濃系、b10の煎じ茶碗は18世紀の京・信楽系である。

皿（b12～b44）磁器同様、碗より出土点数が多い。瀬戸・美濃や肥前が主であるが、b36は朝鮮系と思われる破片である。b21～b25は胎土目が明瞭に残る。b41は磁a23～a42の漳州窯碗片と共に火災面で出土している。

鉢（b50～b56）b52とb53は、いずれも道道を挟んで山側の地区と海側の地区からそれぞれ出土した破

片が接合している。

擂鉢(b57～b79) 15世紀の珠洲産、15～17世紀の越前産のほか、肥前、瀬戸、備前、須佐、堺産（17～18世紀）のものが出ている。b63は舟敷よりも下位で、b69は舟敷きの上に乗った状態で出土したものである。

壺・壷（須恵器含む）(b80～b102) 個体が大型なため破片数も多い。17世紀を中心とした肥前産が主だが、10世紀の五所川原の須恵器甕、14～15世紀の珠洲産、18世紀の信楽、19世紀の丹波や石見もみられる。b99は信楽の腰白茶壷である。

香炉(b104・b105) 肥前のもので、掲載品を含め揃えて10個体以上の破片が出土している。ほぼ完形に近い状態に復元できた２点を掲載した。

その他 b113の灯明皿、b116土瓶蓋は近代明治期のものである。

(4) 瓦・土製品・遊具・土器など

56点掲載した。c６の焜炉は磁a23～a42の漳州窯碗片と共にⅣ層上面の火災面で出土している。全形は不明であるが、一部扇形をした部分がある。なお、陶器製と思われたためここで掲載したが、凝灰岩を削って成形された石製品である。

瓦片713点のうち硬質で濃灰色のもの（355点）は胎土を「瓦質」とし、赤茶系の瓦（358点）は胎土を「陶」として区別した。両者とも産地・時期は不明である。瓦質の瓦には壁に漆喰で塗りこめた「ナマコ壁」に使われたと思われる「平瓦」と、湾曲し屋根を葺くのに使われたと思われる「屋根瓦」がある。赤茶系の瓦には、ガラス質の釉薬がかかり、表面に光沢があるものと、鉄泥により表面はつや消しで胎土が脆弱なものがあり、前者は「石見瓦（近現代）」、後者は「越前瓦（18～19世紀）」と思われるが、明確な区別は避けた。出土瓦の多くがⅠ～Ⅱ層出土で、Ⅳ～Ⅵ層からの出土はほとんどみられない。

c31～c33は土人形である。土師質の白みがかった胎土から京都産の可能性がある。西行を象ったと思われるc31は風呂敷包を背負っているが笠は持たず頭巾をかぶっている。像の右肩（向かって左側）に小さな狼が乗っている。作成時の作業痕と思われる細い穴が足の下に一か所みられる。c32の犬(狛犬？）は台座に乗っており、形状はやや扁平。犬の後頭部に鬣があり、表情は歯を見せている。c33の狛犬は乗っている台座が中空である。c37の土鈴は、本体側面（図では裏側にあたり、表現できていない）に切れ込みの加工跡があり、ここから破損したと思われる。c46の擦文土器はB－Tm直下で出土したものである（図版９）。

(5) 出土傾向

磁器・陶器・土器瓦の出土量割合、磁器・陶器の産地割合を円グラフにした（図Ⅴ－１）。12年前の当センターの調査（北埋調報290）に比べ、15世紀の遺物（特に中国磁器）が顕著である。また限定的ではあるが、D区では続縄文・擦文までの層位を調査できたことから、10世紀から近世までの連続する各層を調査できたことも大きな成果と言える。なお、中国産磁器（貿易陶磁）や瀬戸・美濃産の詳細分類については、次項（６）や付編Ⅰ－６の東京大学埋蔵文化財調査室　堀内秀樹氏の考察を参照されたい。このほか、全体の出土数のうち海あがり片が１万点以上（４割以上）をしめている。

（新家）

表V-1　出土遺物総点数

土陶磁器	金属製品	木製品	繊維製品	石製品	骨角貝製品	ガラス玉	動物遺存体	計
25,935	2,603	6,021	4	34	64	18	418	35,097

表V-2　土陶磁器点数

分類 / 層位		磁器							磁器計	陶器							陶器計	その他瓦・土製品・遊具・土器								その他計	総計
		碗・皿・鉢ほか	坏・猪口	瓶・徳利ほか	紅猪口	甕・壺	急須	その他		碗・皿・鉢ほか	擂鉢	甕・壺	土瓶	瓶・徳利	土鍋・行平・鍋	その他		かわらけ	火道具	瓦・塼	土錘	人形・遊具	坩堝・鞴・羽口	土器（縄文～擦文）	その他		
包含層	Ⅰ	442	3	37	9	1	3	371	866	41	62	42	26	3	10	290	474	1	4	128		4	1	8	6	152	1,492
	Ⅱ	3,942	69	313	82	15	8	5,015	9,444	614	349	690	330	89	121	1,742	3,935	2	88	441	4	15	3	60	51	664	14,043
	Ⅲ	1,146	13	44	8	4	1	539	1,755	326	55	236	18	8	6	128	777		8	15		1	3	19	3	49	2,581
	Ⅳ	204	1	2	1			83	291	109	18	25	1	9	1	17	180		3		1		10	4		18	489
	Ⅴ	89	2	2				22	115	28	13	5				3	49							2		2	166
	Ⅵ	31						4	35	7	1					2	10			1				5		6	51
	最終面	3			1			2	6	2	2	1				4	9							26		26	41
	砂利	108		8	5		1	233	355	5	18	21		5	9	219	277			20					1	21	653
	攪乱など	318	9	32	12	3	1	884	1,259	64	23	77	15	5	14	122	320		3	27		3		3	3	39	1,618
	B調	58	2	8	6			102	176	10	9	7	11	1	1	38	77			13				1		14	267
包含層計		6,341	99	446	124	23	14	7,255	14,302	1,206	550	1,104	401	120	162	2,565	6,108	3	106	645	5	23	17	128	64	991	21,401
遺構計		1,865	46	109	41	32		743	2,836	349	153	545	134	23	37	247	1,488	1	79	68	6	8	8	30	10	210	4,534
合計		8,206	145	555	165	55	14	7,998	17,138	1,555	703	1,649	535	143	199	2,812	7,596	4	185	713	11	31	25	158	74	1,201	25,935

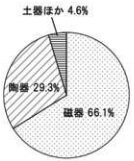
表V-3　遺構出土 土陶磁器点数

遺構名	分類	磁器						磁器計	陶器							陶器計	その他瓦・土製品・遊具・土器								その他計	総計
		碗・皿・鉢ほか	坏・猪口	瓶・徳利ほか	紅猪口	壺・壺	その他		碗・皿・鉢ほか	擂鉢	壺・壺	土瓶	瓶・徳利	土鍋・行平・鍋	その他		かわらけ	火道具	瓦・塼	土錘	人形・遊具	坩堝・輪・羽口	土器(縄文～擦文)	その他		
A	A土坑1								1							1										1
B86	B掘込2	21					3	24	16	7	1					24	1	1						1	3	51
B89	B掘込1	192	6	15	2		178	393	24	43	134	22	4	11	81	319		18	16		5		1	6	46	758
D13	D石積1	4					3	7	1							1										8
	D土坑8		1				4	5	1							1			20						20	26
	D掘込1	170		4	8		33	215	18	9	21	18	2	1	13	82		3	5		1		3	1	13	310
	D掘込2A	10					11	21	11	1	1		1		4	18			1				1		2	41
	D掘込5	5						5	1							1				1			19		20	26
	木製品集中	40					9	49	43	10	7				5	65		1		3			1		5	119
D14-1	D土坑12	1					2	3	3		1				2	6										9
	D炉1	3					3	3			10					10						3			3	16
	D炉2	2						2														4			4	6
	D掘込2B	105	2	5	5		16	133	28	13	15	11		4	15	86				2			3	2	7	226
	D掘込3	116		13	1		18	148	18	14	14	14	1	16	12	89							1		1	238
	D掘込4	28			2		6	36	10	3		1		1	3	18										54
	木製品集中	30	1				30	61	29	3	5				5	42						1			1	104
D15-2	D土坑1	1						1																		1
	D土坑2								1							1										1
	D土坑3	4						4																		4
	D土坑4									1						1										1
	D土坑6	1						1																		1
	磁器片集中	200					2	202	3							3		10							10	215
E10-5	E掘込1	4	1				7	12	1	2	2				2	7										19
E11-6	E掘込1	324	10	7	7		237	585	108	11	116	19	8	1	51	314		10	6				1		17	916
E11-8	E掘込1	51	1	1			29	82	5	1	3	17	1		10	37		1							1	120
③18-0	C土坑11										2					2										2
	C土坑12									1						1										1
⑥12	D掘込6	9		2			32	43	2		5	2	1	1	9	20		1							1	64
	D火事場整理穴1	547	24	62	16	32	120	801	25	34	208	30	5	2	35	339		34	20		2				56	1,196
遺構計		1,865	46	109	41	32	743	2,836	349	153	545	134	23	37	247	1,488	1	79	68	6	8	8	30	10	210	4,534

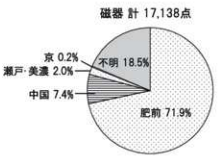
表V-4　産地・層位別 土陶磁器点数

産地・胎土 / 層位		肥前(北九州含む)				瀬戸・美濃			中国			京・信楽				越前		
		磁器	陶器	土ほか	計	磁器	陶器	計	磁器	陶器	計	磁器	陶器	土ほか	計	陶器	土ほか	計
包含層	I	744	78		822	15	4	19	12		12		21		21		62	62
	II	7,143	1,282	7	8,432	116	91	207	245		245	8	212	1	221	22	174	196
	III	1,276	434		1,710	3	82	85	277		277	2	44		46	23	1	24
	IV	69	24		93		94	94	205	5	210					18		18
	V	9	3		12		28	28	102		102					15		15
	VI	24	4		28		2	2	9		9						1	1
	最終面	5	1		6		2	2										
	砂利	310	23		333	2		2					2		2		16	16
	撹乱	777	115	3	895	6	13	19	27	1	28		15		15	3	1	4
	B調	108	25		133	2	1	3	2		2		3		3		9	9
包含層計		10,465	1,989	10	12,464	144	317	461	879	6	885	10	297	1	308	81	264	345
遺構計		1,857	573	3	2,433	210	127	337	393	1	394	26	262	4	292	22	7	29
合　計		12,322	2,562	13	14,897	354	444	798	1,272	7	1,279	36	559	5	600	103	271	374

産地・胎土 / 層位		備前		北陸			東北		石見		その他			不明				総計
		陶器	計	磁器	陶器	計	陶器	計	陶器	計	陶器	土ほか	計	磁器	陶器	土ほか	計	
包含層	I				1	1	3	3	6	6		7	7	95	361	83	539	1,492
	II	19	19	1	18	19	1	1	15	15	22	20	42	1,931	2,253	462	4,646	14,043
	III	7	7		2	2			20	20	1	4	5	197	164	44	405	2,581
	IV	1	1		6	6	1	1	6	6	3		3	17	22	18	57	489
	V						1	1						4	2	2	8	166
	VI													2	4	5	11	51
	最終面				1	1								1	5	26	32	41
	砂利											2	2	43	252	3	298	653
	撹乱	4	4		1	1			3	3				449	165	35	649	1,618
	B調				1	1			1	1		1	1	64	46	4	114	267
包含層計		31	31	1	30	31	6	6	51	51	26	34	60	2,803	3,274	682	6,759	21,401
遺構計		5	5		4	4			60	60	8		8	350	426	196	972	4,534
合　計		36	36	1	34	35	6	6	111	111	34	34	68	3,153	3,700	878	7,731	25,935



主な胎土別割合



磁器 産地別割合

陶器 産地別割合

図V-1　出土陶磁器 産地別構成比

表V-5　掲載磁器一覧（1）

掲載番号	図番号（V-）	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数 接合	破片点数 非接合	破片点数 計	製作地	年代（C）	大きさ（cm）口径	大きさ（cm）器高	大きさ（cm）底径	残存部位	備　考
a1	2	碗	染付青磁		889	Ⅱ	4		4	肥前	$17_{1/4}$	11.0	(5.4)	—	口縁～胴	蛸壺船上、天目形、内面胴目、外面青磁釉
a2	2	碗	染付		890	Ⅱ	27		27	肥前	$17_{1/4}$	5.4	6.7	4.3	口縁～底	雁行砂、船上明石色、高台内荒由状、外面口縁連弧文、胴部雅文、高台脇無釉、付部の紋色黒く変色、被熱
a3	2	碗	染付		890	Ⅱ	1		1	肥前	$1770\sim80'_{\pm}$	10.3	5.2	4.1	口縁～底	小広東碗、見込に虫文、外面宝尻くし
a4	2	碗	染付		890	Ⅱ	4		4	肥前	$1770\sim80'_{\pm}$	10.4	(4.2)	—	口縁～胴	小広東碗、外面家屋山水帆掛舟
a5	2	碗	色絵		889	Ⅱ	2	2	6	肥前	$17_{1/4}$	10.0	6.0	4.0	口縁～底	外面上絵、草花
					890	Ⅱ		2								
a6	2	碗	染付		890	Ⅱ	1		1	肥前	$17_{1/4}$	10.4	5.8	4.4	口縁～底	外面草木山水
a7	2	碗	染付		890	Ⅱ	9		9	肥前	$17_{1/4}$	8.3	(5.3)	—	口縁～胴	外面花、被熱
a8	2	碗	染付		890	Ⅱ	5		5	肥前	$17_{1/4}$	9.1	5.1	3.1	口縁～底	鳴輪染付（祝儀・化粧道具？）、内面松文、外面鳴輪
a9	2	碗	染付		891	Ⅰ	1		2	肥前	17末～18前葉	10.0	(5.2)	(4.3)	口縁～底	外面紅葉と鳥（コンニャク判）、高台内崩し「大明年製」銘
						Ⅱ	1									
a10	2	碗	染付	D堀込28	D14-1	層上上位	1		1	肥前	18後葉	—	(3.1)	4.1	底	筒形碗、見込手描五弁花、外面太鼓に菊花、海あがり
a11	2	碗	染付		D15-2	Ⅱ	10		10	肥前	18後半	10.2	4.8	3.8	口縁～底	外面雅文、折枝柏
a12	2	碗	染付		D15-2	6調整乱	4		4	肥前	18後葉～19初	10.2	5.8	4.2	口縁～底	外面山奇台七梅（コンニャク判）
a13	2	碗	染付	b火事場整理穴	6期12	層上	7		7	肥前	19中葉	9.6	4.8	4.4	口縁～底	見込宮鉄、外面草花、波水と鉄？、被熱
a14	2	碗	染付		888	Ⅱ	4		4	瀬戸・美濃	19前葉～中葉	10.3	6.2	3.9	口縁～底	内面口縁折線鉄、見込に唐、外面に斜菊？、曲
a15	2	碗	染付	D堀込6	6期12	層上	1		1	瀬戸	19中葉	9.0	4.7	3.8	口縁～底	見込・外面に草花
a16	2	碗	染付	b火事場整理穴	6期12	層上	2		2	瀬戸	19中葉	9.2	(4.2)	—	口縁～胴	外面宮？、草に蝶
a17	2	碗	染付		888	Ⅱ	1		1	瀬戸・美濃	19中葉	8.4	4.2	3.0	口縁～底	見込宝珠、外面木目
a18	2	碗	染付		888	Ⅰ	1		1	瀬戸・美濃	19中葉	8.0	(3.3)	—	口縁～胴	外面斜菊？
a19	2	碗	染付		889	Ⅱ	3		3	関西系	19中葉	9.2	4.4	3.2	口縁～底	内面口縁波、外面瓔珞
a20	2	碗	白磁or染付		889	Ⅱ	1		1	瀬戸	$19_{1/4}$	—	(2.8)	3.3	底	太型打込、見込に唐、被熱
a21	3	碗	染付	b火事場整理穴	6期12	層上	20		22	肥前	$19_{1/3}\sim_{2/3}$	11.4	7.4	4.3	口縁～底	蛸付、三重ミセット、内面口縁雷文、見込十字宝、外面蓮弁内に宝、雁文の破片多数
					6期12	Ⅱ	1									
						遺ローム上	1									
a22	3	碗蓋	染付	b火事場整理穴	6期12	層上	8		8	肥前	$19_{1/3}\sim_{2/3}$	10.0	2.8	4.2	口縁～底	口縁の蔓、内面雷文、見込十字宝、外面蓮弁内に宝、8家以上あり
a23	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅳ上面	14		14	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	10.5	5.0	4.3	口縁～底	温度り口縁、雁行砂、見込花弁、外面草花、ピンホール頻著、被熱、表面に雁れ、森編Va類
a24	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅳ上面	16		17	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	11.0	5.2	4.8	口縁～底	雁れ砂、見込花弁、外面折枝花、弱い被熱、見込に薄い鎬り、キズ無し、森編Va類
						層乱	1									
a25	3	中碗	染付	D堀込3	D14-1	砂利	2		20	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	11.4	5.1	4.6	口縁～底	雁れ砂、見込花弁、外面折枝花、ピンホールあり、弱い被熱、見込に薄い鎬り、キズ無し、森編Va類
				磁器片集中	D15-2	Ⅲ	7									
						Ⅳ上面	3									
						Ⅳ	8									
a26	3	中碗	染付	D土坑6	D15-2	層上		1	10	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	10.0	5.3	4.6	口縁～底	雁れ砂、見込花弁、外面折枝花、ピンホールあり、弱い被熱、見込に鎬り無し、キズ無し、森編Va類
				磁器片集中	D15-2	Ⅲ	1									
						Ⅳ上面	7	1								
a27	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅲ	2		13	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	11.0	5.2	4.4	口縁～底	雁れ砂、見込花弁、外面折枝花、ピンホールやや顕著、弱い被熱、見込欠失、森編Va類
					D15-2	Ⅳ上面	10									
						Ⅳ	1									
a28	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅲ	1		8	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	11.2	5.1	4.2	口縁～底	鳴輪後で焼成前の孔あり、雁れ砂、見込花弁、外面折枝花、ピンホールあり、弱い被熱、見込鎬りと放射状キズ、森編Va類
					D15-2	Ⅳ上面	7									
a29	3	中碗	染付	D土坑3	D15-2	層上	1		14	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	11.2	5.4	4.7	口縁～底	雁れ砂、見込花弁、外面折枝花、ピンホール顕著、弱い被熱、見込鎬り無し、キズ無し、森編Va類
				磁器片集中	D15-2	Ⅲ	1									
						Ⅳ上面	12									
a30	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅳ上面	10	3	15	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	11.0	5.3	4.4	口縁～底	焼成時に船上片破片溶着、雁れ砂、見込花弁、外面折枝花、ピンホールあり、弱い被熱、見込出水鎬り、キズ無し、森編Va類
					D15-2	6調整乱	2									
a31	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅳ上面	13		13	瀬戸系	$16_{1/4}\sim17_{1/4}$	11.4	5.6	4.6	口縁～底	雁れ砂、見込花弁、外面折枝花、ピンホールあり、弱い被熱、見込鎬り無し、キズ無し、森編Va類

表V-6　掲載磁器一覧（2）

掲載番号	図番号（V-）	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数 接合	破片点数 非接合	破片点数 計	製作地	年代（C）	大きさ（cm） 口径	大きさ（cm） 器高	大きさ（cm） 底径	残存部位	備考
a32	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅲ	1		11	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	10.4	5.0	4.4	口縁～底	擦れ砂、見込花弁、外面折枝花、貫入目立つ、ピンホール跡著、弱い被熱、見込蛤り無し、キズ無し、森崎Va類
						Ⅳ上面	10									
a33	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅳ上面	5	1	6	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	10.0	5.1	4.4	口縁～底	擦れ砂、見込花弁、外面折枝花、貫入あり、ピンホールあり、弱い被熱、見込蛤り無し、キズ無し、森崎Va類
a34	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅱ	1		6	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	11.4	5.4	4.7	口縁～底	擦れ砂、見込花弁、外面折枝花、貫入目立つ、ピンホール跡著、弱い被熱、見込薄い蛤り、キズ無し、森崎Va類
						Ⅳ上面	5									
a35	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅲ	2		6	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	10.8	5.0	4.6	口縁～底	擦れ砂、見込花弁、外面折枝花、弱い被熱、見込薄い蛤り、キズ無し、森崎Va類
						Ⅳ上面	4									
a36	4	中碗	染付	磁器片集中	D上坑1	D15-2	覆土	1	15	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	11.0	5.4	5.4	口縁～底	擦れ砂、見込花弁、外面折枝花、貫入目立つ、ピンホール跡著、弱い被熱、見込薄い蛤り、キズ有り、森崎Va類
				磁器片集中	D15-2	Ⅱ	1									
						Ⅲ	1									
						Ⅳ上面	4	7								
						Ⅳ	1									
a37	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅳ上面	6		6	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	(12.0)	(4.3)	—	口縁～胴	外面折枝花、貫入目立つ、ピンホールあり、弱い被熱、見込欠失、森崎Va類
a38	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅲ		2	17	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	11.6	(4.6)	—	口縁～胴	外面折枝花、ピンホールあり、弱い被熱、見込欠失、森崎Va類
						Ⅳ上面	11	4								
a39	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅳ上面	4		4	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	(11.2)	5.5	5.0	口縁～底	擦れ砂、見込花弁、外面折枝花、未被熱、見込蛤り無し、キズ無し、森崎Va類
a40	4	中碗	染付	D堀13	D14-1	砂利	1	3	11	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	11.2	(3.6)	—	口縁～胴	外面折枝花、貫入あり、ピンホールあり、被熱、表面に擦れ、見込欠失、森崎Va類
				磁器片集中	D15-2	Ⅲ	3	2								
						Ⅳ上面	1									
						Ⅳ	1									
a41	4	中碗	染付	D上坑3	D15-2	覆土	1		19	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	(11.8)	(4.5)	—	口縁～胴	外面折枝花、貫入あり、ピンホールあり、弱い被熱、見込欠失、森崎Va類
				磁器片集中	D15-2	Ⅱ	1									
						Ⅲ	3									
						Ⅳ上面	4	9								
						攪乱	1									
a42	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	Ⅳ上面	6		6	瀬州窯系	$16_{0/4}$～$17_{2/4}$	(11.8)	(3.9)	—	口縁～胴	外面折枝花、ピンホールあり、弱い被熱、見込欠失、森崎Va類
a43	4	碗	青磁	E10-5	表	Ⅲ	1		1	龍泉窯系	$14_{0/4}$～$15_{2/4}$	(—)	(1.7)	4.9	底	軟質胎上、見込蛇の目釉剥、高台外面粗～高台内露胎、森崎Ⅱb類
a44	4	碗	青磁	B89	表下ローム	Ⅰ	1		1	龍泉窯系	$14_{0/4}$～$15_{2/4}$	—	(3.1)	6.0	底	外面片切削薬痕、見込ヵ釉剥、瀬戸西ヶ窯
a45	4	碗	青磁		D14-1	Ⅳ	1		1	龍泉窯系	$14_{0/4}$～$15_{2/4}$	13.0	(3.6)	—	口縁	瀬戸IV類新～IV'類
a46	4	碗	青磁		C19	Ⅵ	1		1	龍泉窯系	$14_{3/4}$～$15_{3/4}$	16.0	(4.2)	—	口縁～胴	先透彫、瀬戸IV類新
a47	4	碗	青磁		D14-1	Ⅳ	1		1	龍泉窯系	$15_{0/4}$～$15_{3/4}$	15.0	(5.5)	—	口縁～胴	内面花文、外面雲文ヵ、瀬戸V類新
a48	4	碗	青磁		C19	Ⅵ	1		1	龍泉窯系	$15_{1/4}$～$15_{3/4}$	—	(3.7)	6.0	胴～底	海ぶり、瀬戸V類
a49	4	碗	青磁	木製品集中	D14-1	Ⅳ	1		1	龍泉窯系	$16_{1/4}$～$16_{3/4}$	—	(3.1)	4.7	底	内面蓮弁花、外面蓮弁線、瀬戸VI類新、出土等真あり
a50	4	碗	青磁	B堀13	B89	覆土	1		1	龍泉窯系	$15_{1/4}$～$16_{3/4}$	13.0	(4.8)	—	口縁～胴	瀬戸VorVI類
a51	4	碗	青磁		D14-1	不明	1		1	龍泉窯系	$16_{1/4}$～$17_{3/4}$	14.0	(4.4)	—	口縁～胴	聖徳墓上、外面蓮弁線薄平、瀬戸VI類
a52	4	碗	青磁	B堀15	E11-6	覆土	1		3	龍泉窯系	$16_{1/4}$～$17_{3/4}$	13.0	(4.2)	—	口縁～胴	瀬戸VI類
					E11-6	Ⅲ	2									
a53	5	碗	染付		E11-6	Ⅱ	1		1	景徳鎮系	$15_{3/4}$	12.0	(4.1)	—	口縁～胴	内面口縁沉方線?、外面唐草?、小野碗跡・碗M類
a54	5	碗	染付	E堀15	E11-6	覆土	1		1	景徳鎮系	$15_{3/4}$～$16_{3/4}$	—	(3.1)	5.1	底	蛇子碗、外面芭蕉文、小野碗跡・碗I類
a55	5	碗	染付	E堀15	E11-6	覆土	1		1	景徳鎮系	$15_{3/4}$～$16_{3/4}$	12.0	(4.8)	—	口縁～胴	蛇子碗、外面口縁?文、芭蕉文、小野碗跡・碗I類
a56	5	碗	染付		D13	Ⅴ	2		2	景徳鎮系	$16_{3/4}$～末	12.0	(4.9)	—	口縁～胴	内面青海波に梅花、小野碗跡・碗M?、被熱
a57	5	碗	染付		D13	Ⅳ	1		1	瀬州窯系	$16_{1/4}$～$17_{1/4}$?	(12.2)	(6.1)	—	口縁～胴	外面花弁、森崎I類?
a58	5	碗	染付		D13	覆土1	1		2	瀬州窯系	$16_{1/4}$～$17_{1/4}$?	13.0	(3.1)	—	口縁	外面草花、森崎I類?
						覆土2	1									
a59	5	碗	染付	木製品集中	D14-1	Ⅳ	1		1	瀬州窯系	$16_{1/4}$～$17_{1/4}$	—	(2.6)	4.7	底	見込蛇の目釉剥、見込に細かい線痕、外面?、森崎Ⅱb類
a60	5	碗	染付	D上坑12	D14-1	覆土	1		2	瀬州窯系	16末～$17_{1/4}$	14.0	(4.6)	—	口縁～胴	軟質胎上、外面口縁不明文、芭蕉文、森崎Va類
					D14-1	Ⅲ	1									
a61	5	碗	染付		B86	Ⅲ	2		2	瀬州窯系	$16_{1/4}$～$17_{1/4}$	14.0	(4.4)	—	口縁～胴	軟質胎上、外面唐草、森崎Va類
a62	5	碗(蓋)	白磁		B90	Ⅱ	2		2	肥前	1670～1680?	11.3	3.3	4.1	口縁～底	口銹、色が入れば柿右衛門、蓋つき碗の初期のもの、伊万里の最も良い時期の白磁
a63	5	碗(蓋)	白磁		B88	Ⅰ	6		6	瀬戸	$19_{1/4}$	9.1	2.9	3.6	口縁～底	内面口縁好期文、見込雲文の花弁、外面銹跡と蟹、施釉「変形字」底

表V-7　掲載磁器一覧（3）

掲載番号	図番号（V-）	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数 接合	破片点数 非接合	破片点数 計	製作地	年代（C）	大きさ（cm） 口径	大きさ（cm） 器高	大きさ（cm） 底径	残存部位	備　考
a64	5	碗（器）	染付		B89	Ⅱ 黒（Ⅱ）の下	1 2		3	肥前	19前葉～中葉	4.0	2.6	9.4	口縁～底	内面雲文帯，見込窓に唐草，外面菊花，捩に鎬蓮，捩内「変形字」銘，肥前V類
a65	5	碗（器）	染付		B88	Ⅰ	6		6	肥前	19中葉	7.0	2.6	4.1	完形	内面雲文帯，見込双重線，外面唐草，宝文，雷文帯，肥前V類
a66	5	碗（器）	染付		B85-3	Ⅱ	1		1	肥前	19中葉	—	(1.4)	3.7	つまみ	見込「五良太青製」銘，外面？，捩内「変形字」銘，得瑞？肥前V類
a67	5	皿	染付		B85-3	Ⅱ	10	1	11	肥前	17$_{1/4}$	12.8	2.4	5.3	口縁～底	離れ砂，高台内施釉，見込銘・月
a68	5	皿	染付	D掘込1	B89	掘土	2		6	肥前	17$_{1/4}$	—	(2.2)	6.5	胴～底	離れ砂，見込銘・月
					B89	Ⅱ	4									
a69	5	皿	染付	B掘込1	B89	掘土	2		2	肥前	17$_{1/4}$	—	(1.3)	6.5	底	離れ砂，見込銘・月
a70	6	皿	染付	E掘込1	E11-6	掘土	2		2	肥前	17$_{1/4}$	13.8	3.3	6.0	口縁～底	軟質粕上，離れ砂，高台内宝巾状，高台内施釉，内面口縁波文，見込山水
a71	6	皿	染付		D13	Ⅲ1	2		2	肥前	17$_{1/4}$	14.4	2.7	8.2	口縁～底	離れ砂，高台接大きい，高台内施釉，見込宝文，ピンホールあり
a72	6	皿	染付		B89	Ⅱ	1		1	肥前	17$_{1/4}$	—	(1.9)	5.7	胴～底	離れ砂，高台内宝巾状，高台内施釉，見込草花
a73	6	皿	染付		B90	Ⅱ	6		6	肥前	17$_{1/4}$	13.2	3.0	12.2	口縁～底	離れ砂，粕上明灰色，高台内施釉，見込草花
a74	6	皿	染付	B掘込1	B89	掘土	2		2	肥前	17$_{1/4}$	12.6	4.1	6.9	口縁～底	離れ砂，高台内施釉，見込草花，外面圏線，ピンホールあり
a75	6	皿	染付	B掘込1	B89	掘土	1		1	肥前	17$_{1/4}$	14.0	3.0	5.5	口縁～底	型打輪花皿，離れ砂，高台内宝巾状，高台内施釉，内面口縁線目付圏目，見込草花
a76	6	皿	染付		D13	Ⅲ1	1		2	肥前	17$_{1/4}$	13.4	3.4	2.9	口縁～底	離れ砂，初期伊万里，高台内施釉，型打，菊花皿，見込草花
					B88	Ⅱ		1								
a77	6	皿	染付		B89	Ⅱ	1		1	肥前	17$_{1/4}$	—	(1.5)	6.5	胴～底	離れ砂，高台内施釉，見込蓮
a78	6	皿	色絵		E10-5	掘 掘下	1 2		3	肥前	1650～1660″s	24.0	(2.5)	—	口縁～胴	古九谷皿，内面口縁亀甲文，見込色絵
a79	6	皿	染付	B掘込1	B89	掘土	11		11	肥前	17後葉	14.2	3.4	7.4	口縁～底	内面胴菊，外面菊花，被熱
a80	6	皿	染付	木製品集中	4期14-1地先	Ⅳ	1		1	肥前	1670～1690	—	—	—	底部	見込平縁五弁花，高台輪化「福」銘，有田柿右衛門，南川原窯の比製，上等品
a81	6	皿	染付		B91	Ⅰ Ⅱ	1 10		11	肥前	17後葉～18前葉	14.1	2.5	8.8	口縁～底	見込波文，草花，外面草文，胴側体数点あり，被熱
a82	7	皿	染付		B88	Ⅱ	7		7	肥前（波佐見）	17後葉～18前葉	12.8	3.6	3.8	口縁～底	見込蛇の目釉剥，草花
a83	7	皿	染付		D13	Ⅱ	2	2	5	肥前（波佐見）	17後葉～18前葉	13.0	3.9	4.3	口縁～底	見込蛇の目釉剥，花弁
					D15-2	Ⅵ	1									
a84	7	皿	白磁or染付		B89	Ⅱのドのローム	1		2	肥前	17後葉～18前葉	—	(1.9)	4.1	底	見込蛇の目釉剥，BIXとDIXで接合，被熱
					D14-1	Ⅲ2a										
a85	7	皿	染付		B90	Ⅱ	3		3	肥前	18$_{1/4}$	21.4	4.6	13.0	口縁～底	見込蔦紋，外面唐草
a86	7	皿	染付		B88	Ⅰ	3		3	瀬戸	19前葉～中葉	7.6	2.2	4.3	口縁～底	型打輪花皿，見込草文
a87	7	皿	染付		B89	Ⅱ 黒（Ⅱ）の下 Ⅱのドのローム	1 3 1		5	肥前	19$_{1/4}$	14.8	4.1	8.7	口縁～底	型打輪花皿，蛇の目回形高台，口銘，見込楼閣山水・瀟洒・国，鳥獣，雷の文様
a88	7	皿	染付	D大事業整理穴1	6期12	掘土	1		1	肥前	18$_{3/4}$～19$_{1/4}$	12.6	3.1	8.1	口縁～底	型打輪花皿，蛇の目回形高台，口銘，見込楼閣山水・瀟洒・国，鳥獣，雷の文様
a89	7	皿	染付	D大事業整理穴1	6期12	掘土	13	13	26	肥前	18$_{3/4}$～19$_{3/4}$	13.4	3.1	7.8	口縁～底	型打輪花皿，蛇の目回形，高台，内面口縁雷輪の蔦文，見込蔦文，被熱
a90	7	皿	染付	D大事業整理穴1	6期12	掘土	28	28	56	肥前	18$_{3/4}$～19$_{3/4}$	22.6	3.5	13.4	口縁～底	型打十角皿，内面口縁菊花・四方瓔，見込雷輪蔦文，外面胴例学文，被熱
a91	8	皿	白磁		C18-1	Ⅱ	1		1	肥前	18$_{3/4}$～19$_{1/4}$	13.9	4.0	8.6	口縁～底	型打菊花皿，蛇の目回形高台，口銘
a92	8	皿	染付		B89	黒（Ⅱ）の下	1		2	肥前	19$_{1/4}$	13.2	3.0	7.6	口縁～底	型打輪花皿，見込蔦，雷輪蔦文・若松，蛇の目回形高台，BIXとDIXで接合
					D15-2	8調査区	1									
a93	8	皿	染付		B91	Ⅰ	1		1	肥前	19$_{1/4}$	15.0	(3.0)	—	口縁～胴	型打輪花皿，内面口縁雷文帯，見込不明文，外面唐草文？
a94	8	皿	色絵		B89	Ⅱ	1		1	肥前	19$_{1/4}$	15.0	4.6	10.0	口縁～底	型打輪花皿，蛇の目回形高台，高台内に不明銘，口縁に口紅装飾，内面色絵・金彩の蔦文・唐草文，外面蔦文
a95-a	8	皿	染付	D大事業整理穴1	6期12	掘土	3		4	肥前	18$_{3/4}$～19$_{1/4}$	—	3.2	—	口縁～底	型打菱形皿，付高台，口銘，見込菊花山水，外面折松葉文，高台に雷文，被熱，捩文並複数
a95-b							1									
a96	8	皿	染付	D大事業整理穴1	6期12	掘土	9		9	肥前	18$_{3/4}$～19$_{3/4}$	11.3	3.9	6.9	口縁～底	型打長皿，付高台，内面口縁蔦唐草文，見込松竹梅文，外面却芙蓉蔦唐草，高台内に「若玉宝鼎之助」銘，高台輪蔦唐文，捩文並複数，被熱
a97	8	皿	染付		D14-1	Ⅱ	1		1	瀬戸	19$_{1/4}$	—	(1.2)	—	底	見込草文
a98	8	皿	白磁		D13	Ⅱ	1		1	瀬戸	19$_{1/4}$	8.2	2.1	4.0	口縁～底	型打角皿，見込縦刷毛目文，四隅に沙綾形文
a99	8	皿	白磁		B89	Ⅱ	1		1	瀬戸	19$_{1/4}$	—	2.3	(5.5)	口縁～底	型打角皿，内面口縁縦刷毛目文，見込縦刷毛文，波文，海あがり
a100	8	皿	白磁		B88	Ⅱ	1		1	瀬戸	19$_{1/4}$	—	(1.2)	—	底	型打角皿，内面口縁縦刷毛目文，見込花文？，海あがり？
a101	8	皿	白磁		D14-1	Ⅱ	1		1	瀬戸	19$_{1/4}$	9.8	1.9	5.0	口縁～底	水型打込
a102	8	皿	青磁		B86	Ⅱ	1		1	龍泉窯系	14$_{1/4}$（ヘ$_{1/2}$）	—	(1.8)	5.8	底	目跡，瀬戸V類前
a103	8	皿	青磁		4期17-2地先	Ⅳ	1		1	龍泉窯系	15$_{1/4}$（ヘ$_{1/2}$）	11.0	(1.9)	—	口縁	口折皿，瀬戸V類，被熱，印福山街道

表V-8　掲載磁器一覧（4）

掲載番号	図番号（V-）	器種	種類	造構名	発掘区	層位	破片点数 接合	非接合	計	製作地	年代（C）	大きさ（cm） 口径	器高	底径	残存部位	備考
a104	8	皿	青磁		D15-2	VI	2		2	龍泉窯系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	12.6	3.6	7.0	口縁～底	見込中央に線痕，瀬戸V類
a105	9	皿	青磁		B88	II	1		1	龍泉窯系	$14_{/4}$～$15_{/4}$	27.3	(2.2)	—	口縁	口折皿，瀬戸IV類前～V類
a106	9	皿	青磁		B90	II	1		1	龍泉窯系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	11.2	(2.0)	—	口縁～底	口折皿，片切彫蓮弁，瀬戸V類，被熱
a107	9	皿	青磁		D13	V	2		2	龍泉窯系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	12.3	3.0	3.0	口縁～底	櫛折線花紋，瀬戸VI類古
a108	9	皿	青磁	D層以下 D層以2A	D13	埋土	1									
					D13	埋土	1		3	龍泉窯系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	12.4	(2.3)	—	口縁～胴	櫛折線花紋，瀬戸VI類
					D13	II	1									
a109	9	皿	青磁		D14-1	VI	1		1	龍泉窯系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	—	(2.4)	5.2	底	櫛折印花文皿，瀬戸VI類，貝骨層
a110	9	皿	青磁	D層以1	E11-6	埋土	1		2	龍泉窯系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	12.6	(2.6)	—	口縁～胴	櫛折皿，漆継，瀬戸VI～V類
					D13	III2	1									
a111	9	皿	青磁		D15-2	VI	1		1	龍泉窯系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	—	(1.4)	5.4	底	高台内面輪に線状砂付着，見込線彫，瀬戸VI又は3類，海あがり
a112	9	皿	白磁		B86	III	2		2	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	15.0	3.3	8.4	口縁～底	蛇付鍋取，新垣・瀬戸V類並1a（森田B群）
a113	9	皿	白磁		D14-1	III2	1		1	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	11.8	3.0	6.1	口縁～底	蛇付鍋取，新垣・瀬戸V類並1a（森田B群），被熱
a114	9	皿	白磁	本製品集中	D14-1	IV	2		2	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	12.6	3.0	7.0	口縁～底	蛇付鍋取，新垣・瀬戸V類並1a（森田B群）
a115	9	皿	白磁		D13	V	10	4	14	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	11.0	2.6	6.2	口縁～底	蛇付鍋取，新垣・瀬戸V類並1a（森田B群）
a116	9	皿	白磁		D13	IV	1	1	2	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	9.0	2.5	5.4	口縁～底	蛇付鍋取，新垣・瀬戸V類並1a（森田B群）
a117	9	皿	白磁		D15-2	VI	1		1	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	9.2	1.8	5.7	口縁～底	見込蛇の目釉剥，蛇付鍋取，新垣・瀬戸V類並1a（森田B群）
a118	9	皿	白磁	本製品集中	D14-1	IV	1		1	景德鎮系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	—	(1.9)	5.0	底	蛇付鍋取，新垣・瀬戸V類並1？（森田B群?），海あがり
a119	9	皿	白磁		C18-1	IV	1		1	中国南方系	$14_{/4}$～$15_{/4}$	—	(1.3)	3.9	底	蛇付～高台内面釉取，新垣・瀬戸V類並1～c（森田B群）
a120	9	皿	白磁	4層15-2地先	IV	1		1	中国南方系	$14_{/4}$～$15_{/4}$	—	(1.8)	—	底	外面体部下半～高台内面釉取，新垣・瀬戸V類並1～c（森田B群），信山小街道
a121	9	皿	白磁		B85-2	II	1		1	中国南方系	$14_{/4}$～$15_{/4}$	9.0	2.2	4.4	口縁～底	目跡，扶入高台，新垣・瀬戸V類並1～c（森田B群）
a122	9	皿	白磁		D15-2	VI	1		1	中国南方系	$14_{/4}$～$15_{/4}$	—	(1.3)	4.8	底	外面体部～高台内面釉，目跡，扶入高台，新垣・瀬戸V類並1～c（森田B群），被熱
a123	9	皿	白磁		D13	IV	1		1	中国南方系	$14_{/4}$～$16_{/4}$	13.5	(2.0)	—	口縁～胴	蛇付鍋取上，高台外面釉掛取，新垣・瀬戸V類並1（森田B群）
a124	9	皿	白磁	D層以2B	D14-1	埋土下位	1		1	中国南方系	$14_{/4}$～$16_{/4}$	12.6	(2.3)	—	口縁	蛇上所沃白色，新垣・瀬戸V類（森田B群）
a125	9	皿	白磁		D14-1	IV	1		1	中国南方系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	—	(1.8)	4.4	底	蛇付鍋取上，高台内面輪～高台内面釉取，見込線彫，新垣・瀬戸V類並1a（森田B群），海あがり
a126	10	皿	染付	4層17-2地先	IV	1		1	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	12.2	(1.5)	—	口縁	外面草花文，小野忠太郎VI又は3類，信福山街道
a127	10	皿	染付	B88	I	1		1	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	11.3	2.7	6.2	口縁～底	見込蝶子文，外面唐草，小野忠太郎VI類
a128	10	皿	染付	D層以2B	D14-1	埋土下位	2		2	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	—	(2.7)	6.5	底	見込蝶子文，外面唐草，小野忠太郎VI類
a129	10	皿	染付		4層15-3W地先	III	2		2	景德鎮系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	—	(1.7)	—	底	蛇籠文，小野忠太郎VI類，信福山街道
a130	10	皿	染付	本製品集中	4層14-1地先	IV	3		3	景德鎮系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	11.6	2.8	6.1	口縁～底	型打梅花皿，蛇付に線状砂，見込格調山水・石塔・東屋，森並V類，出土写真あり
a131	10	皿	染付	D13	III1	2	1		1	景德鎮系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	—	(1.4)	5.4	底	蛇付鍋取，見込「書」字文，外面小判文，小野忠太郎類，森並I a類
a132	10	皿	染付		D13	III1	2		2	景德鎮系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	9.6	(1.5)	—	口縁	内面口縁四方雷，小野忠太郎IX又は3類，被熱
a133	10	皿	染付		B86	II	3		3	景德鎮系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	14.5	2.9	7.3	口縁～底	見込蝶子文，小野忠太郎3類
a134	10	皿	染付		B86	III	1		1	景德鎮系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	10.2	2.2	5.6	口縁～底	見込草花，高台内銘，小野忠太郎3類
a135	10	皿	染付		A94	II下位	1		1	景德鎮系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	11.3	(3.0)	—	口縁～胴	小野忠太郎
a136	10	皿	染付		D14-1	III3	1		1	景德鎮系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	—	(1.3)	8.0	底	蛇付に線状砂付着，見込砂線形文，ロロ文，小野忠太郎（森並IV類?）
a137	10	皿	染付		B87	I	1		1	景德鎮系?	$15_{/4}$～$17_{/4}$	—	(2.5)	6.0	胴～底	見込植物文，蛇付～高台内面釉
a138	10	皿	染付		B86	II	3		3	景德鎮系?	$15_{/4}$～$17_{/4}$	14.4	2.6	8.2	口縁～底	蛇付に線状砂，見込蝶文，内面雷文
a139	10	皿	染付	D層以1	D13	埋土	1		3	津州窯系	$15_{/4}$～$16_{/4}$	13.9	3.4	6.0	口縁～底	蛇付鍋取上，蝶型底，外面体部下半～高台内面釉，波濤文の横行?，森並I b類（小野忠太郎群）
					D13	V	2									
a140	10	皿	染付		E10-5	III	2		2	津州窯系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	12.0	(2.4)	—	口縁～胴	蛇付鍋取上，瘤反，内面口縁四方雷，見込蝶鞠，見込文様?，森並II b類?
a141	10	皿	染付		D13	IV	1		1	津州窯系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	9.1	(2.2)	—	口縁～底	蛇付鍋取上，見込蝶鞠，外面植物文，高台外面輪取，森並II b類
a142	10	皿	染付	磁器片集中	D15-2	IV上面	1		1	津州窯系	$15_{/4}$～$17_{/4}$	—	(2.2)	15.4	底	蛇付に線状砂，高台内中央銘取，見込草木文，森並II b又はII b類，火炎面で津州窯編と併出，被熱
a143	10	皿	兵庫赤絵		A94	II下位	6		6	津州窯系	$16_{/4}$～$17_{/4}$	—	(4.0)	—	胴	蛇付鍋取上，色絵（只華手），内面植物文，鳥文，胴巻文前入，漆継，森並II b類
a144	11	鉢付鉢	染付	D大事業整理穴1	A5層12	埋土	22		22	肥前	17～$18_{/4}$	11.0	7.4	6.6	口縁～底	外面山水文，被熱
a145	11	八角鉢	染付	D大事業整理穴1	A5層12	埋土	2		2	肥前	$16_{/4}$～$17_{/4}$	10.4	(5.2)	—	口縁～胴	型打，内面口縁金つなぎ文，外面山水文，被熱
a146	11	鉢	染付		2層町通唐津ヶ丘遺	III	3		3	肥前	$17_{/4}$～$18_{/4}$	24.0	(6.0)	—	口縁～胴	内面草花文，注上写真あり
a147	11	鉢	染付		B89	II	1	1	2	肥前	19中葉	25.0	(5.7)	—	口縁	内面口縁雷文，外面花弁文
a148	11	鉢	青磁		B90	II	25	6	31	肥前	$17_{/4}$～$18_{/4}$	28.0	11.2	10.2	口縁～底	貫入

表V-9　掲載磁器一覧（5）

掲載番号	図番号（V-）	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数 接合	破片点数 単独分	破片点数 計	製作地	年代（C）	大きさ（cm） 口径	大きさ（cm） 器高	大きさ（cm） 底径	残存部位	備　考
a149-α	11	盤	青磁		4期15-2地先	Ⅱ	1		2	肥前	1630～1640′s	—	(3.5)	—	口縁、胴～底	型打、内面口縁・見込斜格子幾何に鉄釉
a149-b					B89	Ⅲ	1									
a150	11	盤	青磁		E94	Ⅲ	1		1	龍泉窯系	15_{c1}～15_{c4}	32.0	(2.3)	—	口縁	口折、内面蓮弁、瀬戸V類
a151	11	盤	青磁		D13	Ⅳ	1		1	龍泉窯系	15_{c1}～15_{c4}	—	(1.5)	—	底	見込草花文、瀬戸V類
a152	11	坏	染付		B88	Ⅱ	1		1	瀬戸・美	19	6.2	3.1	2.7	口縁～底	素地は瀬戸の白磁（白玉）、京で七宝焼付により施文、清水寺の文様、京土産風
a153	11	坏	染付	B撹込1	E11-8	撹土	1		1	肥前	19中葉	6.2	2.9	2.6	口縁～底	薄手透明、内面口縁幾何学文様、見込菊水
a154	11	坏	白磁	B撹込1	B89	撹土	2		11	瀬戸・美濃	19中葉	7.5	4.8	3.6	口縁～底	口銹
						Ⅱ	8									
					B90	Ⅱ	1									
a155	11	坏	染付		B88	Ⅱ	1		1	肥前	19前葉～中葉	7.6	3.8	3.0	口縁～底	外面に擦了
a156	11	坏	染付		D13	Ⅴ	1		1	景德鎮系	15_{c2}～?	6.0	(2.4)	—	口縁～底	外面植物文、森小坏Ⅰ類
a157	12	坏	白磁		B90	Ⅱ	1		1	中国南方系	14_{c2}～16_{c4}	7.6	3.2	(3.2)	口縁～底	軟質胎土、外透釉、新垣・瀬戸D類坏Ⅲ（森田0昭）
a158	12	坏	白磁		4期15-3地先	撹	1		1	中国南方系	14_{c2}～16_{c4}	—	(2.2)	3.3	底	新垣・瀬戸D類坏Ⅲ（森田0昭）、田福山街道
a159	12	八角坏	白磁		4期17-2地先	Ⅳ	1		1	中国南方系	14_{c2}～16_{c4}	—	(2.8)	—	胴～底	型打、新垣・瀬戸D類坏Ⅰ又はⅡ（森田0昭）、田福山街道
a160	12	八角坏	白磁		D14-1	Ⅵ	1		1	中国南方系	14_{c2}～16_{c4}	6.6	(1.6)	—	口縁	型打、新垣・瀬戸D類坏Ⅰ又はⅡ（森田0昭）、田福山街道
a161	12	坏	白磁		A94	層下底	1		1	景德鎮系	16_{c2}～17_{c3}	—	(1.2)	2.6	底	見込蛇の目釉剥、新垣・瀬戸D類坏（森田0昭）
a162	12	坏?	染付		D14-1	撹	1		1	景德鎮系	16_{c2}～17_{c3}?	7.4	(2.4)	—	口縁	型打輪花坏、内面植物文、外面波と雷、新垣・瀬戸I群?、碁石5より下
a163	12	皿?	染付		B89	Ⅱ	1		2	肥前	18後葉～19前葉	7.2	5.7	5.2	口縁～底	外面山水
					B90	Ⅱ	1									
a164	12	板焼利	染付	b火事痕整理穴1	6期12	撹土	10	6	16	肥前	17末～18_{c1}?	4.0	(21.0)	—	口縁～底	外面草に蛇、被熱
a165	12	板焼利	白磁or染付	b火事痕整理穴1	6期12	撹土	26	8	34	肥前	17末～18_{c1}?	—	(23.5)	—	胴～脚	無文、被熱
a166	12	灰吹	青磁		B86	Ⅱ	2		2	肥前	18～19中葉	5.8	7.1	4.8	口縁～底	高台なし、内面下2/3無釉
a167	12	香炉	青磁		D15-2	黒色土IV(3層)	1		1	龍泉窯系	15_{c1}～15_{c4}	—	(1.5)	4.0	底	内面無釉、瀬戸V類、付ホーター→前TP-3
a168	12	器物(蓋)	染付		B88	Ⅱ	1		1	肥前	18_{c1}～19_{c1}	7.1	2.0	—	完形	開形の容器の蓋、外面蕨文
a169	12	鉢本体	瑠璃釉	B撹込1	B89	撹土	58		92	瀬戸	19中葉	25.6	19.1	14.0	口縁～底	川本治兵衛三代目作、三本脚、口縁5ヶ所受文貼付、胴部双重受文貼付、底に墨書あり、被熱
					B89	Ⅱ	32	1								
						砂利層	1									
a170	12	鉢本体	瑠璃釉		D15-2	Ⅱ	1		1	瀬戸	19半	—	(6.5)	—	胴	川本治兵衛三代目作、矢羽根文貼付、海あがり
a171	13	鉢本体	染付	B撹込1	B89	撹土	29		41	肥前	19中葉	22.9	15.0	6.1	口縁～底	3本脚脚、口縁波文、輪文、内面草花、外面蔦龍
					B89	Ⅱ	12									
a172	13	紅猪口	白磁		B89	Ⅱ	1		1	肥前	19?	2.4	1.2	0.9	完形	ミニチュア、型押、全面施釉、外面縞
a173	13	紅猪口	白磁		B90	Ⅱ	1		1	肥前	19?	2.3	1.3	1.0	完形	ミニチュア、型押、全面施釉、外面縞
a174	13	紅猪口	白磁		B90	Ⅱ	1		1	肥前	19前葉～中葉	4.7	1.5	1.5	完形	型押、外面縞、内面施釉、外面底のみ施釉
a175	13	紅猪口	白磁		B90	Ⅱ	1		1	肥前	19前葉～中葉	4.6	1.5	1.6	完形	型押、外面縞、内面施釉、外面底のみ施釉
a176	13	紅猪口	白磁		B91	Ⅰ	1		1	肥前	19前葉～中葉	4.8	1.4	1.9	完形	型押、外面縞、内面施釉、外面底のみ施釉、被熱
a177	13	紅猪口	白磁		B89	黒(Ⅱの下)	1		1	肥前	19	4.6	1.6	1.4	完形	型押、外面縞、内面施釉、外面1/3施釉
a178	13	紅猪口	白磁		B91	Ⅱ	1		1	肥前	19	4.6	1.5	1.4	完形	型押、外面縞、内面・外面底施釉
a179	13	紅猪口	白磁		B91	砂利	1		1	瀬戸・美濃	19前葉～中葉	5.0	(1.9)	(1.4)	口縁	型押、外面唐草文、海あがり
a180	13	広東碗	染付		B90	Ⅱ	14	5	19	肥前	17後葉	6.4	(4.6)	—	口縁～胴	銹蝕文様、内面草花?
a181	13	広東碗	染付	木製品集中	4期14-1地先	Ⅳ	1		1	肥前	17後半	—	(3.5)	3.5	胴～脚	外面一重蕨文
a182	13	戸車	白磁	b火事痕整理穴1	6期12	撹土	2		2	肥前	18後葉～19中葉	3.4(径)	0.8(厚)	1.3(穴径)	1/3	外輪面に施釉
a183	13	戸車	白磁	b火事痕整理穴1	6期12	撹土	1		1	肥前	18後葉～19中葉	3.4	0.9	1.3	1/3	外輪面に施釉
a184	13	戸車	白磁		3期西壁ト三蔵道ヶ下	Ⅱ	1		1	肥前	18後葉～19中葉	5.0	1.0	1.4	1/6	外輪面に施釉
a185	13	戸車	白磁		4期15-3地先	Ⅱ	1		1	肥前	18後葉～19中葉	7.0	1.6	2.2	1/6	外輪面に施釉

表V-10　掲載陶器一覧（1）

掲載番号	図番号（V-）	器種	遺構名	発掘区	層位	破片点数 接合	破片点数 非接合	破片点数 計	製作地	年代（C）	大きさ（cm） 口径	大きさ（cm） 器高	大きさ（cm） 底径	残存部位	備　考
b1	14	碗		B06	Ⅱ	3		4	瀬戸・美濃	16後葉	12.0	6.1	3.0	口縁～底	丸碗,黒褐鉄釉,大窯3段階後半
					Ⅲ	1									
b2	14	天目碗	木製品集中	D14-1	Ⅳ	1	1	2	瀬戸・美濃	16中葉	7.8	3.8	3.1	口縁～底	小ぶり,内面全面・外面底部以外黒褐鉄釉,出土写真あり
b3	14	天目碗		B06	Ⅱ	1		1	瀬戸・美濃	16	11.4	5.5	4.4	口縁～底	褐色釉,藤澤大窯3段階後半～4段階前半
b4	14	碗		B06	Ⅱ	8		8	肥前	16末	7.2	3.6	3.1	口縁～底	瀬戸系,肥前Ⅰ期
b5	14	天目碗	木製品集中	D14-1	Ⅳ	4	1	5	瀬戸・美濃	16後葉	12.0	6.3	4.3	口縁～底	内面全面・外面底部以外鉄釉,口縁黄褐色釉
b6	14	天目碗	木製品集中	D14-1	Ⅳ	3		3	瀬戸・美濃	16前葉～中葉	11.0	(4.8)	—	口縁～胴	黒褐鉄釉,鉄銹釉,藤澤大窯2～3段階前半
b7	14	碗	木製品集中	D14-1	Ⅳ	6		1	肥前	16末～17初	10.6	7.9	4.8	口縁～底	鉄絵唐津,灰釉,肥前Ⅰ-2期,出土写真あり
b8	14	碗		B90	Ⅱ	8		8	肥前	17前葉～中葉	11.6	7.7	4.4	口縁～底	鉄釉,外面イッチン,肥前Ⅱ期
b9	14	碗	土壙15	E11-6	覆土	1		1	瀬戸・美濃	17前葉～中葉	—	(2.4)	6.0	底	丸碗,オリーブ色灰釉,藤澤登窯第1～6小期
b10	14	壁行碗		D13	Ⅲ1	6	1	7	京・信楽	18中葉～後葉	—	(4.0)	4.1	胴～底	煎じ茶碗,外面鉄絵,胎土Ⅱ
b11	14	湯呑		B08	Ⅰ	3		3	唐津	19	6.4	5.8	3.4	口縁～底	見込にロクロ目,外面荒の絵
b12	14	皿		D13	Ⅳ	1		4	瀬戸・美濃	16中葉	10.3	2.5	5.5	口縁～底	印花丸皿（菊花）,輪トチ痕,オリーブ色灰釉,藤澤大窯2段階
					Ⅴ	3									
b13	14	皿	木製品集中	D14-1	Ⅳ	1		1	瀬戸・美濃	16中葉	11.0	2.8	5.7	口縁～底	印花丸皿（菊形）,オリーブ色灰釉,藤澤大窯2段階,出土写真あり
b14	14	皿	B溝15	B06	覆土	6		6	瀬戸・美濃	16中葉～末	10.3	2.8	5.8	口縁～底	丸皿,輪トチ痕,オリーブ色灰釉,縦鋸,藤澤大窯2～3段階
b15	14	皿		D13	Ⅳ	1		1	瀬戸・美濃	16中葉～末	10.4	2.4	6.2	口縁～底	丸皿,輪トチ痕,オリーブ色灰釉,縦鋸,藤澤大窯2～3段階,出土写真あり
b16	14	皿	木製品集中	D14-1	Ⅳ	1		1	瀬戸・美濃	16中葉～末	10.4	2.4	6.5	口縁～底	丸皿,輪トチ痕,オリーブ色灰釉,灯明皿,藤澤大窯2～3段階
b17	15	皿		D14-1	Ⅲ2	1		1	瀬戸・美濃	16中葉～末	—	(1.0)	6.0	底	丸皿,輪トチ痕,削り込み底,オリーブ色灰釉,藤澤大窯2～3段階
b18	15	皿	B溝15	B09	覆土	1		1	瀬戸・美濃	16中葉～末	10.5	(1.5)	—	口縁	鉄絵皿,オリーブ色灰釉,藤澤大窯3～4段階前半
b19	15	皿		B07	Ⅱ	1		1	瀬戸・美濃	16後葉	11.6	2.4	5.4	口縁～底	壁行皿・端反形,茶褐色鉄釉
b20	15	皿	木製品集中	D14-1	Ⅳ	2		2	瀬戸・美濃	16中葉～末	—	(1.7)	6.0	底	内面皿,オリーブ色灰釉,藤澤大窯3～4段階前半
b21	15	皿	木製品集中	4期14-1地先	Ⅳ	1		1	肥前	16_{10}～16末	—	(3.5)	4.8	底	灰釉,胎土Ⅱ,肥前Ⅰ-1期
b22	15	皿	木製品集中	D14-1	Ⅳ	1		1	肥前	16末～17初	11.5	3.6	4.6	口縁～底	胎土Ⅱ,灰釉,出土写真あり,肥前Ⅰ期
b23	15	皿		D13	Ⅲ2	1		1	肥前	16末～17初	11.4	2.3	4.4	口縁～底	蕎麦形,高台に石粉土目,灰釉,肥前Ⅰ-1期,出土写真あり
b24	15	皿	A土坑1	A94	覆土	1		2	肥前	16末～17初	—	(3.3)	8.8	底	胎土Ⅱ,灰釉,肥前Ⅰ-2期
				A94	掘	1									
b25	15	皿		B06	Ⅱ	1		1	肥前	16末～17初	—	(2.6)	5.1	底	胎土Ⅱ,灰釉,肥前Ⅰ-2期
b26	15	皿		D13	Ⅳ	1		1	肥前	16末～17初	—	(2.3)	4.2	底	蕎麦形,内面オリーブ色灰釉,肥前Ⅰ-1期
b27	15	皿		D15-2	Ⅲ	1		1	肥前	16末～17初	12.4	3.6	5.4	底	輪花皿,灰釉,肥前Ⅰ-1期
b28	15	皿		A94	Ⅱ	1		1	肥前	17前葉	—	(1.4)	4.4	底	胎土Ⅱ,灰釉,海あがり,肥前Ⅰ期
b29	15	皿		B06	Ⅱ	1		1	肥前	16_{10}～16末	12.0	(2.1)	—	口縁	仏ヒロ,灰釉,皮鯨手,肥前Ⅰ-1期
b30	15	皿		D15-2	Ⅲ	1		1	瀬戸・美濃	16末～17初	6.0	(1.6)	—	口縁	折縁皿・端反形,内面ノガ,藤澤大窯4段階後半
b31	15	皿		C19	Ⅲ	2		2	瀬戸・美濃	16末～17初	12.8	2.9	6.2	口縁～底	丸皿,志野,削込底部,円錐ビン跡,藤澤大窯4段階後半～末
b32	15	皿		A94	Ⅲ	1		1	肥前	16_{10}～17初	11.3	3.1	5.2	口縁～底	灰釉,胎土Ⅱ,肥前Ⅰ期
b33	15	皿		B90	Ⅱ	5		5	肥前	16末～17初	15.0	(2.7)	—	口縁～胴	絵唐津,肥前Ⅰ-2期
b34	16	皿		D15-2	Ⅳ 黒(B溝)	1		1	肥前	16末～17初	12.6	3.3	4.8	口縁～底	鉄絵唐津,胎土Ⅱ,肥前Ⅰ期,胎土用キャー前TP-3
b35	16	皿		2期町道唐津ヶ丘線	Ⅲ水気面	2	3	5	肥前	17中葉～末	20.0	(3.0)	—	口縁	鉄絵皿,胴絵鉄,肥前Ⅱ期,出土写真あり
b36	16	皿		D13	Ⅳ	3		3	朝鮮系?	16後半～17前半	17.0	(3.0)	—	口縁	伊羅保写真,縦鋸
b37	16	皿		B85-3	Ⅱ	1		1	瀬戸・美濃	17前葉	13.3	2.9	7.0	口縁～底	丸皿,見込円錐ビン跡,底面にトチ目,灰釉,藤澤登窯第1～2小期
b38	16	皿	D土坑12	D14-1	覆土	3		4	瀬戸・美濃	17前葉	12.2	3.3	7.1	口縁～底	丸皿,鉄絵志野,見込円錐ビン跡,底面にトチ目,内面唐草文,藤澤大窯4段階後半～末
			D溝15 2B	D14-1	覆土上位（ガ1上ヶ下）	1									
b39	16	皿		B06	Ⅱ	1		1	瀬戸・美濃	17前葉	11.0	2.5	6.0	口縁～底	丸皿,鉄絵梅花,簡文,藤澤登窯第2小期
b40	16	皿		D15-2	Ⅳ	1		1	瀬戸・美濃	17前葉	—	(2.0)	7.2	底	菊花皿,志野鉄,見込円錐ビン跡,底面輪トチ痕,藤登窯第1小期
b41	16	皿	福器片集中	D15-2	Ⅳ上面	1		1	肥前	16_{10}	—	(2.1)	5.8	底	灰釉,火炎面で薄州雲鐵と併出,肥前Ⅰ期
b42	16	皿	B溝15	E11-6	覆土	2		2	瀬戸・美濃	17前葉	—	(1.2)	8.0	底	丸皿,底面にトチ目痕,鼠志野,藤澤大窯4段階後半～末
b43	16	皿		D14-1	Ⅲ砂利	2	1	3	瀬戸・美濃	17前～中葉	12.6	2.6	6.8	口縁～底	菊花皿,志野鉄,見込円錐ビン跡,藤澤登窯第1小期
b44	16	皿		E10-5	Ⅱ	1		1	肥前	17中葉～末	—	(1.5)	4.7	底	見込蛇の目釉剥,肥前Ⅱ期
b45	16	盤		D13	地山砂礫	1		2	瀬戸・美濃	14後葉～15後葉	37.0	(2.6)	—	口縁	オリーブ色灰釉,藤澤古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳ新
				D14-1	Ⅵ	1									

表V-11 掲載陶器一覧（2）

掲載番号	図番号（V-）	器種	遺構名	発掘区	層位	破片点数			製作地	年代（C）	大きさ（cm）			残存部位	備考
						接合	非接合	計			口径	器高	底径		
b46	16	盤		D13	地山砂	1		1	瀬戸・美濃	14後葉～15後葉	—	(2.7)	—	胴	鉄釉,オリーブ色灰釉,藤澤2瀬戸後期Ⅱ～Ⅳ新,海あがり
b47	16	向付		B90	Ⅱ	1		1	瀬戸・美濃	16末～17初	—	(2.0)	—	底	鉄絵志野,茶黄底,藤澤大薮4段階後半～末,海あがり
b48	16	向付		D14-1	盛2	1		1	瀬戸・美濃	16末～17初	—	(1.5)	—	底	鉄絵志野,底面目跡7,藤澤大薮4段階後半～末
b49	16	大皿		D14-1	盛2	1		1	瀬戸・美濃	16末～17初	—	(3.2)	13.1	底	内・底面に目跡,茶褐色鉄釉
b50	16	鉢	B堀込1	D13	層土下	1		1	瀬戸・美濃	16末～17初	—	(2.1)	10.0	底	鉄絵志野,内面同鉄ビン絡,高台内輪トチ痕,藤澤大薮4段階後半～末
b51	17	鉢		D13	盛1	1		1	肥前	16後葉～17初	21.4	(5.5)	—	口縁～胴	灰釉,肥前Ⅰ期
b52	17	鉢		B90	Ⅱ	4		6	肥前	17中葉	—	(2.9)	10.2	底	押型による菊文と不明文,B区とD区で接合,肥前Ⅲ期,被熱,村井モーター前TP-3
					盛の下のローム	1									
				D15-2	盛砂利(地固)	1									
b53	17	鉢		B85-3	Ⅱ	1		16	肥前	17中葉	—	(7.0)	—	底	種に施釉,B区とD区で接合
				D13	盛1(杭列り)	9	1								
					盛1	4	1								
b54	17	大鉢		D13	盛2	4		4	肥前	17中葉～後葉	43.0	(8.6)	—	口縁	鉄絵唐津,白色化粧土
b55	17	鉢	D大事務整理穴1	6層12	層土	11		11	肥前	17末～18中葉	23.5	9.4	6.7	口縁～底	銅生日,肥前Ⅳ期
b56	17	鉢		B89	Ⅱ	2		15	肥前	18前葉～中葉	21.0	12.3	9.2	口縁～底	内面全面と外面上半分鉄釉,被熱
				B90	Ⅱ	13									
b57	18	碗蓋	C土坑12	3層18-1	層土	1		1	珠洲	15前半	24.0	(2.7)	—	口縁	古洲Ⅴ期
b58	18	**碗蓋**		C18-1	Ⅳ	**2**		**2**	**珠洲**	15前半	33.0	(4.5)	—	口縁	口縁波状帽日文,11本帽日7,古洲Ⅴ期
b59	18	**碗蓋**		D13	Ⅳ	**1**		**1**	**珠洲**	15後半	32.0	(2.8)	—	口縁	口縁波状帽日文,7本帽日,古洲Ⅵ期
b60	18	碗蓋		D14-1	V1(井骨)	**1**		1	越前	15末～16前半	36.0	(5.6)	—	口縁	11本帽日,木材V1～2期
b61	18	**碗蓋**		D14-1	Ⅳ(井骨こり底上の感覚色)	**1**		**1**	**越前**	15末～16前半	30.0	(8.2)	—	口縁	12本帽日7,内面炭化物付着,木材V1～2期
b62	18	**碗蓋**		D13	Ⅳ	**1**		1	越前	15末～16前半	37.0	(8.7)	—	口縁	11本帽日,口縁外側炭化物付着,木材V1～2期,木集中1
b63	19	碗蓋	本製品集中	D14-1	Ⅳ	2	1	3	越前	15末～16後半	—	(8.8)	14.0	底	墨日跡残,内底面ふこげ付着,外底面炭化物付着,被熱,木材V期,非数より下で出土
b64	19	碗蓋	本製品集中	D14-1	Ⅳ	**1**		1	越前	16後半	34.0	(7.1)	—	口縁	10本帽日7,木材V3期,杭2上端近く
b65	19	**碗蓋**		D13	Ⅳ	**1**		**1**	**越前**	16後半	39.0	(3.7)	—	口縁	9本帽日,内面おこげ付着,木材V3期
b66	19	**碗蓋**		D13	Ⅳ	**1**		1	越前	16後半～17前葉	33.0	(6.5)	—	口縁	9本帽日,外面炭化物付着,木材V3～V4期
b67	19	碗蓋	E堀込1	E11-6	層土	**1**		1	越前	16後半～17前葉	33.0	(9.1)	—	口縁	8本帽日,木材V3～V4期
b68	19	**碗蓋**		A94	Ⅲ	**2**		2	越前	17中葉～後葉	28.0	(3.4)	—	口縁	8本帽日,木材V4?～3期
b69	19	碗蓋	本製品集中	D14-1	Ⅳ	**1**		1	越前	不明	—	(5.8)	—	胴	8本帽日,海あがり,非数の上位にあった
b70	20	碗蓋		B86	Ⅱ	1		1	瀬戸	17?	30.0	(2.8)	—	口縁	藤澤大薮4段階末
b71	20	碗蓋		C19	Ⅲ	**1**		1	**備前**	17前半	35.0	(4.0)	—	口縁	9本以上帽日
b72	20	碗蓋		B90	Ⅱ	2	2	2	唐代	17後葉～18前葉	31.0	(5.1)	—	口縁	10本帽日
b73	20	碗蓋		2期町道溝ヶ丘線	Ⅲ大溝面	1		1	肥前	17中葉～末	—	(4.3)	—	胴	17本帽日7,肥前Ⅱ～Ⅲ期,出土写真あり
b74	20	碗蓋	B堀込1	B89	層土		1	7	肥前	17末～18前半	37.0	(14.3)	16.6	口縁・底	9本帽日7,全面明赤褐色鉄釉,肥前Ⅳ期
				B87		6									
b75	21	碗蓋		B89	Ⅱ	12	7	19	肥前	17末～18前半	34.4	14.2	19.0	口縁～底	11本帽日7,全面黄褐色鉄釉,被熱,肥前Ⅳ期
b76-a	22	碗蓋	B堀込2	B86	層土	1		4	肥前	17末～18前半	33.8	(10.2)	—	口縁・胴～底	11本帽日7,赤褐色鉄釉,離れ砂付着,肥前Ⅳ期
b76-b						3									
b77	21	**碗蓋**		B85-3	Ⅱ	**1**		1	**堺**	18前葉～中葉	32.0	(5.3)	—	口縁	10本帽日,白神Ⅰ型式
b78	21	**碗蓋**	D堀込20	D14-1	層土	**2**		2	**堺**	18前葉～中葉	—	(9.5)	—	胴～底	9本帽日7,白神Ⅰ型式2段階
b79	21	**碗蓋**	D大事務整理穴1	6層12	層土	14		14	堺	18後半	53.0	(4.4)	—	口縁～底	7本帽日,内面底部にクールマーク状に帽日文,白神Ⅱ型式2段階
b80	23	**壺**		B91	Ⅱ	**1**		1	**珠洲**	14後半	60.0	(15.0)	—	口縁～肩	外面平行タタキ,古洲Ⅳ2期
b81	22	壺	C土坑11	3層18-1	層土	2		2	珠洲	15前半	—	(12.7)	—	胴	古洲Ⅴ期
b82	22	壺		4層17-2他先	Ⅳ	1		1	珠洲	不明	—	(4.6)	—	胴	羽福山断面
b83	22	壺		4層15-3E他先	Ⅳ	1		1	五所川原	10中葉～後葉	—	(5.6)	—	肩～胴	藤原重1a?期,羽福山断面
b84	22	壺		D14-1	V1	1		1	五所川原	10_{C4}	46.0	(8.0)	—	口縁	器部直い斜沈線文を横位沈線が上下で挟む,藤原壺Ⅱ類（BD16号d2）
b85	22	壺・壷	D土坑12	D14-1	層土	1		7	肥前	16末～17前葉	—	(9.6)	—	胴	同心円タタキ,赤褐色鉄釉,肥前Ⅰ～Ⅱ期
					Ⅲ	2									
					盛1	1	1								
					盛2	1	1								
b86	23	壺		B90	Ⅱ	3		3	肥前	17中葉	32.0	(8.5)	—	口縁	被熱

表V-12 掲載陶器一覧（3）

掲載番号	図番号（V-）	器種	遺構名	発掘区	層位	破片点数			製作地	年代（C）	大きさ（cm）			残存部位	備考
						接合	非接合	計			口径	器高	底径		
b87-a	23	壺・甕	3号1	D14-1	埋土	1	7	8	肥前	17中葉～	—	—	—	頸・胴	格子目タタキ，鐵状突帯，波熱，焼歪と伴出
b87-b						1		1							
b87-c						1		1							
b88	23	壺		D14-1	第2(標G6より下)	1		1	丹波	17以前?	16.0	(2.9)	—	口縁	自然釉
b89	23	壺		B89	Ⅱ	5		5	北九州	19中葉	17.7	(13.8)	—	口縁～胴	内面口縁～外面光沢のある褐色鉄釉
b90	24	壺	D火事場整理穴1	6期12	埋土	1		1	丹波	19	30.0	(6.3)	—	口縁	口縁波輪，体面褐色鉄釉上に黒色鉄釉流し掛け
b91	24	壺	D火事場整理穴1	6期12	埋土	28	1	29	石見	19?	7.0	11.6	9.4	口縁～底	割付け，内外面に鉄釉，波熱，b96と同じ胎土
b92	24	壺		B88	Ⅱ	18		18	肥前	17前葉～中葉	13.2	17.7	8.2	口縁～底	割付け，内外面鉄釉掛け
b93-a	24	壺		2期町道微津ヶ丘線	Ⅲ火災面	2	8	11	肥前	17後半	—	(7.9)	—	口縁・胴	内面格子目タタキ，外面黒褐色鉄釉，出土写真あり，肥前畳間以降
b93-b						1									
b94	24	壺	B堀込1	B89	埋土	24	2	51	肥前	17後半	12.0	17.2	11.0	口縁～底	内面格子目タタキ，外面沈線
				B89	Ⅱ	3									
					Ⅲ	22									
b95	24	壺	B堀込1	B89	埋土	13	5	43	肥前	17後半	12.4	17.8	11.0	口縁～底	内面格子目タタキ，外面沈線
				B89	Ⅲ	16	9								
b96	24	壺	B堀込1	B89	埋土	27	8	36	肥前	17後半～18	—	(19.3)	13.6	胴～底	内面格子目タタキ，褐色鉄釉
				B89	Ⅱ		1								
b97	24	壺	B堀込1	B89	埋土	1		9	肥前	17後葉～18前葉	8.6	15.7	7.2	口縁～底	内面口縁上沃熱，外面全体に鉄釉掛け，土沃熱の上から外面上半分鉄釉流し掛け
				B89	Ⅱ	8									
b98	24	壺	D火事場整理穴1	6期12	埋土	14	8	22	石見	19?	20.5	18.5	—	口縁～胴	内外面褐色鉄の上から黒色鉄釉流し掛け，波熱，91と同じ胎土
b99	25	壺	E堀込1	E11-6	埋土	47	18	72	信楽	17後半～18前葉	—	(22.1)	13.4	胴～底	鶯白茶釜，外面沃熱，波熱
				E10-5	Ⅲ	2	4								
					撹乱	1									
b100	25	壺	D火事場整理穴1	6期12	埋土	3	5	8	信楽	18	13.6	(18.5)	16.0	口縁・肩～底	外面沃熱
b101	25	壺		B90	Ⅱ	47	13	60	肥前	17後半	21.2	26.3	15.4	口縁～底	内面格子目タタキ，外面黒褐色鉄釉，沈線
b102	25	壺		E10-5	Ⅱ	6		17	肥前	18～19	—	(26.0)	22.0	胴～底	内面格子目タタキ，内外面褐色鉄釉，外面褐色鉄釉の上から黒色鉄釉流し掛け，出土写真あり
					撹乱	11									
b103	26	片口鉢	B堀込28	D14-1	埋土	1		1	肥前	17中葉～末	12.0	(5.4)	—	口縁～胴	オリーブ色沃熱，肥前畳期
b104	26	香炉	B堀込1	B89	埋土	2		8	肥前	17後半	15.0	6.7	6.4	完形	縦え複数個体あり，別高台，口縁内外のみ銅緑釉，他は無釉，波熱
				B89	Ⅱ	3									
					Ⅲ	3									
b105	26	香炉	B堀込1	B89	埋土	3		11	肥前	17後半	14.4	5.9	6.2	口縁～底	縦え複数個体あり，別高台，口縁内外のみ銅緑釉，他は無釉，波熱
				B89	Ⅱ	8									
b106	26	水注		B88	Ⅰ	3	1	6	関西系?	19	8.4	8.8	5.6	口縁～底	把手欠失，茶褐色鉄釉
					Ⅱ		2								
b107	26	土瓶		B85-3	Ⅱ	2	8	11	肥前?	19	6.4	(4.2)	—	口縁	銅緑釉
				B86	Ⅱ		1								
b108	26	瓶		B90	Ⅱ	12	5	17	肥前	17後半	4.0	(27.2)	10.0	口縁～底	沈線，波熱
b109	26	徳利		D14-1	Ⅳ	5	1	6	石見	19中葉	—	(8.0)	—	胴	外面褐色鉄釉の上から黒色鉄釉流し掛け
b110	26	徳利		B90	Ⅱ	8		8	不明	不明	—	(10.8)	—	頸～胴	外面鉄釉，波熱
b111	26	橋木鉢		B89	Ⅱ	1		1	瀬戸・美濃	18末～19中葉	—	8.3	21.4	底	底中央の孔の周囲に小孔複数，外面透明釉
b112	27	灯明皿		B90	Ⅱ	2		2	備前	17末～18	11.4	2.0	4.0	口縁～底	波熱
b113	27	灯明皿	B堀込28	D14-1	埋土	2		2	京・信楽	明治(19後葉)	11.6	2.8	4.6	口縁～底	透明釉，焦げ底
b114	27	土鍋蓋		6期12	Ⅱ	13		13	不明	不明	15.4	(3.7)	—	摘まみ部欠失	波状沈線文
b115	27	行平鍋蓋		6期12	Ⅱ	14	1	15	不明	不明	16.0	(3.4)	—	摘まみ部欠失	瓦面用途とイッチン
b116	27	土瓶(蓋)		B88	Ⅱ	1		1	益子	明治(19後葉)	10.9	4.4	8.2	完形(蓋のみ)	カエルのつまみ，白化粧土，山水図(鉄絵，緑釉)

表V-13　掲載瓦・土器・土製品・人形ほか一覧（1）

掲載番号	図番号（V-）	器種	胎土	遺構名	発掘区	層位	破片点数			製作地	年代（C）・時期	大きさ（cm）			残存部位	備考
							接合	非接合	計			口径（長さ）	器高（径）	底径（穴径）		
c1	28	かわらけ	土		B88	Ⅰ	1		1	不明	中世	10.0	(1.9)	—	口縁	手づくね、外面口縁ヨコナデ、内面ヨコナデ、いわゆる「しろ焼」
c2	28	かわらけ	土		B89	Ⅱ	1		1	不明	中世	10.0	(2.0)	—	口縁	口縁端つまみ上げ、内面ナデ上げ、外面ヨコナデ、いわゆる「あか焼」
c3	28	灯明皿	土		B89	Ⅱ	3		3	不明	近世	10.0	2.3	4.0	口縁～底	灯明痕がつく、回転糸切痕、内外面回転ナデ
c4	28	灯明皿	土		D14-1	覆2	3		3	在地?	近世	11.4	1.8	5.6	口縁～底	内側に突起、低火度釉、内外面回転ナデ、見込と外底面に沈線
c5	28	袋物?	土	D掘込1	D13	覆上下	1		1	不明	近世	—	(1.8)	—	胴～底	低火度釉
c6-a c6-b	28	壁炉?	瑞沢焼	瑞器片集中	D15-2	Ⅳ上	6 3	2	11	不明	17?	(13.0)	(13.0) (幅)	(5.0) (厚)		筒形、火災痕で藤州窯跡と併出
c7	28	壁炉	土	D火事場整理穴1	6期12	覆上	1	32	33		不明	25.0	(7.5)	—	口縁	表に刻みあり、剥がれあり、内面刷毛目、突起1
c8	28	サナ	土		6期12	Ⅱ	2		2	不明	不明	13.0	(1.2)	—		七尾、被熱
c9	28	七尾	土		B89	Ⅱ	1		1	不明	近代?	—	10.1	—	脚～底口	
c10	29	火鉢	瓦質		B89	Ⅱ	1		1	不明	不明	31.0	(5.7)	—	口縁	ベンガラ
c11	29	火鉢?	瓦質	B掘込2	B96	Ⅱ	1		2	不明	不明	24.2	(10.4)	—	口縁～胴	風炉?押型文、花菱と菓
					B96	覆上	1									
c12	29	火鉢	瓦質		B89	Ⅱ	1		1	不明	不明	31.0	(6.6)	—	口縁	内面櫛目、海あぶり
c13	29	火鉢	瓦質		B89	Ⅱ	1		1	不明	不明	34.0	(6.1)	—	口縁	外面に突起、海あぶり
c14	29	火鉢	瓦質		D14-1	Ⅳ上火災面	1		1	不明	不明	(6.1)	(10.7) (幅)	(4.1) (厚)	脚	風炉?
c15	29	桃瓦	陶	B掘込1	B89	覆上	1		1	不明	不明	9.4	(2.5)	—		軒瓦、三つ巴文様、鉄釉
c16	29	切凧瓦	陶		B89	Ⅱ	1		1	越前?	18～19?	18.0	19.4 (幅)	6.7 (厚)		三巴、唐草文、全面鉄釉
c17	29	面戸瓦	瓦質		D15-2	Ⅱ	1		1	不明	19～	(7.5)	4.5	3.1		
c18	30	平瓦	瓦質		6期12	Ⅱ	1		4	不明?	不明	25.6	22.4	2.6		鉄泥がけ、裏面に縦横の刷毛目、西トレンチⅡローム下白粘土、出土写真あり
c19	30	平瓦	瓦質		B88	Ⅰ	2		4	不明	不明	29.8	30.5 (幅)	2.4 (厚)		釘片残存、両面ナデ
						Ⅱ	2									
c20	31	平瓦	瓦質	D火事場整理穴1	6期12	覆上	2		2	不明	不明	30.4	19.1 (幅)	2.3 (厚)		ナデの後、表面四隅刷毛目、裏面波状・直の刷毛目
c21	31	管状上錘	土	D掘込20	D14-1	覆上上位	1		1	不明	不明	(2.9)	—	—	破片	
c22	31	管状上錘	土		B86	Ⅱ	1		1	不明	不明	4.1	3.3	1.4		
c23	31	管状上錘	土		B96	Ⅱ	1		1	不明	不明	4.2	3.3	1.4	欠け	
c24	31	管状上錘	土		B90	Ⅱ	1		1	不明	不明	4.7	2.8	0.9		
c25	31	管状上錘	陶		C19-1	Ⅳ	1		1	不明	不明	4.8	2.5	0.9		
c26	31	管状上錘	土	D掘込20	D14-1	覆上上位	1		1	不明	不明	6.0	(4.9)	(2.0)	半損	
c27	31	管状上錘	土	木製品集中	D13	Ⅳ	1		2	不明	不明	(8.2)	3.9	1.8	一端欠け	黒鉛
					D13	Ⅳ	1									
c28	31	管状上錘	土		B86	Ⅱ	1		1	不明	不明	(9.0)	3.8	1.4	両端欠け	
c29	31	管状上錘	土		D13	Ⅳ	1		1	不明	不明	(8.6)	4.5	1.6	一端欠け	出土写真あり
c30	31	管状上錘	土	D掘込5	D13	覆上	1		1	不明	不明	(8.7)	4.5	1.5	両端欠け	
c31	32	人形	土		B89	Ⅱ	1		1	京都	19?	7.6	3.7 (幅)	2.2 (厚)	ほぼ完形	型作、西行?胴に鎖
c32	32	人形	土	B掘込1	B89	覆上	1		1	京都	19?	4.3	3.4 (幅)	1.3 (厚)	ほぼ完形	型作、拾大
c33	32	人形	土	D火事場整理穴1	6期12	覆上	1		1	京都	19?	6.2	4.0	2.6	ほぼ完形	拾大、台は中空
c34	32	飯事道具	土	D掘込1	D13	覆上	1		1	京都?	19?	2.0	1.0	1.1	完形	ミニチュア鍋、梅花印
c35	32	飯事道具	土		B88	Ⅱ	1		1	京都?	19?	3.2	2.4	1.9	完形	ミニチュア壺、回転糸切痕
c36	32	遊具	土	B掘込1	B89	覆上	1		1	不明	19?	3.6	1.4	—	欠け	独楽
c37	32	遊具	土	B掘込1	B89	覆上	1		1	不明	19?	5.2	(2.9)	—	半損	土鈴
c38	32	遊具	土		B96	Ⅲ	1		1	不明	不明	2.2	2.2	2.2	完形	土玉
c39	32	泉道具	陶		B88	Ⅱ	1		1	不明	不明	4.3	1.1 (穴径)	1.8 (厚)	完形	輪ドナ?

表V-14　掲載瓦・土器・土製品・人形ほか一覧（2）

掲載番号	図番号（V-）	器種	胎土	遺構名	発掘区	層位	破片点数			製作地	年代（C）・時期	大きさ（cm）			残存部位	備考
							接合	非接合	計			口径（長さ）	器高（径）	底径（穴径）		
c40	32	悪山・深鉢	上		BS5-2	Ⅱ	1		1		悪山式期	—	—	—	筋～胴	沈線
c41	32	悪山・深鉢	上		D14-1	Ⅴ	1		1		悪山式期	—	—	—	筋	沈線
c42	32	悪山・深鉢	上		B87	Ⅱ	1		1		悪山式期	—	—	—	胴	縦帯縄文のあとナデ
c43	32	縄文・坏	上	D掘込1	D13	覆土下層	1		1		8期半	—	—	—	口～体	外面ヨコミガキ,胸部背針,宇田川早期
c44	32	縄文・深鉢	上		D14-1	地山砂礫	1		1		8後半	—	—	—	筋	丸棒による沈線,内面ヨコハケ→ヨコミガキ,外面ヨコミガキ→タテミガキ,炭化物付着,宇田川前期
c45-a c45-b	32	縄文・坏	上		C19	Ⅵ	2 2		4		8後半 ～9前半	—	—	—	口縁～底	回転ナデ,宇田川前～中期前半
c46	33	縄文・深鉢	上		D13	地山砂礫	3		3		9前半	—	—	—	胴下半	内面ヨコハケ,外面タテハケ,炭化物付着,宇田川中期,出土写真あり
c47	33	縄文・深鉢	上	D掘込5	D13	覆土	3		3		9前半	—	—	—	口縁～胴	波状沈線,口縁内面ヨコハケ,胴部内面斜めハケ,胴部外面ヨコハケ,炭化物付着,宇田川中期
c48	33	縄文・深鉢	上	D掘込5	D13	覆土	1		1		9前半	—	—	—	筋～胴	筋部内面ヨコハケ,胴部内面タテハケ→ヨコミガキ,筋部外面ヨコナデ,胴部外面タテハケ,炭化物付着,宇田川中期
c49	33	縄文・深鉢	上		D13	地山砂礫	1		1		9前半	—	—	—	筋～胴	内面筋～胴部ヨコハケ→ヨコミガキ,筋部外面ヨコナデ,胴部外面タテハケ,炭化物付着,宇田川中期
c50	33	縄文・深鉢	上		4期15-39地先	Ⅲ	1		1		11前葉	—	—	—	口縁	内外面ヨコナデ,宇田川中期後半,田福山街道
c51	33	縄文・深鉢	上		B89	Ⅱ	1		1		9前半	—	—	—	口縁	波状沈線,内外面ヨコナデ,宇田川中期
c52	33	縄文・深鉢	上		B90	Ⅱ	1		1		9前半	—	—	—	口縁	波状沈線,内外面ヨコナデ,宇田川中期
c53	33	縄文・不明	上		D14-1	Ⅲ	1		1		9前半	—	—	—	口縁	内面ナデ,外面タテミガキ,宇田川中期
c54	33	縄文・深鉢	上	D掘込5	D13	覆土	1		1		9前半	—	—	—	筋～胴	内面ヨコハケ→ヨコミガキ,外面筋部ヨコナデ,外面胴部タテハケ,炭化物付着,宇田川中期
c55	33	縄文・深鉢	上		B89	Ⅱ	1		1		10前半	—	—	—	底	再利用,炭化物付着,宇田川後期
c56	33	縄文・深鉢	上		4期15-39地先	Ⅲ	1		1		10前半	—	—	—	底	胸納骨針,内面～内底ナデ,外面タテハケ→タテミガキ,外面底ナデ,田福山街道

表V-15　産地・層位別 陶磁器点数

産地など ＼ 層位		中国					計	瀬戸・美濃						肥前							珠洲			越前			総計
		青磁		白磁	染付			陶器					計	陶器			磁器		計		陶器		計	陶器		計	
		碗	皿	皿	碗	皿		天目碗	碗	皿	盤	擂鉢		碗	皿	擂鉢	瓶・壺	碗	皿		擂鉢	瓶・壺		擂鉢	瓶・壺		
包含層	Ⅲ	23	15	47	79	72	236	9	14	41	1	2	67	27	134	25	151	350	223	910	1	1	2	17	6	23	1,238
	Ⅳ	29	17	84	34	34	198	21	1	107	2		131	2	10	1	12	23	12	60	3	3	6	22	4	26	421
	Ⅴ	6	7	50	10	7	80	5		22			27			1	1	2	5	9				12	3	15	131
	Ⅵ	2	4	1			7				2		2		2	1		21	2	26							35
	最終面										2		2			1		1	1	3	1		1				6
	合　計	60	43	182	123	113	521	35	15	170	7	2	229	29	146	29	164	397	243	1,008	5	4	9	51	13	64	1,831
遺構	Ⅲ　D掘込2B	2		1		3	6			4			4	2	1	9	4	42	11	69				1	1	2	81
	Ⅲ　D掘込3				7		7			2	1	2	5		8	4	5	56	23	96							108
	Ⅳ　D15-2銅器片集中			1	197	1	199	2					2		1					1							202
	Ⅳ　D14-1木製品集中	1		3	6	11	21	8		5			13	6	7		3	2	3	21		1	1	3		3	59
	Ⅴ～Ⅵ　D掘込5	1		5			6																				6
	合　計	4		10	210	15	239	10		11	1	2	24	8	17	13	12	100	37	187		1	1	4	1	5	456
総　計		64	43	192	333	128	760	45	15	181	8	4	253	37	163	42	176	497	280	1,195	5	5	10	55	14	69	2,287

(6) 17世紀前葉以前の陶磁器と擂鉢付着炭化物について若干の所見

Ⅱ層の総土陶磁器点数：14,043点はⅢ層：2,581の約＋5.4倍ほどあって、Ⅱ層は引き続き人間活動が大きく増えている時期である（表Ⅴ－２）。つまり「福山城下町発展期：1619年以降、下述参照」といえる。その様相は、堀内秀樹氏による広範な考察が付編Ⅰ－６に収められているので参照を乞う。

福山城の築城は1600年に始まり、1606年に完成し、1619年に大館街・寺街が福山城下へ移転された。1600～1619年は「福山城下形成期」といえる。「福山城下形成期」の遺構は、町並に従うⅢ層の礎石建物・冶金遺構がある。それ以前は遺構配置から街区の形成はうかがえないようであり、Ⅳ層の排滓などの集中・木製品集中・磁器片集中、Ⅶ層の屈葬？人骨掘込（Ⅳ－５・付編Ⅰ－12）がある。

上述の状況における陶磁器について他の福山城下町遺跡調査地点と比較する。そのための対象は、総土陶磁器破片数25,935点におけるⅠ層～最終面破片数18,863点のうち、Ⅲ層以下の破片数：18％（＝3,328/18,863点）を用い（表Ⅴ－２）、相応するⅢ層以下の海浜側遺構（D掘込２B・３・５、D15－２磁器片集中、D14－１木製品集中）を代表とした（表Ⅴ－３）。

・Ⅲ層以下の生産地組成とその変遷について

包含層について。Ⅲ層～最終面における特定産地抽出片数/Ⅲ層～最終面破片数：55％（1831/3328点）において（表Ⅴ－15上段）、Ⅲ層：68％（1238/1831点）・Ⅳ層：23％（421/1831点）・Ⅴ層：７％（131/1831点）・Ⅵ層：２％（35/1831点）・最終面：１％以下（6/1831点）となる。Ⅲ層の総土陶磁器点数（2,581点）はⅣ層（489点）の約＋5.3倍で接続する包含層間比較の最大値であり（表Ⅴ－２）、遺跡形成が本格化したのはⅢ層以降といえる。なお、Ⅴ層～最終面の肥前陶磁器は、肥前合計の４％（38/1026点）（表Ⅴ－15上段）であり、Ⅳ層以下に及ぶ掘削（Ⅱ～Ⅲ層の城下町形成・発達に関わる地業、例えば掘込１～３、土坑など）により混入した可能性が高く、Ⅱ層における古相の中国産磁器出土もその影響の結果である。

Ⅲ層の最頻出は中国染付と肥前産陶磁器である。Ⅳ層の最頻出は中国産青磁と中国白磁と美濃瀬戸産と珠洲・越前産である。Ⅲ層の主要な陶磁器は肥前産陶磁器であり、Ⅲ層の中において中国染付→肥前産磁器への遷移があった。Ⅳ層の主要な陶磁器は中国産磁器と美濃瀬戸産陶器であり、Ⅳ層の中において中国青磁・白磁→中国染付への遷移があった。Ⅴ層の主要な陶磁器は中国白磁・美濃瀬戸陶器である。Ⅵ層の組成は中国青磁・美濃瀬戸陶器である。福山城下形成初期以前の海岸部では、日本海側北部における中世後期組成が成立していた。

海浜側遺構について。D掘込２B：36％（抽出片数81/掘込２B総破片数226点、D掘込３：45％（抽出片数108/掘込３総破片数238点である（表Ⅴ－３・15）。これらはともにⅢ層帰属であるが、越前を含まないD掘込３はD掘込２Bよりも古相を呈している可能性がある。D15－２磁器片集中：94％（抽出片数202/磁器集中総破片数215点）、D14－１木製品集中：57％（抽出片数59/木製品集中総破片数104点）はともにⅣ層帰属であるが（表Ⅴ－３・15）、D15－２磁器片集中は中国染付がかなり多く、D14－１木製品集中は各種の中国産磁器と美濃瀬戸産陶器を含むことから、D15－２磁器片集中はD14－１木製品集中よりも新相を呈している。D掘込５：23％（抽出片数6/掘込５総破片数26点）はⅤ～Ⅵ層に帰属するが、中国産白磁を主体とするのでⅤ層的状況を呈している。

・Ⅲ層以下の細分組成とその変遷について

上述の傾向について生産地・細分時期を通じてより細かくみる。表Ⅴ－16は表Ⅴ－15のうち細分型式１～２単位の短い資料体を更に抽出集計した。よって表Ⅴ－16と表Ⅴ－15の数は一致しない。なお、Ⅲ層自体は前述したように肥前Ⅲ期以降の遺物を含むが、下層との連続性をみるため肥前Ⅱ期までを集計した。

包含層について。青磁は、瀬戸碗Ⅴ類と瀬戸皿Ⅵ類がⅢ層で多数を、瀬戸皿Ⅵ類がⅣ層で最多である。白磁は、福建広東D類皿がⅣ層で、景徳鎮C類皿Ⅰaが Ⅴ層で最多である。中国染付は、景徳鎮E群碗がⅢ層で最多を占め、景徳鎮B_1群皿がⅢ・Ⅳ層で多数を占め、漳州碗Ⅴa類がⅢ・Ⅳ層で最多を占める。瀬戸美濃は、丸皿大窯１・２段階がⅣ・Ⅴ層で多数を占め、志野丸皿大窯４段階後半～末がⅣ層で最多を占める。肥前は、陶器皿Ⅱ期と磁器皿Ⅱ期がⅢ層で最多を占める。珠洲は擂鉢Ⅴ期がⅣ層で、越前は擂鉢Ⅴ１・２期がⅤ・Ⅳ層で多数を占める。

各層の主要な組成は、Ⅲ層：肥前陶器皿Ⅱ期・磁器皿Ⅱ期＋染付漳州碗Ⅴa類＋染付景徳鎮E群碗＋染付景徳鎮E群皿。Ⅳ層:白磁福建広東D類皿＋青磁瀬戸皿Ⅵ類＋丸皿大窯１・２段階＋丸皿大窯３・４段階＋志野丸皿大窯４段階後半～末＋染付漳州碗Ⅴa類。Ⅴ層:白磁景徳鎮C類皿Ⅰa＋丸皿大窯１～２段階＋丸皿大窯２段階。Ⅵ層：青磁瀬戸Ⅴ類皿、例数が極めて少ないものの、白磁・中国染付・肥前・珠洲・越前が空欄であるため有意と考える。

以上より、包含層の暦年代は、Ⅲ層:17世紀1/5以降、Ⅳ層:16世紀3/3以降、Ⅴ層:15世紀3/3以降、Ⅵ層：15世紀2/2以降、の堆積と考えられる。

遺構はD15－２磁器片集中を除くと、例数が極めて少なく詳細な組成は不詳であるものの、先述した大まかな傾向（表Ⅴ－15）と齟齬はない。代表的な細分類は、D掘込２B:肥前陶器皿・碗Ⅰ～Ⅱ期、D掘込３：染付漳州碗Ⅴa類、D15－２磁器片集中：染付漳州碗Ⅴa・b類、D14－１木製品集中：天目碗大窯３段階後半、D掘込５：白磁福建広東D類皿、である。

・Ⅳ層上面の磁器集中について

分布は、低い密度で広がる東側（点取り破片数の４割）と高い密度で纏まる西側（点取り破片数の６割）で構成される。接合関係は、東側に収まる２個体、西側に収まる２個体、東西にまたがる16個体である。調査区D15－２に拡がる火災面にある遺物分布が２か所にまとまるので、被災散乱したのではなく、火災（文献史料にない火事）の後片付けによりこの遺構が形成されたと考えられる。

表面の爛れ・呉須の変色なし「被熱」：２点、表面の光沢がやや失われた「弱い被熱」：17点、未被熱：１点である。呉須が変色するまで過度に被熱した個体は見当たらないので、容器に収納された状態であったり、未被熱もあることから火事による家屋倒壊により破損した個体も加わると考えられる。

復元個体数は20個であるが、これらと接合しない底部片がある。高台や底面の厚さなどの形態、呉須の色調、釉調、被熱度合の違いにより復元個体20個と別な個体の可能性があるものに以下がある。㋑:「遺物No.165＋点取りNo.43」は別個体、㋺:「遺物No.262」は別個体または掲載a37と同一個体、㋩:「点取りNo.96」は別個体または掲載a37と同一個体、㋥：「点取りNo.70」は別個体または掲載a38と同一個体、㋭:「点取りNo.55」は別個体または掲載a41と同一個体、㋬：「点取りNo.103」は別個体または㋩と同一個体。したがって、個体数は20＋１～６個体あった可能性がある。碗の型式は、森碗Ⅴb類（森1995年分類碗F_3）は掲載a23の１個体、森碗Ⅴa類（森1995年分類碗F_1）は掲載a24～a42の19個体である。他には被熱した森大皿ⅠbまたはⅡb（掲載a142）が１片出土している。Vb：Va＝１：15という出土比でVa類が極めて多く組成する。なお出土量が多い下記①SK404におけるVbとVaの掲載比は４：１と逆である。

森碗Va・b類の編年上の位置付けは、大坂城三の丸跡出土資料群により比定され、碗Va類は豊臣後期から徳川初期（1598～1650年）にかけて出土し（森1992、森1995、鋤柄・森1999）、Vb類は1615年以降に出現するようである（森1995の表１より）。①元和８年＝1622年埋没下限である大坂城下町跡AZ87－５次調査地第４b層上面SK404は、Va（F_1・F_2）類とVb（F_3）類と肥前陶器（多量の胎土目：そのうちⅠ－２期が多い、極少量の砂目：Ⅱ期）と志野丸皿が出土した1598～1622年の遺構で

ある（大阪市文化財協会2009）。いっぽう下限の例は、②第Ⅲ遺構面および第３下層から数点のⅤa類と肥前磁器なし肥前Ⅱ期（1610～1650年）陶器（大阪市文化財協会1988）、大坂城下町跡の③OJ91－２次調査地第４層上面SK401から数点のⅤb類と④OJ92－18次調査地第４c層SK403から数点のⅤa類と極少量の肥前Ⅱ－１期（1610～1630年）砂目磁器がともに掲載されている（大阪市文化財協会2009）。①より、Ⅴ類は1598～1622年頃まで量的にあることから需要と供給があり、③④より1630年までは伝世などにより残存すると考えられる。

碗の見込みに細かい擦痕が付いている個体があるので、搬入後すぐ被熱したのではなく、使用期間がある。東側の集中からは回転糸切痕が残る肥前Ⅰ期（1580～1610年）肥前陶器皿（掲載b41）も出土した。磁器集中は、Ⅴa・b類の組成から1615年頃以降の可能性があり、①SK404の出土比より古相を示しているように思われることから、1615年以前にまずⅤa類・Ⅰ期肥前陶器皿が組成・使用され、続いてⅤb類が加わり、被災した経緯が想定できる。なおB地区Ⅱ層から蛇の目高台・口縁端部つまみ上げ肥厚・浅鉢に近い森皿H$_3$（森1995）７片出土しており、Ⅱ層の中国産磁器は攪乱による下層からの混入があるものの数量が多いので、17世紀前半までは輸入染付が遺跡に持ち込まれていたと考えられる。

①：大多数を占めるⅤa類が一度に被災していてⅤb類（１個体）も含まれていること、②：胴部に焼成前の孔（掲載a28）や胴部に胎土片溶着（掲載a30）や内側高台脇～高台内の厚さ１mm未満の「遺物No.262」（未掲載）などの不良品が含まれること、③：当該期の大坂においてもⅤb類の出土量は少ない（森1995の表１より）状況下で１点出土したということ、から漳州窯系の供給が十分にあって受容もあったということが推定される。①②③より流通過程は以下と推定される。生産地（中国）での梱包が集散地（日本・大坂？）で荷解きされ、再度組み合わされて、福山城下町に搬入されたと考えられる。

北海道における漳州窯系碗皿の出土例は以下である。松前町福山城下町遺跡では、旧唐津内町地点で碗：20点以上、小松前町地点で大皿：１片（関根2019）、旧枝崎町地点で大皿：１片（松前町教委2015）、旧蔵町地点で碗Ⅴa：２点（北埋調報290）。上ノ国市街地遺跡の掲載遺物で碗Ⅱb類：１点・１片、碗Ⅴa類：１点、碗Ⅴb類：１点、碗Ⅴ類：12点、皿Ⅲ類：１片、皿Ⅲb類：４片、大皿Ⅰ類：１片（上ノ国町教委2011・2019）。津別町ツペットウンチャシ跡の碗Ⅴa：１片（津別町教委2009）。

北海道での分布は、碗Ⅴaがかなり多く、松前地に多出するいっぽうで道東にも出土する。現時点では松前地を介しての広がりと捉え、上ノ国町勝山館内から漳州窯系碗皿が出土しないので、供給中継点は潜在的量を予想させる旧唐津内町地点の磁器集中の一括例から福山城下町遺跡と考える。

・Ⅳ層以下（大館街・寺街の福山城下への移転以前）における小松前町地点・旧蔵町地点との比較

旧唐津内町地点から、小松前町地点は福山街道を東へ約360m、旧蔵町地点は福山街道・蔵町の通りをめぐって北東へ約800m、離れた地点である。

小松前町地点では、段丘面からの客土より肥前陶磁器・瀬戸美濃・越前に混じって中国磁器が出土し、瀬戸Ⅴ類末（15世紀中葉）の青磁碗が掲載され（関根2019）、僅かに城下整備以前の人間活動が認められる。旧蔵町地点では旧河道の泥炭層・Ⅳ層から、アイヌ民族・和人の骨製・木製品、人四肢骨、瀬戸Ⅳ´類（14世紀末～15世紀初頭）の青磁碗・瀬戸美濃皿大窯２～４段階前半（15世紀中葉～16世紀末）などが出土した（北埋調報290）。旧唐津内町地点浜側D地区Ⅳ層では鉄に関わる鍛冶関連遺物集中、火災整理の磁器集中・土坑、アイヌ民族・和人の骨製・木製品が混在する木製品集中、Ⅶ層では屈葬？人骨掘込などがある。

旧唐津内町地点Ⅳ層以下と旧蔵町地点泥炭層・Ⅳ層の類似した状況は15世紀中ば～17世紀初めにあ

たる。それは「大館期：1456頃～1513年」から「徳山館期：1514～1600年」から「福山城下形成期：1600～1619年」まで、にあたる。この時期の海浜・河川では、アイヌ民族・和人が入り混じって多様な生業を展開する様相がみられ、いっぽうで葬地にもなっていた。網野善彦のいう「「無縁」の場」（網野1978）が考古学的に表れたといえる。

総土陶磁器点数はⅥ層/最終面：Ⅴ層/Ⅵ相：Ⅳ層/Ⅴ層＝1.2：3.3：2.9なので（表Ⅴ－2）、Ⅴ層で増加しⅣ層（16世紀3/3以降、ほぼ「徳山館期」の後半期）で伸びが横ばいである。交易・税徴収場所が海岸部へ固定化して人間活動が活発化したものの、街の形成が未熟であったと考えられる。

・付着炭化物から見た擂鉢の使用について

擂目が磨滅し、炭化物・おこげが底部外面・口縁部内外面に付着する擂鉢が、煮炊にも用いられたことを示している。そして、それは越前に多く（19％：15/77片）あり、珠洲（8％：1/12片）・肥前（3％：9/315片）擂鉢にはみられる、堺（0％：0/33片）擂鉢にはみられない。

まずは何を煮沸したのかということである。上ノ国町伝花沢館出土15世紀後半の珠洲擂鉢2点の付着炭化物の安定同位体C/N比は、$\delta^{13}C_{PDB}$＝－17.2/－17.4、$\delta^{15}N_{AIR}$＝13.9/13.5であり、海生魚類・海棲哺乳類である。残存脂質分析でも海生魚類・海棲哺乳類と解析された（上ノ国町2021）。これらの食材が擂鉢の煮炊で調理されていた。そして、本報告の16世紀後半以前の屈葬？人骨の右尺骨から得られた安定同位体C/N比は、$\delta^{13}C_{PDB}$＝－15.615、$\delta^{15}N_{AIR}$＝12.976であり、海生魚類・海棲哺乳類・海棲貝類を多く摂取していたと解析された（付編Ⅰ－2）。これらより食材は海棲動物が多く含まれていた。転用擂鉢で調理が行われたということは通常の煮炊でもこれら食材が使用されていた可能性を示す。

時期が判明した付着個体においては、越前Ⅴ1～2期（1490～1550年）：8点、越前Ⅴ3～Ⅵ1期（1550～1620年）：4点、肥前Ⅱ～Ⅲ期（1610～1690年）：3点、である。珠洲は時期不明であるものの出土傾向から推定される下限は15世紀末で、越前に先行・並行する事例と考えられる。そして、肥前17世期末以降、堺18世紀後半以降にはみられない。擂鉢の用途転用は、珠洲15世紀後半に始まり17世紀前葉には下火になり肥前17世期末以降には行われなくなると考えられる。煮炊に適した耐火性、擦目の磨滅が顕著な越前擂鉢に転用が多くあることは、二つの条件がそろう程度の軟質胎土によると考えられる。肥前17世期前葉以降の減衰は、より硬質の肥前の供給増と土鍋・鉄鍋などの専用煮沸具の普及が考えられる。

上ノ国町伝花沢館・勝山館跡・青森県十三湊遺跡では同様に珠洲・越前擂鉢の転用が少例みられ、擂鉢の煮炊具への転用は北日本にひろがりがみられる。正確な計数に基づく評価ではないが、当該地点における件数は発掘面積の大きい勝山館跡・十三湊遺に比べて多い印象があり、印象の原因は転用擂鉢の頻用・擂鉢自体の供給量の少なさ、とも考えられる。今後精査の必要がある。

・擂鉢付着炭化物からみた動物油脂の利用について

近世アイヌ民族例は、北海道では海獣油・鯨油や鯨油の副産物としての石焼鯨（菊池2002）があり、津軽では鮫（アブラザメ）漁による魚油生産が行われ（菊池2001）、石焼鯨を生産した可能性もあること（菊池2002）から鯨油の生産も行われていた可能性がある。また、やや遡る例として、1621年作成のデ・アンジェリスの『蝦夷國報告書』には「蝦夷人が松前に持来て売る物品は（中略）海驢〈註では蝦夷ではアシカを指してトドという〉の魚の油（後略）」後述では「海驢は油をとる」（兒玉1954）とある。くわえて、福山城下町遺跡小松前町地点出土では、17世紀第4四半期の肥前陶器皿の付着炭化物が海生哺乳類？の灯明油（関根ほか2020）と解析された。近世江戸において蝋燭よりも安価な植物油、さらに安価な魚油が照明に多用されたことと符合する。そして、江戸とは異なり海生哺

乳類が魚油の代わりに用いられたのは、当該地域の海獣漁に支持された原料選択といえる。

近世の北海道では海獣油・鯨油生産が生業としておこなわれていた。津軽では魚油生産が生業としておこなわれていて鯨油生産の可能性もある。転用擂鉢で調理された海棲哺乳類が食材として用いられる例からは、海獣油・鯨油利用が近世を遡って中世においても行われていた可能性を示唆する。

（鈴木）

表Ⅴ-16　産地・層・遺構別 細分類陶磁器点数

産地/細分類形式など	層位 III	層位 IV	層位 V	層位 VI	層位 合計	遺構 III 0層込2B	遺構 III 0層込3	遺構 IV D15-3陶器片集中	遺構 IV D14-1木製品集中	遺構 V〜VI 0層込5	遺構 合計
[illegible]	1				1			1			1
[illegible]									1		1
[illegible]	3				3						
[illegible]	1				1						
[illegible]	2	7			9				1		1
[illegible]	2	2			4						
[illegible]			2		2						
[illegible]	5	6			11						
[illegible]	2				2						
[illegible]		2			2			14			14
[illegible]	36	13	1		50		6	183	1		190
[illegible]	1				1						
[illegible]	1				1				1		1
[illegible]	2				2				3		3
[illegible]	1				1						
[illegible]	2	1	1		4						
[illegible]	1				1						
[illegible]	4		1		5						
[illegible]	5				5						
[illegible]	1				1						
[illegible]	2	1			3						
[illegible]	1	1			2						
[illegible]	1				1						
[illegible]	3	1			4	2					2
[illegible]	6	6			12						
[illegible]	2	1			3				1		1
[illegible]	8				8						
[illegible]	2				2						
[illegible]	1				1						
[illegible]			2		2						
[illegible]	1				1						
[illegible]	2	1	1		4						
[illegible]			1		1						
[illegible]						1				1	2
[illegible]	3	9	5		17					2	2
[illegible]		2			2						
[illegible]		5	1	1	7						
[illegible]		1			1						
[illegible]	5	3	14		22				2		2
[illegible]		2			2						
[illegible]	1		1	1	3						
[illegible]	9	10	3	1	23	1					1
[illegible]			2		2						
[illegible]		1		2	3						
[illegible]		2			2						
[illegible]	2				2						
[illegible]									1		1
[illegible]	3	6	1		10						
[illegible]		1			1						
[illegible]	8	4	2	1	15						
[illegible]	2	1			3						
[illegible]		1			1						
[illegible]				1	1						
[illegible]		1			1						

産地/細分類形式など	層位 III	層位 IV	層位 V	層位 VI	層位 合計	遺構 III 0層込2B	遺構 III 0層込3	遺構 IV D15-3陶器片集中	遺構 IV D14-1木製品集中	遺構 V〜VI 0層込5	遺構 合計
[illegible]											
[illegible]	4	1			5						
[illegible]	4	3	1		8						
[illegible]		2			2				1		1
[illegible]											
[illegible]		1			1				1		1
[illegible]	2	6	5		13						
[illegible]		1			1						
[illegible]		1			1						
[illegible]		2			2						
[illegible]	8				8						
[illegible]	3				3						
[illegible]	4	1			5						
[illegible]											
[illegible]	5				5	3					3
[illegible]	13	1			14						
[illegible]	5				5	3	1	1	1		6
[illegible]	1				1						
[illegible]	2	1			3	1			1		2
[illegible]	2				2						
[illegible]	1				1						
[illegible]	1				1						
[illegible]									1		1
[illegible]	1	1			2						
[illegible]	3	4			7						
[illegible]	1				1						
[illegible]	2				2						
[illegible]	5	9			14	1					1
[illegible]	1	3			4				1		1
[illegible]		1	9		10				2		2
[illegible]	1	9	8		18	1					1
[illegible]	2				2						
[illegible]		2			2						
[illegible]	1				1						
[illegible]		4			4						
[illegible]		6			6						
[illegible]		17			17						
[illegible]		1	1		2						
[illegible]	1				1						
[illegible]	3				3						
[illegible]		6	2		8			2			2
[illegible]	1				1				4		4
[illegible]									3		3
[illegible]		1			1						
総計	209	175	64	7	455	13	7	201	26	3	250

a1
a2
a3
a4
a5
a6
a7
a8
a9
a10
a11
a12
a13
a14
a15
a16
a17
a18
寿文拡大
a19
a20
0
1:3
10cm

図Ⅴ-2　磁器（1）

図V-3 磁器 (2)

a33
a34
a35
a36
a39
a37
a38
a40
a41
a42
a45
a47
a46
a43
a50
a51
a48
a49
a52
a44
0
1:3
10cm

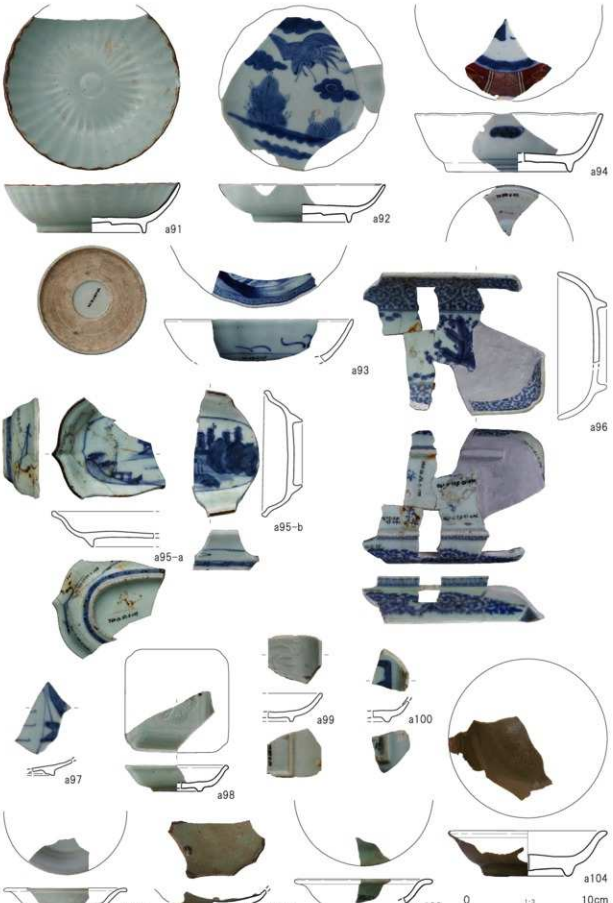
図Ⅴ-4　磁器（3）

a53
a54
a55
a56
a57
a58
a59
a60
a61
a62
a63
a64
a65
a66
a67
a68
a69
0
1:3
10cm

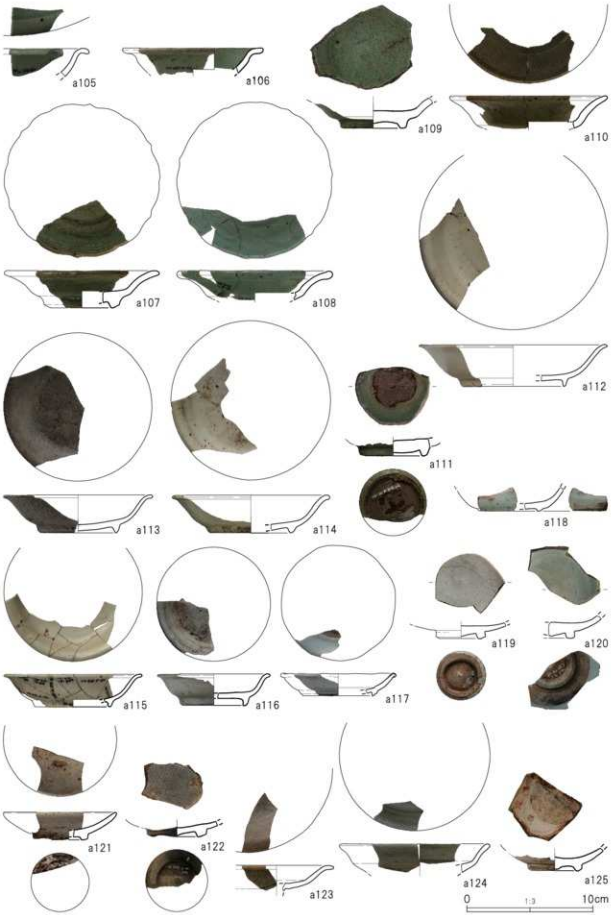
図V-5 磁器 (4)

図Ⅴ-6　磁器（5）

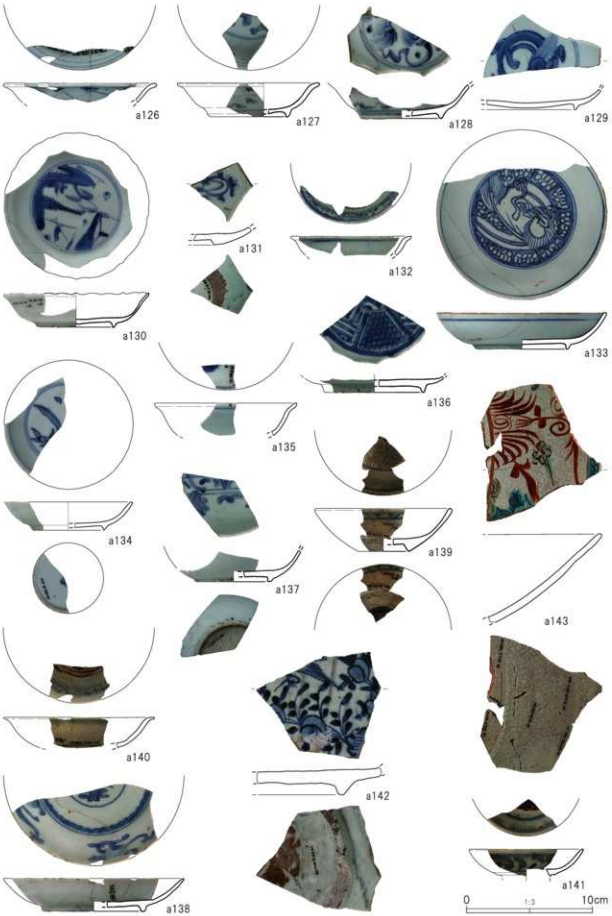
図V-7 磁器 (6)


a91
a92
a94
a93
a96
a95-a
a95-b
a97
a98
a99
a100
a101
a102
a103
a104
0
1:3
10cm

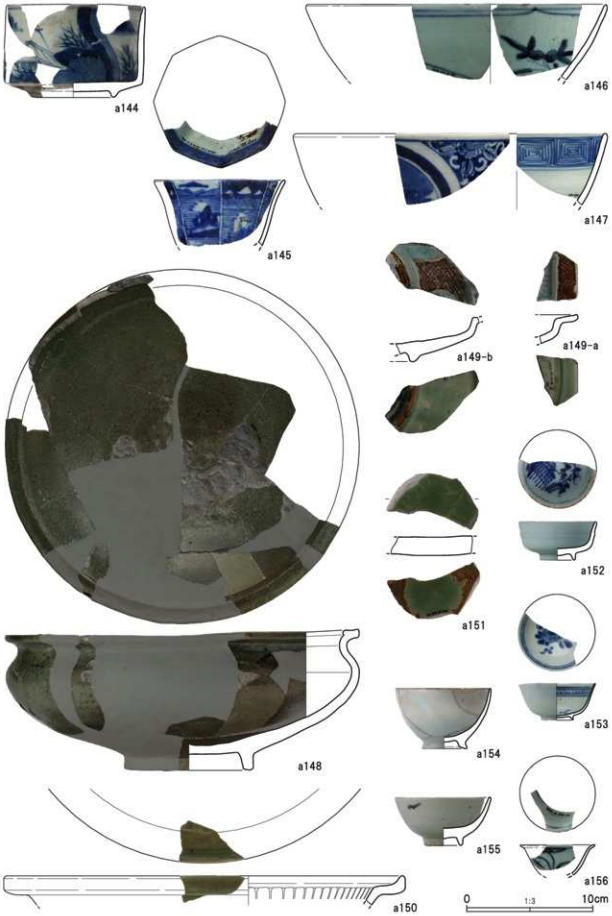
図Ⅴ-8　磁器（7）


a105
a106
a109
a110
a107
a108
a112
a111
a113
a114
a118
a119
a120
a115
a116
a117
a121
a122
a123
a124
a125
0
1:3
10cm

図V-9 磁器 (8)


a126
a127
a128
a129
a130
a131
a132
a133
a134
a135
a136
a137
a138
a139
a140
a141
a142
a143
0
1:3
10cm

図V-10　磁器（9）


a144
a145
a146
a147
a148
a149-a
a149-b
a150
a151
a152
a153
a154
a155
a156
0
1:3
10cm

図V-11 磁器 (10)

a157
a158
a159
a160
a161
a162
a163
a164
a165
a166
a167
a168
a169
a170
0
1:3
10cm

図V-12　磁器（11）

a171

a172

a173

a174

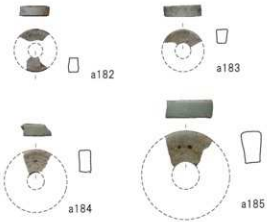
a175

a176

a177

a178

a179

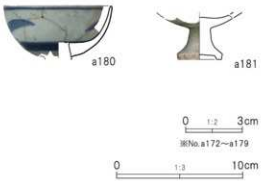


a182

a183

a184

a185



a180

a181

0 1:2 3cm

※No.a172～a179

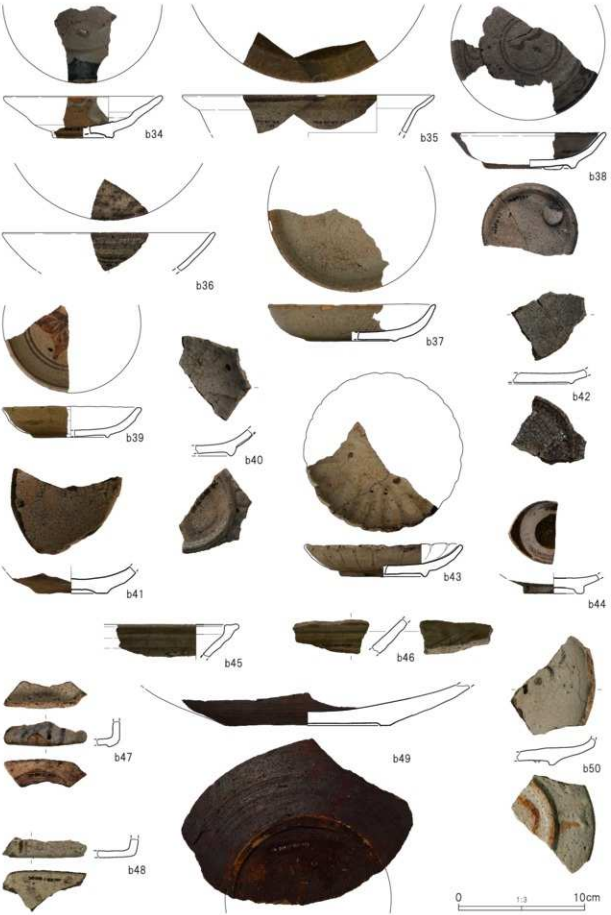
0 1:3 10cm

図V-13 磁器 (12)

図V-14　陶器（1）

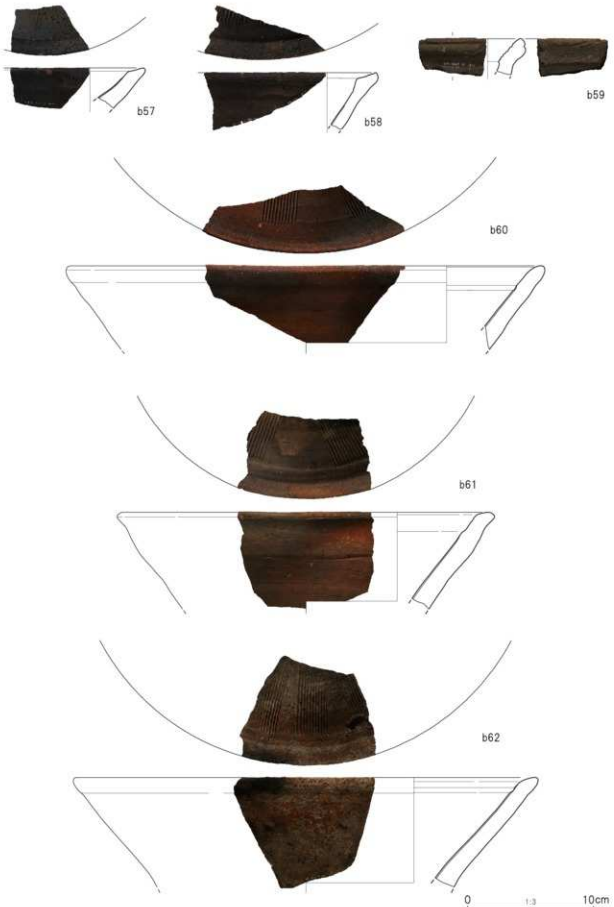
b17
b18
b19
b21
b20
b22
b23
b24
b25
b26
b28
b29
b30
b27
b31
b32
b33
0
1:3
10cm

図V-15 陶器 (2)

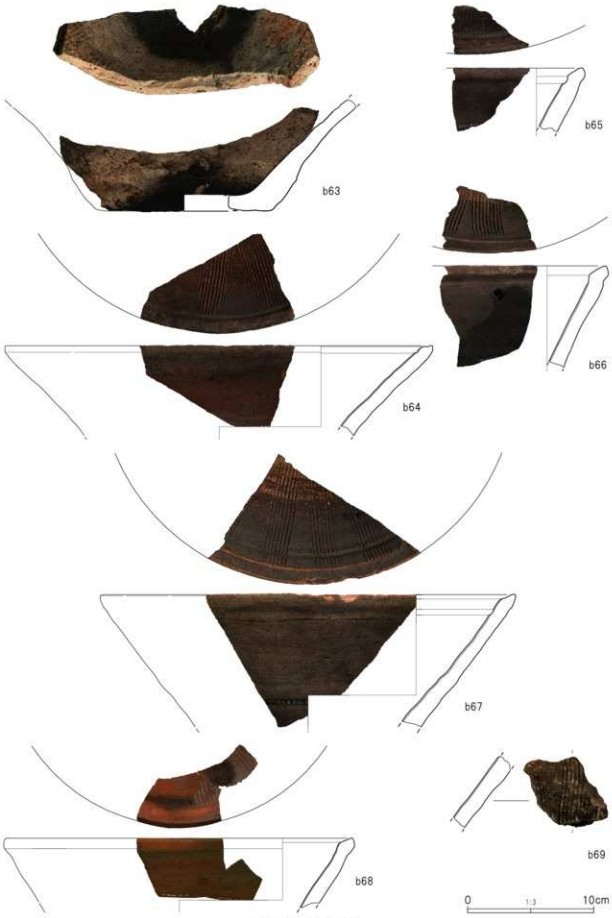

b34
b35
b38
b36
b37
b42
b39
b40
b43
b44
b41
b45
b46
b47
b49
b50
b48
0
1:3
10cm

図V-16　陶器（3）

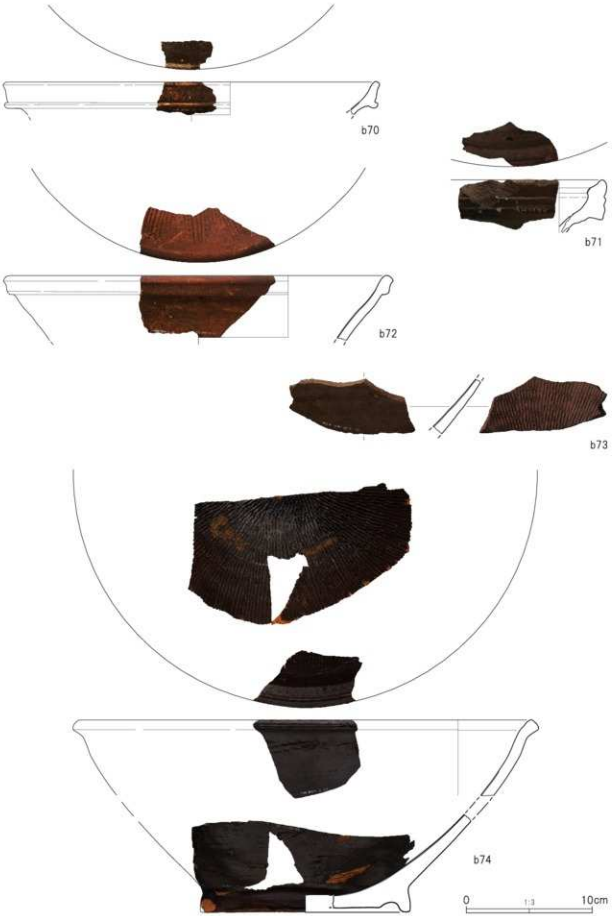
図V-17 陶器 (4)



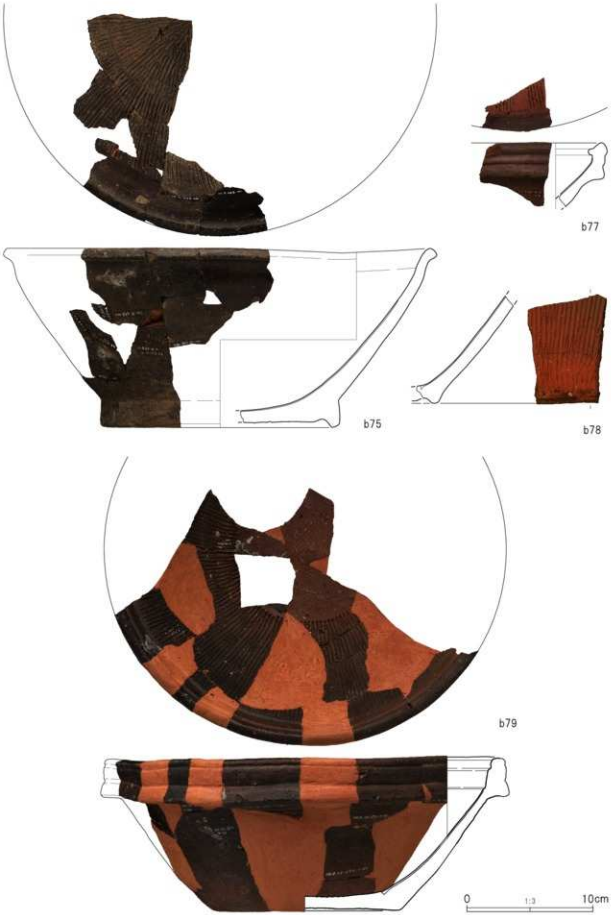
図Ⅴ-18　陶器（5）



図V-19 陶器（6）

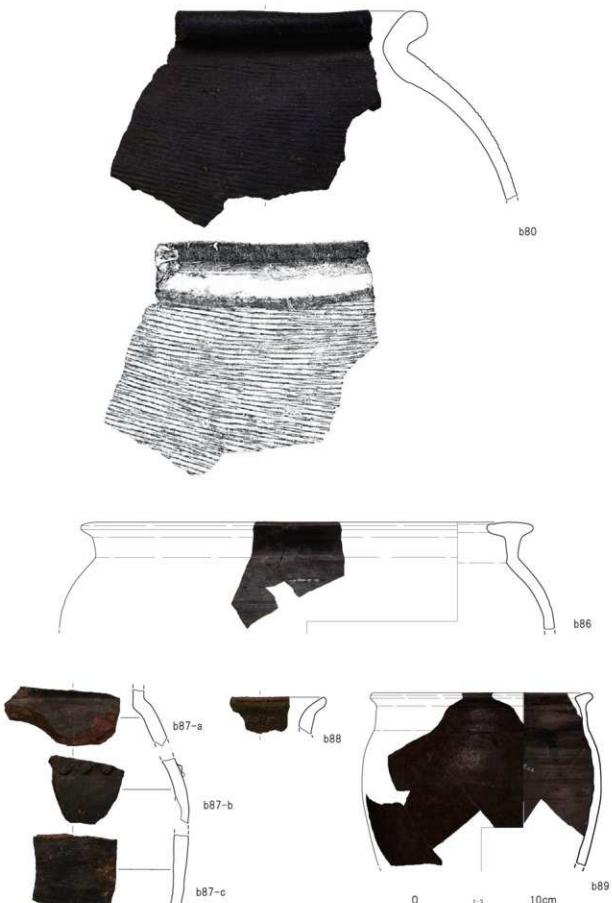


図Ⅴ-20　陶器（7）



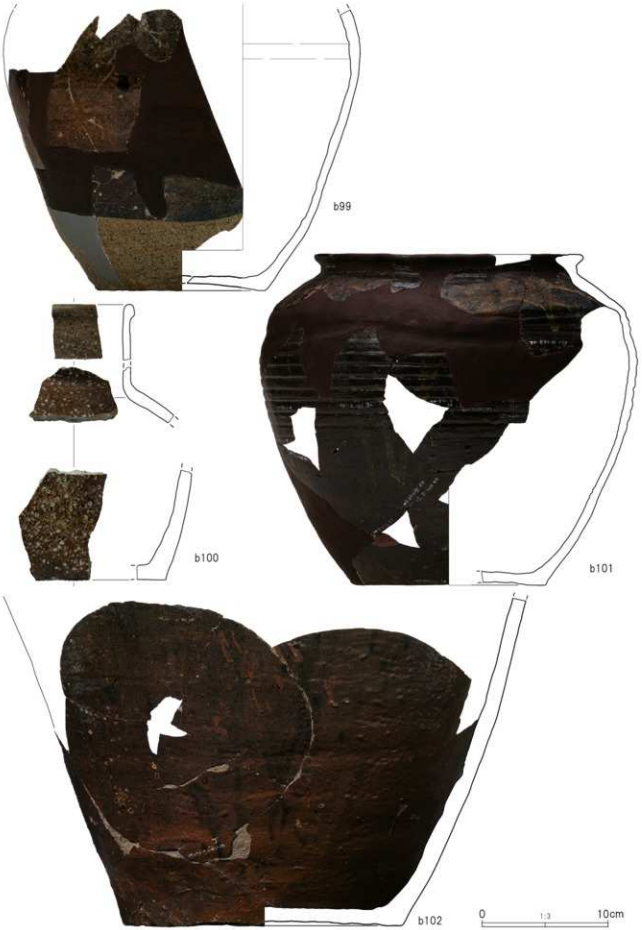
図V-21 陶器 (8)

図V-22　陶器（9）



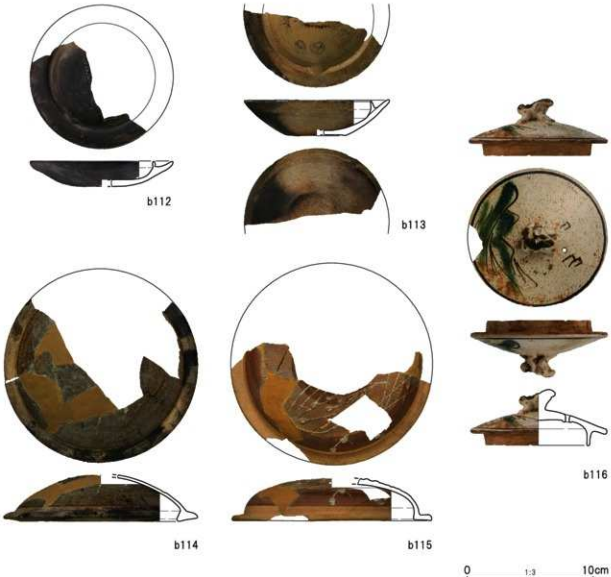
図V-23 陶器（10）

図Ⅴ-24　陶器（11）



図V-25 陶器 (12)

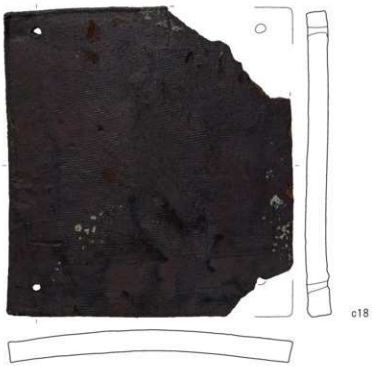
図Ⅴ-26　陶器（13）



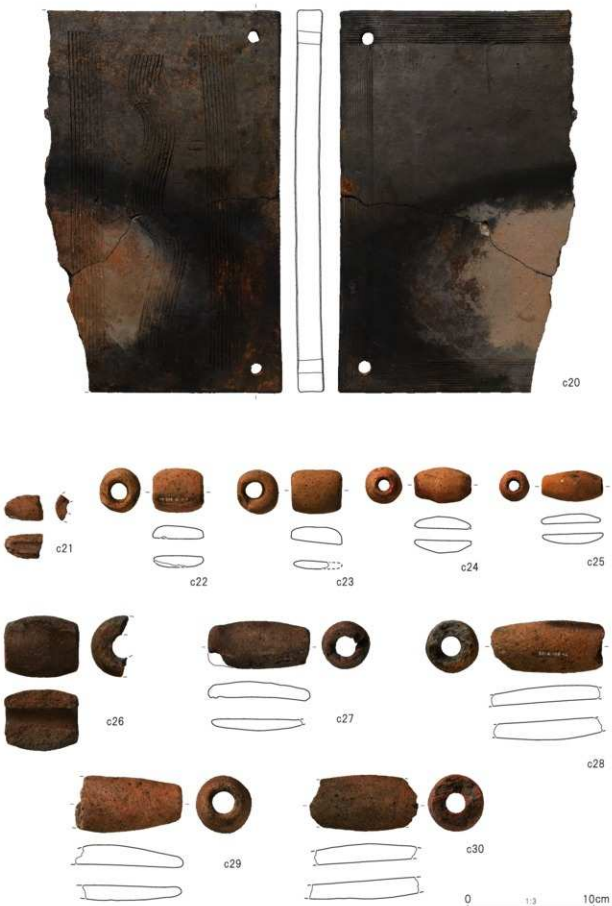
図Ⅴ-27 陶器（14）

図Ⅴ-28　瓦・土製品ほか（1）

図V-29 瓦・土製品ほか (2)

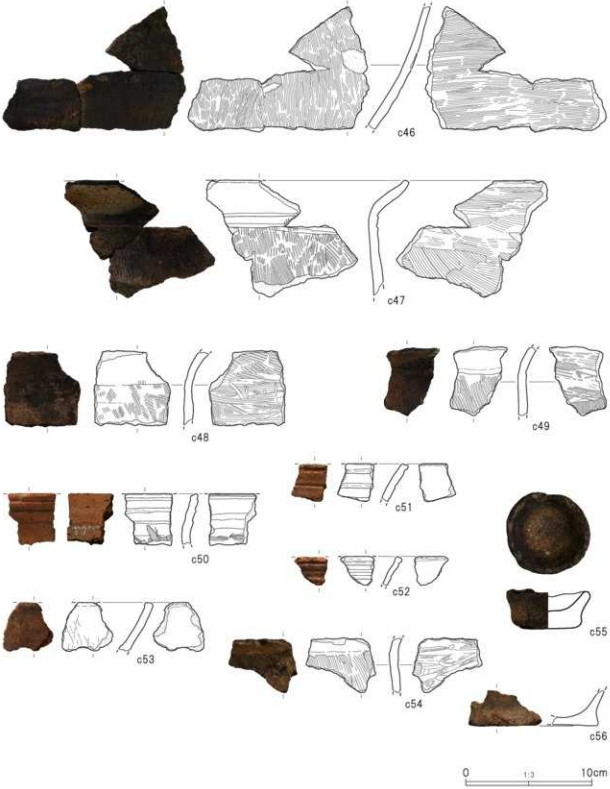


図Ⅴ-30　瓦・土製品ほか (3)



図V-31　瓦・土製品ほか（4）

図Ⅴ-32　瓦・土製品ほか（5）



図V-33 瓦・土製品ほか (6)

3　金属製品

2,603点（鉄製品1,918点、非鉄製品292点、貨幣393点）が出土している。地番・層位別の内訳は表Ⅴ－17～19のとおりである。このうち非掲載品は大分類のみにとどめている。以下、前報告（北埋調報290）の項目を踏襲し、図化遺物の詳細について記載する。なお、金属製品等の実測図（図Ⅴ－35～47・49）は、3Dスキャナ型三次元測定機（KEYENCE VLシリーズ）で作成した三次元データから図化した。

（1）鉄製品

刀類・武具類

分類は刃渡20cm以上とみられるものを刀。20cm以下を小刀とした。小刀は小野哲也の分類を用いた（小野2000）。1・2は刀。1は切先から茎まで緩やかに外反りする丸棟、平造の脇差である、腐食により判然としないが、鞘に納められた状態とみられる。鐔のみで鍔はない。X線では刃区、棟区は不明瞭。目釘は1か所のみで、茎の中心よりやや鐔側に寄った位置にある。鐔は銅製。図化面側のみにわずかに銀、金、ヒ素が認められた。2は全長不明であるが刀とした。平棟、平造で棟側に一本樋が認められる。3～7は小刀。7を除き、棟部が基軸と平行ないわゆるⅠ類に属する。3～5は小柄とみられる。3・4は茎が身幅の中央付近にある両区である。3は茎が長い。切先を欠損する。5・6は棟区がなく、棟部が茎と直線となるもの。5は刃身に木質が残る。6は残存状況が悪く、切先、棟区が不明瞭である。一部本質が残る。7は刃身が棟部側に外湾するⅡ類に属する可能性があるもの。両区は不明瞭であるが、茎とみられる部分に木質が残る。8は小札。本小札の再加工品とみられる。

生活具・工具

9・10は茶釜の蓋。鋳造である。接合しないが質感、厚みが類似しており同一個体の可能性がある。11～15は鉄鍋である。11は底部で丸湯口がつく。12は口縁部。11と溶着状態で出土。同一個体かもしれない。13～15は脚部のある破片。15は脚のみで長さ5.3cmの大型となる。16は甑。基部はやや潰れる。17は毛抜。右側を欠損する。18・19は釣針。20は用途不明。21・22は分銅。21は宝塔形。明瞭ではないが、頂突起部に水平方向の貫通孔、底部に垂直方向の貫通しない細穴がある。22は釣錘形。重さは21が200.3g、22は228.4gである。54～59は鍛造で棒状を呈する。54は屈曲する部分がある。55の断面は丸みを帯びる。56はヤスの可能性がある。57・59は図の上方の断面がやや扁平となる角棒。58は2段に屈曲し先端は巻釘状に加工される。

釘

23～53、60～66は和釘。金属遺物の中で最多である。大火による焼失により建築材に残った釘等が遺棄されたものが多いとみられる。51・62は脚部にやや不自然な変形が認められ、転用されている可能性がある。23～53は、基脚部の断面が概ね正方形を呈する「建築用和釘」。60～66が長方形を呈するいわゆる「舟釘」である。建築用、舟釘の順に推定長順に記す。1寸2分（36mm）23～25。1寸5分（45mm）26。1寸6分（48mm）27～35。2寸（60mm）36～41。2寸5分（75mm）42～44。3寸（90mm）44・45。3寸5分（105mm）47～49。4寸（120mm）50。4寸5分（135mm）51。以上48以外は、角釘の頭を鍛き巻き、頂部が平坦となる金箱文夫の分類（金箱1984）における巻頭M2にあたる。52・53は同分類の折釘C。長さは1寸6分である。舟釘は60が1寸4分。61が2寸。62～64が4寸。65が4寸4分。66が5寸4分。頭の形状は66が不明な他は全て折釘である。

鏃

67・68は平鏃。69～73は2寸5分～6寸5分までの鏃である。比較的大きな72・73は断面がやや扁平となる傾向がある。

その他

74～77は用途の不明なもの。74･75は扁平棒状な素材を用いる。74は「L」字状の扁平厚手。図の右手は欠損しているとみられる。75は緩やかな曲線を描く。76･77は薄い金属管に糸を巻き付けたもの。錆色の色調から便宜上ここに分類した。仙台城跡で規格、構造が極めて類似するものが出土している（東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2008　図54－24）。

(2) 非鉄製品

刀装具等

1は鐔、2は切羽。縁は「こきざみ」となる。3・4は鍔。素材は純銅である。3は丸形で四隅に切込があり、折り曲げられる。5は目貫。図柄は蕪。6・7は小柄、8は笄である。9の図柄も蕪とみられる。9は先端が匙状、末端は矢筈状に加工され、頸部中央には穿孔される。耳かきとしたが、簪や笄の一部の可能性がある。10は鞐である。図化面中央の一部が金色を呈する。素材となる銅の他に、金、水銀が認められた。鍍金されていたとみられる。

装身具等・その他

11は鏡の一部とした。裏面は平滑。表面は水面、樹木、岩等の庭園風の図柄が鋳出される。図左方上に小ぶりな鈕があり、出土時には繊維が残存していた。12は簪。完形であるが、折り曲げられ変形している。素材は銅を主とし、亜鉛が混じる真鍮製である。13は鈴。正面と下面に中心を避けて菊花文が刻まれている。素材は銅を主として、亜鉛、鉛が認められる。14は分銅。重さは51.9gである。対となる面に刻印がなされるが判読できない。素材は真鍮である。15は小型の容器。口縁内部に輪、対突起には穿孔がなされ、蓋がつくとみられる。16は銅環、17･18は乳金物。18には輪環がつけられる。17の素材はやや鉛の多い青銅。19･20は飾金具。19は把手状、20は八双金具。21は銅鋲である。真鍮とみられるがやや鉛が多い。22～26は用途不明。22は鳥と植物をモチーフとした抽象的な図柄の鋳造品。風鐸の舌部等が考えられるが不明である。23･24は工具の可能性がある。25･26は形状から木質の端部につけられた金具とみられる。

銅釘

27～31は銅釘。27～30は折釘、31は平鋲である。

煙管

部位名称、編年は古泉弘（古泉1983・1985）に従った。32～42は脂返が大きく湾曲する河骨形の雁首。32～34は比較的湾曲が強いもの。32･33は首部に肩がつく。32は肩部が輪状に刻まれ糸巻様に装飾される。36～42は比較的湾曲が弱いもの。37～42は首部に段差がない。37は線刻により花弁様の図柄が描かれる。43～46は脂返を欠くⅡ類Bに属する雁首。44は首部に直交する線刻が4～5mm単位で刻まれている。45は首の直線部に直交する線刻を施し、線間は刷毛目状に仕上げられている。47～56は吸口。47のみ肩が作出されるⅠ類。他はⅡ類である。54～56は線刻による文様が描かれる。54は6～7条の刻線が5単位つけられる。56は樹木状の文様が描かれる部分がある。

(3) 貨 幣

鉄銭を含め393点が出土している。寛永通宝が最も多い。

寛永通寶

分類にあたっては、川根正教の形式（川根1995・1996）に従い、特徴ある字体の名称については藤光秀雄（藤光2013）の名称を用いた。1～20はⅠ期、古寛永。21～49は新寛永。21～27はⅡ期、背に

「文」字のあるいわゆる文銭。28はⅥ～Ⅶ期、四文銭。背11波である。色調がやや赤味を帯びる。29～49はⅢ～Ⅴ期に相当する。字画ごとに特徴を記す。「寛」32～34は「寛」の見画末尾が曲がって上に延びるいわゆる「虎ノ尾寛」。37は見画の末画が内側に跳ねる「内跳寛」。「永」35･36･44･45は点が草書になる「草点永」。「通」29～45は頭が「コ」または「ユ」、46～49は「マ」となる。「寶」46～49は、貝画の５画が１画の左に出る「爪貝寶」。

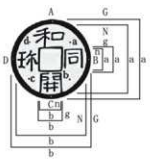
中国銭

唐銭、北宋銭、南宋銭、明銭が出土している。記載は日本出土銭総覧（兵庫埋蔵銭調査会1996）によった。50：開元通寶（初鋳621、以下同）、51：乾元重寶（758）、52：宋通元寶（960）、53･54：天禧通寶（1017）、55･56：天聖元寶（1023）、57･58：皇宗通寶（1038）、59：至和元寶（1054）、60：治平通寶（1064）、61：熙寧元寶（1068）、62～65：元豊通寶（1078）。62･63は篆書体。64は行書体。66･67：元祐通寶（1086）、66は篆書体。67は行書体。68：紹聖元寶（1094）、69･70：聖宋元寶（1101）、70は穿が多角形に加工される。71～74：洪武通寶（1368）。72･73は背に一銭。75：永楽通寶（1408）。

不明・その他

76～78は判読できないもの。全て左画が「寶」となる四字である。79は鉄銭･銅銭複数枚が連なる。80～86は無文、87～89は輪銭、87は６枚以上が溶着する。90は匙首銭、92は鉄銭。銘は不明、方孔である。91は鉛製の円盤。便宜上ここに掲載した。93は新南錦二朱銀（1824～1830）。94は帝政ロシアアレクサンドル二世治下のもの。５コペイカ1864と記されている。

（立田）



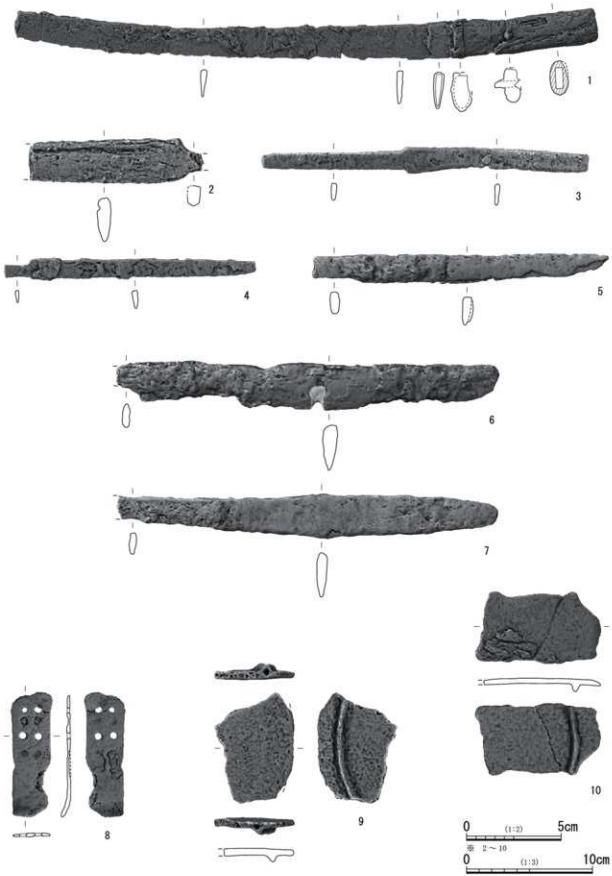
外縁外径 $G=\frac{Ga+Gb}{2}$　外縁内径 $N=\frac{Na+Nb}{2}$

内郭外径 $g=\frac{ga+gb}{2}$　内郭内径 $n=\frac{na+nb}{2}$

外縁厚 $T=\frac{A+B+C+D}{4}$　文字面厚 $t=\frac{a+b+c+d}{4}$

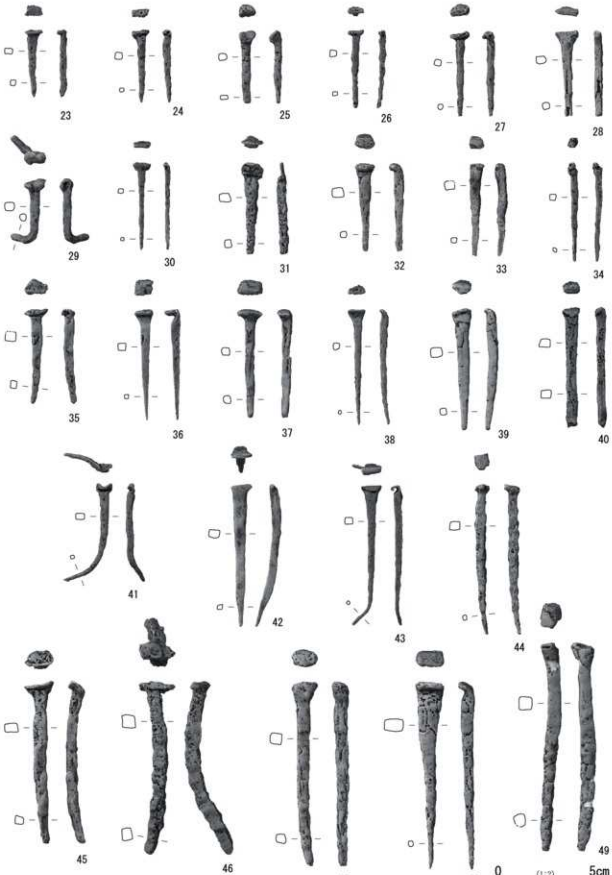
出典：奈良文化財研究所編　2010『発掘調査のてびき－整理・報告書編－』55頁　同成社

図Ⅴ-34　銭計測位置

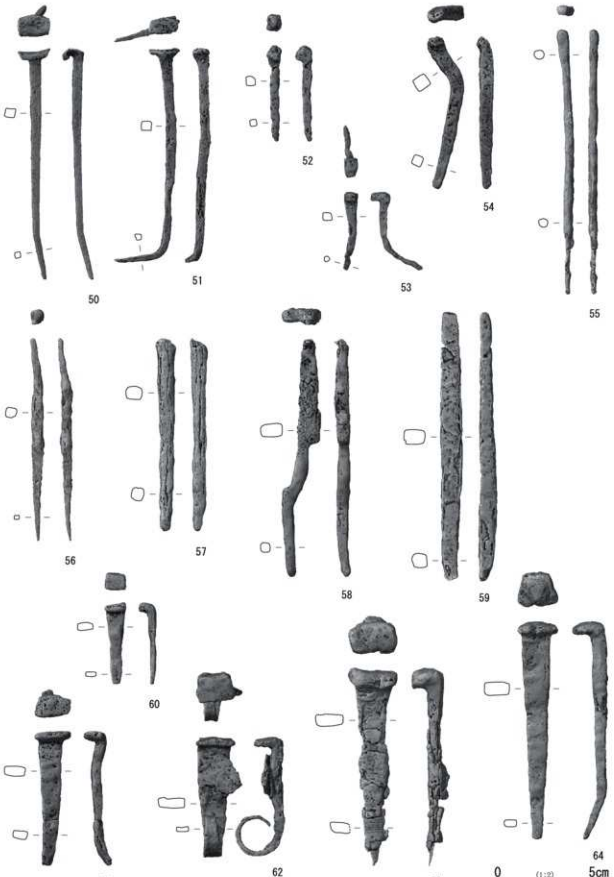


図V-35 鉄製品（1）

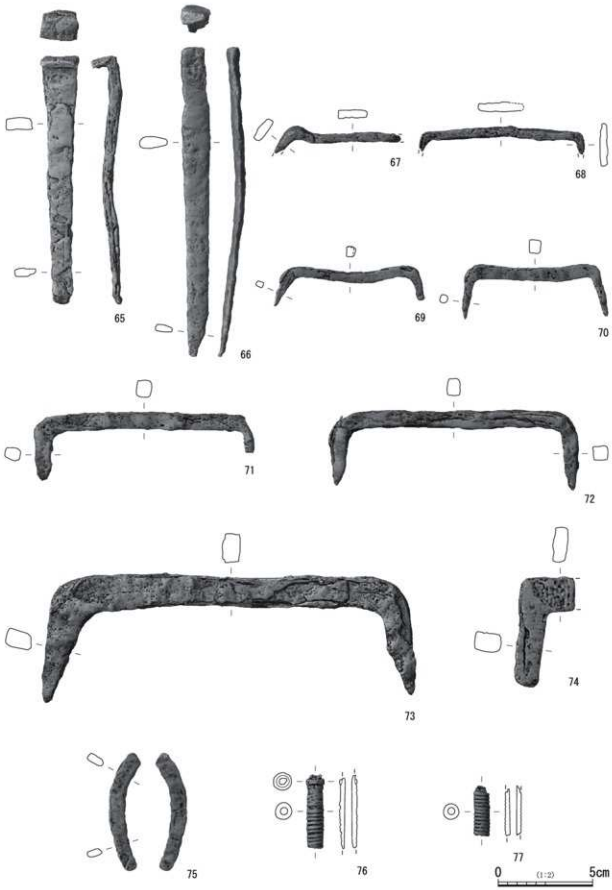
図V-36 鉄製品 (2)


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
(1:2)
5cm

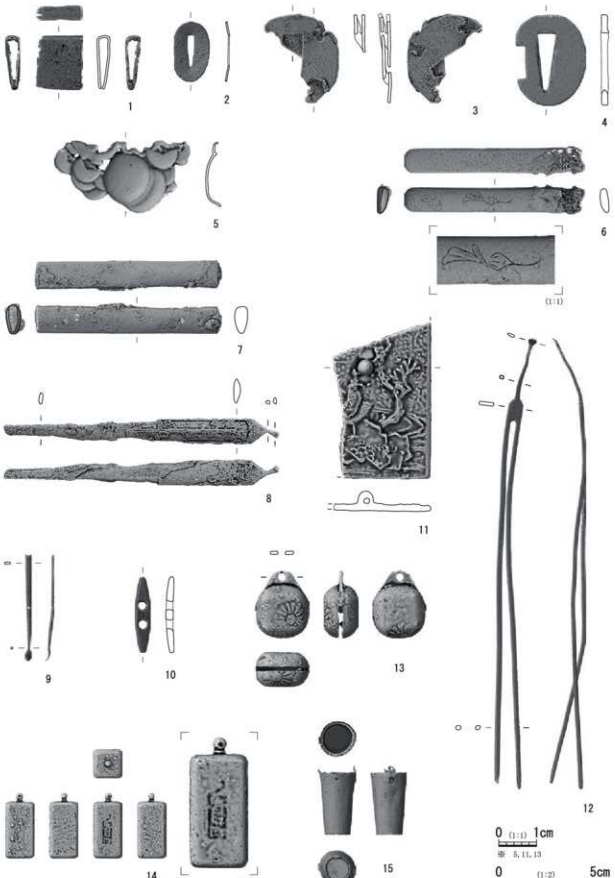
図V-37 鉄製品 (3)



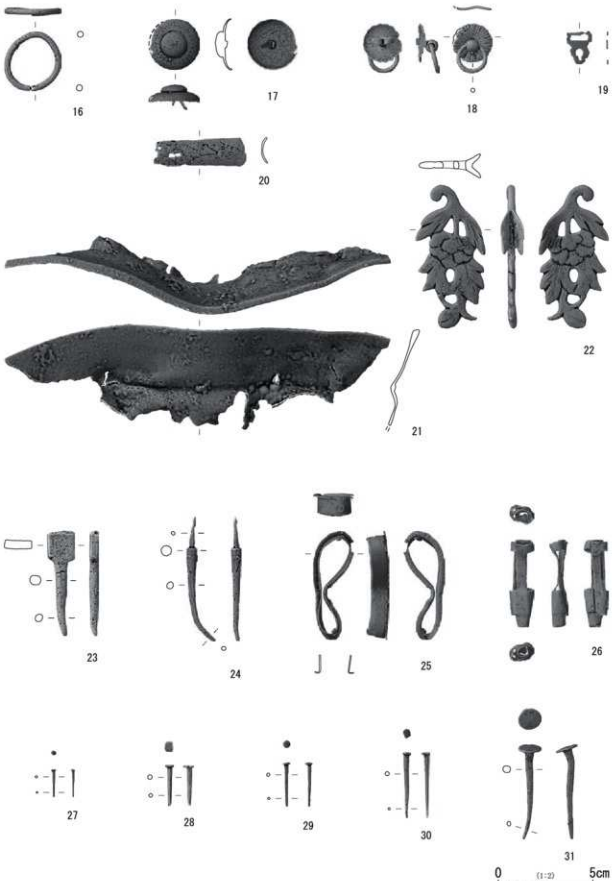
図V-38 鉄製品 (4)



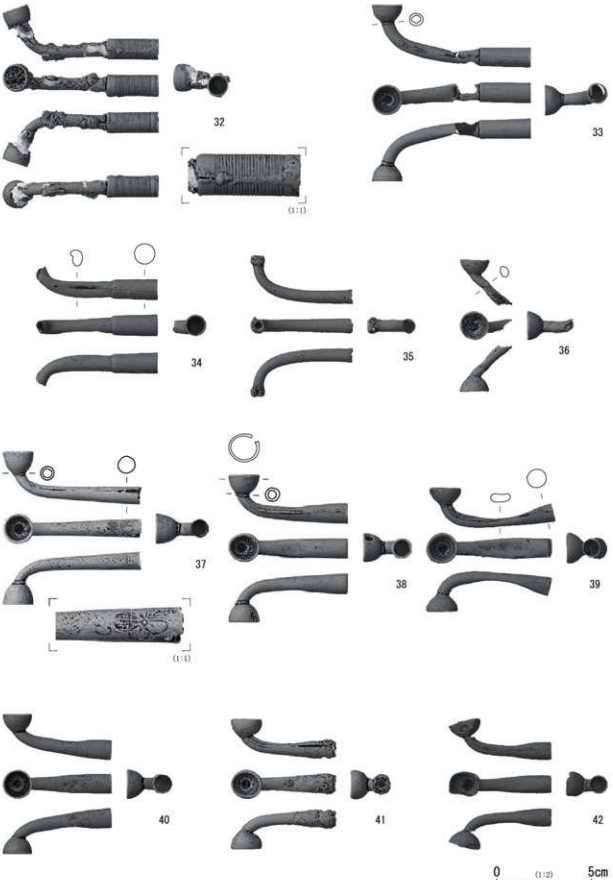
図V-39 鉄製品（5）



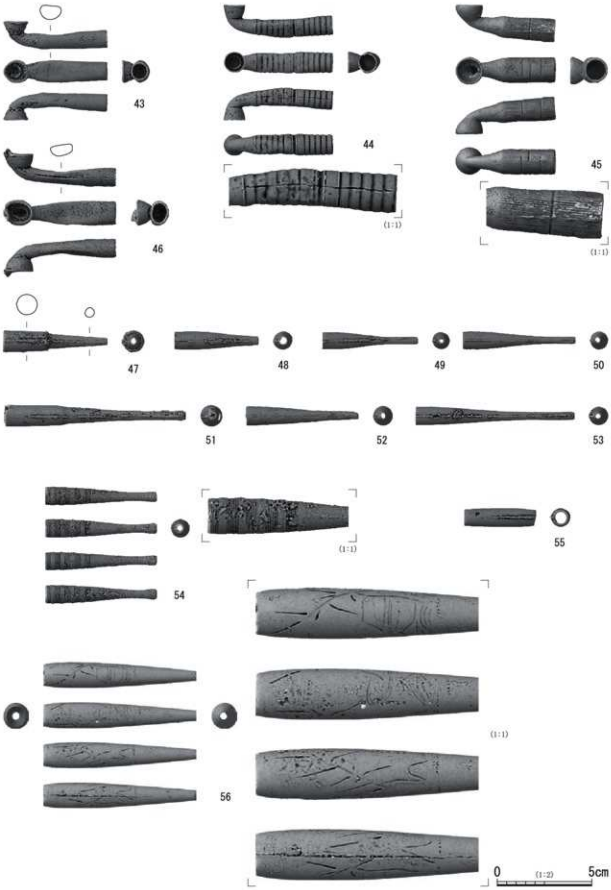
図V-40　非鉄製品（1）



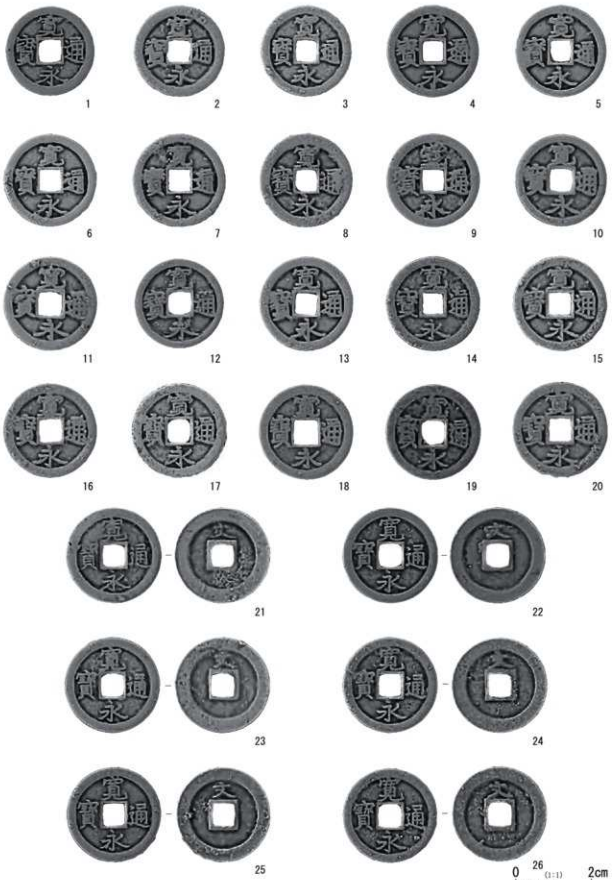
図V-41　非鉄製品（2）



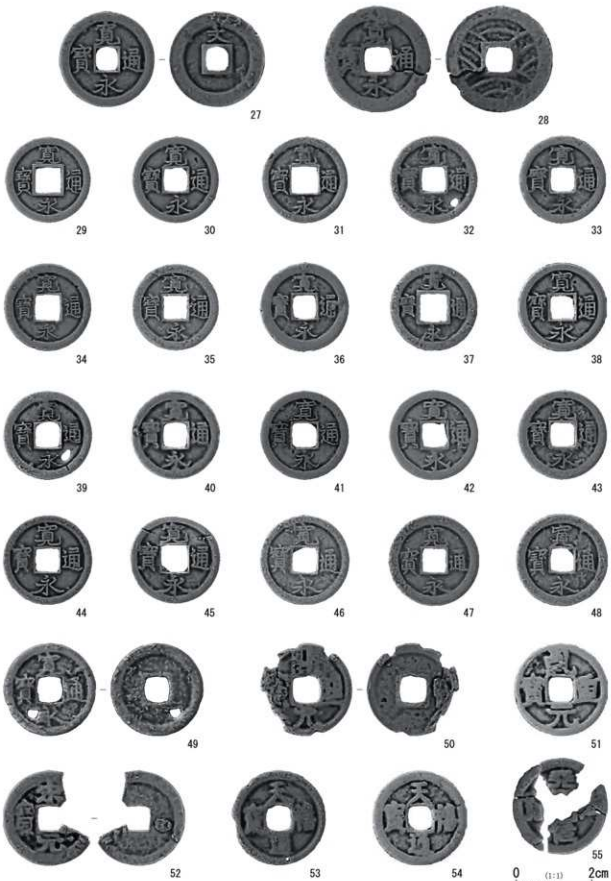
図V-42　非鉄製品（3）



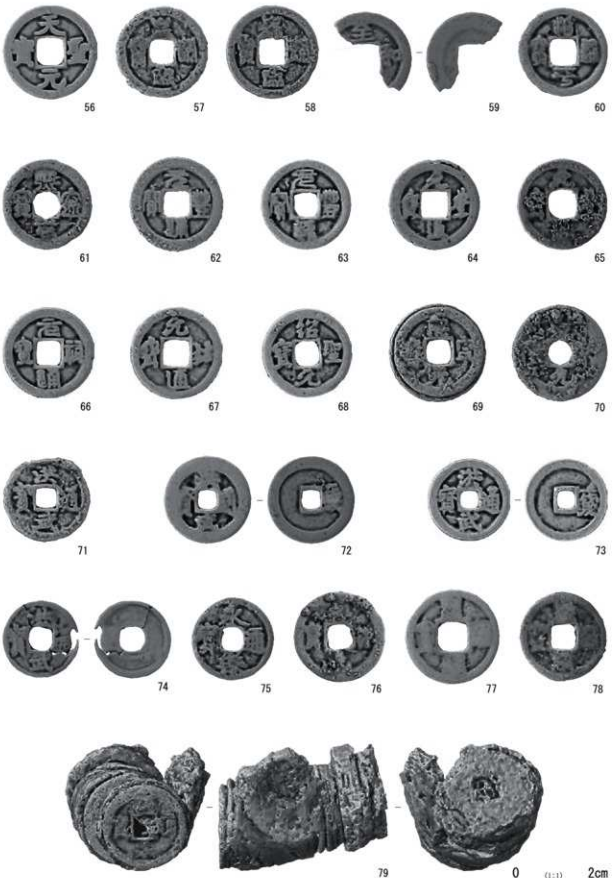
図V-43 非鉄製品（4）



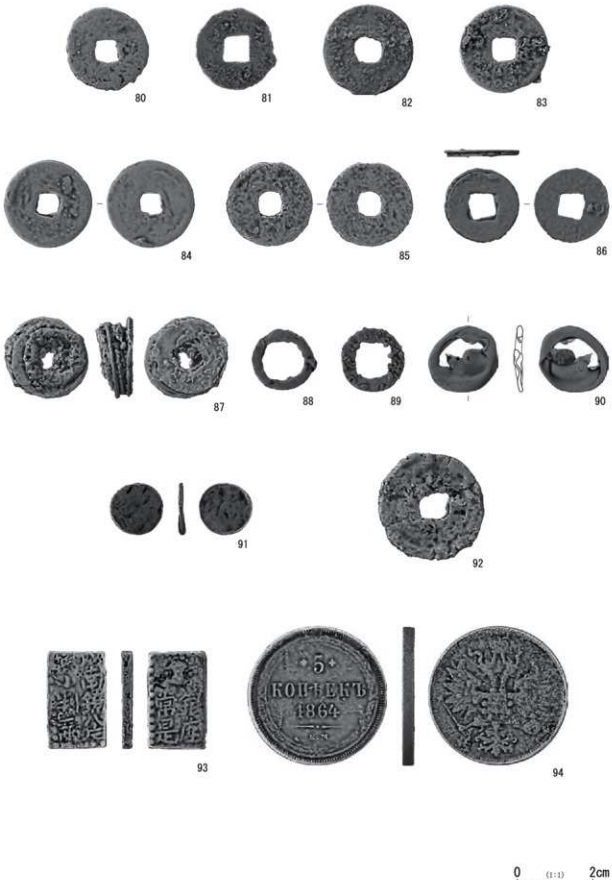
図V-44　貨幣（1）


27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0 (1:1) 2cm

図V-45 貨幣 (2)


56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
0
(1:1)
2cm

図V-46　貨幣（3）



図V-47 貨幣 (4)

表V-17　鉄製品等集計表

地区	地番	遺構等	層位	刀	小刀	小札	鏃	鉄鏃	鑿	槍	毛抜	雑ケ	釣針	分銅	釘	鋲	鎹	鋼	棒状製品	針ケ金具	針金	鐵	鉄板	薄板状鉄片	鉄製品	不明	鉄	洋釘	合計
A	–		Ⅰ・Ⅱ												49		1										1	1	52
	93-2		Ⅲ上面～上部												2		1												3
	94		盟上面												4														4
	94		Ⅲ	1	1			1							6		1												10
B	–		Ⅰ・Ⅱ		3			45							898		15			2		2	3	1	1	5	110	1	21	1,107
	86		Ⅲ												10		2			1							2			15
	89	B堀込1	覆土												86		2										3			91
	89		Ⅲ												1															1
	89		不明												1		1													2
	91		砂利												1															1
C	–		Ⅰ・Ⅱ												10												4			14
	18-1		Ⅲ		4										3			2												9
	18-1		Ⅳ																					1						1
	19		Ⅲ					1							13			1						1						16
	19		Ⅴ											1																1
	19		Ⅵ		1																									1
D	–		Ⅰ・Ⅱ												1												1			2
	13		Ⅲ		1			5				1			20												1			28
	13	木製品集中	Ⅳ		6		2								11					3				7						29
	13	D堀込5の上	Ⅴ			1									7					1										9
	13	D堀込1	覆土						1						14											1	5			21
	13	D堀込3	覆土												3															3
	13	D堀込5	覆土												1															1
	14-1		Ⅲ	1				3							32		3			1							7			47
	14-1		Ⅲ中ローム (D6ｸﾘ・1層相当)												4															4
	14-1		Ⅲ中ローム下 (D6ｸﾘ確認面相当)												3															3
	14-1		Ⅳ						1						4									33			6			44
	14-1	木製品集中	Ⅳ		1										5															6
	14-1		Ⅴ								1				1					1				2			1			6
	14-1	D炉1	覆土																						34					34
	14-1	D炉2	灰層												1															1
	14-1	D土坑9	覆土												1															1
	14-1	D土坑12	覆土												1															1
	14-1	D堀込2B	覆土												6		1													7
	14-1	D堀込3	覆土上面												15	1	1										1			18
	14-1	D堀込3	覆土												30												1			31
	14-1	D堀込4	覆土																								1			1
	14-1		不明																					1						1
	15-2		Ⅲ												6															6
	15-2		Ⅳ上面												4												1			5
	15-2	D土坑4	覆土				1																							1
	15-2	D土坑5	覆土											1			1													2
	15-2	試掘坑3	–												4												3			7
E	10-5		Ⅲ												19															19
	10-5		Ⅳ												4															4
	10-5		撹乱												3												1			4
	11-6		Ⅲ												7		1										1			9
	11-6	E堀込1	覆土		1			2		1			1	1	132		4		1					1			11			155
	11-8	E堀込1	覆土												1															1
②	唐津ヶ丘麓		Ⅲ												14															14
④	14-1地先		Ⅳ												1															1
	15-3西地先		Ⅲ												3															3
⑥	–		Ⅱ												1															1
	12		Ⅲ												1															1
	12	D火事痕穴1	覆土					7							52															59
	合計			2	18	1	3	64	2	1	1	1	2	2	1,496	1	34	3	1	8	1	2	3	1	47	34	6	161	1	22	1,918

表V-18　非鉄製品等集計表

地区	地番	遺構等	層位	鍋	釜	目貫	切羽	小柄	笄	耳かき	鞘	簪	鐔	鉾	分銅	錺	錺付座金	乳金物	座金	縁子	灰掻き	鋲	薬匙	容器片	筋鍾車	釘	鎹	銅鈎	飾金具	銅金具	銅鏡	針金類	薄板類	有孔銅円盤	銅製品	銅塊	煙管雁首	煙管火皿	煙管吸口	煙管部位不明	不明	合計
A	93-2		Ⅲ上面～上部														1																									1
B	–		Ⅰ・Ⅱ		2	1				1		1					1			1	1					5	1	1		3	1	10	14	1	65		12		16	3	1	141
	86		Ⅲ						1																																	1
	89		Ⅲ																																1							1
	89	D掘込1	覆土	1						1				1	1														1			3			9				1			18
	89	試掘坑1	–																																1							1
	91		砂利																													1										1
	–		Ⅱ							1																								1							2
C	18-1		Ⅲ									1																														1
	19		Ⅲ																																				1			1
D	13		Ⅲ										1												3									1		3						8
	13	D掘込1	覆土																						1											2						3
	14-1		Ⅲ															1														2				1		1		19	24
	14-1		Ⅲ中ローム（DP1・1層相当）																													1										1
	14-1	木製品集中	Ⅳ					1																	1				1						3							6
	14-1	D掘込2B	覆土									1				1																2			1		2		1		1	9
	14-1	D掘込3	覆土上面																																	2						2
	14-1	D掘5A3	覆土																							1															2	3
	15-2		Ⅲ																																	1						1
	15-2	D土坑5	Ⅳ上面																																	3	1					4
	15-2	D土坑5	覆土															1																								1
E	–		Ⅱ																																		1					1
	11-6		Ⅲ																																				1			1
	11-6	E掘込1	覆土					1									1		1							2							2		7		4		2		2	22
①	–		撹乱																																				1			1
④	–		Ⅱ・撹乱																						1														3			4
	–		Ⅰ																														1				1	1			1	4
⑥	12		Ⅲローム直上																																							1
	12	D火事場穴1	覆土				1															9	1	13		1									1						1	28
合計				1	2	1	1	2	1	3	1	2	1	1	1	3	1	2	1	1	1	9	1	13	1	14	1	1	2	3	1	19	18	1	90	6	28	1	27	3	27	292

表V-19　貨幣集計表

地区	地番	遺構等	層位	古寛永通寶	新寛永通寶	新寛永（文銭）	新寛永（寛十一波）	寛永通寶	開元通寶	乾元重寶	宋通元寶	天禧通寶	天聖元寶	皇宋通寶	至和元寶	治平通寶	元豐通寶	元祐通寶	紹聖元寶	聖宋元寶	洪武通寶	永樂通寶	中国銭	無文銭	輪銭	鉄銭	厚百銭一宋銭	新南越一宋銭	ロシア銅貨	寛永銭	銭貨銅貨	銅銭貨銅貨	不明	合計
A	93-2		Ⅱ		2																													2
	93-2		Ⅲ																														1	1
	94		Ⅲ																					1	2									3
	94		Ⅲ下部												1										11									12
B	85-2		Ⅱ	1																1													1	3
	85-3		Ⅱ					1		1	1	1	1											1		1							1	6
	86		Ⅱ	3	1	2			1																18								1	26
	86		Ⅲ																						6									5
	87		Ⅱ	1	1																			1									3	6
	88		Ⅰ	3	8	1		1									1								7					1				22
	88		Ⅱ	5	4																			1	7			1					2	20
	89	E脱込1	攪土	1	5	1											1								3									11
	89		Ⅱ	6	13	1		2													1			1	2	44							1	71
	89		不明												1																			1
	90		Ⅰ		1																													1
	90		Ⅱ	12	3			1				1					1	1		2				3	1								3	28
	90		DA層相当																						1									1
C	19		Ⅱ	1	1	1		1																									2	6
	19		Ⅲ	1		1									1													1					1	4
	19		Ⅳ														1				1												1	3
	19		Ⅵ																				1											1
D	13	本集中	Ⅳ									1												6									1	7
	13	D脱込1	攪土	1	3	1																											2	7
	13	D脱込2A	攪土					1																										1
	13		Ⅱ		2																													2
	13		Ⅲ	6	3	1													1					1	2									13
	13	D脱込5の上	Ⅴ														1																	1
	14-1	D脱込2B	攪土		1			1																1									2	5
	14-1	D脱込3	攪土	1																				1									1	3
	14-1	D脱込4	攪土		1																				1								2	4
	14-1		Ⅱ		1																													1
	14-1		Ⅲ	2	1													1						3	1								1	9
	14-1		Ⅳ																				1											1
	14-1		Ⅴ																		2												1	3
	14-1		Ⅵ																		1												1	2
	15-2	試掘坑3	～		3																												1	4
	15-2		Ⅱ		1																												1	2
	15-2		攪乱		1																													1
E	10-5		Ⅳ																		1												5	6
	11-6	E脱込1	攪土	5	22	1		7															1	2	1	3							6	47
	11-6		Ⅱ		4																					1								5
	11-6		Ⅲ	1	3																													4
	11-8	E脱込1	攪土		1																				1									2
①	92-1		炭面採集			1																												1
②	唐津ヶ丘攪		Ⅲ火災層	2																														2
	唐津ヶ丘攪		攪乱	1			1																											2
③	唐津ヶ丘攪		攪乱																													1		1
	18-1		Ⅱ																										1					1
④	14-1地先	炭抗地形	Ⅳ	1																														1
	15-3地先		Ⅱ	1	2	1																											1	5
	17-2地先		Ⅳ																														5	5
	18-3		Ⅱ																														1	1
⑤	10-5		攪乱																														1	1
⑥	12	火事場穴1	攪土		1														1					1		1							1	5
	12		Ⅱ		1	5																												6
	12		攪乱																														1	1
	無地番地		攪乱		1																													1
	合計			55	95	12	1	15	1	1	1	2	2	2	1	1	4	2	2	3	6	1	1	20	47	68	1	1	1	1	1	1	49	398

表V-20 掲載鉄製品一覧表

地区	掲載番号	図版	遺物名	地区地番/遺構等	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	金No.	備考
V'-35	1	31	刀	B14-1	41	Ⅲ2	46.3	4.1	2.2	204.4	1317	断面E-F・Ⅲ2上面砂利層出土
〃	2	〃	刀	A94	8	Ⅲ	(9.3)	2.4	(0.9)	(34.0)	690	
〃	3	〃	小刀	B14-1/本製品集中	96	Ⅳ	17.3	1.4	0.3	18.2	693	
〃	4	〃	小刀	B13/本製品集中	40	Ⅳ	13.3	1.2	0.4	13.8	81	
〃	5	〃	小刀	B13/本製品集中	34	Ⅳ	15.7	1.6	0.9	20.0	79	
〃	6	〃	小刀	A94	9	Ⅲ	(20.4)	2.6	(0.8)	(67.2)	691	
〃	7	〃	小刀	B88	29	Ⅱ	(20.1)	2.4	0.6	(53.6)	692	
〃	8	〃	小札	B13/B層込5の上	45	V	6.6	2.2	0.5	13.3	31	
〃	9	〃	鞘	B15-2/B土坑4	1	覆土	(5.8)	(4.2)	0.8	30.1	513	
〃	10	〃	鞘	B13/本製品集中	28	IV	(6.7)	(3.8)	0.7	30.3	61	
V'-36	11	〃	鉄鏃	⑥12/B大事壊穴1	1	覆土	(12.6)	(13.3)	1.2	(150.7)	23-41	
〃	12	〃	鉄鏃	⑥12/B大事壊穴1	15	覆土	(9.4)	(9.0)	(0.6)	(63.5)	23-55	
〃	13	〃	鉄鏃	⑥12/B大事壊穴1	15	覆土	(4.4)	(8.2)	(7.1)	(47.5)	23-55	
〃	14	〃	鉄鏃	B14-1	11	Ⅲ1	(3.3)	(3.5)	(4.0)	(21.0)	516	
〃	15	〃	鉄鏃	B14-1	57	Ⅲ2	(5.3)	(2.6)	(2.6)	(45.0)	518	
〃	16	〃	鞍	B14-1/廃沿遺物集中	25	Ⅳ	14.5	4.4	3.2	697.0	697	
〃	17	〃	毛抜	B14-1	39	V1	9.6	(1.9)	(1.3)	(8.8)	522	
〃	18	〃	釣針	C19	19	V	5.4	3.7	0.7	10.4	3	
〃	19	〃	釣針	E11-6/B層込1	105	覆土	5.6	4.7	1.1	21.6	503	
〃	20	〃	不明	E11-6/B層込1	68	覆土	4.3	3.0	2.8	9.0	506	
〃	21	〃	分銅	E11-6/B層込1	103	覆土	5.9	3.7	3.3	390.3	507	
〃	22	〃	分銅	B15-2/B土坑5	1	覆土	4.9	4.2	4.3	228.4	525	
V'-37	23	32	釘	B14-1	59	Ⅲ2	3.5	0.9	0.5	1.5	546	
〃	24	〃	釘	B14-1/B土坑9	1	覆土	3.8	0.9	0.4	1.3	568	
〃	25	〃	釘	B15-2/廃棄片集中	143	IV上面	3.8	0.9	0.7	3.4	558	
〃	26	〃	釘	⑥12/B大事壊穴1	3	覆土	4.1	0.8	0.5	1.7	23-65	
〃	27	〃	釘	B14-1	19	Ⅲ中ローム堆土	4.5	1.0	0.7	2.1	541	DP1の1(ローム)相当層出土
〃	28	〃	釘	B13/B層込5の上	44	V	4.5	1.2	0.5	2.8	35	
〃	29	〃	釘	B14-1/B土坑12	1	覆土	3.4	1.8	1.5	2.9	569	
〃	30	〃	釘	B14-1/B層込3	40	覆土	4.6	0.9	0.3	1.5	565	
〃	31	〃	釘	B14-1	65	Ⅲ2	4.8	1.1	0.6	3.4	549	
〃	32	〃	釘	B14-1/廃沿遺物集中	37	IV2'	4.6	1.0	0.8	3.5	544	
〃	33	〃	釘	B14-1/本製品集中	102	Ⅳ	4.9	0.8	0.7	2.6	526	
〃	34	〃	釘	B14-1/本製品集中	103	Ⅳ	5.2	0.6	0.5	1.7	527	
〃	35	〃	釘	E11-6/B層込1	42	—	5.0	1.2	0.8	3.7	573	
〃	36	〃	釘	B13/本製品集中	36	Ⅳ	5.8	0.9	0.8	3.7	73	
〃	37	〃	釘	B13/B層込5の上	47	V	5.7	1.3	0.8	5.6	31	
〃	38	〃	釘	B14-1/本製品集中	91	Ⅳ	6.1	0.9	0.5	2.4	554	
〃	39	〃	釘	B13/B層込5の上	43	V	6.4	1.0	0.7	5.1	33	
〃	40	〃	釘	B14-1	90	V	6.4	0.9	0.6	8.4	553	
〃	41	〃	釘	B14-1/B層込3	48	覆土	5.2	2.5	1.0	3.6	566	砂利層出土
〃	42	〃	釘	B13/B層込5の上	50	V	7.5	1.0	1.4	9.4	68	
〃	43	〃	釘	B14-1/本製品集中	96	Ⅳ	7.3	1.1	0.6	4.8	556	
〃	44	〃	釘	⑥12/B大事壊穴1	3	覆土	7.3	0.8	0.8	6.6	23-65	
〃	45	〃	釘	B14-1	20	Ⅲ中ローム堆土	8.6	1.5	1.0	8.9	542	DP1の1(ローム)相当層出土
〃	46	〃	釘	⑥12/B大事壊穴1	3	覆土	9.2	1.9	2.5	21.6	23-65	
〃	47	〃	釘	E11-6/B層込1	7	覆土	9.7	1.4	0.9	14.8	589	
〃	48	〃	釘	B86	2	Ⅲ	9.9	1.5	0.9	11.7	530	
〃	49	〃	釘	B89/B層込1	129	覆土	11.0	1.1	1.3	13.2	535	
V'-38	50	〃	釘	A94	1	Ⅲ	12.2	1.7	1.6	14.0	528	
〃	51	〃	釘	B14-1	62	Ⅲ2	11.3	3.4	1.4	15.7	547	
〃	52	〃	釘	E11-6	3	Ⅲ	5.1	0.8	0.9	1.7	572	
〃	53	〃	釘	B14-1/DP2	1	灰層	4.1	5.7	1.1	2.8	1342	
〃	54	〃	棒状製品	B14-1	89	V	8.0	1.9	0.9	21.2	552	
〃	55	〃	棒状製品	B13/本製品集中	24	Ⅳ	13.9	0.9	0.6	10.6	77	
〃	56	〃	棒状製品	B13/B層込5の上	42	V	10.7	0.7	0.8	9.6	82	
〃	57	〃	棒状製品	B13/本製品集中	39	Ⅳ	10.1	1.1	0.9	18.6	80	
〃	58	〃	棒状製品	B13/本製品集中	26	Ⅳ	12.5	2.1	0.9	22.6	78	
〃	59	〃	棒状製品	B14-1	21	Ⅲ2	14.2	1.2	0.9	41.2	494	
〃	60	〃	釘	B13/本製品集中	25	Ⅳ	4.3	1.1	0.9	5.4	59	
〃	61	〃	釘	E11-6/B層込1	41	覆土	7.1	1.9	1.4	12.1	574	
〃	62	〃	釘	⑥12/B大事壊穴1	3	覆土	6.4	2.4	2.6	30.1	23-65	
〃	63	〃	釘	B13	11	Ⅲ1	10.5	2.6	2.0	28.9	48	
〃	64	〃	釘	B15-2	3	Ⅲ	11.5	2.1	1.9	25.4	537	
V'-39	65	〃	釘	B89	228	Ⅱ	13.1	2.0	1.6	48.5	537	
〃	66	〃	釘	B14-1/B層込3	34	覆土	16.4	1.6	1.5	26.1	562	砂利層出土
〃	67	33	鋲	B14-1	40	Ⅲ2	(6.7)	(1.5)	(1.6)	(16.5)	545	
〃	68	〃	鋲	B15-2/B土坑5	2	覆土	(8.8)	(1.5)	(2.6)	(33.9)	520	
〃	69	〃	鋲	B14-1	45	Ⅲ1	7.9	2.1	1.0	11.2	512	
〃	70	〃	鋲	E11-6	1	Ⅲ	7.7	2.9	0.8	13.3	523	
〃	71	〃	鋲	B14-1	68	Ⅲ2a	11.7	3.6	0.9	34.5	521	
〃	72	〃	鋲	B89	136		13.2	4.2	1.2	48.5	499	
〃	73	〃	鋲	B89/B層込1	120	覆土	19.8	6.8	1.6	198.4	498	
〃	74	〃	不明	E11-6/B層込1	123	覆土	5.8	3.2	1.0	29.6	501	
〃	75	〃	不明	B14-1	80	IV	6.2	1.7	0.4	6.6	1331	
〃	76	〃	不明	E11-6/B層込1	124	覆土	3.9	0.9	0.9	3.9	502	
〃	77	〃	不明	E11-6/B層込1	125	覆土	2.7	0.9	0.9	2.1	500	

＊金No.は金属製品の保存処理番号を表す。

表V-21　掲載非鉄製品一覧表

挿図	掲載番号	図版	遺物名	地区地番/遺構	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	金№	備考
V-40	1	34	鐸	B89/B層込1	83	撹土	2.9	2.4	0.8	9.2	278	
〃	2	〃	切別	㐂12/D火事場穴1	3	撹土	3.2	1.9	0.2	2.5	23-58	
〃	3	〃	鋲	B87	3	Ⅱ	4.6	3.9	0.6	14.8	272	
〃	4	〃	鋲	B90	1	Ⅱ	4.8	3.7	0.4	31.7	282	
〃	5	〃	目貫	B92-1	1	Ⅱ	3.6	1.9	4.0	1.7	291	
〃	6	〃	小柄	B14-1	100	Ⅳ	9.5	1.3	0.6	13.2	297	
〃	7	〃	小柄	E11-6/E層込1	19	撹土	9.7	1.4	0.6	31.9	294	
〃	8	〃	笄	B86	1	Ⅲ	14.5	1.4	0.5	24.2	595	
〃	9	〃	耳かき	B88/B層込1	4	撹土	5.6	0.4	0.2	1.3	276	
〃	10	〃	鞐	C18-1	10	Ⅲ	4.0	0.8	0.4	6.0	22	
〃	11	〃	鑢	B13	1	Ⅲ1	4.1	2.6	0.5	10.5	46	
〃	12	〃	簪	B14-1/B層込2B	16	撹土	23.7	1.4	1.7	19.3	270	
〃	13	〃	鈴	B89/B層込1	1	撹土	1.8	1.4	0.9	2.4	273	
〃	14	〃	分銅	B89/B層込1	3	撹土	3.4	1.5	1.5	51.9	275	
〃	15	〃	銅容器	B89/B層込1	5	撹土	3.6	2.6	1.9	4.8	277	
V-41	16	〃	銅鏡	A93-2	1	Ⅲ上面～上部	3.2	3.0	0.5	5.1	271	
〃	17	〃	乳金物	B14-1	42	Ⅲ2	2.8	2.7	1.3	5.6	283	
〃	18	〃	乳金物	B15-2/D土層5	3	撹土	2.6	2.1	1.3	5.6	286	
〃	19	〃	飾金具	B89/B層込1	2	撹土	1.7	1.4	0.7	0.3	274	
〃	20	〃	飾金具	B14-1/木製品竈中	97	Ⅳ	4.9	1.5	0.4	3.8	285	
〃	21	〃	銅鏃	㐂12/D火事場穴1	9	撹土	20.4	5.6	1.6	107.0	23-49	
〃	22	〃	銅製品	㐂12/D火事場穴1	3	撹土	7.6	3.7	1.3	66.7	23-43	
〃	23	〃	銅製品	B89/試掘坑1	171	－	5.6	1.5	0.5	13.2	281	
〃	24	〃	銅製品	B14-1/木製品竈中	93	Ⅳ	6.6	1.6	0.5	5.1	284	
〃	25	〃	銅製品	B13	54	Ⅲ2	5.7	2.1	1.2	7.9	75	
〃	26	〃	銅製品	E11-6/E層込1	122	撹土	4.7	0.3	0.9	5.8	290	
〃	27	〃	銅釘	B13	4	Ⅲ上ローム	1.4	0.2	0.2	0.1	39	
〃	28	〃	銅釘	E11-6/E層込1	20	撹土	2.2	0.5	0.6	0.7	288	
〃	29	〃	銅釘	B13	5	Ⅲ1	2.3	0.4	0.4	0.3	40	
〃	30	〃	銅釘	B14-1/E層込3	53	撹土	3.5	0.3	0.5	0.8	287	
〃	31	〃	銅釘	B13	3	Ⅲ1	4.9	1.2	1.1	4.5	38	
V-42	32	35	雁首	B15-2/銅鈴片竈中	1	Ⅳ上面	8.2	1.7	2.9	10.9	96	
〃	33	〃	雁首	B13	2	Ⅲ	8.4	1.7	3.3	11.6	87	
〃	34	〃	雁首	E11-6/E層込1	6	撹土	6.4	1.1	1.7	8.1	125	
〃	35	〃	雁首	E11-6/E層込1	2	撹土	5.4	0.8	2.5	6.8	121	
〃	36	〃	雁首	B13	3	Ⅲ2	2.7	1.5	2.4	2.1	88	
〃	37	〃	雁首	B90	1	Ⅱ	7.3	1.5	2.8	7.9	91	
〃	38	〃	雁首	B88	3	Ⅰ	6.3	1.5	2.5	8.5	96	
〃	39	〃	雁首	B86	2	Ⅱ	6.6	1.6	2.1	9.1	105	
〃	40	〃	雁首	B90	2	Ⅱ	5.8	1.5	2.4	8.1	92	
〃	41	〃	雁首	B89	2	Ⅲ	5.5	1.5	2.1	7.4	99	
〃	42	〃	雁首	B14-1	1	Ⅲ	5.4	1.3	2.2	4.8	89	
V-43	43	〃	雁首	B13/B層込1	1	撹土	5.5	1.2	1.4	10.1	112	
〃	44	〃	雁首	B13/B層込1	2	撹土	5.7	1.1	1.7	8.5	86	
〃	45	〃	雁首	B87	1	Ⅱ	5.3	1.4	1.9	13.7	107	
〃	46	〃	雁首	㐂12/D火事場穴1	6	撹土	5.9	1.3	2.0	13.0	23-61	
〃	47	〃	吸口	B89/B層込1	6	撹土	5.5	1.1	1.1	7.8	103	
〃	48	〃	吸口	B88	2	Ⅰ	4.6	0.9	0.9	3.1	95	
〃	49	〃	吸口	E11-6/E層込1	3	撹土	5.0	0.9	0.9	4.0	122	
〃	50	〃	吸口	B89	1	Ⅱ	5.9	0.9	0.9	5.8	98	
〃	51	〃	吸口	B14-1	2	Ⅲ2	9.6	1.1	1.1	6.1	116	
〃	52	〃	吸口	B89	3	Ⅱ	5.9	1.0	1.0	3.5	100	
〃	53	〃	吸口	E11-6/E層込1	4	撹土	8.8	1.0	1.0	7.5	123	
〃	54	〃	吸口	B88	4	Ⅰ	5.9	0.9	0.9	5.6	97	
〃	55	〃	吸口	E11-6	2	Ⅲ	3.8	1.0	1.0	8.2	118	
〃	56	〃	吸口	B89	5	Ⅱ	8.0	1.3	1.3	12.3	102	

＊金№は金属製品の保存処理番号を表す。

表V-22 掲載貨幣一覧表

挿図	掲載番号	図版	銭種	地区地番/遺構	遺物番号	層位	外縁径 外径平均	外縁径 内径平均	内郭径 外径平均	内郭径 内径平均	厚さ 外縁部平均	厚さ 文字面部平均	重量	金%ₐ	備考
V-44	1	35	古寶永通寶	B86	2	II	25.03	18.84	7.45	5.75	1.00	0.64	2.76	148	
〃	2	〃	古寶永通寶	B88	17	II	24.17	18.77	7.81	5.50	1.36	0.89	3.45	182	
〃	3	〃	古寶永通寶	B13-5横込1	6	覆土	24.15	19.32	7.07	5.51	1.19	0.60	3.16	132	
〃	4	〃	古寶永通寶	宅傳津々丘溝	2	盤(火災層)	24.32	20.13	6.98	5.27	1.38	0.62	3.74	23-2	
〃	5	〃	古寶永通寶	B13	5	盤1	24.27	20.32	6.95	5.31	1.32	0.78	3.41	257	
〃	6	〃	古寶永通寶	B88	1		24.52	20.02	6.87	5.61	1.24	0.55	3.46	168	
〃	7	〃	古寶永通寶	B88	18	I	24.36	19.74	7.06	5.55	1.46	0.92	3.94	183	
〃	8	〃	古寶永通寶	B85-2	8	II	24.65	18.97	6.92	5.50	1.17	0.61	2.00	141	
〃	9	〃	古寶永通寶	宅傳津々丘溝	1	盤(火災層)	24.67	19.75	7.01	5.59	1.37	0.64	3.54	23-6	
〃	10	〃	古寶永通寶	B88	10	I	24.31	19.84	8.12	5.91	1.27	0.84	3.49	200	
〃	11	〃	古寶永通寶	B89	9	I	24.83	19.81	7.99	6.11	1.19	0.65	3.18	199	
〃	12	〃	古寶永通寶	B89-5横込1	27	覆土	23.62	19.09	7.40	5.69	1.14	0.68	2.23	216	
〃	13	〃	古寶永通寶	B90	17	II	24.88	20.07	7.38	5.47	1.46	0.85	3.66	237	
〃	14	〃	古寶永通寶	B87	2	II	25.06	19.81	7.57	5.30	1.37	0.84	4.04	163	
〃	15	〃	古寶永通寶	B88	23	I	25.09	19.84	7.82	5.58	1.43	0.78	3.66	188	
〃	16	36	古寶永通寶	B89	18	I	25.04	19.28	7.83	5.85	1.09	0.63	2.99	208	
〃	17	〃	古寶永通寶	B96	1	II	25.08	19.22	7.99	6.07	1.22	0.63	3.22	147	
〃	18	〃	古寶永通寶	B89	4	II	25.12	19.77	8.03	6.37	1.27	0.74	3.24	196	
〃	19	〃	古寶永通寶	4/4-1横先/木偏平	1	IV	25.20	20.11	7.87	6.22	1.18	0.66	3.25	23-19	
〃	20	〃	古寶永通寶	B89	17	II	25.21	19.90	7.97	5.73	1.29	0.65	3.01	207	
〃	21	〃	新寶永通寶	B86	5	II	25.28	19.66	7.40	5.67	1.38	0.77	4.10	151	文錢
〃	22	〃	新寶永通寶	B89	11	II	25.22	19.90	7.96	6.04	1.19	0.56	2.84	201	文錢
〃	23	〃	新寶永通寶	B89-5横込1	28	覆土	25.23	19.95	7.73	5.87	1.38	0.70	3.85	217	文錢
〃	24	〃	新寶永通寶	C19	4	II	25.23	20.51	7.43	5.77	1.23	0.57	3.11	245	文錢
〃	25	〃	新寶永通寶	C19	4	II	25.08	20.25	7.40	5.74	1.47	0.77	4.22	248	文錢
〃	26	〃	新寶永通寶	B13-5横込1	4	覆土	25.13	20.06	7.57	6.09	1.18	0.54	2.91	218	文錢
V-45	27	〃	新寶永通寶	B95-1	1	表採	25.25	20.02	7.19	5.92	1.24	0.49	3.42	23-11	文錢
〃	28	〃	新寶永通寶	宅傳津々丘溝	2	盤2	25.14	20.64	8.28	6.87	1.22	0.75	4.17	23-8	貫1穴
〃	29	〃	新寶永通寶	B93-2	3	I	22.60	18.33	8.33	6.53	1.05	0.61	2.45	133	
〃	30	〃	新寶永通寶	B96	3	I	22.89	18.43	7.62	6.01	1.14	0.64	2.65	170	
〃	31	〃	新寶永通寶	B88	8	I	23.07	18.61	8.30	6.70	0.97	0.56	2.16	172	
〃	32	〃	新寶永通寶	B88	7	I	23.17	18.49	7.68	6.27	1.07	0.64	2.11	173	孔有り
〃	33	〃	新寶永通寶	B14-1	12	II2	23.18	18.33	7.72	6.14	0.85	0.56	1.79	309	
〃	34	〃	新寶永通寶	B89	20	I	23.24	18.43	7.92	6.52	1.14	0.68	2.68	210	
〃	35	〃	新寶永通寶	B90	5	I	22.81	17.87	7.42	5.88	1.12	0.63	2.59	227	
〃	36	〃	新寶永通寶	B89-5横込1	26	覆土	23.60	18.45	7.65	6.04	0.96	0.60	2.28	315	
〃	37	〃	新寶永通寶	B88	9	I	23.13	18.13	9.43	7.01	1.00	0.54	1.97	174	
〃	38	〃	新寶永通寶	B88	2	I	23.36	19.09	7.82	6.15	1.20	0.65	2.39	201	
〃	39	37	新寶永通寶	B14-1	1	II	23.53	18.53	7.92	6.33	1.14	0.52	2.39	301	孔有り
〃	40	〃	新寶永通寶	G15-3横先	5	II	23.35	18.97	7.66	6.23	1.04	0.67	2.64	23-22	
〃	41	〃	新寶永通寶	B90	24	I	23.47	18.74	7.53	6.34	1.15	0.61	2.43	243	
〃	42	〃	新寶永通寶	B89	22	I	23.70	18.96	7.67	6.06	1.04	0.69	2.69	212	
〃	43	〃	新寶永通寶	E11-6	2	II	23.73	18.56	7.92	6.03	1.12	0.63	2.53	357	
〃	44	〃	新寶永通寶	B89	40	II	23.80	18.43	7.42	6.04	1.25	0.69	2.66	231	
〃	45	〃	新寶永通寶	B13-5横込3	26	覆土	24.00	19.48	8.42	6.96	1.17	0.72	2.62	322	
〃	46	〃	新寶永通寶	B89-5横込3	26	覆土	23.97	19.19	7.71	6.32	1.04	0.66	2.63	212	
〃	47	〃	新寶永通寶	B90	3	I	24.02	18.36	7.54	5.85	1.19	0.58	2.89	226	
〃	48	〃	新寶永通寶	B90	12	II	24.27	19.04	7.55	5.82	1.36	0.70	3.03	202	
〃	49	〃	新寶永通寶	B88	16	I	24.61	19.19	8.08	6.67	0.92	0.55	2.26	193	孔有り
〃	50	〃	開元通寶	B96	12	I	24.59	21.15	8.57	6.78	1.14	0.76	2.13	397	
〃	51	〃	乾元重寶	B85-2	1	II	24.59	20.28	8.45	6.50	1.29	0.66	2.85	294	
〃	52	〃	和同開珎	B93-2	2	II	(25.06)	19.83	(7.94)	(6.24)	(1.08)	0.65	1.83	395	欠損
〃	53	〃	大観通寶	B85-2	3	II	25.05	20.25	8.30	6.35	1.15	0.64	2.31	143	
〃	54	〃	大観通寶	B90	13	II	25.13	19.96	8.66	6.34	1.23	0.81	2.82	401	
〃	55	〃	天聖元寶	B13-5	1	II	—	—	—	—	1.26	0.723	1.64	396	6片接合
V-46	56	〃	天聖元寶	B13-5/亀甲	16	IV	25.07	20.24	8.87	7.07	1.40	0.82	3.96	408	
〃	57	〃	皇宋通寶	B94	3	III下部	24.30	19.89	8.56	6.35	1.20	0.72	2.52	393	
〃	58	〃	皇宋通寶	B89	31	I	24.62	19.82	8.93	6.84	1.30	0.77	2.85	399	
〃	59	〃	治平元寶	C19	6	II	—	—	—	—	(0.94)	(0.53)	1.82	404	欠損
〃	60	〃	治平通寶	B13	23	V	23.67	19.02	8.30	6.82	1.06	0.63	2.37	409	
〃	61	〃	熙寧元寶	B14-1	6	II	23.89	18.16	8.13	6.96	1.27	0.78	2.87	305	
〃	62	〃	元豊通寶	B89-5横込5	25	覆土	25.05	18.09	8.87	6.70	1.07	0.62	3.16	398	
〃	63	〃	元豊通寶	C19	7	IV	23.80	19.25	8.36	6.18	1.31	0.83	3.14	405	
〃	64	〃	元豊通寶	B90	20	I	24.02	18.41	8.60	6.87	1.26	0.89	2.46	403	
〃	65	〃	中国銭	B88	4	I	24.05	18.86	8.92	7.19	1.08	0.90	2.79	171	
〃	66	〃	元祐通寶	B96	14	I	24.11	18.58	8.48	6.52	1.45	0.84	3.39	402	
〃	67	〃	元祐通寶	B14-1	3	II1	24.37	19.55	8.85	6.97	1.18	0.72	2.77	412	
〃	68	〃	紹聖元寶	B13	14	II1	23.72	18.41	8.06	6.51	1.34	0.71	3.13	407	
〃	69	〃	聖宋元寶	B90	4	I	23.98	18.31	8.62	6.36	1.29		6.69	400	2枚溶着
〃	70	〃	聖宋元寶	B85-2	1	II	23.40	17.24	8.51	6.09	1.50	1.35	3.39	140	
〃	71	38	政和通寶	B14-1	7	V2	(23.07)	(18.57)	7.52	5.13	(1.53)	0.63	2.74	410	変形
〃	72	〃	政和通寶	C19	8	II	23.60	18.39	7.30	4.91	1.43	1.65	3.13	406	
〃	73	〃	政和通寶	B14-1	9	VI	21.78	16.89	6.61	4.74	1.42	0.69	3.03	411	
〃	74	〃	政和通寶	E10-2	1	IV	(20.47)	(18.41)	8.52	6.40	(0.94)	0.57	1.81	413	欠損
〃	75	〃	永楽通寶	B89	15	I	21.80	16.60	6.99	5.74	0.70	0.43	1.83	203	
〃	76	〃	不明	B93-2	1	II	24.01	18.74	8.01	6.31	1.16	0.85	2.13	131	
〃	77	〃	不明	B87	5	I	24.95	20.71	9.72	7.61	0.97	0.84	2.85	166	
〃	78	〃	不明	B87	4	II	23.34	18.93	8.15	6.27	1.01	0.63	2.31	165	
〃	79	〃	不明	B88	6		—	—	—	—	—	—	66.62	416	複数枚溶着
V-47	80	〃	無文銭	C19	12	VI	22.23	—	—	—	5.79	1.15	—	1.73	252
〃	81	〃	無文銭	B13	15	IV	(21.61)	—	—	—	6.44	0.67	—	1.64	266	欠損
〃	82	〃	無文銭	B13	18	IV	23.67	—	—	—	6.96	1.57	—	2.44	268
〃	83	〃	無文銭	B13	19	IV	23.48	—	—	—	6.06	1.19	—	3.08	269
〃	84	〃	無文銭	B13	20	IV	23.13	—	—	—	5.70	1.38	—	3.28	298
〃	85	〃	無文銭	B13	22	III2	22.58	—	—	—	6.25	0.78	—	1.76	300
〃	86	〃	無文銭	B14-1	5	II	—	—	—	—	—	—	—	1.69	304	2枚溶着
〃	87	〃	輪銭	B96	16	I	17.58	—	—	—	5.71	1.61	—	5.71	161	複数枚溶着
〃	88	〃	輪銭	B13	13	III2上面	16.83	—	—	—	10.32	0.75	—	0.51	265
〃	89	〃	輪銭	B14-1	2	III2	16.93	—	—	—	9.40	0.68	—	0.58	302
〃	90	〃	踏鞴銭	B85-2	6	I	17.58	—	—	—	18.50	2.42	—	1.60	145
〃	91	〃	和賀門銭	宅/亀甲東端穴1	6	覆土	13.93	—	—	—	14.22	1.23	—	1.78	23-46
〃	92	〃	鉄銭	宅/亀甲東端穴1	7	覆土	28.17	—	—	—	6.47	2.04	—	3.52	23-47
〃	93	〃	新用銭/木製	C19	18	II	—	—	—	—	—	2.88	—	10.32	7
〃	94	〃	ロシア銭貨	B88	30	I	36.84	—	—	—	—	3.24	—	24.50	453

＊金%ₐは金属製品の保存処理番号を表す。

4　金属生産関連遺物

D炉１から羽口片３点と薄板状鉄片34点、D炉２から坩堝３点、D14－１Ⅳ層の鍛冶関連遺物集中から羽口片７点、鉄滓38点が出土した。このほか、D13のⅣ層で鉄滓７点、④14－１地先のⅣ層で羽口片１点が得られている。なお、掲載番号横の（FJ）は付編Ⅰ－７、（M）は付編Ⅰ－８の分析試料番号を表す。

羽　口

１～３は、D14－１のⅣ層で近接して出土した（図Ⅳ－18）。１は先端側とみられる部分の器面が剥がれ、砂混じりの胎土が露出している。外面には褐灰色とにぶい赤褐色を呈する部分が帯状に見られる。２は表面が褐灰色を呈し、ナデ調整の痕が目立つ。砂混じりの胎土には５mm以上の礫が目立ち、大きいもので15mmを測る。接合した破片には同心円状に割れているものがあり、芯棒に粘土を巻き付けて製作したことをうかがわせる。先端側はどちらか判然としなかった。３は先端側とみられる部分の器面が剥がれ、砂混じりの胎土が露出している。外面の大部分は褐灰色を呈する。

４（FJ－６）は熔着滓（網伏せ部分）が付着した先端付近の破片である。本来の器面は裏面に図示した送風孔の一部だけで、ほかは剥離している。熔着滓は黒色で光沢があり、磁性は図の上端で強いが、多孔質の破面ではほとんどない。分析の結果、鍛冶羽口と推定されている。５は元側の破片で、端部周辺がやや外側に広がる。砂混じりの胎土にはスサが多量に認められる。６はD炉１の覆土から出土した３点が接合する。形状は先細りで、先端側とみられる部分の器面が剥がれ、砂混じりの胎土が露出している。外面には褐灰色とにぶい橙色を呈する部分が帯状に見られる。

坩　堝

７（M５）は完形の皿形で、口唇断面は丸みを帯び、底面は丸底である。胎土には砂が混じる。内面は縁を中心に灰オリーブ色の付着物が目立つ。付着物には５mm程度の半球状の盛り上がりもわずかに見られる。縁から中央にかけて、微細な穴があいた暗赤褐色の付着物がある部分や、明赤灰に変色した部分がある。外面は灰色を呈する。８（M４）は３点が接合した。全体の半分弱が残存する皿形で、口唇断面は丸みを帯び、底面は丸底である。胎土には砂が混じる。内面全体に微細な穴が多数あいた灰色や暗赤灰色の熔着物が見られる。一方の縁には、光沢のある暗灰色の熔着物や赤色と黒色が墨流し状に入り交った光沢のある熔着物も付着する。暗灰色の熔着物には６mm程度以下の穴が目立つ。外面は橙色を呈する。

９～11はD炉２の灰層から出土した。９（M１）はほぼ完形の皿形で、口唇断面は丸みを帯び、底面は丸底である。胎土には砂が混じる。内面の大半は暗灰色の付着物で覆われ、部分的に微細な穴が見られる。一部に２mm程度以下の半球状の粒等がややまとまって付着する。外面は灰黄色、黄灰色、灰色の部分がある。10（M２）は半分を欠損する。皿形で、口唇断面は丸みを帯び、底面はやや尖った丸底である。胎土には砂が混じる。内面の大半は暗灰色の付着物で覆われており、肉眼観察で金微粒子が多数付着することを確認した。内面の縁は一部にガラス光沢があり、わずかに赤褐色の部分も見られる。外面の縁は灰色で、中央部周辺は暗赤褐色の部分が多い。11（M３）は皿形の破片である。口唇断面はやや角張り、底面は平底ぎみである。胎土には砂が混じる。内面の大半は暗灰色の付着物で覆われ、微細な穴が多数見られる。また、赤色に黒色が斑に交った光沢物や、銅とみられる緑みを帯びた微細な半球状の付着物もある。外面は灰白色と褐灰色の部分がある。

鉄滓等

12（FJ－２）は完形の椀形滓である。平面は円形ぎみで一部が突出する。網伏せ部分にはガラス質滓が熔着し、一部が剥落している。上面中央のくぼみは、ガラス質滓が取れた部分のように見られ、

その部分だけ暗赤褐色を呈する。上面は付着物のためかあまり孔が見られず、下面は多孔質である。木炭が上下両面に多数付着しており、上面には銹化した繊維状の細長い物質（長さ30～40mm、幅5mm程度）も見られる。ガラス質滓部分をのぞき磁性があり、底面中央付近の赤黒色部分でやや強い。

13～**22**はD14－1のⅣ層で近接して出土した（図Ⅳ－18）。**13**（FJ－5）は破損した板状の鉄滓である。図の両側面上方と下端が破面で、本来の平面形は突出部のある略円形であったと推測される。本体部の上面は比較的滑らかであるが、下面は多孔質である。突出部の上面から下面の一部にかけて、にぶい褐色の小瘤が見られる。突出部上面の根元には斜めの穴がある。本体上面に磁性はあるが、その裏面にはない。突出部上面の錆瘤部分は磁性が強い。**14**（FJ－3）はほぼ完形の楕形滓である。平面は楕円形に近い。上面は平坦、下面は尖底である。磁性がある。**15**（FJ－4）は完形の楕形滓である。平面は楕円形に近く、上面の一端に鉄片が斜めに熔着する。上面は平坦、下面は尖底ぎみである。木炭は熔着鉄片との境界付近に集中して付着する。上面に直径5mm程度の丸棒状物質が2点付着しており、一方は磁性があり、もう一方は磁性がない。磁性は全体的に強い。**16**は楕形滓で、図の上端部分を欠損する。上面はややくぼんでおり、下面は丸底の皿状である。木炭は上下両面に付着する。磁性はやや強い。**17**は楕形滓で、約半分を欠損する。上面はややくぼんでおり、下面は丸底である。木炭は見られない。全体的に磁性があり、上面左側でやや強い。

18は下面に凸凹があるが、板状に近い。磁性が両面とも強く、鉄塊系遺物の可能性がある。**19**の破面は図の左右と下端にある。全体的に磁性があるが、下端で強い。鉄滓と鉄が熔着しているようである。**20**は磁性の強い熔着滓が突起状に残る。熔着滓以外は全て破面で、滓内に2cm大の礫を含む。**21**は不定形である。磁性はやや強いが、図の上面左側は弱い。鉄滓と鉄が熔着しているようである。**22**は不定形で、下端に破面がある。側面上部には空隙が形成されている。木炭が付着しており、磁性は弱い。

D炉1の薄板状鉄片（ねずみ鋳鉄破片）は、写真のみ掲載した（図版40）。色調は赤褐～暗赤褐で、厚さは約3mmを測る。層状の構造が見られ、1枚1mm弱の薄層が数枚重なっている。磁性は強い。

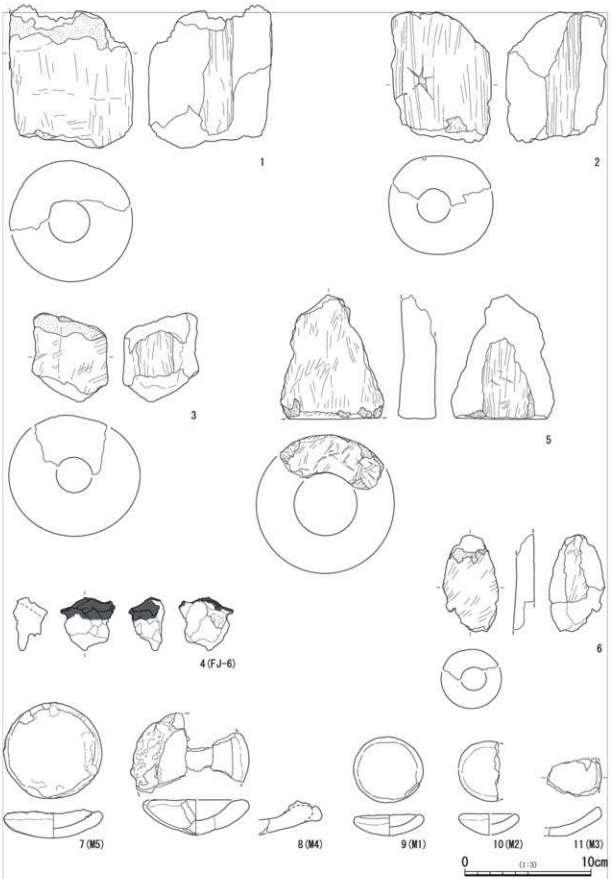
分析の結果、薄板状鉄片（FJ－1）はねずみ鋳鉄破片、**12**・**14**・**15**（FJ－2～4）の鉄滓は鍛錬鍛冶滓、**13**（FJ－5）の鉄滓は精錬鍛冶滓と推定された（付編Ⅰ－7）。

このほか、付編Ⅰ－8で銅塊（図版40下段のM7～9）の分析結果を報告する。（山中）

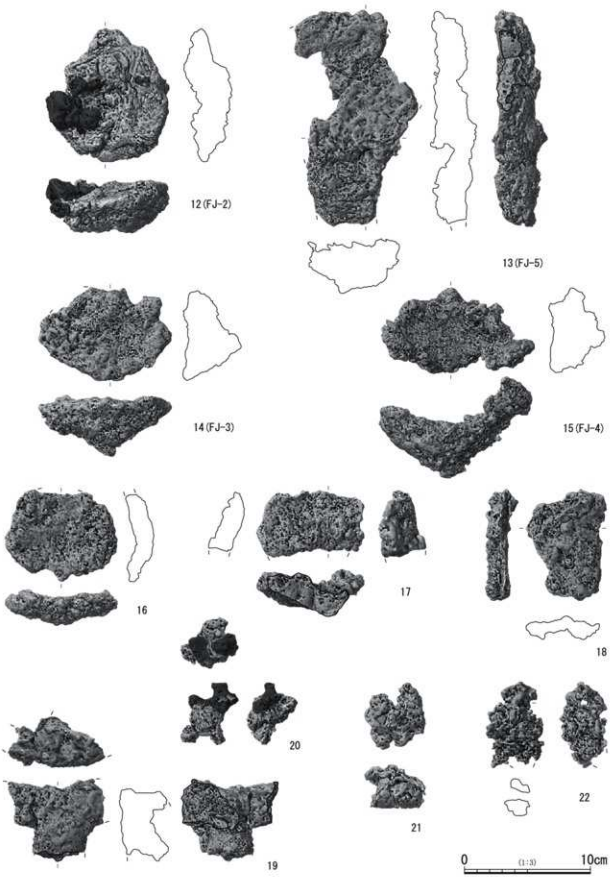
表Ⅴ-23　掲載金属生産関連遺物一覧表

地区	掲載番号	図版	遺物名	地区地番/遺構	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅・口径(cm)	厚さ・高さ(cm)	重量(g)	金%	備考
V-48	1	39	羽口	D14-1/第古遺物集中	(1)	Ⅳ2	(11.3)	(9.8)	(5.6)	453.9	－	
〃	2	〃	羽口	D14-1/第古遺物集中	(17)	Ⅳ	(10.3)	(7.9)	(5.1)	283.5	－	
〃	3	〃	羽口	D14-1/第古遺物集中	(18)	Ⅳ	(7.6)	(6.0)	(4.7)	155.3	－	
〃	4	〃	羽口	D14-1	653	Ⅳ	(4.2)	(4.3)	(2.8)	27.7	－	熔着滓付着。分析試料FJ-6
〃	5	〃	羽口	D15-2	220	Ⅳ	(9.8)	(8.2)	(3.8)	191.6	－	スサ混入
〃	6	〃	羽口	D14-1/B炉1	1	覆土	(7.7)	(4.4)	(2.3)	43.8	－	
〃	7	〃	埋蔵	B90	149	Ⅱ	－	7.7	2.3	65.1	－	分析試料M5
〃	8	〃	埋蔵	D14-1	647	Ⅳ	－	(8.4)	(2.8)	39.9	－	分析試料M4
〃	9	〃	埋蔵	D14-1/B炉2	(1)	炭	－	5.5	1.7	28.7	－	分析試料M1
〃	10	〃	埋蔵	D14-1/B炉2	(2)	炭	－	(4.8)	1.7	15.7	－	分析試料M2
〃	11	〃	埋蔵	D14-1/B炉2	(3)	炭	－	－	(2.3)	12.5	－	分析試料M3
V-49	12	40	鍛滓	D13	41	Ⅳ	10.5	9.8	3.8	343.7	84	分析試料FJ-2
〃	13	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	81・87	Ⅳ	17.1	9.7	3.8	633.7	1337	分析試料FJ-5
〃	14	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	28(5)	Ⅳ	7.5	10.6	4.7	321.6	1320	分析試料FJ-3
〃	15	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	34(13)	Ⅳ2′	6.7	12.0	4.4	364.2	1326	分析試料FJ-4
〃	16	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	35(14)	Ⅳ2′	7.2	8.9	2.3	185.7	1327	
〃	17	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	36(15)	Ⅳ2′	5.3	8.5	2.4	142.7	1328	
〃	18	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	78	Ⅳ	8.8	6.4	2.0	112.6	1329	
〃	19	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	30(7)・32(9)	Ⅳ	6.5	7.6	3.8	197.8	1322	
〃	20	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	79	Ⅳ	4.9	4.6	3.5	40.1	1330	
〃	21	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	27(4)	Ⅳ	5.3	4.8	3.5	55.8	1319	
〃	22	〃	鍛滓	D14-1/第古遺物集中	29(6)	Ⅳ	6.8	4.6	3.7	68.7	1321	
〃	1	〃	薄板状鉄片	D14-1/B炉1	1	覆土	4.0	3.5	0.3	5.8	－	分析試料FJ-1(図版40上段左端)

＊遺物番号の( )は取上げ番号を表し、( )だけのものは取上げ番号と遺物番号が同じものである。＊金%は金属製品の保存処理番号を表す。



図V-48　金属生産関連遺物（1）



図Ⅴ-49　金属生産関連遺物（2）

5　木製品等

令和４年度5,627点、５年度361点の木製品（5,951点）・漆製品（33点）・繊維製品（４点）が出土し、うち164点を掲載した。掲載木製品等は舟敷、舷側板、櫂、鞘、刀子、矢柄、中柄、漆塗椀、曲物、樽、折敷、箱物、箸、串、捧酒箸、織機受糸木、下駄、木札、炉鉤、砥石台、浮子、建材、柱、杭、布、縄などである。掲載木製品等一覧表には名称、出土地点、層位、木取り、樹種、焼け、樹皮、計測値等の詳細を示した。

掲載木製品152点について樹種同定を行った（付編において記載しDVD-ROMに収録）。うち45%にあたる69点がスギであり、曲物、箱物、木札、箸等に使用されている（木製品等樹種別集計表参照）。舟敷のカツラは、各地のアイヌの伝承においても、ヤチダモと共に舟材に適しているとされている。木の大きさや材質、また入手しやすさなどからであろう。刀の鞘はホウノキが想定される。ホオノキは柔らかく刀身を傷つけないことや加工しやすいこと、また油分が少ないことなどから鞘の材に適しているとされ、古来ホウノキが使用されている。漆塗椀のブナは、前回の調査報告（北埋調報 290）においての、汎用品はブナ材であるという報告と整合する。漆塗椀については標津町教育委員会　小野哲也氏にご教示をいただいた。

D柵１

１は約13cm角の芯持材の柱である。幅約１～２cm、深さ約1.5～２cmの枘孔が４か所ある。２は丸杭で、先端は連続する８面削りである。樹種は共にアスナロ。

B掘込２

３はブナ材を横木取りした漆塗椀である。外面は黒地に赤漆による簡易な植物文を３方に配し、内面は黒地に赤漆が塗られている。黒漆は堅牢に塗り重ねられたものではなく、廉価な日常什器と考えられる。口唇と高台の一部が欠損している。４はハリギリの柾目板を使用した板綴舟の舷側版で、縄で綴じるための方形の孔を２ヵ所有する。５はスギの柾目板２枚を合せた小型の樽蓋である。中央に栓の孔が穿たれ、側面には固定するための木釘が４ヵ所残る。倒立して出土した３漆塗椀の中より出土した。

D13木製品集中

６は漆塗皿の破片である。ブナ材を横木取りし、内外面とも黒地に赤漆が塗られている。７はスギの柾目材の漆塗容器の蓋で、両面に黒漆が斑に残存する。８は両面に黒漆が塗られたスギの箆状製品である。９はスギの建材で焼けており、鉄釘が残る。10はヤナギ属の丸杭で、先端は連続して交差する３面削りである。11はクリの割杭で、1/6分割した材を６面削り全体を整形し、先端は連続して交差する５面削りである。12はタラノキの割杭で、先端は主として連続して交差する３面削りで補助は１面削りである。13はカエデ属の材を1/12分割した割杭で、先端は主として４面削りで補助は２面削りである。14は曲物蓋（底）である。15は中央に孔を有する曲物蓋である。16は柄杓の柄部分で、先端付近に孔を有する。17は桶の側板である。18は折敷の底板で木釘孔が１か所あり、筋が引かれている。19は箱物の部材である。角に抉りがあり、木釘が１ヵ所残る。14～19の樹種はスギ。20～24は箸である。断面は20･21が方形、22は楕円、23･24は円形である。樹種は20･21･23スギ、22カツラ、24アスナロ。25は小型で小判形の連歯下駄である。前壺はほぼ中央に、後壺は後歯より前に穿たれている。樹種はモクレン属。26は織機の受糸木である。幅約２cm、厚さ約１cmの板目材の片側に1.5～２cmの間隔、反対側には0.5～１cmの間隔の刻みがある。樹種はスギ。27は炉鉤で全体に焼けがある。樹種はカエデ属。28は砥石を嵌める溝のある砥石台で、全体に焼けがある。樹種はアスナロ。29は先端が箆状の細板で抉りがある。樹種はヤナギ属。30･31は先端の両縁に抉りがある木札である。32は箆状の細板である。33は刻みのある細棒である。30～33の樹種はスギ。34は刻みのある丸木の半割材で、樹種はモクレン属。35は1/16分割の割材で、樹種はマツ属。36は切断されたスギの板材である。37は先端が連続する３面削りの丸木材である。樹種はモクレン属。38～43は樹皮製品である。38･39は孔が穿たれている。40は結束用のバンド、41～43は樹皮巻であるが、41は焼けており灯火用であろう。44～46（写真掲載）は黒地に赤漆が塗られた布であるが、用途は不明である。

D14-1 木製品集中

47～49は漆塗椀である。いずれも外面は黒漆、内面は黒地に赤漆が塗られている。47は植物文が1ヵ所残る。高台の一部と口縁部から胴部にかけ欠損する。48は全体に植物模様が施され、口縁部が欠損する。52舟敷の上部より出土している。49は無文で口縁部が欠損する。いずれも日常什器であろう。樹種はブナ。50は黒漆が台表に残る小判形の連歯下駄である。前壺はほぼ中央に、後壺は後歯より前に穿たれている。刃物痕が台表裏ともに残る。樹種はモクレン属。51は生漆が塗られた折敷の底板を転用したもので、片側に3～5mmの間隔で23ヵ所の刻みがあり、離れて2ヵ所の刻みがある。織機の受糸木の可能性がある。樹種はスギ。52は板綴舟の舟敷（丸木舟）である。半割したカツラの大木から作り出している。全体の約1/4程度と推定され、平らな舟底が確認される。縁は波形を呈しており、縄で舷側版を綴じるための孔が穿たれている。孔は短径約2cm、長径約2.5～4cmの楕円形や長方形で22ヵ所が確認される。孔は内側から広く浅く削り、中央部で貫通させている。8ヵ所の孔に縄が残り、2本残る孔もみられる。縄は斜めや横を向いて残っており、2方向と縛られていたことを示している。内外面に刃幅2.8cmと4.6cmの手斧のはつり痕が多数みられる。放射性炭素年代測定において14世紀初頭～14世紀末の結果が出たが、実際に伐採された年代はやや新しい年代と考えられる（詳細は付編参照）。53は舟敷直下、54も舟敷付近から出土しており、樹種も同じカツラであり舟敷の一部と思われる。55は板目材から作り出した早櫂で、水掻き部の幅広いパドル形である。1/2程度が破損しており、先端に焼けがある。樹種はモクレン属。56は両角に抉りのある板材で、建築部材と思われる。焼けがある。樹種はアスナロ。57はスギの角材を切断したもので、建築部材と思われる。焼けがある。

立杭1～8：58は立杭5の丸杭で、先端は連続して直交する4面削りである。先端に打ち込み時の潰れがある。59は立杭1の丸杭で、先端は連続して直交する4面削りである。60は立杭3の丸杭で、先端は1面削りを主とし補助は2面削りである。61は立杭8の丸杭で、先端は連続して直交する3面削りである。63は立杭6の丸杭で、先端は連続して交差する3面削りを主とし、補助は1面削りである。64は立杭4の割杭で、先端に主とする2面削りと補助の1面削りがあり、さらに先端に補助の1面削りがある。65は立杭2の割杭で、先端は連続して交差する4面削りである。66は立杭7の割杭で、先端は連続して交差する3面削りである。樹種は58･59モミ属、60-61ヤナギ属、63･64･66トネリコ属、65ミズキ属。

62は丸杭で、先端は連続して交差する5面削りである。樹種はコナラ属。67は角杭で、先端は連続して直交する4面削り、さらに先端に1面削りがある。樹種はモクレン属。68～71は曲物の部材で、68･69は把手、70･71は蓋（底）である。樹種は全てスギ。72は桶の側板で孔が穿たれている。樹種はアスナロ。73～75は樽の部材である。73は蓋（底）で全体に焼けがある。74･75は栓で、74には孔が穿たれている。樹種は全てスギ。76～82は箱物の部材とした。76は底板で濃淡のある墨跡が残る。77は細板の縁に8ヵ所の木釘（孔）があり補強材と思われる。焼けがある。78は突起部に2か所の木釘がある板状の小片で、固定するときの補強材と思われる。79は底板や側板を切断したもの。80は方形の孔が2ヵ所ある薄い柾目板の小片である。81は先端が切り出された細板に4ヵ所の木釘（孔）があり補強材と思われる。82は細角棒に2ヵ所木釘があり、台の縁であろうか。樹種は全てスギ。83～87は箸である。83は断面が方形で刻みを持つ。84は断面が長方形、85は断面が円形、86･87は断面が楕円形である。樹種は83･85～87スギ、84アスナロ。88～90は串である。断面は不整長方形で樹種は全てスギ。91･92は薄いスギの柾目板を箆状に加工したもの。93･94は浮子で、先端に抉りがある。樹種は93アスナロ、94カエデ属。95は矢の中柄で、両端部は細く体部は太く、鏃装着部と茎部は明瞭である。樹種はノリウツギ。96～99は矢筈付近の矢柄である。96は矢羽を装着するための樹皮が巻かれている。樹種は96･98モミ属、97スギ、99アスナロ。100～102は刀子の柄である。100は茎が残存する。101は茎の装着痕がなく未使用と思われる。102は長さ調整のために切断されたものであろう。

樹種は100アスナロ、101カエデ属、102モクレン属。103はブナの分割材から作り出された縦槌の頭部であり、約1/3が残存する。104は竹製の編針で径５mmの孔を有する。105～113は木札である。細板の両縁に抉りがある。105～109は墨書が確認されるが、部分的なため文字の判読は困難である。樹種は全てスギ。114は捧酒箸である。先を幾分尖らせ、下部は先端に向って徐々に尖らせている。シロシが全体に施されている。シロシの溝は横筋を入れた後、上から削り取り作っているが、筋の両側を斜めに削り取った溝と、片側だけ斜めに削り取った溝があり、それぞれ真直ぐと右下がりの斜めがある。間隔７mmの４本目までと６・７本目は真直ぐの両側削り、８・９本目は斜めの両側削り、５本目は真直ぐの片側削り、10本目は斜めの片側削りである。11～13本目は斜めの筋だけで削り取っておらず、また先端を整形していないことから制作途中と考えられる。７本目の溝と13本目の筋で折れているが、意図的に折られた可能性がある。樹種はヒノキ科。115･116は篦状の細板である。115は先端を篦状に削っている。116は下部を細く削り、先端を切り出している。樹種は共にスギ。117～120は刻みのある細棒である。119は焼けて先端は消失しているが串の可能性がある。樹種は117スギ、118ハリギリ、119カツラ、120ノリウツギ。121～123は板状の加工品である。121はアスナロの柾目材の先端を尖らせたもの、122はクリの板目材を加工したもの、123はスギの薄い板目材の先端を削り尖らせている。124～126は細い棒状の加工品である。樹種は124サクラ属、125ハコヤナギ属、126不明環孔材。127はスギの板材で箱物の部材か。128～131は丸木材で、128･129は先端１面削り、130･131は先端２面削りである。樹種は128カエデ属、129トネリコ属、130モクレン属、131ヤナギ属。132～135は割材で、132～134は先端１面削り、135は先端２面削りである。樹種は132ミズキ属、133ハコヤナギ属、134ハシドイ属、135カエデ属。136～138はスギの薄柾目板で曲物の原材料であろう。139は樹皮を細い帯状にしたもの。140（写真掲載）は幅１cm、長さ69.7cmの二本撚りの縄である。

E地区11-６

141は孔があり道具等の一部であろう。残存状態が極めて悪く樹種は不明。

D14－１ 木製品集中（④14-１地先）

立杭９～19：142は立杭９の丸杭で、先端は連続して交差する３面削りで、抉りが１ヵ所入っている。143は立杭10の丸杭で、先端は交差する２面削りを主とし、補助は１面削りである。144は立杭11の割杭で、1/12分割した割材の一辺を斜めに削り尖らせている。145は立杭12の丸杭で、先端は連続して交差する３面削りを主とし、補助は２面削りである。146は立杭13の割杭で、樹皮が残る板目材の一辺を斜めに削って尖らせている。147は立杭14の丸杭で、先端は交差する２面削りを主とし、補助は２面削りである。148は立杭15の丸杭で、先端は直交する２面削りを主とし、補助は３面削りである。149は立杭16の丸杭で、先端は直交する２面削りを主とし、補助は１面削りである。150は立杭17の丸杭で、先端は直交する２面削りを主とし、補助は１面削りである。151は立杭18の割杭で、樹皮が残る板目材の一辺を斜めに削り尖らせている。152は立杭19の丸杭で、先端は連続して交差する５面削りである。樹種は142モミ属、143ブナ属、144･146･150･151コナラ属、145･149モクレン属、147ハコヤナギ属、148マツ属、152カエデ属。

153は花文の漆製品で、花弁は９枚と推定される。黒地に赤漆が塗られており、建築物等の装飾と思われる。樹種はハコヤナギ属。154は板材の切断品で建築材と思われる。樹種はヒノキ科。155は曲物の側板で、３枚の薄柾目板を樹皮で綴じ合わせている。156は小型の曲物の蓋（底）、157は樽の栓、158は柾目板に木釘孔が４か所ある。箱物の底板と思われる。159は断面が円形で両端が先細る箸である。160は矢柄である。全体の約1/3程度と推定され、矢筈より約10cmの部分に矢羽を装着するための樹皮が巻かれている。155～160の樹種はスギ。161は刀子である。刀身の約2/3が残存し、柄はヒノキ科の板目材から作り出している。162は刀の鞘である。モクレン属（ホオノキを想定）の薄い柾目板を２枚貼り合わせ、樹皮製バンド19ヵ所（15ヵ所が残存し、４ヵ所の痕跡あり）と鞘尻を木釘１ヵ所で留めている。帯執は長さ13.9cm、厚さ1.3cm

の板目材から作られて溝にはめ込まれており、樹皮製バンド３ヵ所で固定されている。紐を通すための突起が２か所作り出されていると推定されるが、１ヵ所のみが残存する。刀身の重ねが十分にとられていないようにも思われ、祭祀用の可能性も考えられる。**163**は両縁に抉りのあるスギの木札である。**164**は両端に径８mmの孔を２か所有する菱形の細板で用途は不明である。樹種はカエデ属。（菊池）

舟敷について

舟敷片について若干の所見を記す。舟敷片には以下の加工が加わっている。船底が平底に、舷側に二～三面の面取りが施されている。これまでの出土例・現存民族例に拠れば（由良1995）、舷側の面取りは舳・艫部分寄りの加工であることから、この舟敷片は舳・艫に近い中央部の破片と考えられる。船縁には顕著な波状摩耗が形成されていることから舟敷の使用が長期にわたったと考えてよい。残存する舟敷片の両端は、切断痕がみられず、破断面が著しく磨滅していて、中央部における船底最大幅が約20cmであることから船幅において1/2以下の残存状態である。これらより相当期間風雨にさらされて腐植した状況であったことがわかる。

また、摩耗により船縁端面が波状（綴孔の上が凸、綴孔間は凹）になっていることが観察される。これは、舷側板綴孔と舟敷綴孔に縄を縫合する縄を通す回数が２回以上となることによって綴り方向が２方向となって、「レ」字状に連続した綴りになる場合に生じる。

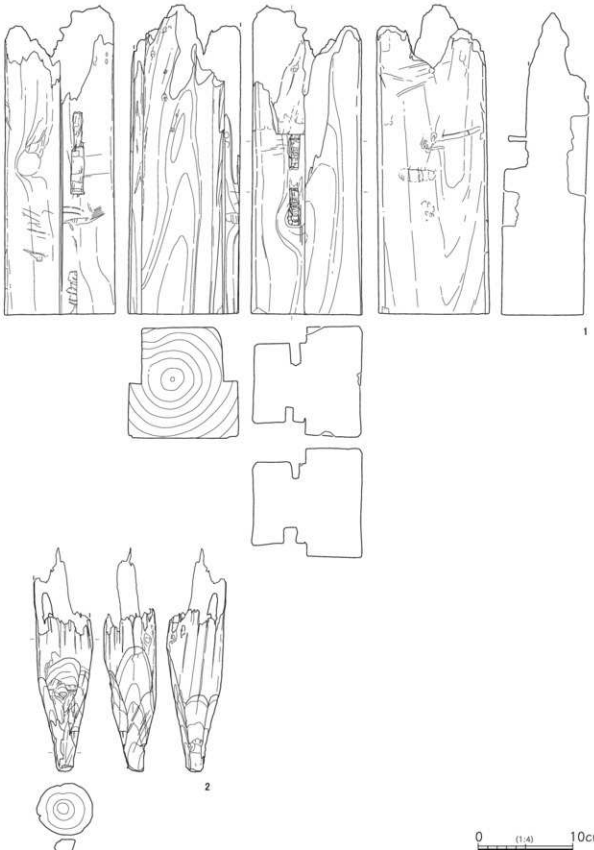
アイヌ民族例に因る「舟の送り」は、舟敷の舳・艫を本体から切断し、分離された舳・艫を川縁に長期置くという行為である（出利葉1993、由良1995）。この舟敷片には舳・艫を分割したような切断痕跡はない。くわえて、舟敷片上位の遺物は摩耗した越前擂鉢片・口縁部が欠失した漆塗り椀・曲げ物底・アワビ貝殻があり、これらは５cm位舟敷片から浮いた状態で出土した。舟敷片の周辺や上層からも陶磁器片・骨角器・木製品・動物遺存体など多様な出土がある。なお、舟敷片底面は断面図（図Ⅳ-15上から２番目）において標高4.40mのⅣ層中程の層準にあり、標高4.33mには瀬戸美濃天目碗（図Ⅴ-14　ｂ２・ｂ５）が、上位の層準には16世紀末～17世紀初めの陶器も含まれることから、舟敷片は16世紀中葉以降～17世紀初めに沢状地形の粘質土中に埋没したと考えられる。従がって、舟敷片が板綴舟として機能していたのは16世紀中葉以前となる。

なお、遺跡等出土例には完形が多くあり、降下火山灰直下に並んで出土する例（苫小牧市教委1966）もある。これらは前述によれば偶発的に埋没（「舟の送り」を受けない）したものと考えられる。舳・艫が分割切断された事例は千歳市美々８遺跡のⅠB-１層出土例：近世アイヌ文化期（北埋調報102）でみられ、ユカンボシC15遺跡のⅠB-１～２層出土例：近世アイヌ文化期～中世アイヌ文化期の擦文文化期（北埋調報192）では分割切断されたと思われる端面を持つ舳・艫が、ⅠB-３層出土例：10世紀中葉降下のB-Tmを挟む擦文文化中期後半では分離された舳・艫がみられる。これらより舳・艫の分割切断を伴う「舟の送り」が中世アイヌ文化期には行われていて、擦文文化中期後半まで遡る可能性がある。アイヌ民族の「舟の送り」事例、分離した舳・艫とそれに関わる一括資料が備わる事例、これらの増加が望まれる。

ところで、「イタオマチップ（板綴船：縫合船である準構造船）」は、『松前蝦夷記』『縄綴之舟』（松前町史編集室　1974）、『松前嘉広宛書状（控）』「縄とち船」（北海道開拓記念館　1984）、『国日記』「縄閉船・縄とち船」（青森県史編纂近世部会　2001）などと呼び近世和人は「綴じる材料」に着目した。アイヌ人は「綴じる船材形状」に着目して呼称するいっぽうで、「カリンパテシカチップ（桜皮で綴じた舟）」と「綴じる材料」に着目して呼称する場合もある。

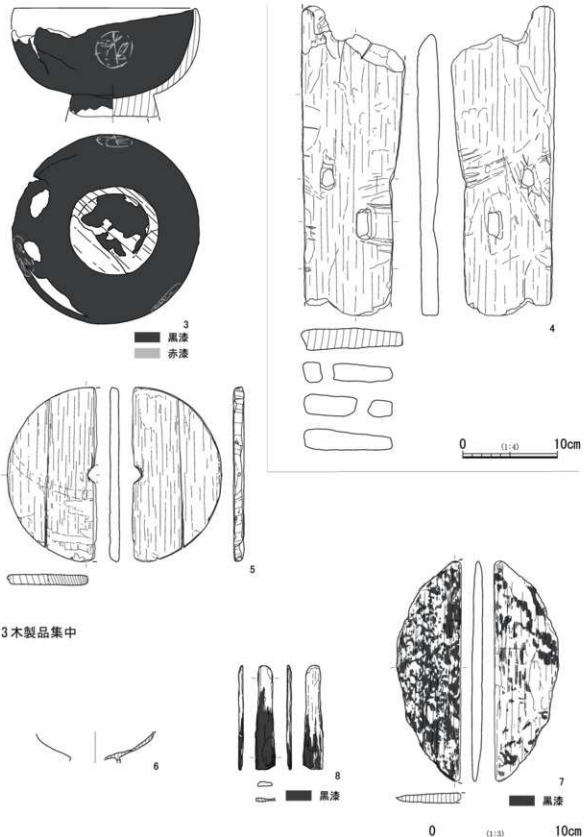
舟敷片は分割切断痕跡がなく破断面にかなり腐朽がみられること、アイヌ民族例の「舟の送り」と合致しないこと、上位遺物が舟敷片に伴う一括遺物群ではないこと、から舟敷片の埋没に関わり特定的な人為はみられず、アイヌ民族の「舟の送り」にも当たらない。よって、「舟の送り儀礼の痕跡がみられた」（関根2023、128頁）は誤りで、アイヌ民族の「舟の送り」に関する理解に乏しい。この記述・それに関わる写真の掲載が報告書刊行前に無断・無引用でなされていた、極めて遺憾である。（鈴木）

D柵1

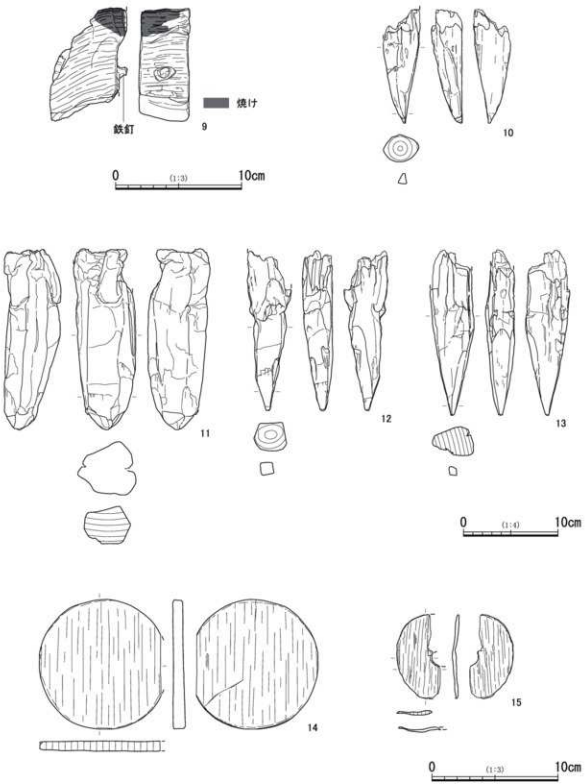


図V-50　木製品等（1）

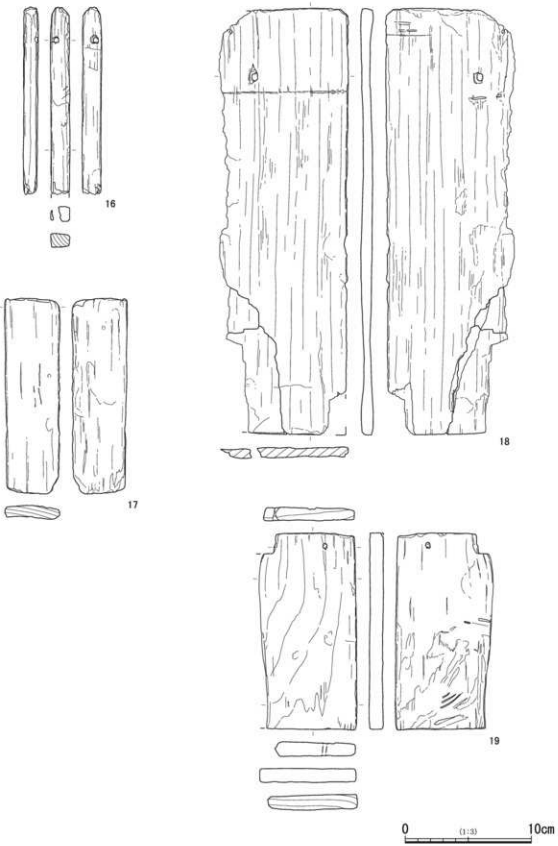
B掘込2



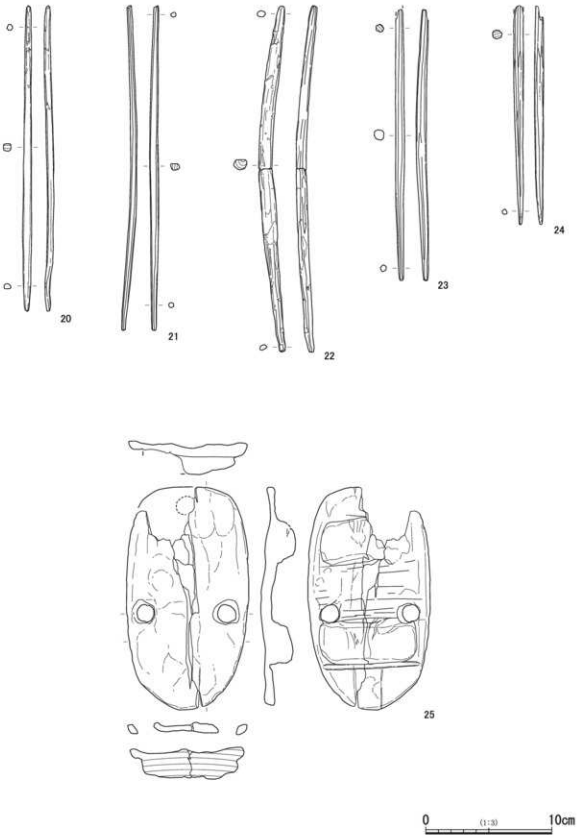
図V-51 木製品等 (2)



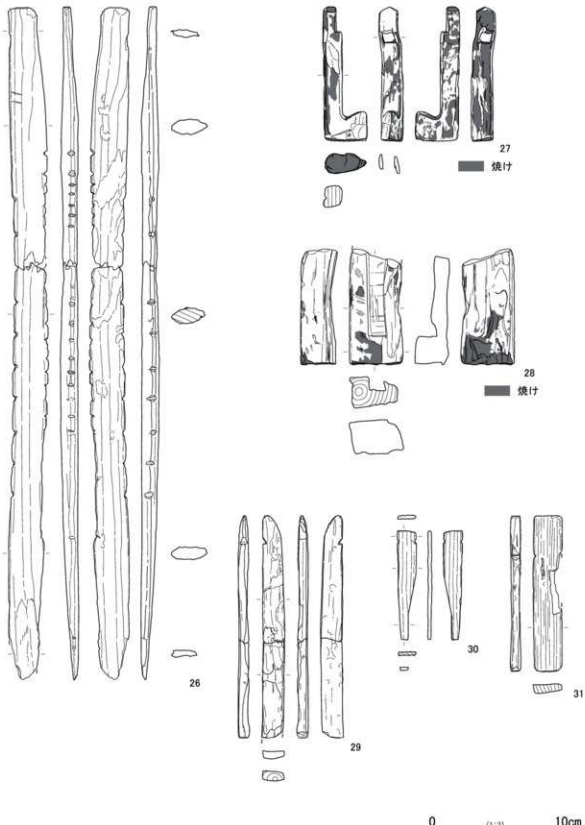
図V-52　木製品等（3）



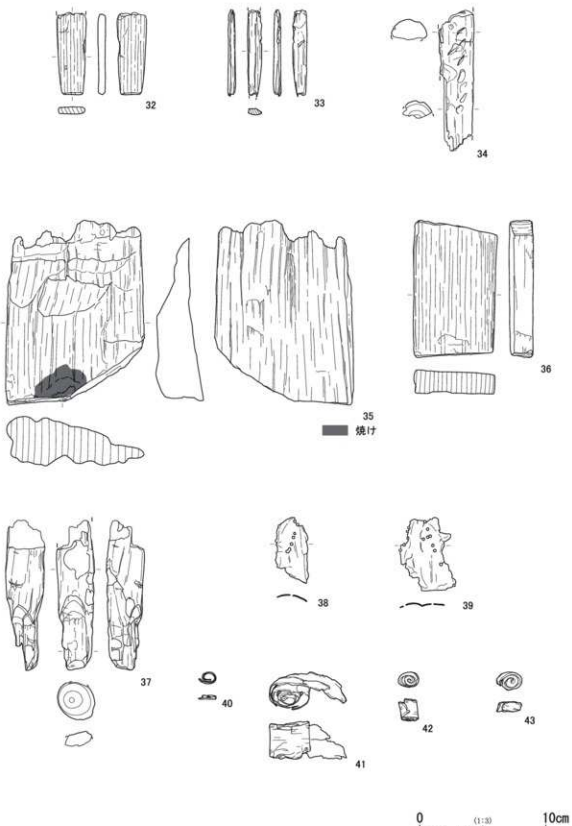
図V-53 木製品等 (4)



図Ⅴ-54　木製品等（5）

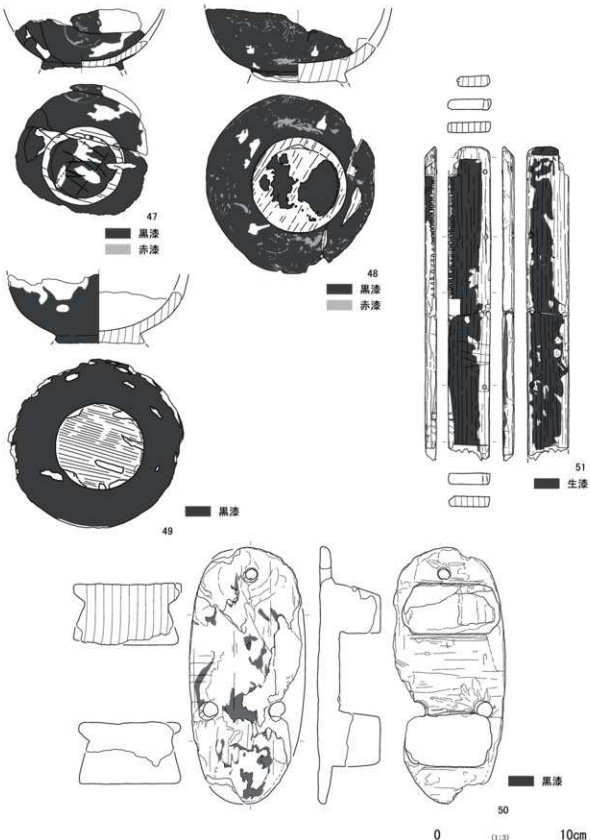


図V-55 木製品等 (6)

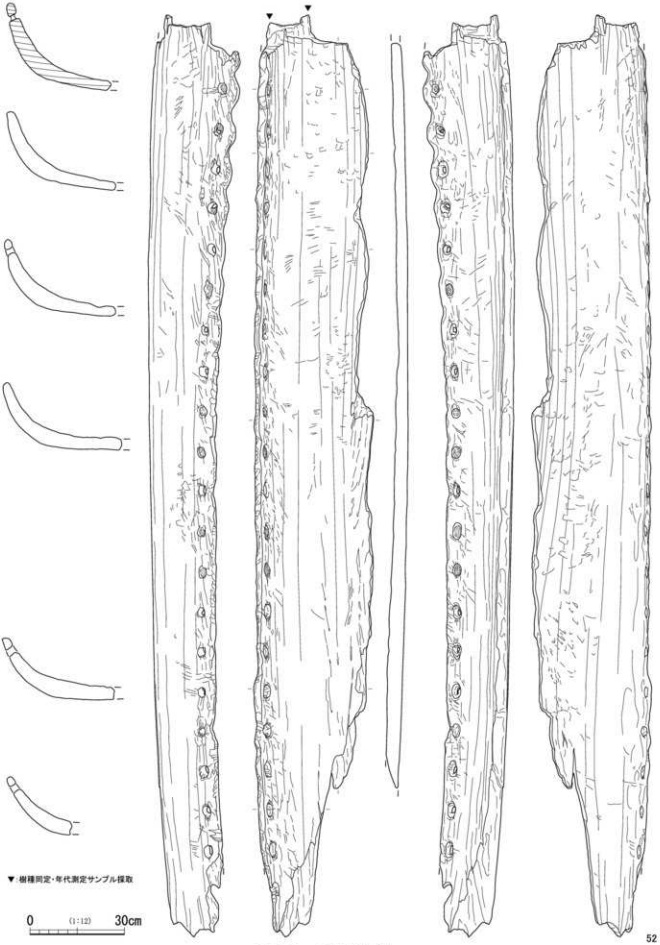


図V-56　木製品等（7）

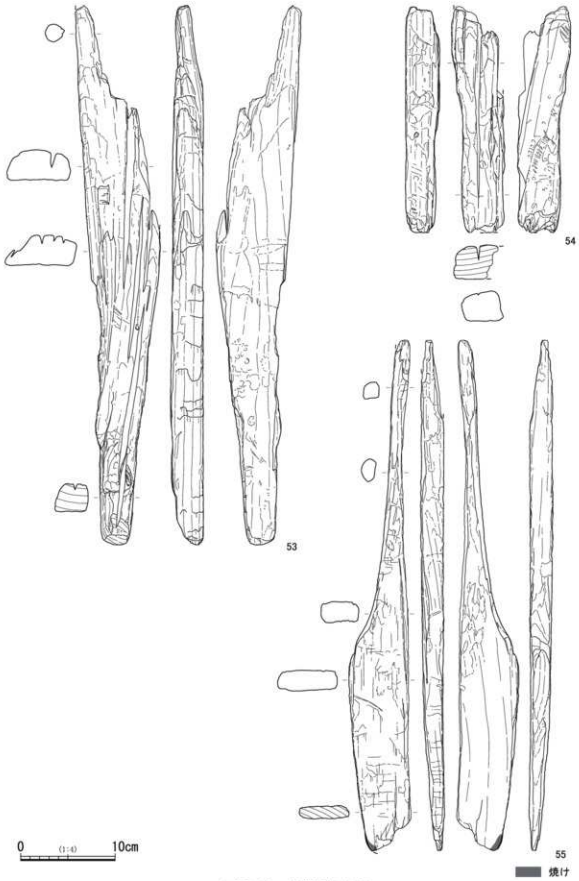
D14-1木製品集中



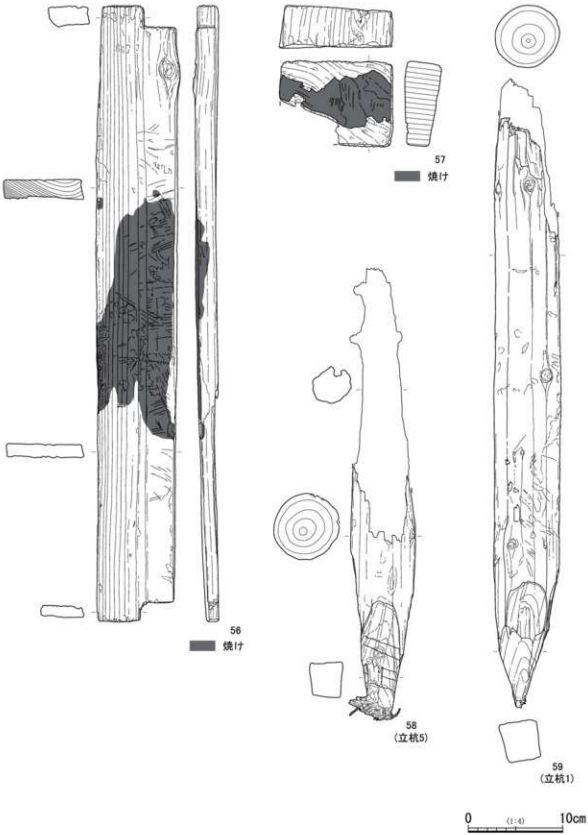
図V-57 木製品等 (8)



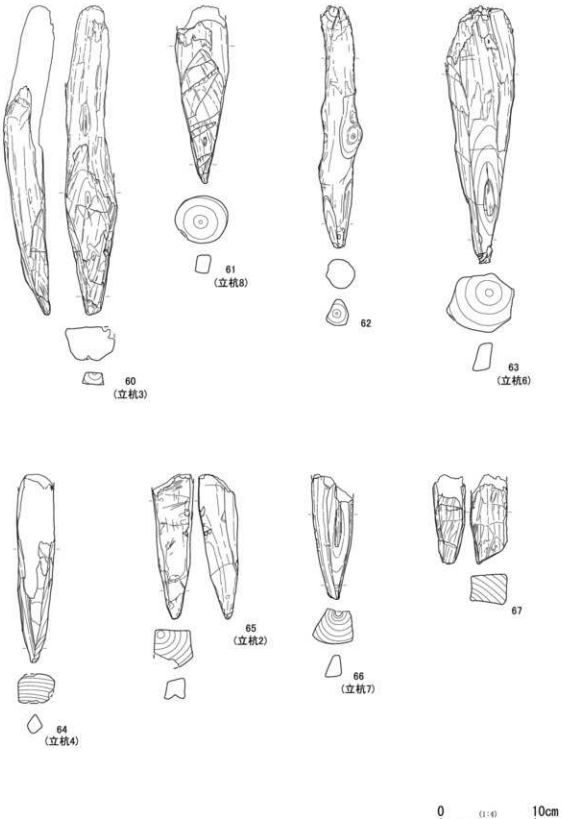
図V-58　木製品等（9）



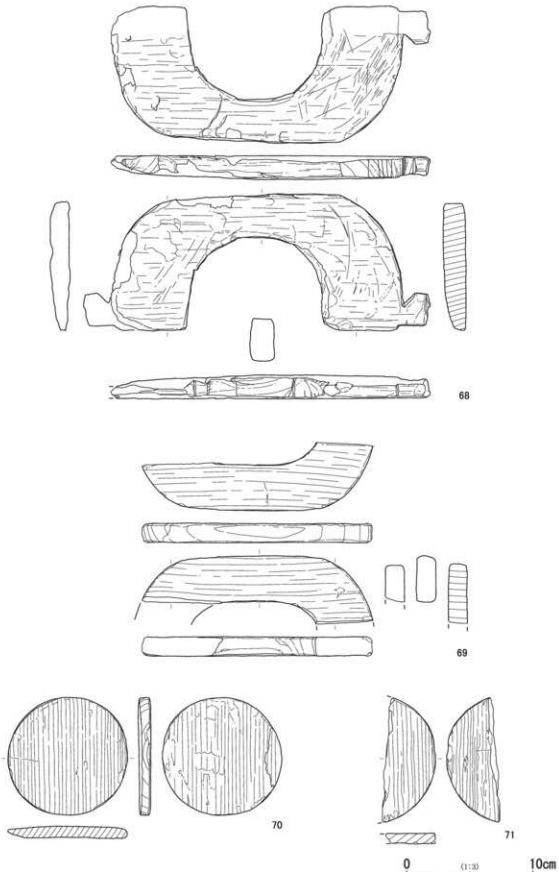
図V-59 木製品等（10）



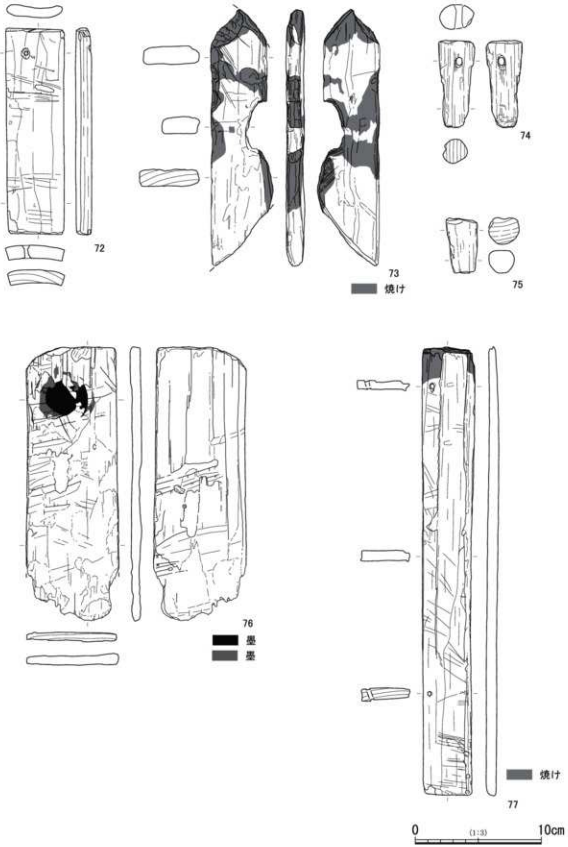
図V-60　木製品等（11）



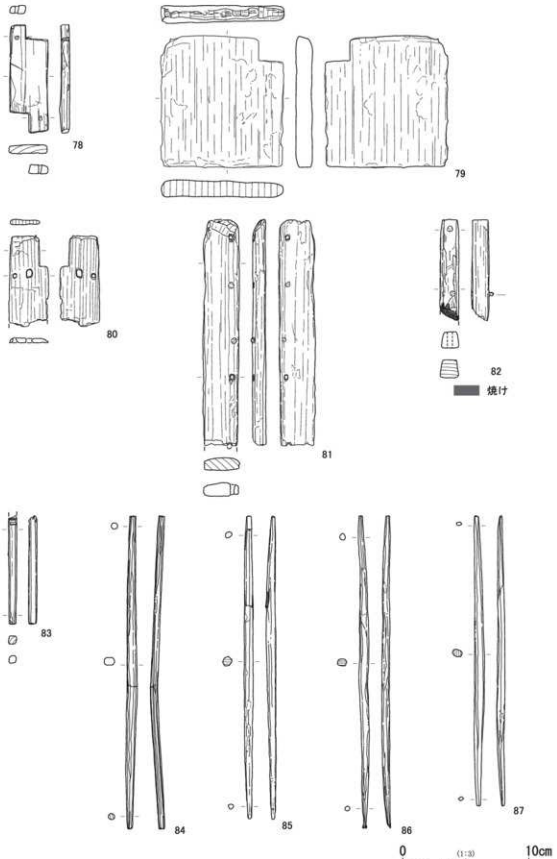
図V-61 木製品等 (12)



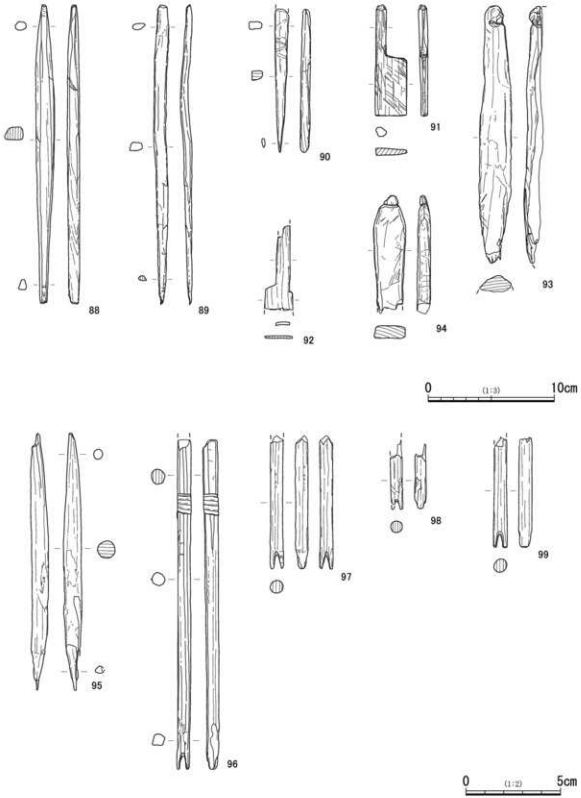
図Ⅴ-62　木製品等（13）



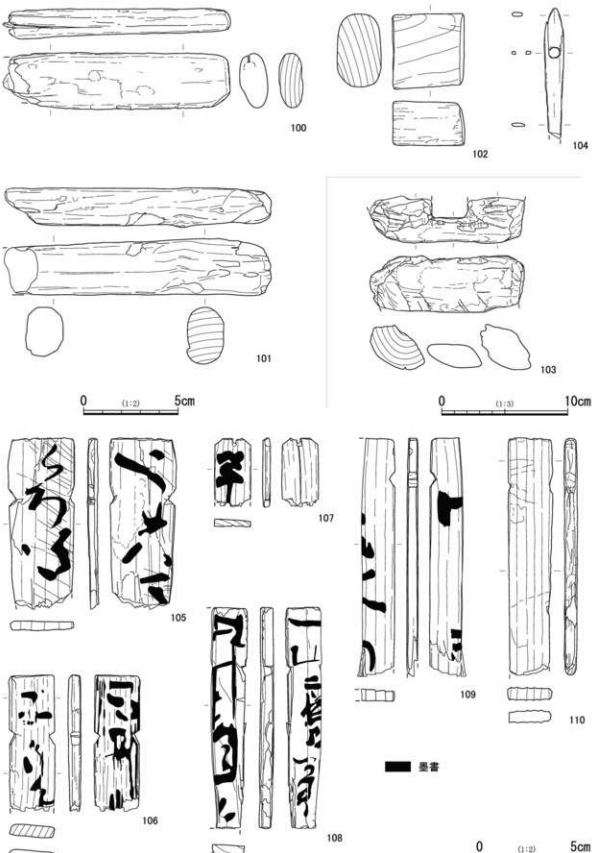
図V-63 木製品等（14）



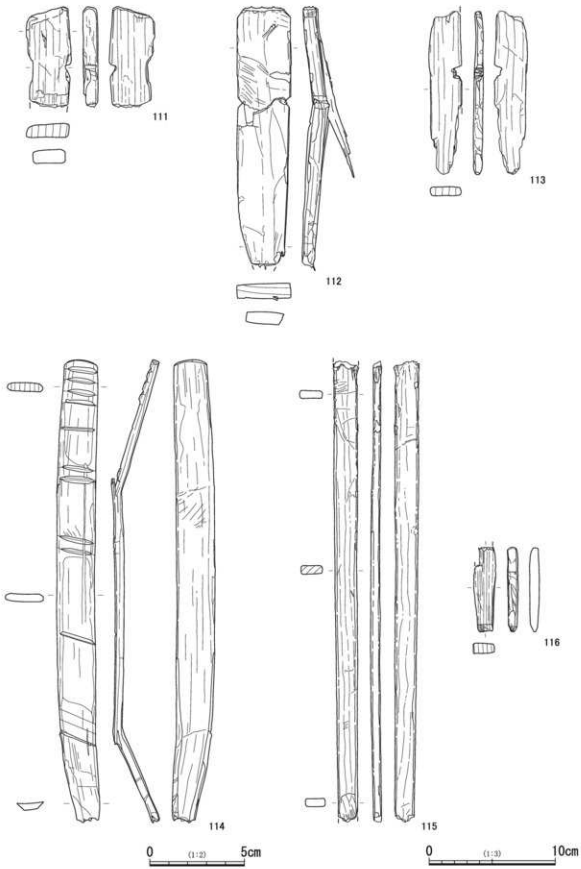
図V-64　木製品等（15）



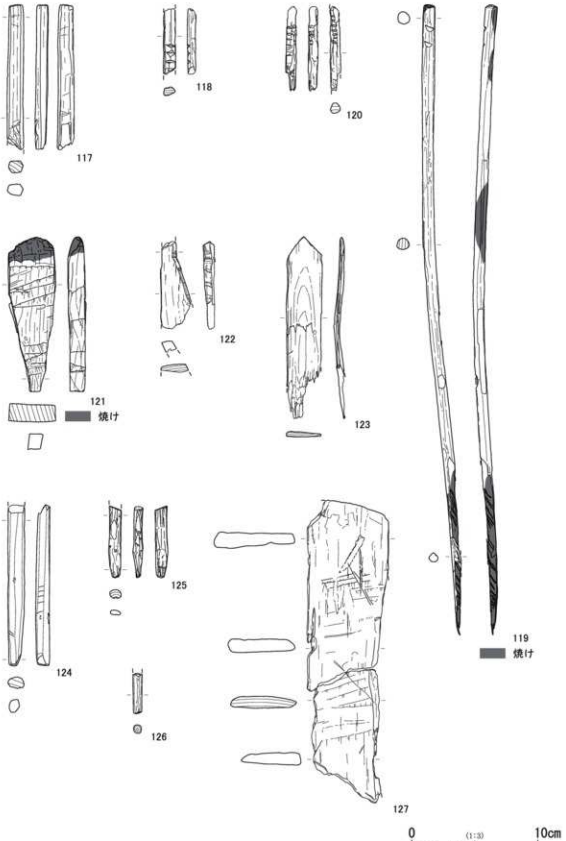
図V-65 木製品等（16）


100
101
102
103
104
0 (1:2) 5cm
0 (1:3) 10cm
105
106
107
108
109
110
墨書
0 (1:2) 5cm

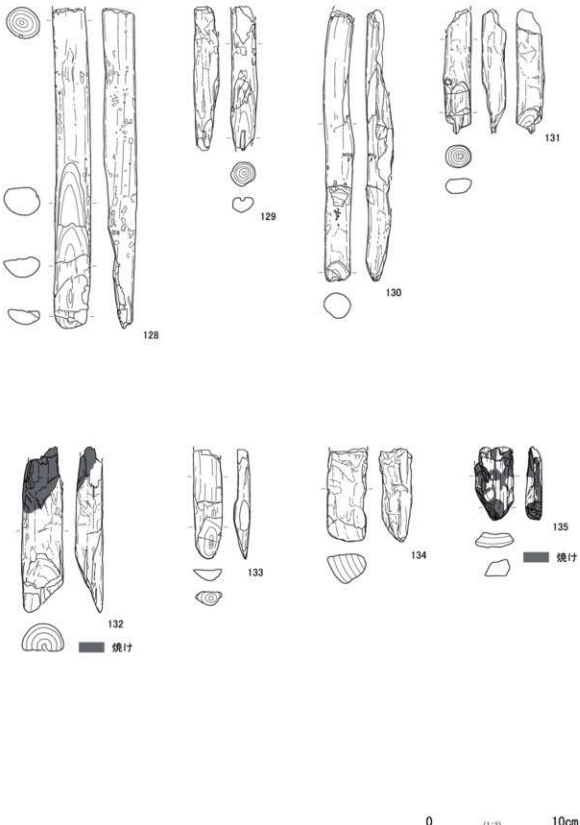
図V-66　木製品等（17）



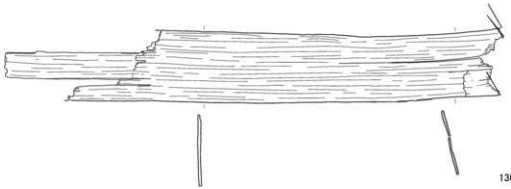
図V-67 木製品等（18）

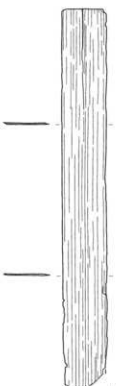


図Ⅴ-68　木製品等（19）



図V-69 木製品等（20）

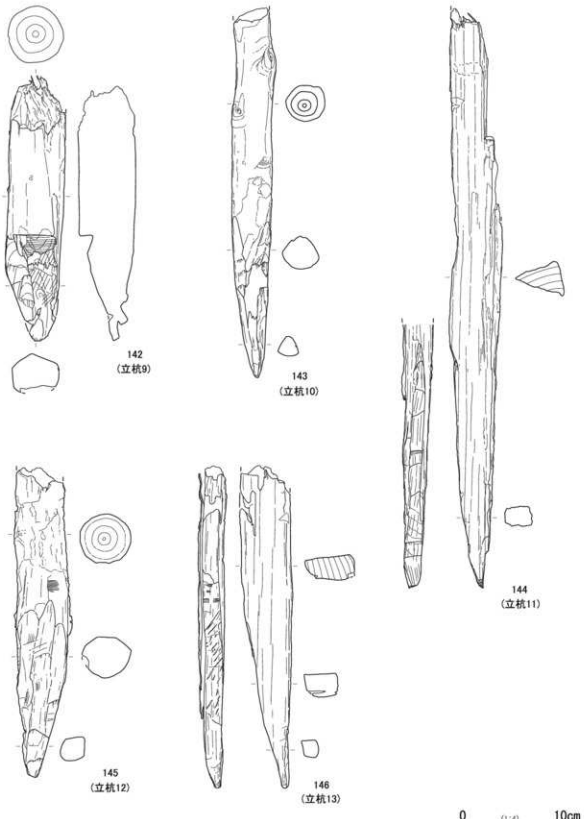




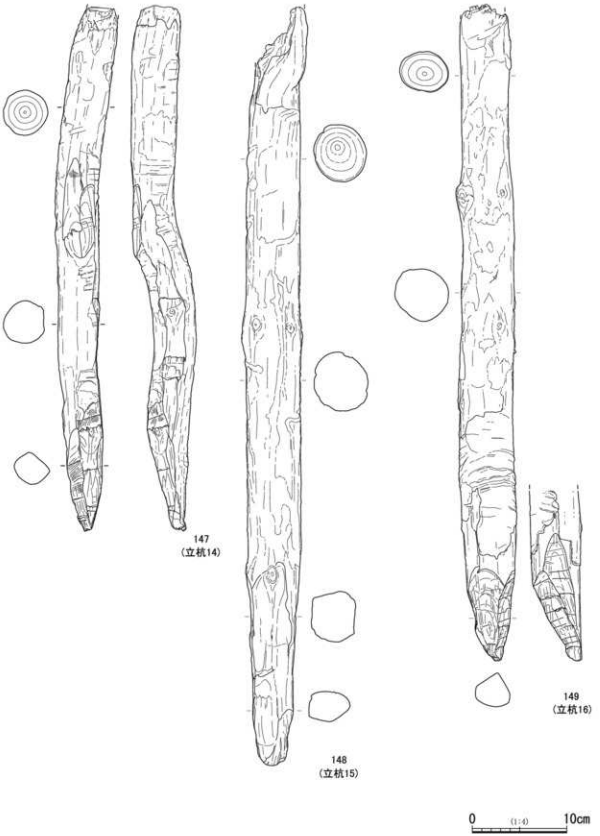
E地区11-6

図V-70　木製品等（21）

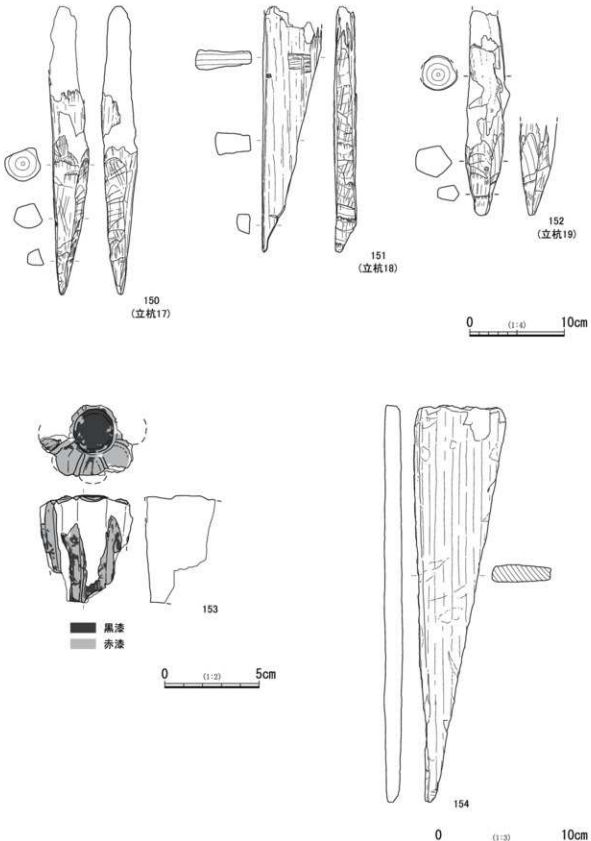
D14-1木製品集中（④14-1地先）



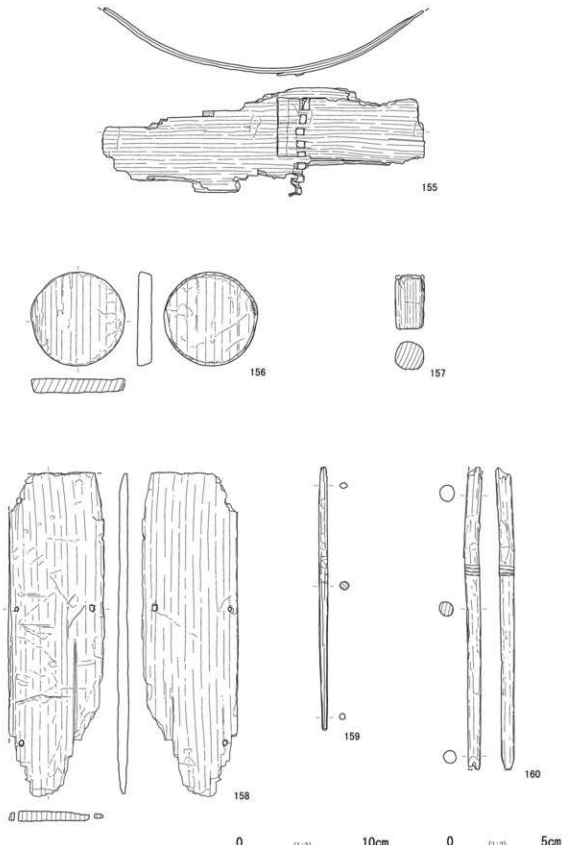
図V-71 木製品等（22）



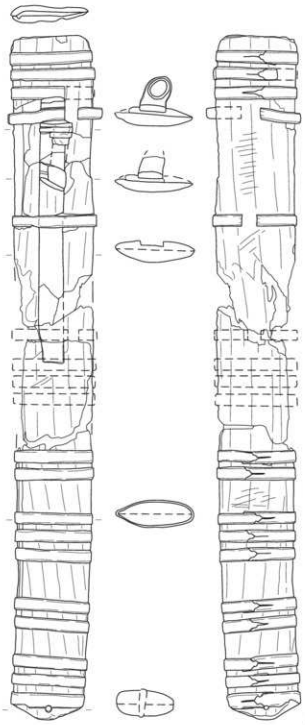
図Ⅴ-72　木製品等（23）


150
(立杭17)
151
(立杭18)
152
(立杭19)
0 (1:4) 10cm
153
黒漆
赤漆
0 (1:2) 5cm
154
0 (1:3) 10cm

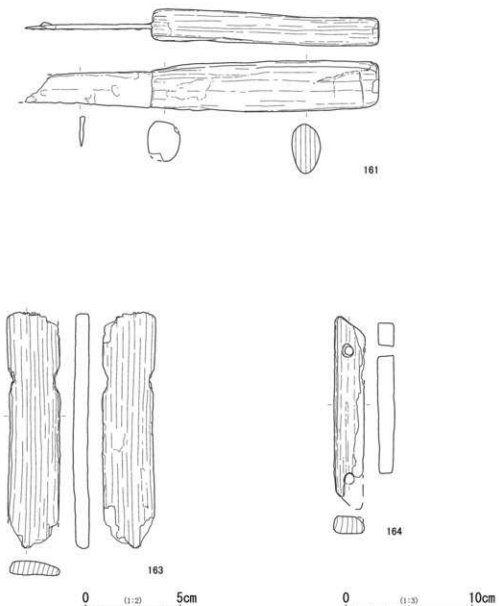
図Ⅴ-73 木製品等 (24)



図V-74　木製品等（25）



図V-75 木製品等 (26)



図Ⅴ-76　木製品等（27）

表V-24 掲載木製品等一覧表（1）

※漆塗椀計測値:器高/口径/底径

挿図	掲載番号	図版	名称	地区地番/遺構	遺物番号	層位	点数	木取り	樹種	技け	概度	縮尺	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
V-50	1	41	建材(柱)	D種1	1	皿	1	芯持	アスナロ			1/4	32.7	11.8	11.7	
〃	2	〃	丸杭	D種1	2	皿	1	丸木	アスナロ			1/4	23.7	6.2	5.5	
V-51	3	口絵5	漆塗椀	B層込2	3	IV	1	横木	ブナ			1/3	14.4	8.6	—	
〃	4	42	粘側板	B層込2	1	IV	1	柾目	ハリギリ			1/4	32.8	11	2.4	
〃	5	〃	樽蓋	B層込2	4	IV	1	柾目	スギ			1/3	13.8	7.1	0.9	
〃	6	口絵5	漆塗皿	D13本製品集中	73	IV	2	横木	ブナ			1/3	9.2	2.1	4.0	
〃	7	〃	漆塗容器蓋	D13本製品集中	76	IV	1	柾目	スギ			1/3	17.5	7.1	0.8	
〃	8	〃	漆塗椀	D13本製品集中	74	IV	1	板目	スギ			1/3	8.3	1.6	0.4	
V-52	9	42	建材(角材)	D13本製品集中	24	IV	1	柾目	スギ	○		1/3	9.0	6.1	4.0	
〃	10	〃	丸杭	D13本製品集中	6	IV	1	丸木	ヤナギ属			1/4	12.3	3.9	3.2	
〃	11	〃	割杭	D13本製品集中	7	IV	1	1/6分割	クリ			1/4	19.1	6.0	6.0	
〃	12	〃	割杭	D13本製品集中	5	IV	1	芯持	タラノキ			1/4	16.9	4.6	3.2	
〃	13	〃	割杭	D13本製品集中	8	IV	1	1/12分割	カエデ属			1/4	17.5	4.8	3.1	
〃	14	〃	曲物蓋(底)	D13本製品集中	3	IV	1	柾目	スギ			1/3	10.3	9.7	1.0	
〃	15	〃	曲物蓋	D13本製品集中	10	IV	1	柾目	スギ			1/3	6.7	3.5	0.8	
V-53	16	43	柄杓柄	D13本製品集中	21	IV	1	追柾	スギ			1/3	14.9	1.5	1.2	
〃	17	〃	樽側板	D13本製品集中	16	IV	1	板目	スギ			1/3	15.5	4.4	1.1	
〃	18	〃	折敷底板	D13本製品集中	16	IV	3	追柾	スギ			1/3	33.9	10.2	1.6	
〃	19	〃	箱物部材	D13本製品集中	20	IV	1	板目	スギ			1/3	15.6	7.8	1.2	
V-54	20	〃	箸	D13本製品集中	29	IV	1	板目	スギ			1/3	24.2	0.7	0.7	
〃	21	〃	箸	D13本製品集中	28	IV	1	柾目	スギ			1/3	25.7	0.7	0.8	
〃	22	〃	箸	D13本製品集中	55	IV	2	半割	カツラ			1/3	27.4	2.1	1.7	
〃	23	〃	箸	D13本製品集中	58	IV	1	柾目	スギ			1/3	21.5	0.9	1.0	
〃	24	〃	箸	D13本製品集中	71	IV	1	柾目	アスナロ			1/3	17.3	0.8	0.7	
〃	25	〃	漆塗下駄	D13本製品集中	1	IV	1	板目	モクレン属			1/3	17.7	9.8	2.8	
V-55	26	44	織機受糸木	D13本製品集中	4	IV	2	板目	スギ			1/3	53.3	3.6	1.5	
〃	27	〃	砂胸	D13本製品集中	2	IV	1	柾目	カエデ属	○		1/3	10.6	3.6	2.0	
〃	28	〃	紙石台	D13本製品集中	9	IV	1	芯持	アスナロ	○		1/3	9.2	4.2	2.9	
〃	29	〃	挟竹細板	D13本製品集中	18	IV	2	板目	ヤナギ属			1/3	17.6	1.9	0.9	
〃	30	〃	木札	D13本製品集中	11	IV	1	追柾	スギ			1/3	14.5	2.6	0.5	
〃	31	〃	木札	D13本製品集中	12	IV	1	柾目	スギ			1/3	12.4	2.3	0.8	
V-56	32	〃	筬状細板	D13本製品集中	13	IV	1	柾目	スギ			1/3	6.5	2.3	0.6	
〃	33	〃	有刺細棒	D13本製品集中	22	IV	1	柾目	スギ			1/3	6.9	1.2	0.6	
〃	34	〃	有刺細棒	D13本製品集中	60	IV	1	半割	モクレン属			1/3	11.1	2.8	1.7	
〃	35	〃	割材	D13本製品集中	38	IV	1/16分割	マツ属	○		1/3	16.6	11.0	4.2	
〃	36	〃	板材	D13本製品集中	30	IV	1	柾目	スギ			1/3	10.9	6.6	1.9	
〃	37	〃	丸木材	D13本製品集中	32	IV	1	丸木	モクレン属			1/3	11.9	3.0	3.1	
〃	38	〃	有孔廃皮	D13本製品集中	49	IV	1	—	—			1/3	5.2	2.7	0.6	
〃	39	〃	有孔廃皮	D13本製品集中	48	IV	1	—	—			1/3	5.8	4.4	0.7	
〃	40	〃	樹皮巻	D13本製品集中	35	IV	1	—	—			1/3	0.9	1.4	0.3	
〃	41	〃	樹皮巻	D13本製品集中	25	IV	1	—	—			1/3	3.0	6.1	3.0	
〃	42	〃	樹皮巻	D13本製品集中	26	IV	1	—	—			1/3	1.8	1.6	1.2	
〃	43	〃	樹皮巻	D13本製品集中	27	IV	1	—	—			1/3	0.8	2.0	1.4	
—	44	口絵5	布	D13本製品集中	1(繊維)	IV	1	—	—			1/3	—	—	—	写真掲載
—	45	〃	布	D13本製品集中	2(繊維)	IV	1	—	—			1/3	—	—	—	写真掲載
—	46	〃	布	D13本製品集中	3(繊維)	IV	1	—	—			1/3	—	—	—	写真掲載
V-57	47	口絵5	漆塗椀	D14-1本製品集中	406	IV	1	横木	ブナ			1/3	4.8	—	6.5	
〃	48	〃	漆塗椀	D14-1本製品集中	417	IV	1	横木	ブナ			1/3	5.8	14.7	7.6	
〃	49	〃	漆塗椀	D14-1本製品集中	400	IV	1	横木	ブナ			1/3	4.3	5.5	7.0	
〃	50	〃	漆塗連歯下駄	D14-1本製品集中	325	IV	1	横木	モクレン属			1/3	20.3	9.2	5.0	
〃	51	〃	漆塗板	D14-1本製品集中	414・418	IV	1	柾目	スギ			1/3	25.8	3.4	0.9	
V-58	52	45	舟敷	D14-1本製品集中	350	IV	1	横木	カツラ			1/12	292.0	38.0	29.0	
V-59	53	46	舟部材	D14-1本製品集中	351	IV	1	板目	カツラ			1/4	57.0	9.0	3.4	
〃	54	〃	舟部材	D14-1本製品集中	352	IV	1	板目	カツラ			1/4	24.0	5.6	3.6	
〃	55	〃	草履	D14-1本製品集中	73	IV	1	柾目	モクレン属	○		1/4	54.0	6.2	2.2	
V-60	56	47	建材(角材)	D14-1本製品集中	349	IV	1	板目	アスナロ	○		1/4	65.3	8.9	2.7	
〃	57	〃	建材(角材)	D14-1本製品集中	203	IV	1	四方柾	スギ	○		1/4	9.2	12.0	5.0	
〃	58	〃	丸杭	立杭5	160	IV	1	丸木	モミ属			1/4	47.9	7.1	7.0	
〃	59	48	丸杭	立杭1	353	IV	1	丸木	モミ属			1/4	66.6	7.2	6.8	
V-61	60	〃	丸杭	立杭3	391	IV	1	丸木	ヤナギ属			1/4	32.8	5.5	5.3	
〃	61	〃	丸杭	立杭8	355	IV	1	丸木	ヤナギ属			1/4	18.8	5.7	5.0	
〃	62	〃	丸杭	D14-1本製品集中	361	IV	1	丸木	コナラ属			1/4	25.6	4.7	3.1	
〃	63	〃	丸杭	立杭6	354	IV	1	芯持	トネリコ属			1/4	27.2	7.3	6.6	
〃	64	〃	割杭	立杭4	392	IV	1	1/8分割	トネリコ属			1/4	19.9	4.0	3.1	
〃	65	〃	割杭	立杭2	390	IV	1	偏分割	ミズキ属			1/4	15.3	4.4	4.2	
〃	66	〃	割杭	立杭7	233	IV	1	偏分割	トネリコ属			1/4	13.2	4.4	4.0	
〃	67	〃	角杭	D14-1本製品集中	194	IV	1	四方柾	モクレン属			1/4	9.5	3.9	3.5	
V-62	68	49	曲物把手	D14-1本製品集中	33	IV	1	柾目	スギ			1/3	10.9	25.4	1.9	
〃	69	〃	曲物把手	D14-1本製品集中	324	IV	1	柾目	スギ			1/3	5.5	18.3	1.8	
〃	70	〃	曲物蓋(底)	D14-1本製品集中	283	IV	1	柾目	スギ			1/3	9.3	9.5	1.0	
〃	71	〃	曲物蓋(底)	D14-1本製品集中	71	IV	1	追柾	スギ			1/3	9.8	4.2	0.9	
V-63	72	〃	樽側板	D14-1本製品集中	183	IV	1	板目	アスナロ			1/3	16.4	4.7	1.3	
〃	73	〃	樽蓋(底)	D14-1本製品集中	39	IV	1	板目	スギ	○		1/3	26.5	5.0	1.5	
〃	74	〃	樽枝	D14-1本製品集中	10	IV	1	1/12分割	スギ			1/3	6.9	2.9	2.0	
〃	75	〃	樽枝	D14-1本製品集中	35	IV	1	1/8分割	スギ			1/3	4.4	2.5	2.1	
〃	76	50	箱物部材	D14-1本製品集中	70	IV	1	板目	スギ			1/3	21.7	7.4	0.9	墨
〃	77	〃	箱物部材	D14-1本製品集中	328	IV	1	板目	スギ	○		1/3	35.6	4.3	0.9	
V-64	78	〃	箱物部材	D14-1本製品集中	112	IV	1	板目	スギ			1/3	8.6	3.1	0.8	
〃	79	〃	箱物部材	D14-1本製品集中	6	IV	1	柾目	スギ			1/3	16.5	9.8	1.4	
〃	80	〃	箱物部材	D14-1本製品集中	8	IV	1	柾目	スギ			1/3	7.2	3.2	0.4	
〃	81	〃	箱物部材	D14-1本製品集中	106	IV	1	追柾	スギ	○		1/3	17.9	2.9	1.2	
〃	82	〃	箱物部材	D14-1本製品集中	189	IV	1	板目	スギ	○		1/3	8.0	1.5	1.5	

表V-25　掲載木製品等一覧表（2）

挿図	掲載番号	図版	名称	地区地番/遺構	遺物番号	層位	点数	木取り	樹種	焼け	朱炭	縮尺	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
V-64	83	50	箸	D14-1木製品集中	222	Ⅳ	1	柾目	スギ	○		1/3	8.6	0.7	0.7	
〃	84	〃	箸	D14-1木製品集中	104	Ⅳ	1	柾目	アスナロ			1/3	24.8	0.9	1.1	
〃	85	〃	箸	D14-1木製品集中	30	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	24.0	0.7	0.8	
〃	86	〃	箸	D14-1木製品集中	63	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	24.7	0.9	0.7	
〃	87	〃	箸	D14-1木製品集中	202	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	23.0	0.8	0.7	
V-65	88	〃	串	D14-1木製品集中	62	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	23.7	1.5	1.0	
〃	89	〃	串	D14-1木製品集中	103	Ⅳ	1	柾目	スギ	○		1/3	23.8	1.2	0.9	
〃	90	〃	串	D14-1木製品集中	102	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	11.4	1.1	0.8	
〃	91	〃	板材加工品	D14-1木製品集中	193	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	8.8	2.5	0.7	
〃	92	〃	板材加工品	D14-1木製品集中	187	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	9.4	2.2	0.3	
〃	93	51	浮子	D14-1木製品集中	61	Ⅳ	1	板目	アスナロ			1/3	20.4	2.6	1.5	
〃	94	〃	浮子	D14-1木製品集中	228	Ⅳ	1	追柾	カエデ属			1/3	9.4	2.5	1.1	
〃	95	〃	矢中柄	D14-1木製品集中	199	Ⅳ	1	板目	アジサイ属			1/2	13.6	1.0	0.9	
〃	96	〃	矢柄	D14-1木製品集中	235	Ⅳ	1	柾目	モミ属			1/2	17.4	0.8	0.9	
〃	97	〃	矢柄	D14-1木製品集中	96	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/2	7.0	0.7	0.7	
〃	98	〃	矢柄	D14-1木製品集中	221	Ⅳ	1	柾目	モミ属			1/2	3.6	0.6	0.6	
〃	99	〃	矢柄	D14-1木製品集中	229	Ⅳ	1	柾目	アスナロ			1/2	5.8	0.7	0.7	
V-66	100	〃	刀子柄	D14-1木製品集中	197	Ⅳ	1	板目	アスナロ			1/2	3.0	12.0	1.6	
〃	101	〃	刀子柄	D14-1木製品集中	243	Ⅳ	1/16分割	カエデ属				1/2	3.0	1.4	2.1	
〃	102	〃	刀子柄	D14-1木製品集中	231	Ⅳ	1	柾目	モクレン属			1/2	3.8	4.0	2.3	
〃	103	〃	縦横間部	D14-1木製品集中	423	Ⅳ	1	1/6分割	ブナ			1/3	3.8	12.2	4.5	
〃	104	〃	竹針	D14-1木製品集中	69	Ⅳ	1	—	タケ亜科			1/2	6.8	1.0	0.2	
〃	105	〃	木札	D14-1木製品集中	97	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/2	9.1	3.5	0.6	墨書
〃	106	〃	木札	D14-1木製品集中	120	Ⅳ	1	追柾	スギ			1/2	7.2	2.4	0.7	墨書
〃	107	〃	木札	D14-1木製品集中	223	Ⅳ	1	追柾	スギ			1/2	3.6	1.9	0.4	墨書
〃	108	〃	木札	D14-1木製品集中	236	Ⅳ	1	追柾	スギ			1/2	11.7	1.9	0.7	墨書
〃	109	〃	木札	D14-1木製品集中	237	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/2	12.0	2.0	0.6	墨書
〃	110	〃	木札	D14-1木製品集中	364	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/2	12.5	2.4	0.7	
V-67	111	52	木札	D14-1木製品集中	34	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/2	5.3	2.4	0.8	
〃	112	〃	木札	D14-1木製品集中	176	Ⅳ	2	板目	スギ			1/2	13.9	2.8	0.8	
〃	113	〃	木札	D14-1木製品集中	66	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/2	8.6	1.7	0.5	
〃	114	〃	挿西箸	D14-1木製品集中	200	Ⅳ	1	柾目	ヒノキ科			1/2	24.5	2.0	0.5	
〃	115	〃	鼓状細板	D14-1木製品集中	380	Ⅳ	1	追柾	スギ			1/3	36.5	2.0	0.9	
〃	116	〃	鼓状細板	D14-1木製品集中	186	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	6.7	1.8	0.9	
V-68	117	〃	有刃細棒	D14-1木製品集中	111	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	11.5	1.3	1.0	
〃	118	〃	有刃細棒	D14-1木製品集中	108	Ⅳ	1	板目	ハリギリ			1/3	5.2	1.0	0.7	
〃	119	〃	有刃細棒	D14-1木製品集中	363	Ⅳ	1	柾目	カツラ	○		1/3	50.1	3.1	1.9	
〃	120	〃	有刃細棒	D14-1木製品集中	191	Ⅳ	1	板目	アジサイ属			1/3	6.7	0.8	0.8	
〃	121	〃	板状製品	D14-1木製品集中	319	Ⅳ	1	柾目	アスナロ	○		1/3	12.1	3.8	1.5	
〃	122	〃	板状製品	D14-1木製品集中	99	Ⅳ	1	板目	クリ			1/3	6.9	2.4	0.9	
〃	123	〃	板状製品	D14-1木製品集中	110	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	14.4	2.8	0.8	
〃	124	〃	棒状製品	D14-1木製品集中	300	Ⅳ	1	柾目	ヤクシ属			1/3	12.7	1.3	1.1	
〃	125	〃	棒状製品	D14-1木製品集中	114	Ⅳ	1	半割	ハコヤナギ属			1/3	5.7	1.0	0.8	
〃	126	〃	棒状製品	D14-1木製品集中	190	Ⅳ	1	丸木	儒花材			1/3	3.2	0.7	0.8	
〃	127	53	板材	D14-1木製品集中	7	Ⅳ	2	板目	スギ			1/3	6.5	24.0	1.3	
V-69	128	〃	丸木材	D14-1木製品集中	95	Ⅳ	1	丸木	カエデ属			1/3	25.4	3.1	2.7	
〃	129	〃	丸木材	D14-1木製品集中	195	Ⅳ	1	丸木	トネリコ属			1/3	11.4	2.1	2.0	
〃	130	〃	丸木材	D14-1木製品集中	201	Ⅳ	1	丸木	モクレン属			1/3	21.5	2.5	2.2	
〃	131	〃	丸木材	D14-1木製品集中	232	Ⅳ	1	丸木	ヤナギ属			1/3	9.7	2.2	1.9	
〃	132	〃	割材	D14-1木製品集中	301	Ⅳ	1	半割	ミズキ属	○		1/3	13.2	3.3	2.2	
〃	133	〃	割材	D14-1木製品集中	101	Ⅳ	1	扇分割	ハコヤナギ属			1/3	8.6	2.4	1.3	
〃	134	〃	割材	D14-1木製品集中	321	Ⅳ	1	1/12分割	ハンノキ属			1/3	7.4	3.2	2.6	
〃	135	〃	割材	D14-1木製品集中	67	Ⅳ	1	板目	カエデ属	○		1/3	5.8	3.1	1.3	
V-70	136	〃	薄板目板	D14-1木製品集中	385	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	5.8	39.7	2.3	
〃	137	〃	薄板目板	D14-1木製品集中	94	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	12.9	7.1	0.5	
〃	138	〃	薄板目板	D14-1木製品集中	93	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	30.2	3.6	0.1	
〃	139	〃	細棒状樹皮	D14-1木製品集中	68	Ⅳ	1	—	—	○		1/3	0.7	3.6	0.2	
—	140	〃	鐘	D14-1木製品集中	1(鐘)柾	Ⅳ	1	—	—			1/3	69.7	1.0	—	写真掲載
V-70	141	〃	有孔材	江地区11-6	1	盤	1	板目	—			1/3	2.5	4.1	1.5	
V-71	142	54	立柱	立柱9	16	Ⅳ	3	丸木	モミ属			1/4	28.0	6.4	6.1	
〃	143	〃	丸柱	立柱10	17	Ⅳ	1	丸木	ブナ		○	1/4	39.1	4.7	4.0	
〃	144	〃	割柱	立柱11	18	Ⅳ	1	1/12分割	コナラ属		○	1/4	61.5	5.7	3.8	
〃	145	〃	丸柱	立柱12	19	Ⅳ	3	丸木	モクレン属		○	1/4	32.8	6.2	5.3	
〃	146	〃	割柱	立柱13	20	Ⅳ	5	板目	コナラ属		○	1/4	34.1	5.7	3.0	
V-72	147	〃	丸柱	立柱14	39	Ⅳ	1	丸木	ハコヤナギ属		○	1/4	55.5	6.6	6.9	
〃	148	55	丸柱	立柱15	40	Ⅳ	1	丸木	マツ属			1/4	80.4	6.0	6.3	
〃	149	〃	丸柱	立柱16	41	Ⅳ	1	丸木	モクレン属		○	1/4	69.6	6.5	5.3	
V-73	150	〃	丸柱	立柱17	71	Ⅳ	1	丸木	コナラ属		○	1/4	30.5	4.2	3.8	
〃	151	〃	割柱	立柱18	72	Ⅳ	2	板目	コナラ属		○	1/4	26.1	6.3	2.4	
〃	152	〃	丸柱	立柱19	73	Ⅳ	1	丸木	カエデ属		○	1/4	21.7	4.7	4.1	
〃	153	口絵6	建築物部	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	68	Ⅳ	6	丸木	ハコヤナギ属			1/2	5.5	3.9	3.8	
〃	154	56	板材	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	30	Ⅳ	1	柾目	ヒノキ科			1/3	31.9	7.1	0.9	
V-74	155	〃	曲物側板	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	65	Ⅳ	56	柾目	スギ			1/3	8.6	25.6	5.4	
〃	156	〃	曲物蓋(底)	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	66	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	7.4	7.4	1.1	
〃	157	〃	樽栓	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	98	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	4.0	2.5	2.0	
〃	158	〃	箱物部材	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	67	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/3	25.7	7.7	0.9	
〃	159	〃	箸	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	23	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	20.9	0.7	0.5	
〃	160	〃	矢柄	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	43	Ⅳ	2	柾目	スギ			1/2	16.0	1.0	1.0	
V-76	161	57	刀子	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	21	Ⅳ	2	板目	ヒノキ科			1/2	18.7	2.7	1.9	
V-75	162	〃	刀鞘	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	64	Ⅳ	1	柾目	モクレン属			1/2	36.2	5.0	2.9	
V-76	163	〃	木札	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	62	Ⅳ	1	柾目	スギ			1/2	12.3	2.7	0.5	
〃	164	〃	有孔細板	D14-1木製品集中(区D14-1地先)	22	Ⅳ	1	板目	カエデ属			1/3	14.3	2.5	1.4	

表V-26　木製品等樹種別集計表

名称	モミ属	マツ属	スギ	アスナロ	ヒノキ科	コナラ属	クリ	ハリギリ	タラノキ	トネリコ属	環孔材	ヤナギ属	ハンノキ属	ブナ	カヤラ	キクレン属	アジサイ属	サクラ属	カエデ属	ミズキ属	ハンミイ属	タケ類科	総計
漆塗椀														4									4
漆塗皿														1									1
漆塗容器蓋			1																				1
漆筒			1																				1
漆塗遮断下駄																1							1
漆塗板			1																				1
漆塗断部													1										1
弁敷															1								1
舟部材															2								2
舷側板								1															1
早縄																1							1
建材(柱)				1																			1
建材(角材)			2																				2
建材(板材)				1																			1
丸板	3	1		1		2				1		3	1	1		2			1				16
角板																1							1
割板					3	1		1	2										1	1			9
曲物側板			1																				1
曲物把手			2																				2
曲物脚(底)			5																				5
薄板目板			3																				3
桶側板			1	1																			2
樽脚(底)			2																				2
樽枠			3																				3
箱物部材			9																				9
折敷底板			1																				1
箸			8	2											1								11
串			3																				3
柄杓柄			1																				1
遮断下駄																1							1
盛機受台木			1																				1
炉脚																			1				1
浮子				1															1				2
紙石付				1																			1
矢中柄																	1						1
矢柄	2		2	1																			5
刀子					1																		1
刀子柄				1												1			1				3
刀鞘																1							1
履物側部														1									1
竹針																						1	1
木札			12																				12
挽磨臼					1																		1
筋状細板			3																				3
有頭棒			2					1							1	1	1						6
板状製品			1	1			1																3
板材加工品			2																				2
板材			2		1																		3
割材		1											1						1	1	1		5
丸木材										1		1				2			1				5
棒状製品											1		1					1					3
有孔細板																			1				1
块付細板												1											1
総計	5	2	69	11	3	5	2	2	1	4	1	5	4	7	5	11	2	1	8	2	1	1	152

6　石製品

石製品は、硯、火打石、石臼、砥石、有孔礫、凹石、切石、削器、二次加工剥片、磨製石斧、琥珀、不明石製品が合計で34点出土した。砥石が13点で最も多い。削器、二次加工剥片、磨製石斧は縄文時代または続縄文時代の石器である。

硯

1は長方硯の破片で、角は面取りされている。硯縁は墨池側（硯首）が広い。墨堂には鋒鋩と呼ばれる微小な突起があり、ぶつぶつとした触感がある。部分的に薄く墨が残る。硯背は墨堂の裏が浅くくぼんだ覆手で、中央に「赤」とみられる文字が刻まれる。石材は泥岩とみられ、にぶい赤褐色を呈する。硯背の特徴等から赤間硯の可能性がある（日田市教育庁2015）。2の硯面は剥離しており、墨池の一部が残存する。硯背には覆手があり、煤けた部分がある（網伏せ部分）。3は長方硯の破片であろうか。角は面取りされており、両面とも長軸の一端側がやや薄くなる。表面には同じ幅の縁が器体を囲うように付く。裏面の縁は表面より広く、長軸方向にだけ付く。長軸方向の縁は、両面とも外側が面取りされている。2・3の石材は泥岩とみられる。

火打石

4は長軸両端に剥離痕が見られ、表裏は自然面、両側面は折れ面である。石質は瑪瑙である。

石　臼

5の臼面は中央部がわずかにふくらんでおり、下臼の破片かもしれない。芯棒孔は方形のようで、一部が残存する。目立ては8分画で、主溝間には副溝が7、8本切られている。石材は安山岩とみられる。

砥　石

6は角砥石である。正面には長軸にやや斜交する溝が目立つ。裏面には敲打による凹みが複数見られ、端部付近に鉄さびが付着する（網伏せ部分）。7は直方体の礫を使用したもので、中央部が浅くくぼむ。図示していないが、左側面の正面側が帯状に煤けている。8は扁平な砥石で、砥面がつるつるしていることから、仕上砥の破片とみられる。裏面には薬研彫りの溝が見られる。9は直方体に近い礫を使用したもので、全体的にやや煤けている（網伏せ部分）。図の下端は両面が剥離されている。裏面には大きな剥離面が2枚あり、一方は砥面として使用される。この砥面には、点状の使用痕のまとまりも見られる。石材はいずれも凝灰岩である。

有孔礫

10はD土坑2から出土した。棒状礫の一端に貫通孔があり、両主面等に敲打痕が見られる。石材は安山岩である。11は転礫の中央から一端に抜ける貫通孔がある。石材は凝灰岩である。

凹　石

12は楕円体状の礫にすり鉢状の穿孔痕が見られる。穿孔は両面で3か所を数え、正面上部のものが大きい。裏面上部の浅い溝に右手人差指を当てると握りやすい。裏面の一部が擦れている。石材は凝灰岩である。縄文時代の石器ではないが、便宜的に凹石の名称を使用した。

切　石

13の正面中央部には、ノミによるハツリが密集する。ハツリの方向は、破損部の近くが図の左から右へ、それ以外が右から左である。正面外縁部は3～4cmの幅で研磨されており、両側面との境は面取りされている。両側面は平滑に仕上げられており、図上端の側面下部にはハツリが残る。正面のハツリと比べて、裏面のハツリは溝が大きく、ハツリ同士の間隔も空いている。裏面と両側面との間は面取りされていない。敷石のようなものかと思われる。石材は緑色凝灰岩で、笏谷石の可能性が高

い。旧蔵町の調査（北埋調報290）では、笏谷石とみられる石廟の屋根（図Ｖ－５－７－29）や縁石が出土している。

磨製石斧

14の平面は撥形で、基部の横断面は長方形に近い。全面が研磨されている。刃部は両刃で、刃縁は弧状を呈する。石材は泥岩である。

琥 珀

15は写真のみ掲載した（口絵７上段）。④14－１地先で、木製品等とともに出土している。風化面と破砕面からなる。なお、旧蔵町の調査（北埋調報290）では、琥珀玉１点が報告されている（図Ｖ－５－６－27）。

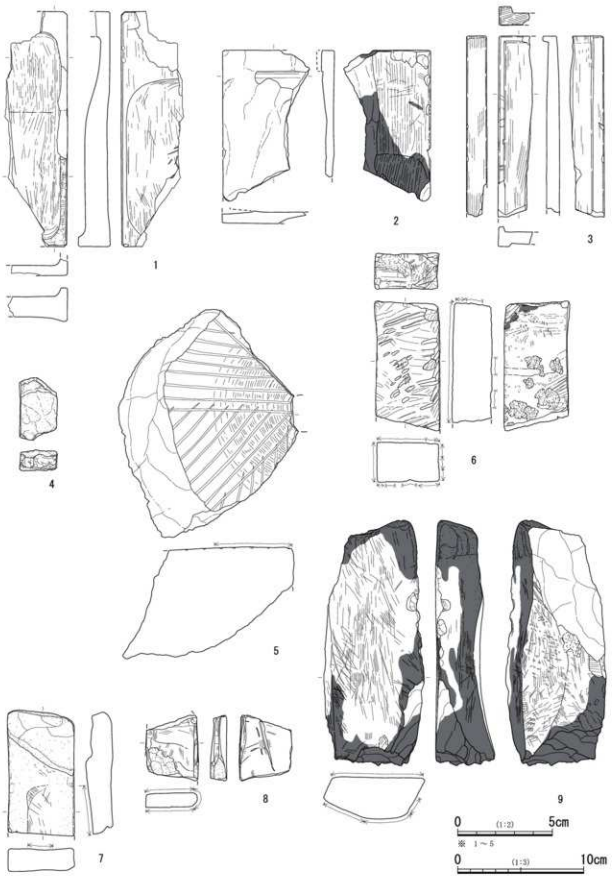
（山中）

表Ｖ-27　石製品集計表

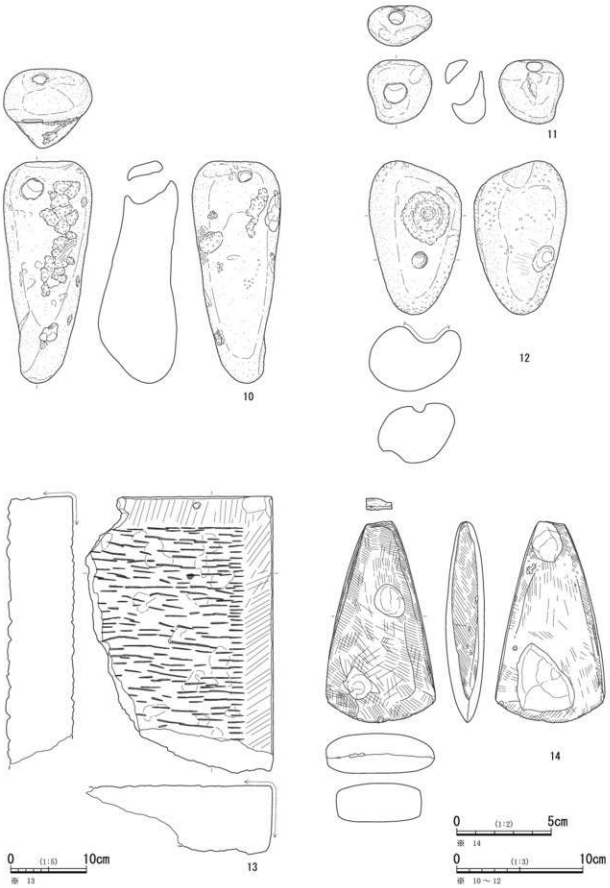
地区	地番	遺構	層位	砥	火打石	石臼	底石	有孔礫	団石	切石	削器	二次加工剥片	磨製石斧	琥珀	不明	合計
B	－		Ⅰ・Ⅱ	1		1	4				1	1				8
	89	B掘込1	覆土				1									1
	13		Ⅲ	1												1
	13	木製品集中	Ⅳ				2	1	1				1			5
	14-1	B掘込2B	覆土				1								1	2
B	14-1		覆土		1											1
	14-1		Ⅲ上ローム	1												1
	14-1	木製品集中	Ⅳ				2									2
	14-1		Ⅳ				3				1					4
	15-2	B土坑2	坑底					1								1
E	10-5		Ⅳ	1												1
③	18-1地先		Ⅳ			1										1
④	14-1地先	木製品集中	Ⅳ											1		1
	15-3地先		Ⅱ		1											1
⑥	12	B火事場穴1	覆土							2					1	3
	12		Ⅲ上面	1												1
		合計		5	2	2	13	2	1	2	2	1	1	1	2	34

表Ｖ-28　掲載石製品一覧表

掲図	掲載番号	図版	遺物名	地区地番/遺構等	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
V-77	1	58	砥	②12	1	Ⅲ上面	12.5	(3.3)	1.7	70.3	泥岩	
〃	2	〃	砥	B13	1	Ⅲ	(8.0)	(4.6)	(0.7)	23.2	泥岩	
〃	3	〃	砥	E10-5	1	Ⅳ	(9.5)	(1.8)	1.1	25.9	泥岩	
〃	4	〃	火打石	B14-1	3	Ⅲ3b	3.3	2.9	1.1	10.5	鬼面	
〃	5	〃	石臼	③18-1地先	1	Ⅳ	(12.1)	(9.8)	(7.5)	636	安山岩	
〃	6	〃	底石	B89/B掘込1	1	覆土	(10.2)	5.3	3.2	281.7	凝灰岩	
〃	7	〃	底石	D14-1/木製品集中	4	Ⅳ	(9.9)	5.4	2.2	162.4	凝灰岩	
〃	8	〃	底石	D13/木製品集中	5	Ⅳ	(5.2)	4.2	1.3	37.6	凝灰岩	
〃	9	〃	底石	D13/木製品集中	4	Ⅳ	19.5	8.0	4.7	755	凝灰岩	
V-78	10	〃	有孔礫	B15-2/B土坑2	1	坑底	17.6	7.0	6.3	655	安山岩	
〃	11	〃	有孔礫	D13/木製品集中	6	Ⅳ	5.0	5.1	3.2	63.9	凝灰岩	
〃	12	〃	団石	D13/木製品集中	3	Ⅳ	12.2	7.4	5.1	375.8	凝灰岩	
〃	13	〃	切石	⑥12/B火事場穴1	2	覆土	(36.6)	(24.8)	(9.2)	9.7(kg)	緑色凝灰岩	笏谷石
〃	14	〃	磨製石斧	D13/木製品集中	2	Ⅳ	10.6	5.8	2.1	179.6	泥岩	
〃	－	口絵7	琥珀	④14-1地先/木製品集中	1	Ⅳ	(2.4)	(1.3)	(1.2)	1.5	琥珀	



図V-77 石製品 (1)



図V-78 石製品 (2)

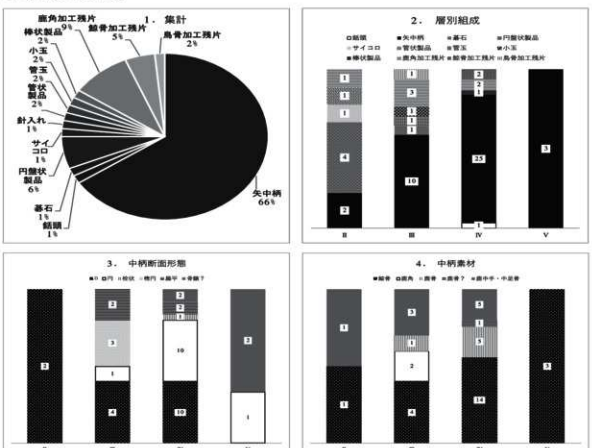
7　骨角貝製品

今回の調査では、64点の骨角器が出土した（図Ⅴ－79－１）。そのうち31点を図示、記載した。

中柄が最も多く、全体で42点検出された。中・近世併行期における骨角器利用において、中柄がいかに重要であったかが反映されている。断面形態を見ると、D字形、円形が大半で、円形が古く、D字形が新しい要素の可能性がある（図Ⅴ－79－３）。素材は、シカ中手・中足骨製とクジラ骨製がおよそどの時期も半々となるようである（図Ⅴ－79－４）。また、銛頭片が１点得られたが、開窩式（茎溝式）の最終段階を示すものである。

層ごとの組成変遷（図Ⅴ－79－２）をみると、時期が新しくなるにつれて中柄の組成率が下がるように見える。また数は少ないが、Ⅱ～Ⅳ層ともに加工残片が含まれ、骨角器加工がおこなわれるような地点であったことがうかがわれる。

円盤状製品は、１点は貝製の碁石とみられるが、ほかは正体不明の骨製品である。Ⅱ層に集中する点から、和人が残したものと考えられる。サイコロは北海道では余市町大川遺跡出土に次ぐもので、これも骨製品である。



図Ⅴ-79　骨角貝製品関連グラフ

銛　頭

１はⅣ層出土の鹿角製縦二索孔開窩式（茎溝式）銛頭の破片とみられる。型式の存続時期からすると、中世並行期とみられる。開窩の周囲を巡らせた締着溝のための段差は丁寧に作られている。窩部分の加工は不明瞭であるが、下の索孔より少し下位までは僅かな横側方向の段が見られ、そこまで窩が達していた可能性はある。素材自体の組織構造は、表面は円形構造の集合がみえ、内部は細かな泡状ないし針状の結晶の集合にみえる。

矢中柄（骨鏃含む）

2～6はシカ骨製品。4は部位不明であるが、ほかは独特な骨内外の溝状形態が残るため中手骨ないし中足骨製とみられる。素材自体の組織構造は、焼けた骨の断面を見ると、微細なオステオンの連続がみえる。また、風化部分では平行な層板もみえる。

2は基部側を残すもの。茎部は段により明瞭に画される。茎部の基端側3分の2は黒色になっており、当時使用された接着剤の影響かもしれない。

3～5は全体の様子が分かる遺存度のもの。3は先端を欠く。5に類似するが全体に断面D字状となる。茎部と胴部は円錐状に削ることで画している。表面に藍鉄鉱が付着している。4も先端をやや欠く。風化によって全体に表面が荒れている。断面基部側3分の1は三角形状だが、残る先端側はD字状となる。茎部とは不明瞭な段で画している。先端には鏃装着部が残る。5はほぼ完全品で、先端を僅かに欠く。断面三角形状を呈し、茎部を段で画す。先端は素材由来の溝のある面を削ぐことで断面D字状とし、鏃装着部を形成している。器面には金属器による稜の明瞭な削り痕が残される。

6は未成品とみられる。全体に削り痕が粗々しく残されており、茎部の境界も不明瞭。面に対し、素材由来の溝が斜めになったり、捻れていたりするので、途中で放棄したものとみられる。

7～10は一面に海綿質が広くみられるもので、シカ角製品と骨製品が含まれる。8は素材に髄腔を中心とした同心円の層状構造と連続したオステオンが確認されるので骨製とみられる。7も不明瞭ながら層状構造がみられるが、骨製品なのかシカ角製品なのか見分けがつかない。骨表面側の加工状況からするとシカ角製かもしれない。9・10は骨のような層状構造がみられない。横断面でオステオンの集合、縦断面では葉状骨の集合に見える。風化している場合、横断面では細かな泡状構造、縦断面では細かな結晶の集合中に小単位の層版が散在するようにみえることからシカ角製品とみられる。

7は完形品。断面は楕円形状を呈し、茎部は両側面と海綿質の残る面を段で画す。先端は海綿質が残る面を削ぐことで薄くし、さらに僅かな皿状のくぼみとし、鏃装着部を形成している。器面の側面～海綿質の残る面には金属器による稜の明瞭な細長い削り痕が残される。素材表面が部分的に残る面は細かな単位の削り痕が残る。8は茎部基端を欠く。断面は楕円形状を呈し、茎部は両側面と素材表面が残る面を段で画す。先端は海綿質が残る面を削ぐことで鏃装着部を形成している。海綿質が残る面の胴部では髄腔面がみられる。素材表面が残る面では、異なる成分による「エナメル質」のような層が認められる。9は両端を欠くも、両側面に段を入れて茎部とする部分は残る。胴部も主な加工は両側面で、「背面」には素材表面の皺が残り、「腹面」全面に海綿質が残る。断面は楕円形。先端側には縦方向の剥離が残され、欠損は使用の結果かもしれない。10は先端部を欠く。断面楕円形。「背面」は平滑に調整されている。「腹面」は膨らみをもつ面で、中央全面に海綿質が残される。茎部は両側面と「腹面」を削って、先細にしてある。

11～18はクジラ骨製とみられる。素材自体の構造は、径の大きな管腔が多い網目状の構造となる。

11～14の断面は胴部では円形～隅丸方形で、先端では楕円形～レンズ状～D字状に整えられるもの。基部を12～14は明瞭に段で画されるが、11はやや不明瞭。11は茎部の大半を欠く。先端部は寸詰まりで丸く整えられ、断面は鈍いレンズ状。胴部の断面が円形～ややにぶいD字状なのは、稜線が少し残るため。茎部の段差は14よりは不明瞭。12・13は完形品だが、12は先端を僅かに欠く。先端部は一面を斜めに削いで広い平坦面とし、断面D字状にしてある。胴部は削りの稜線が明瞭ながら、断面円形にしてある。茎部の段差は明瞭で、その先は円錐形にされる。14は先端と基部端を僅かに欠く完形品。表面には藍鉄鉱が付着する。先端部は断面レンズ状で、先より2cm程度まで表面が平滑で光沢をもつ。胴部は断面円形状で、表面に削りによる稜線が不明瞭に残るものの、全体に紡錘状に整えられている。

茎部は段差が明瞭になるよう画されており、その先は円錐状に整えられる。

15・16は先端側がやや平坦で断面レンズ状、胴部も平坦なもの。茎部の境界も明瞭ではない。15は先端部と茎部端を僅かに欠く完形品。表面は全体を丁寧に削り、稜線が目立たなくされている。胴部断面が円形で11～14に類似するが、茎部は徐々に円錐形に整えるだけで画されてはいない。先端側は両側縁に稜を持つ断面レンズ状で、表面の光沢も強い。16は茎部端を欠く。全体に平坦で、表面の加工は丁寧だが、部分的に粗整形時の打割痕が残るため胴部断面は三角形状を呈する。茎部は徐々に円錐形に整えるだけで画されてはいない。先端側は両側縁に稜を持つ断面レンズ状で、先端は尖らずに台形状になって、先端部に小さな面を持つ。これらは骨鏃かもしれない。

17・18は各々個性的な形態をしたもの。あるいは骨鏃か。17は茎部端を僅かに欠く完形品。柊状鏃のように、先端部が平坦にされてある。折り取られたようではないので、意図的に削って整えたものとみられる。したがって中柄ではないかもしれない。胴部は削りの稜線が明瞭ながら、断面円形にしてある。茎部は僅かに段差を作り、その先は円錐形にされる。18は茎部の大半を欠くが、両側に非対称の段差を設けている。胴部は楕円形で、先端側は扁平かつ両側縁を徐々に細長い面とし、表裏面には不明瞭な稜が付される。先端は両側縁から段を入れて凸状に整えている。断面は方形。凸の先端は鈍い∧状に整形される。

円盤状製品（碁石ほか）

19は貝製品で、碁石とみられる。表面の研磨された面に浮かび上がった成長線は、透明な部分や薄い赤褐色を呈する部分がある。裏面はほとんどが風化し、僅かに成長線がみられる。断面は扁平で、レンズ状を呈さない。状況から一般的素材であるハマグリ製とみられる。

20～23は骨製品とみられる。素材の構造を実体顕微鏡でみると、同心円状の薄い層状構造にオステオンが散在するように見える。特に22ではオステオンの集中が明徴に確認できる。したがって、ウシの骨素材の可能性がある（奈良ほか1999）。整形はいずれも平面正円にされ、直径は20～21mm。断面は長方形で、厚さ３～６mmと幅がある。

20は穿孔され、完成品とみられる。直径19.79～20.09mm。厚さは6.02mm。孔の直径は2.31～2.52mm。表面はやや風化するが、各面とも平滑であったとみられる。21は無穿孔品だが、各面とも滑らかに平滑にされ、完成品と思える。直径21.21～21.52mm。厚さは5.38mm。22も無穿孔品だが、各面とも滑らかに平滑にされ、完成品と思える。直径21.19～21.48mm。厚さは3.53mmと薄い。23も無穿孔品とみられるが、被熱により表面は黒褐色、内部は黒色に変色している。各面とも滑らかに平滑にされ、完成品と思える。直径20.94mm。厚さは3.23mmと薄い。これらは平面正円で、直径20～21mmと同一のものにみえるが、４点中穿孔品は１点、厚さは６mm台１点、５mm台１点、３mm台２点と多様性を示す。

サイコロ

24は骨製サイコロとみられる。10.35mm前後四方に整えられている。「・」は直径４mmの窪みを回転によって作り出す。ほかの数字部分は直径２mm前後。表面はよく磨かれて光沢をもつが、点の配置にばらつきがあり、製品というよりは、自家製とみられる。素材骨組織構造は、三－四の面において同心円状の弧状かつ葉状の組織がみられる。

針入れ

25は鳥骨製品で、恐らくアホウドリの上腕骨を素材にしている。断片ながら、表面に彫刻が施されている。一辺に切断面を残しており、摩耗していることから、製作途中に割れたのではなく、成品が壊れた破片とみられる。

管状製品

26は鹿角製品で、表面に線刻で模様が刻まれている。小刀の鞘装飾ではなかったかと考えている。被熱によって表面は白色化し、内部は黒色化している。

管 玉

27は鳥骨製品で、恐らくアホウドリの橈骨を素材にしている。表面はよく研磨され光沢をもっており、切断面もよく摩耗している。

小 玉

28は骨製品で、平面に微細なオステオンが連続的に見える。1面の孔周辺には、穿孔時の加工具先端のズレで生じたC字状の溝が残る。この面は古い面らしく切断痕は不明瞭であるが、部分的に切断時に生じた段差が残されている。もう1面では鋸による切断痕と、その際に生じた小さな「バリ」が残されている。側面は風化したようで、特段の加工痕跡は残されないが、エッジに切断時に鋸の刃が当たった痕跡がみられる。

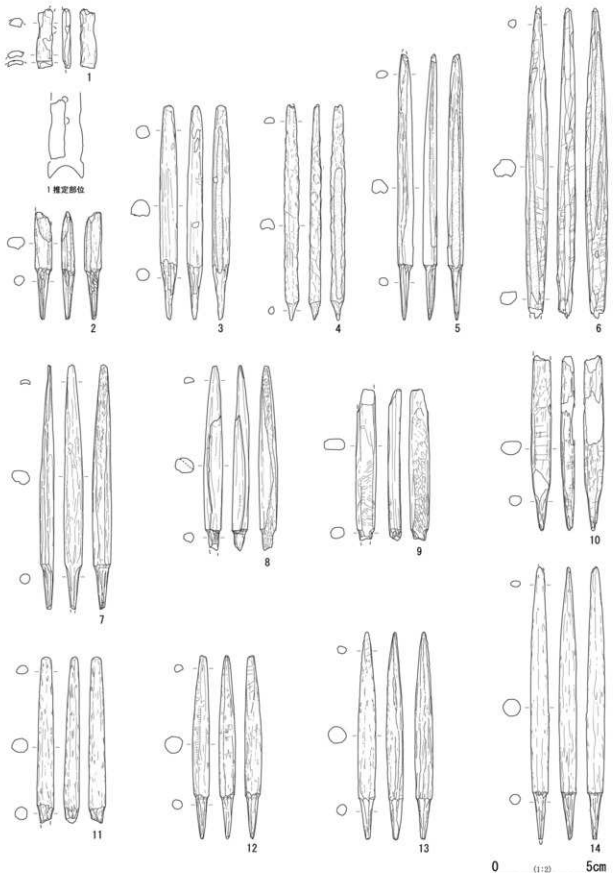
鹿角加工残片

29～31が該当する。29は鋸により横分割後、さらに鋸で縦分割された二次素材。一端に残された折断面は一度鋸で切れ目を入れたうえでなされており、製品のための原材として用意されたものかもしれない。角表面側では凹凸を削って平滑にしようとした痕跡が残るが、全ての凹凸を削るまでには至っていない。海面質側は削りによって広く平滑な面となっている。30は粗く分割されていた枝角部分を押し削りによって分割した残片。あるいは「整形部」と「持ち手部」に区分されたうえで、残された「持ち手部」かもしれない。31は鋸によって横分割された角尖部。先端付近の凹凸が摩耗した部分は、シカ生存時の活動によるもの。

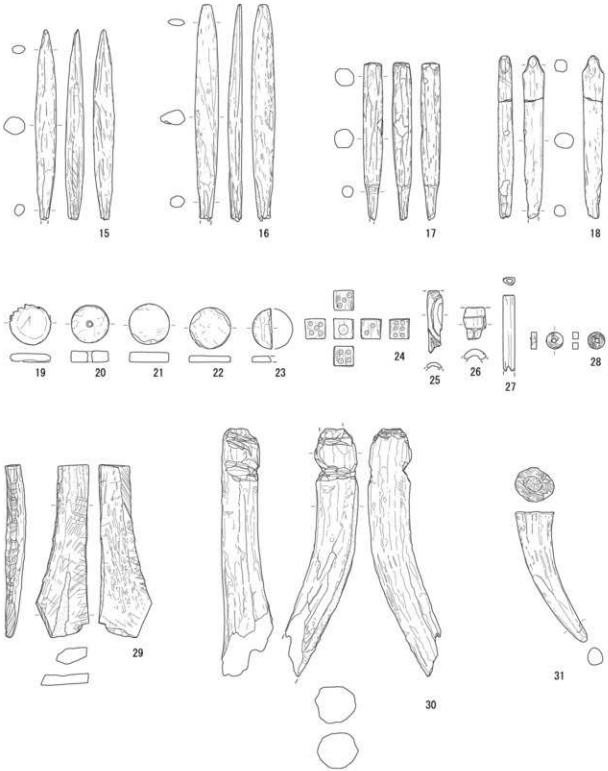
骨角器の素材分類は、肉眼で判断可能な特徴でなされることが多いが、その根拠が明示されることは少ない。しかし、ルーペや実体顕微鏡で観察すると、様々な骨自体の微細構造を見出すことができる。今回も、なるべく素材分類の根拠を示すべく、骨自体の微細構造を記述によって記載したが、誤謬もあるかもしれない。骨の微細構造による動物骨同定、骨角器素材同定を試みた当センター刊行所収報文には以下がある。

（福井）

奈良貴史・澤田純明・百々幸雄　1999 「柏台1遺跡出土骨片の骨組織構造の検討（予報）」『千歳市柏台1遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター
福井淳一　2015 「骨角器」『北斗市押上1遺跡』（公財）北海道埋蔵文化財センター
澤田純明　2017 「館崎遺跡出土焼成骨角器の非破壊的組織形態観察に基づく素材同定（序報）」『福島町館崎遺跡』（公財）北海道埋蔵文化財センター
福井淳一　2017 「館崎遺跡の骨角器」『福島町館崎遺跡』（公財）北海道埋蔵文化財センター



図Ⅴ-80　骨角貝製品（1）



図V-81 骨角貝製品 (2)

表V-29　骨角貝製品集計表

地区	地番	遺構等	層位	鈕頭	矢中柄	碁石	円盤状製品	サイコロ	針入れ	管状製品	管玉	小玉	棒状製品	鹿角加工残片	鯨骨加工残片	鳥骨加工残片	合計
B	88		Ⅱ					1		1							2
	89		Ⅱ		1												1
	90		Ⅱ				3										3
	92-1		Ⅱ											1			1
C	19		Ⅲ									1					1
D	13		Ⅲ		1												1
	13		Ⅲ1		1												1
	13		Ⅲ2		1												1
	13	木製品集中	Ⅳ	1	9									1			11
	13	D掘込5の上	Ⅴ		2												2
	13		Ⅴ1		1												1
	14-1		Ⅲ		1									1			2
	14-1		Ⅲ1		2	1											3
	14-1		Ⅲ2		2									2		1	5
	14-1	木製品集中	Ⅳ		6								1				7
	14-1		Ⅳ		2									1	2		5
	14-1		Ⅳ2'		1												1
	14-1	D掘込2B	覆土						1						1		2
	15-2		Ⅱ				1										1
E	10-5		Ⅲ		1												1
	10-5		Ⅳ		2												2
	11-6		Ⅲ		1						1						2
	11-6	E掘込1	覆土		2												2
④	12地先		Ⅱ		1												1
	14-1地先	木製品集中	Ⅳ		5												5
	合計			1	42	1	4	1	1	1	1	1	1	6	3	1	64

表V-30　掲載骨角貝製品一覧表

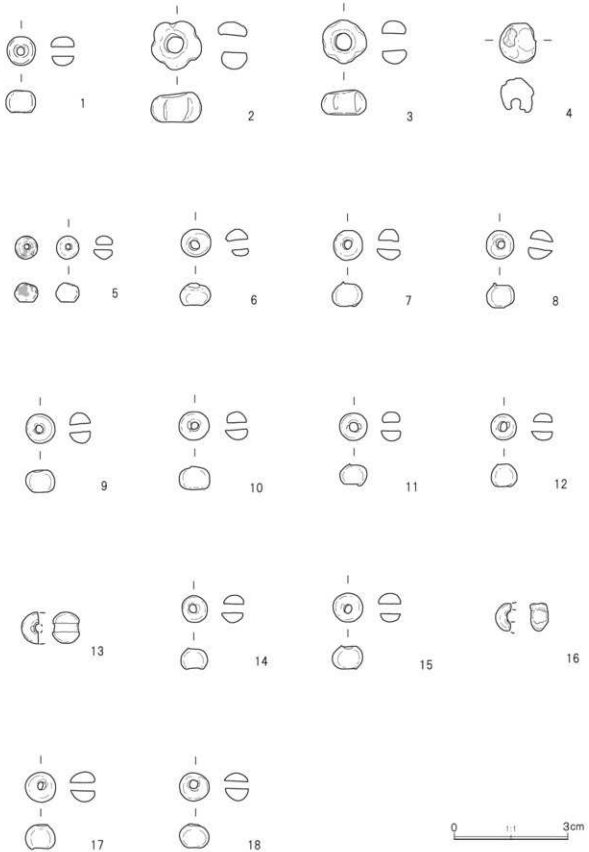
挿図	掲載番号	図版	遺物名	地区地番/遺構	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考	整理番号
V-80	1	59	鈕頭	D13/木製品集中	16	Ⅳ	(3.2)	(0.9)	(0.4)	0.8	鹿角		1
〃	2	〃	矢中柄	D13/木製品集中	8	Ⅳ	(5.7)	0.9	0.7	2.7	鹿中手・中足骨		10
〃	3	〃	矢中柄	D14-1/木製品集中	9	Ⅳ	(11.3)	0.9	0.8	8.3	鹿中手・中足骨	鏃鉄鏃付着	3
〃	4	〃	矢中柄	D14-1	4	Ⅳ	(11.4)	0.8	0.6	4.4	骨	鹿？	4
〃	5	〃	矢中柄	D13/木製品集中	5	Ⅳ	(14.0)	0.8	0.7	8.5	鹿中手・中足骨		2
〃	6	〃	矢中柄	D13/木製品集中	11	Ⅳ	(16.4)	1.2	1.0	17.4	鹿中手・中足骨		12
〃	7	〃	矢中柄	D14-1/木製品集中	5	Ⅳ	(12.9)	1.0	0.7	7.3	鹿骨・部位不明		16
〃	8	〃	矢中柄	D14-1	3	Ⅲ	(9.8)	1.0	0.9	6.2	鹿骨・部位不明		17
〃	9	〃	矢中柄	D13	2	Ⅲ2	(8.0)	1.1	0.7	5.9	鹿角		18
〃	10	〃	矢中柄	E11-6	1	Ⅲ	(9.2)	1.0	0.7	4.8	鹿角		20
〃	11	〃	矢中柄	D14-1/木製品集中	7	Ⅳ	(8.8)	0.9	0.9	4.8	鯨骨		22
〃	12	〃	矢中柄	D13/木製品集中	7	Ⅳ	9.7	0.9	0.9	5.5	鯨骨	鏃鉄鏃付着	24
〃	13	〃	矢中柄	④14-1地先/木製品集中	1	Ⅳ	11.0	1.0	0.9	6.9	鯨骨	鏃鉄鏃付着	56
〃	14	〃	矢中柄	D13/木製品集中	6	Ⅳ	(14.4)	1.0	1.0	11.2	鯨骨	鏃鉄鏃付着	21
V-81	15	〃	矢中柄	D14-1	2	Ⅳ2	(10.0)	1.1	1.0	6.8	鯨骨		26
〃	16	〃	矢中柄	D13	4	Ⅴ1	(11.5)	1.2	0.8	7.4	鯨骨		27
〃	17	〃	矢中柄	D13/木製品集中	9	Ⅳ	(8.3)	1.0	1.0	6.5	鯨骨		30
〃	18	〃	矢中柄	D14-1	6	Ⅳ	(8.6)	1.2	0.8	5.2	鯨骨		31
〃	19	60	碁石	D14-1	1	Ⅲ1	(2.2)	2.2	(0.4)	2.5	貝	ハマグリ？	38
〃	20	〃	円盤状製品	D15-2	1	Ⅱ	2.0	2.0	0.6	2.3	骨	有孔	39
〃	21	〃	円盤状製品	B90	3	Ⅱ	2.1	2.1	0.6	2.7	骨		40
〃	22	〃	円盤状製品	B90	1	Ⅱ	2.2	2.2	0.4	1.1	骨		41
〃	23	〃	円盤状製品	B90	2	Ⅱ	2.1	(1.1)	0.3	0.8	骨		42
〃	24	〃	サイコロ	B88	1	Ⅱ	1.1	1.1	1.1	2.0	骨		43
〃	25	〃	針入れ	D14-1/D掘込2B	1	覆土下位	(3.3)	(0.8)	(0.3)	0.7	鳥上腕骨	アホウドリ？	44
〃	26	〃	管状製品	B88	2	Ⅱ	(1.7)	(1.2)	(0.5)	0.6	鹿角	小刀装飾？	45
〃	27	〃	管玉	E11-6	2	Ⅲ	(4.0)	0.6	0.4	0.9	鳥橈骨	アホウドリ？	46
〃	28	〃	小玉	C19	1	Ⅲ	0.9	0.9	0.3	0.3	骨		47
〃	29	〃	鹿角加工残片	D14-1	18	Ⅲ2	9.2	2.8	1.1	12.5	鹿角		50
〃	30	〃	鹿角加工残片	D13/木製品集中	12	Ⅳ	(13.1)	(3.8)	2.7	49.7	鹿角		51
〃	31	〃	鹿角加工残片	D14-1	16	Ⅲ	6.9	3.8	1.8	13.4	鹿角		52

8 ガラス玉（表Ⅴ－31、図Ⅴ－82、口絵７、付編Ⅰ－10）

ガラス玉の製作地は不明であるが、成分分析結果を掲載している（付編Ⅰ－10）。色は青、青緑系が多く、ほとんどが巻き付け方式で作られたものと思われる。蛍光X線分析の結果は、蜜柑玉２点がカリ鉛ガラス、白色不透明の１点と青色系の13点はカリ石灰ガラスであることが判明した。その他２点は既存の分類に帰属しないことがわかった。

表Ⅴ-31 掲載ガラス玉一覧

掲載No.	図No.	図版	地区	地番	層位	遺物No.	色調	計測値(cm、g)				点数	取上げ日	備 考
								長さ	幅	厚さ	重さ			
1	V-82	口絵7・付編10	B	85-3	Ⅱ	1	白系	0.8	0.8	0.6	0.45	1	2022/7/7	完形
2	V-82	口絵7・付編10	B	86	Ⅱ	1	青緑系	1.3	1.3	0.8	2.21	1	2022/7/8	接合完形、ミカン玉、表面摩耗
3	V-82	口絵7・付編10	B	86	Ⅱ	2	青緑系	1.2	1.2	0.7	1.50	1	2022/7/8	完形、ミカン玉
4	V-82	口絵7・付編10	B	86	Ⅳ	3	黒系	1.05	1.0	0.9	0.70	1	2022/7/14	破損？被熱
5	V-82	口絵7・付編10	B	88	Ⅱ	1	白系	0.6	0.6	0.5	0.16	1	2022/7/14	完形、赤色顔料付着
6	V-82	口絵7・付編10	B	92-1	Ⅱ	1	青系	0.7	0.8	0.6	0.36	1	2022/8/25	完形
7	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	1	青系	0.8	0.8	0.6	0.46	1	2022/8/30	完形
8	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	2	青系	0.8	0.8	0.7	0.42	1	2022/9/1	完形
9	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	3	青系	0.8	0.8	0.6	0.47	1	2022/9/1	完形
10	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	4	青系	0.75	0.8	0.6	0.46	1	2022/9/1	完形
11	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	5	青系	0.7	0.7	0.6	0.38	1	2022/9/1	完形
12	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	6	青系	0.7	0.7	0.6	0.35	1	2022/9/1	完形
13	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	7	青系	0.8	(0.4)	(0.7)	0.29	1	2022/9/1	破損
14	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	8	青系	0.7	0.7	0.6	0.37	1	2022/9/26	完形
15	V-82	口絵7・付編10	C	19	Ⅱ	9	青系	0.8	0.8	0.6	0.50	1	2022/9/27	完形
16	V-82	口絵7・付編10	D	13	Ⅱ	1	青系	(0.7)	(0.4)	(0.5)	0.16	1	2022/6/1	破片、摩耗(海あがり)
17	V-82	口絵7・付編10	4期	15-3	Ⅱ		青系	0.8	0.8	0.7	0.55	1	23/8/22	完形
18	V-82	口絵7・付編10	6期	12	Ⅲローム上面		青系	0.75	0.8	0.65	0.4	1	23/9/20	完形、焼土



図V-82　ガラス玉

引用文献

秋葉　實翻刻・編　1999　松浦武四郎『校訂　蝦夷日誌【一編】』北海道出版企画センター

網野善彦　1978　『無縁・公界・楽』平凡社

青森県史編さん近世部会　2001　『青森県史 資料編 近世１』

新垣　力・瀬戸哲也　2005　「沖縄における14～16世紀の中国産白磁の再整理」『沖縄埋文研究 3』沖縄県立埋蔵文化財センター

榎森　進　1982　『北海道近世史の研究―幕藩体制と蝦夷地』北方歴史文化叢書　北海道出版企画センター

大阪市文化財協会　1988　『大坂城跡 Ⅲ』

大阪市文化財協会　2009　『大坂城下町跡 Ⅱ』

奥野　充　2018　「白頭山苫小牧（B-Tm）テフラの精密年代決定の意義」『名古屋大学　年代測定研究 2』名古屋大学宇宙地球環境研究所・年代測定研究部

小野哲也　2000　「刀子からマキリへ―考古学的アプローチによる」『北大史学 第40号』北大史学会

小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 2』日本貿易陶磁研究会

小山正忠・竹原秀雄　2004　『新版標準土色帖 26版』日本色研事業株式会社

金箱文夫　1984　「近世の釘」『物質文化 43』物質文化研究会

上ノ国町教育委員会　2009　『史跡上ノ国館跡 Ⅳ』

上ノ国町教育委員会　2019　『上ノ国市街地遺跡発掘調査報告書』

上ノ国町教育委員会　2021　『史跡上之国館跡 Ⅶ』

萱野　茂　1978　『アイヌの民具』すずさわ書店

川根正教　1995　「寛永通寶銭の基礎的研究１（上）」『出土銭貨 第４号』出土銭貨研究会

川根正教　1996　「寛永通寶銭の基礎的研究１（下）」『出土銭貨 第５号』出土銭貨研究会

菊池勇夫　2001　「津軽領内におけるアイヌの動向」『青森県史 資料編 近世１』

菊池勇夫　2002　「石焼鮑について」『東北学 ７号』東北芸術工科大学

木村孝一郎　2011　「越前焼の編年的研究と生産地の動向」『山陰地方における越前・常滑系陶器』山陰中世土器検討会

九州近世陶磁器学会　2000　『九州陶磁の編年』九州近世陶磁器学会

久保　泰　1977　「北海道松前町上川遺跡における縄文晩期墳墓の調査」『考古学ジャーナル 133』ニュー・サイエンス社

古泉　弘　1983　『江戸を掘る』柏書房

古泉　弘　1985　「銅製品」『江戸―都立一橋高校地点発掘調査報告』都立一橋高校内遺跡調査団

兒玉作左衛門ほか　1954　「蝦夷に関する耶蘇会士の報告」『北方文化究報告 ９輯』北海道大学北方文化研究室

（財）北海道埋蔵文化財センター　1996　『美沢川流域の遺跡群Ⅹ Ⅷ』北埋調報102

（財）北海道埋蔵文化財センター　2003　『千歳市ユカンボシC15遺跡（６）』北埋調報192

（財）北海道埋蔵文化財センター　2012　『松前町福山城下町遺跡』北埋調報290

佐藤雄生　2014　「松前の海揚がり陶磁器」『弘前大学國史研究 136』弘前大学國史研究会

白神典之　1992　「堺擂鉢考」『東洋陶磁 19』東洋陶磁学会

鵜柄俊夫・森　毅　1999　「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」『研究紀要 ２』大阪市文化財協会

関根達人　2018　『松前藩福山城下町の考古学的研究１』平成29年度公益財団法人三菱財団研究助成「近世国家北方領域境界域における物資流通に関する考古学的研究」研究成果報告書

関根達人　2019　「北海道松前町福山城下町遺跡小松前町地点発掘調査報告」弘前大学人文社会科学部研究推進・評価委員会『人文社会学論叢 第７号』

関根達人・米田　穣・宮田佳樹・宮内信夫・堀内晶子・吉田邦夫　2020　「福山城下町遺跡の地鎮に使われた灯明皿とその油種」『北海道考古学 第56輯』北海道考古学会

関根達人　2021　「北海道松前町上川遺跡発掘調査報告」『北海道考古学 第57輯』北海道考古学会

関根達人　2023　『つながるアイヌ考古学』新泉社

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城　靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志　2007 「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究 5』沖縄県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也　2015 「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究 35』日本貿易陶磁研究会
瀬戸哲也　2015 「14～16世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索」「中近世陶磁器の考古学 1」雄山閣
津別町教育委員会　2009 『ツベットウンチャシ跡』
出利葉浩司　1993 「大正年間を中心とした千歳川におけるアイヌ民族のサケ漁について」『北海道開拓記念館研究報告 32号』
東京大学埋蔵文化財調査室　1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』東京大学構内遺跡調査研究年報２別冊
東京大学埋蔵文化財調査室　2006 『東京大学本郷構内の遺跡　工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書７
東京大学埋蔵文化財調査室　2011 『東京大学構内遺跡調査研究年報 7』
東京大学埋蔵文化財調査室　2012 『東京大学構内遺跡調査研究年報 8』
東北大学埋蔵文化財調査室　2008 『東北大学埋蔵文化財調査年報 19』第４分冊
苫小牧市教育委員会　1966 『苫小牧市沼ノ端丸木舟発掘調査概要報告書』
日本ペドロジー学会編　1997 『土壌調査ハンドブック 改訂版』博友社
野上建紀　2010 「「海揚がりの肥前陶磁」展」『金大考古 第68号』
秦　光男・箕浦名知男・大沼晃助・加藤　誠　1990 『松前地域の地質』地質調査所
服部　郁　1994 「近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開」「研究紀要 第２輯」瀬戸市埋蔵文化財センター
日田市教育庁咸宜園教育研究センター　2015 『文人の至宝～学芸と視の世界』
兵庫埋蔵銭調査会　1996 『日本出土銭総覧』
藤澤良祐　1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」「研究紀要 V」瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1987 「本業焼の研究（1）」「研究紀要 VI」瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　2002 「瀬戸・美濃大窯の再検討」「研究紀要 第10輯」瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐　2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院
藤光秀雄　2013 『寛永通寶　収集・分類・整理』文芸社
松井十郎編　1894 『北海道實業人名録完』北海道実業人名録編纂所
宮内崇裕　2003 「５－５（２）松前半島―隆起の歴史を語る階段状地形」「日本の地形 2 北海道」東京大学出版会
森　毅　1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」「難波宮址の研究　第九」大阪市文化財協会
森　毅　1995 「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通」「ヒストリア 149」大阪歴史学会
北海道　1969 「津軽一統志　巻第十（中）」「新北海道史 第七巻史料一」
北海道庁　1936（復刻版1991）「福山秘府」「新撰　北海道史 第五巻史料一」清文堂
北海道開拓記念館　1984 「松前藩主・一族書状集・Ⅱ 資料解説シリーズNo.6」
松前町教育委員会　2006 「福山城・福山城下町遺跡」
松前町教育委員会　2007 「福山城下町遺跡Ⅱ」
松前町教育委員会　2008 「福山城下町遺跡Ⅳ」
松前町教育委員会　2009 「神明石切り場跡Ⅱ」
松前町教育委員会　2015 「福山城下町遺跡Ⅴ」
松前町史編集室　1974 「松前蝦夷記」「松前町史 史料編第一巻」
松前町史編集室　1984 「松前町史 通説編第一巻上」
松前町史編集室　1988 「松前町史 通説編第一巻下」
本村充保　2022 「下駄の考古学」同成社
由良　勇　1995 「北海道の丸木舟」マルヨシ印刷
吉岡康暢　1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
IAWA（国際木材解剖学者連合）委員会　2006 「針葉樹材の識別」海青社

写真図版

図版 1　遺跡近景

昭和 30 年代の字唐津空中写真　松前町郷土資料館所蔵

遺跡近景　白線内が調査区域

図版 2　A 地区

基本土層 A-B　地番 93-2　北東から

基本土層 C-D　地番 93-2　西から

基本土層 E-F　地番 94　南から

A 礎石 1 検出状況　地番 93-2　北東から

A 柱 1 土層断面　地番 94　北から

A 土坑 1 遺物出土状況　地番 94　東から

A 土坑 2 土層断面　地番 94　北から

A 土坑 3 土層断面　地番 94　北東から

基本土層A-B　地番85-2　南東から

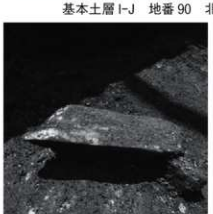
基本土層C-D　地番85-2・85-3　北から

基本土層E-F　地番85-3・86　北から

基本土層G-H　地番89　北から

基本土層I-J　地番90　北から

B礎石1検出状況　地番85-3　北から



舷側板出土状況　地番86　北東から

漆塗椀出土状況　地番86　北から

漆塗椀出土状況　地番86　北東から

図版 4　C 地区（1）

基本土層 C-D　地番 19 地先　西から

基本土層 E-F、碗（掲載 a48）地番 19 地先　北から

基本土層 A-B、C 礎石 1　地番 18-1 地先　南から

C 礎石 2　検出状況　南東から

C 土坑 1 土層断面　地番 19　西から

C 土坑 2 土層断面　北東から

Ｃ土坑３土層断面　　西から

Ｃ土坑４（左）・５土層断面　北西から

Ｃ土坑６（左）・７土層断面　南西から

Ｃ土坑８土層断面　西から

Ｃ土坑３～８完掘　南西から

図版6　D地区地番13（1）

基本土層 E-F　南から

皿（掲載 b23）出土状況　南から

基本土層 E-F 及び G-H　南西から

D 石積 1 検出状況　西から

D 石積 1 検出状況　俯瞰

D 石積 1 下掘方（左）・溝 1 礫集中　南から

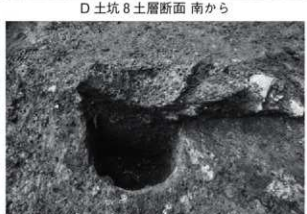
D 石積 1・溝 1（右）検出状況　南から

D 溝 1 炭検出状況　東から

D 礎石 8 検出状況　南西から

D 土坑 8 土層断面 南から

D 土坑 8 瓦出土状況　南西から



D 土坑 11 土層断面　南から

D 土坑 13 炭化材出土状況　南から

木製品出土状況　南から

図版 8　D 地区地番 13（3）

木製品出土状況　南から

下駄出土状況　南東から

釘出土状況　南東から

中柄出土状況　北から

土錘（掲載 c29）　出土状況　南から

瀬戸丸皿（掲載b15）出土状況　南から

擦文土器（掲載c46）出土状況　南から

天聖元寶出土状況　西から

馬歯出土状況　北から

V層遺物出土状況　南から

図版10　D地区地番14-1（1）

基本土層I-J　西から

基本土層M-N　東から

基本土層S-T　南東から

灰白色堆積物検出状況　北から

灰白色堆積物土層断面O-P・Q-R　北東から

D 礎石 4（左）・13 検出状況　北から

D 礎石 4（上）・5 検出状況　東から

D 礎石 6 検出状況　南東から

D 礎石 7 検出状況　南東から

D 礎石 9 検出状況　東から

D 礎石 10（奥）・11 検出状況　南から

D 礎石 12 検出状況　南から

図版 12　D 地区地番 14-1（3）

D 炉 1 検出状況　南西から

D 炉 1 土層断面　東から

D 炉 2 検出状況　北東から

D 土坑 9 土層断面　東から

D 土坑 12・炉 2 土層断面　南から

羽口出土状況　南から

脇差出土状況　南東から

漆塗椀出土状況　南から

木製品出土状況　南から

舟敷出土状況、基本土層 O-P・Q-R　北東から

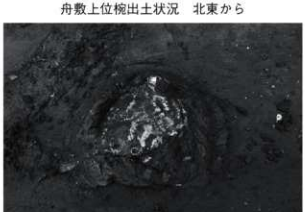
図版 14　D 地区地番 14-1 (5)

舟敷出土状況　俯瞰

舟敷出土状況　南東から

舟敷上位遺物出土状況　東から

舟敷上位椀出土状況　北東から



舟敷上位椀の下アワビ出土状況　北東から

舟敷取り上げ作業状況　北東から

図版16　D地区地番14-1（7）

舟敷の穴に残る縄　北東から

樹皮集中出土状況　東から

櫂出土状況　西から

立杭2（右）・3（中）・4（左）出土状況　東から

遺物出土状況　南から

天目碗（掲載 b5）出土状況　東から

唐津皿（掲載 b22）出土状況　南から

瀬戸丸皿（掲載 b13）出土状況　南から

D 柵 1 検出状況　南西から

人骨出土状況　東から

人骨出土状況　東から

人骨出土状況、基本土層 K-L　東から

図版18　D地区地番15-2（1）

基本土層Q-R　南から

D石列1検出状況　南から

D礎石1（左）・2検出状況　南から

D 礎石 3 検出状況　南から

D 土坑 1 完掘　南東から

D 土坑 2 土層断面　南から

D 土坑 3 完掘　南西から

D 土坑 4 土層断面　北から

D 土坑 5 土層断面　北西から

D 土坑 6 土層断面　北から

D 土坑 7 完掘　南から

図版 20　D 地区地番 15-2 (3)、E 地区地番 10-5・11-6・11-8

磁器片出土状況　地番 15-2　南から

磁器片出土状況　地番 15-2　西から

基本土層 A-B　地番 10-5・11-6　北から

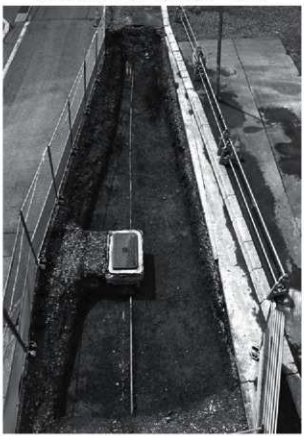
調査状況　地番 10-5・11-6・11-8　南から

大甕（掲載 b102）出土状況　地番 10-5　東から

基本土層　地番 88 地先　北から

基本土層 K-L　地番 84-2 地先　南から

調査状況　地番 87 地先　西から



80cm掘削完了　地番 83-2 地先・84-2 地先　東から

80cm掘削完了　地番 87 地先・88 地先　東から

図版 22　令和 5 年度②地区地番 17-1 地先

基本土層　東から

調査状況　南西から

肥前甕（掲載 b93）出土状況　南から

肥前鉢（掲載 a146）出土状況　南から

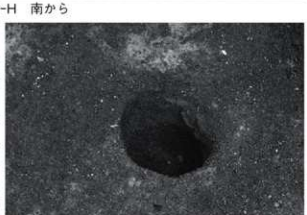
肥前擂鉢、皿（掲載 b35、b73）出土状況　北東から

80cm掘削完了　北から

図版 23　令和 5 年度③地区地番 18-1 (1)

基本土層 G-H　南から

調査開始面　西から



C 土坑 9 完掘　西から

C 土坑 10 土層断面　北西から

図版 24　令和 5 年度③地区地番 18-1（2）

B-Tm 上面土坑検出状況　南から

C 土坑 11 土層断面　北西から

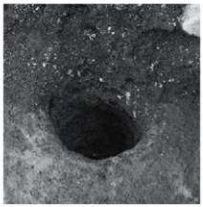
C 土坑 12 土層断面　東から

C 土坑 13 土層断面　東から

C 土坑 14（右）・15（中）・21（左）完掘　南から

C 土坑 16 土層断面　東から

C 土坑 17 完掘　北西から



C 土坑 18 完掘　北から

C 土坑 19 完掘　北から

C 土坑 20 完掘　北から

190cm掘削完了　北から

図版 26　令和 5 年度④地区地番 14-1 地先

立杭 9 ～ 11 土層断面　南東から

立杭 12 土層断面　南から

立杭 13 ～ 15 土層断面　西から

立杭 16 土層断面　南西から

立杭 17・18 土層断面　南西から

馬頭骨出土状況　東から

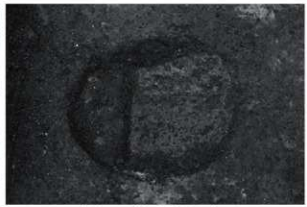
景徳鎮皿（掲載 a130）出土状況　北から

図版 27　令和 5 年度④地区地番 17-2 地先

調査状況　南東から

D 土坑 10 土層断面　東から

基本土層 E-F　南東から



D 土坑 14 礫出土状況　東から

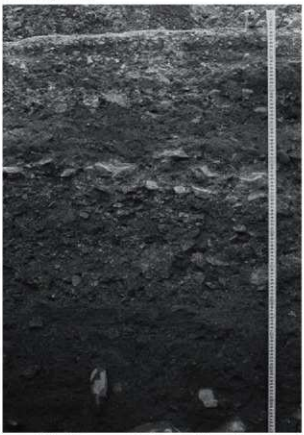
基本土層 C-D　南から

図版 28　令和 5 年度④地区地番 15-3 地先、⑤地区地番 11 地先 (1)

D 土坑 15 完掘　南から

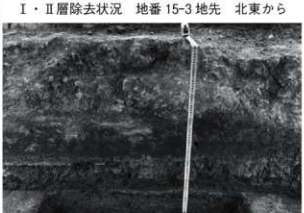
80cm掘削完了　地番 15-3 地先　東から

190cm掘削完了　地番 15-3 地先　南から



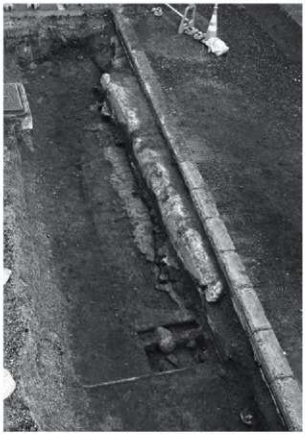
基本土層 A-B　地番 15-3 地先　東から

Ⅰ・Ⅱ層除去状況　地番 15-3 地先　北東から



基本土層 C-D　地番 11 地先　北から

図版 29　令和 5 年度⑤地区地番 11 地先（2）、⑥地区地番 12（1）



ローム層検出状況　地番 11 地先　西から

D 礎石 14 検出状況　地番 12　北東から

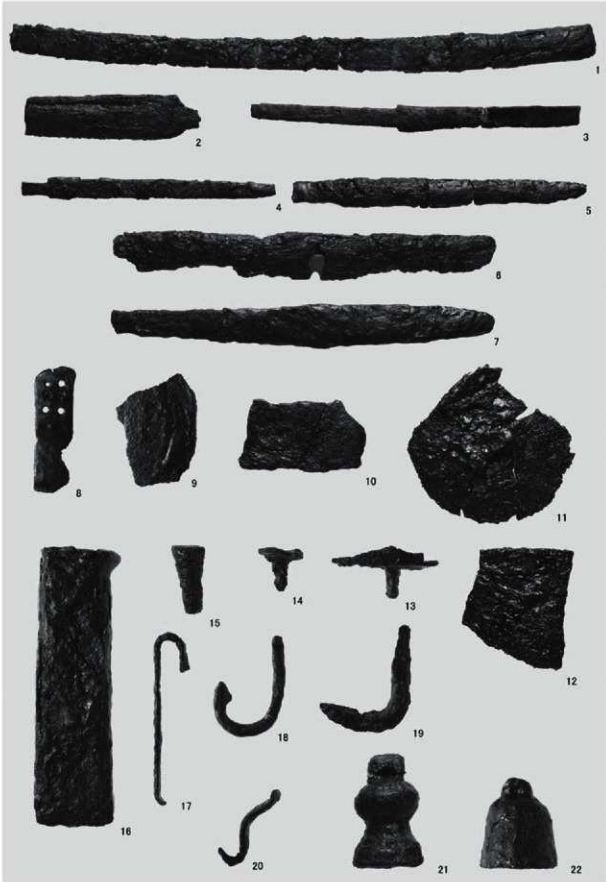
基本土層 A-B　地番 12　東から

基本土層 C-D　地番 12　北から

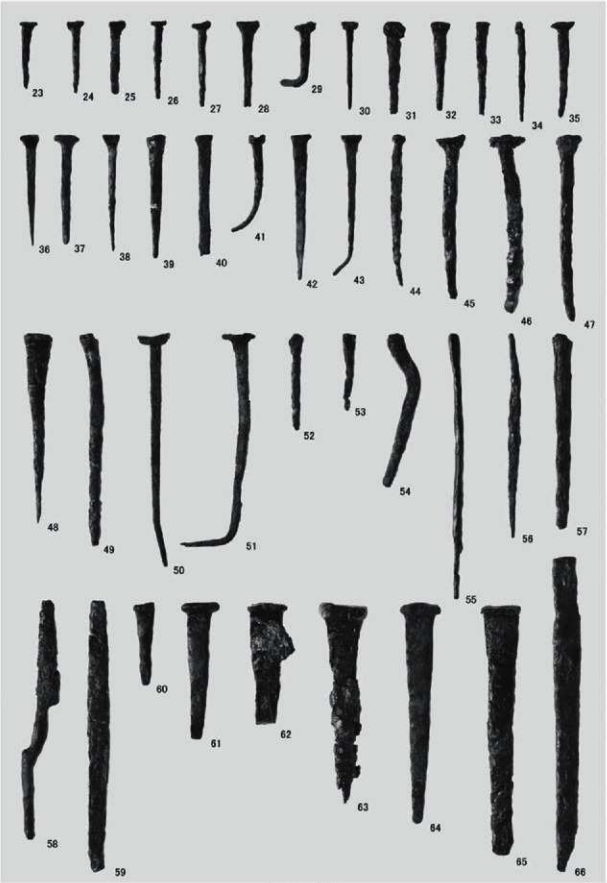
図版 30　令和 5 年度⑥地区地番 12 (2)

D 火事場整理穴 1 検出状況　東から

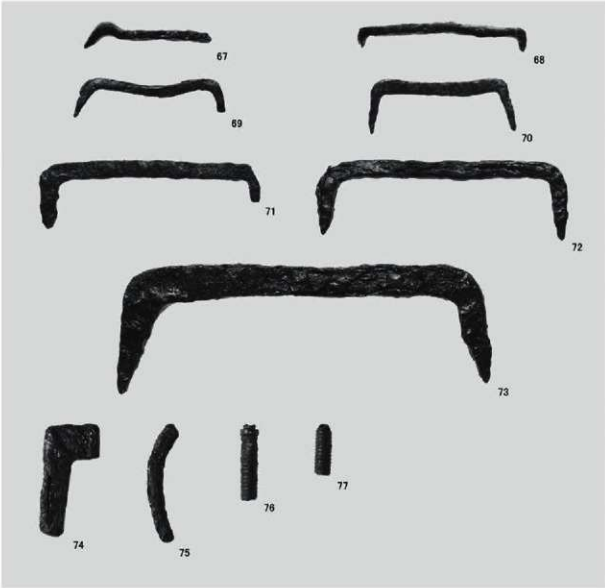
80㎝掘削完了　北東から



鉄製品(1)


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66

鉄製品(2)



鉄製品(3)

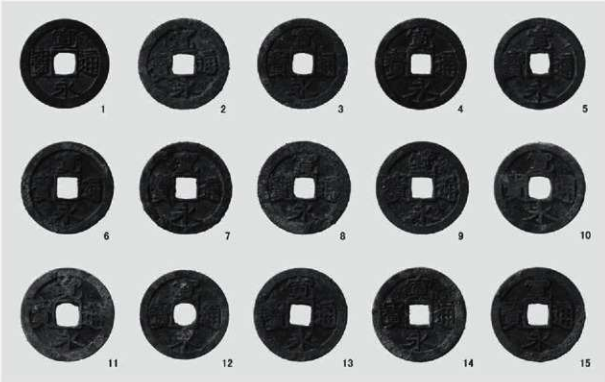
図版 34

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

非鉄製品(1)

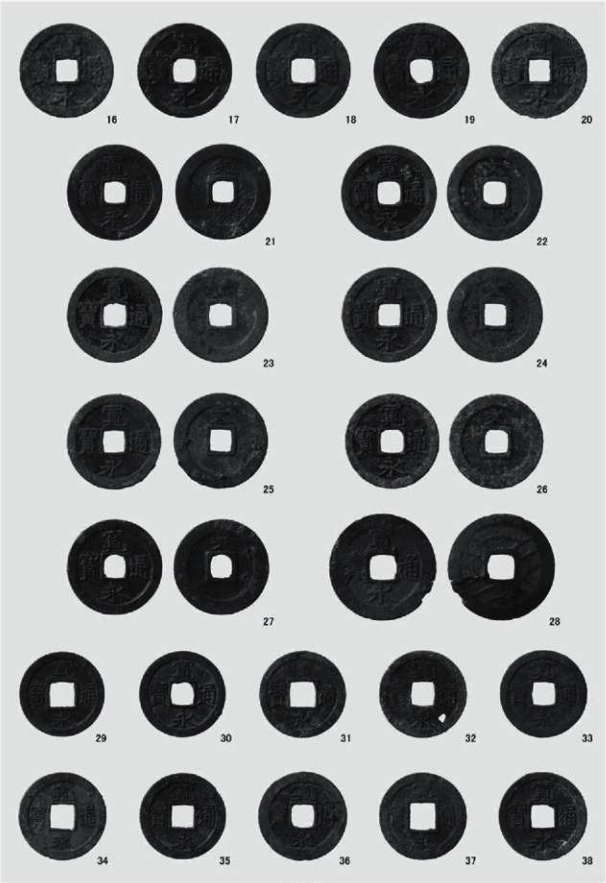
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56

非鉄製品(2)

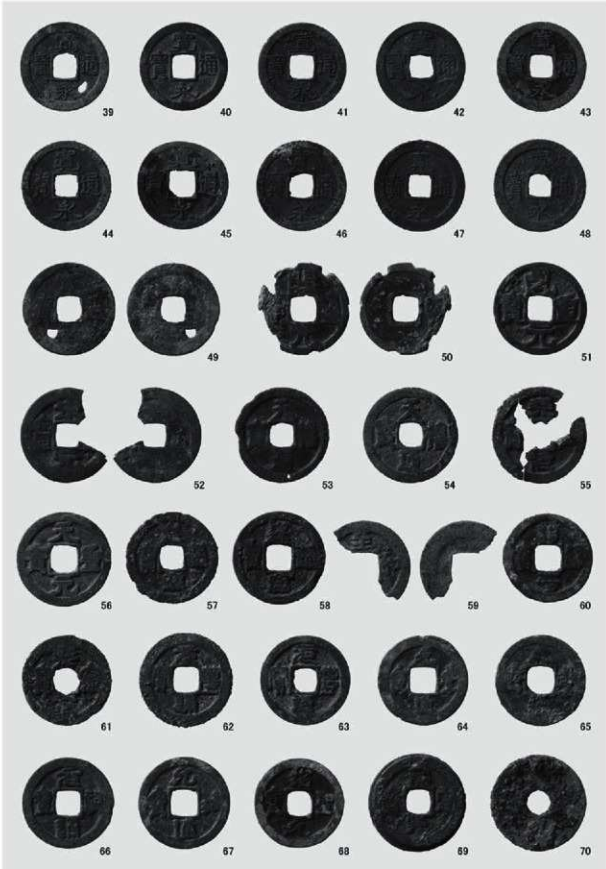

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

貨幣(1)

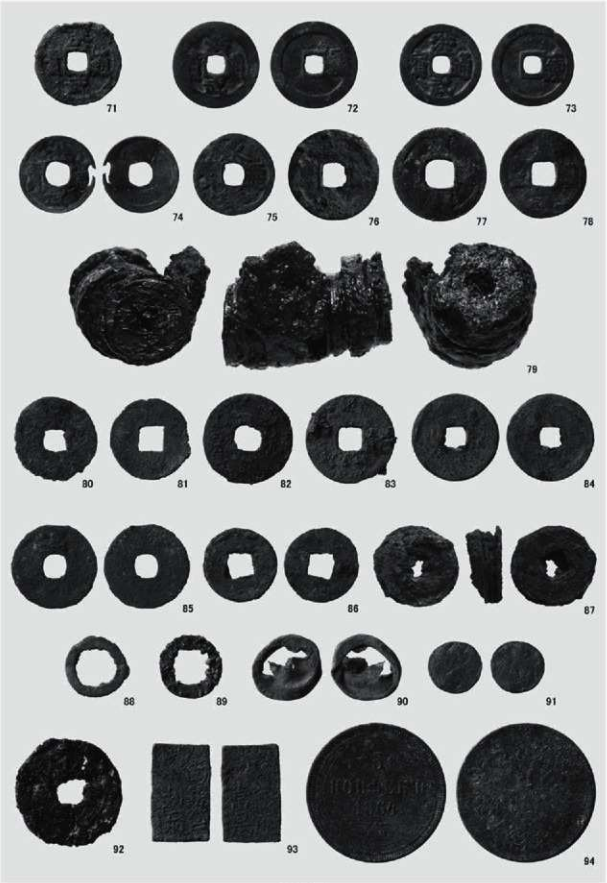
図版 36



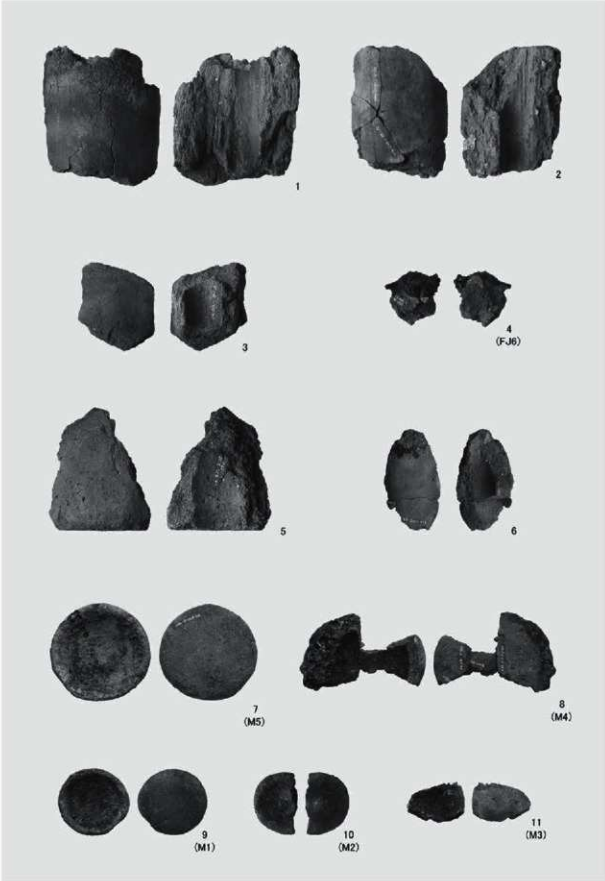
貨幣(2)


39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70

貨幣(3)



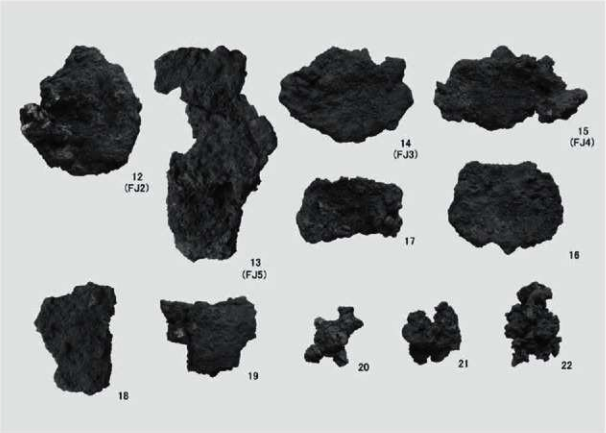
貨幣(4)

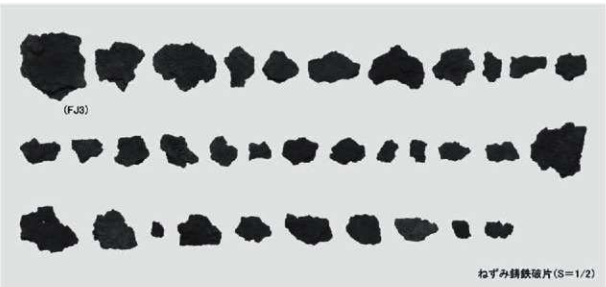


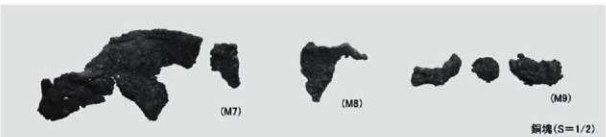
金属生産関連遺物(1)

(　)分析番号

図版 40







金属生産関連遺物(2)

(　)分析番号

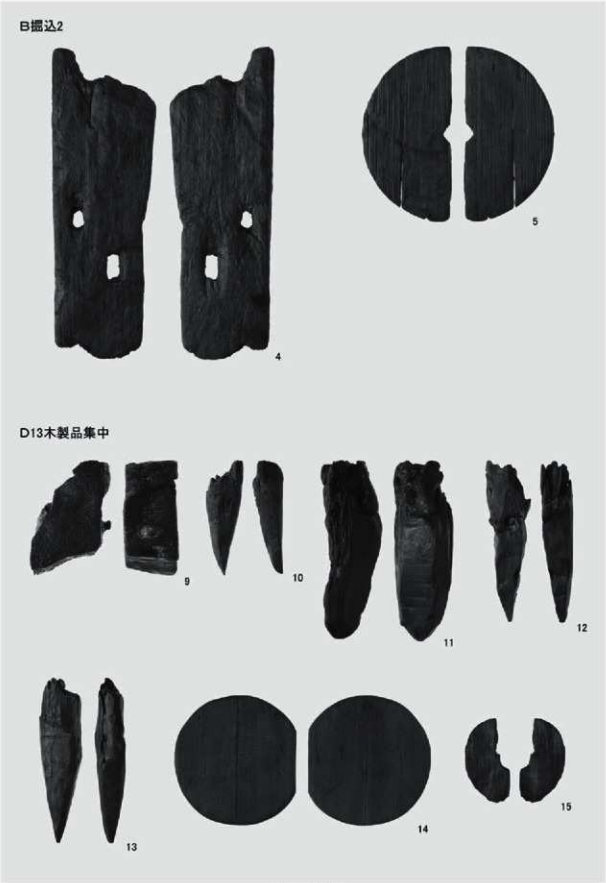
D柵1

1

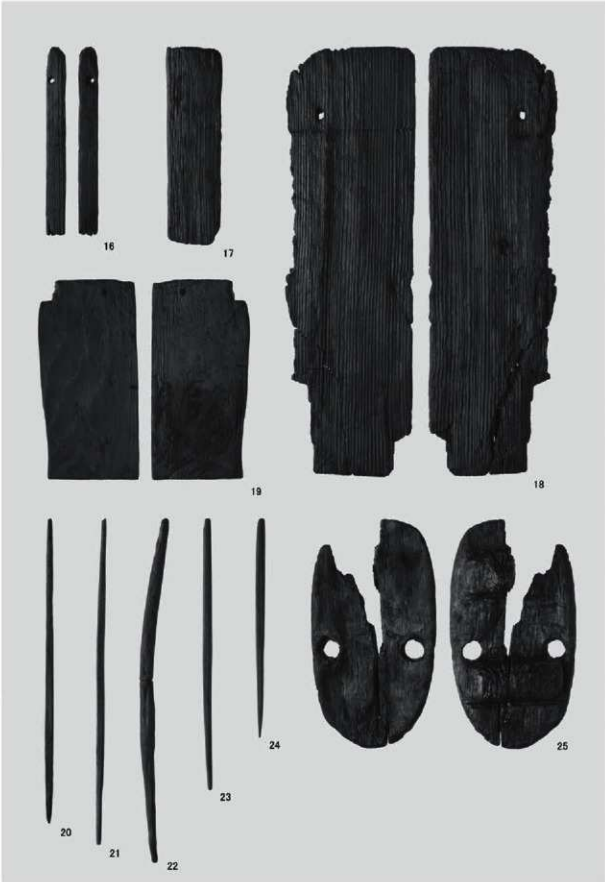
2

木製品等(3)

図版 42

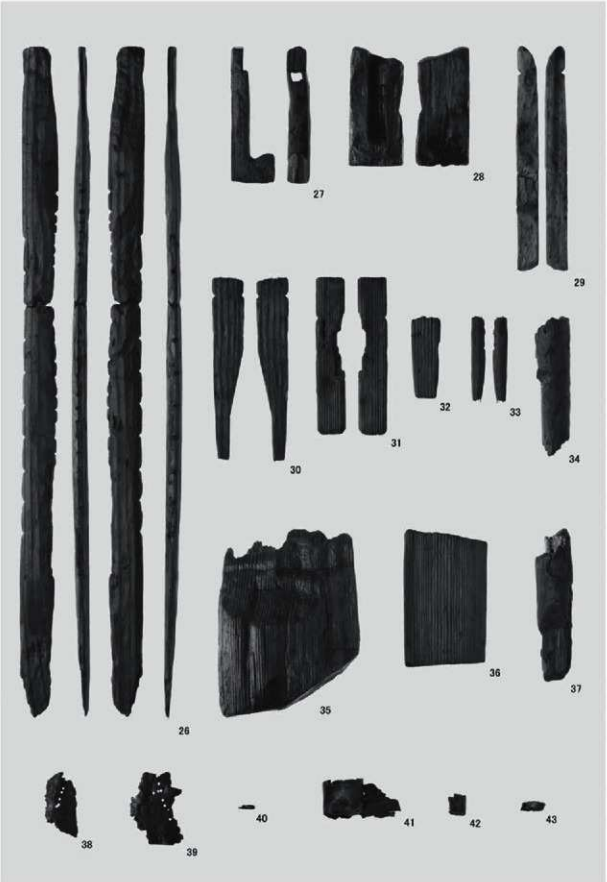


木製品等(4)



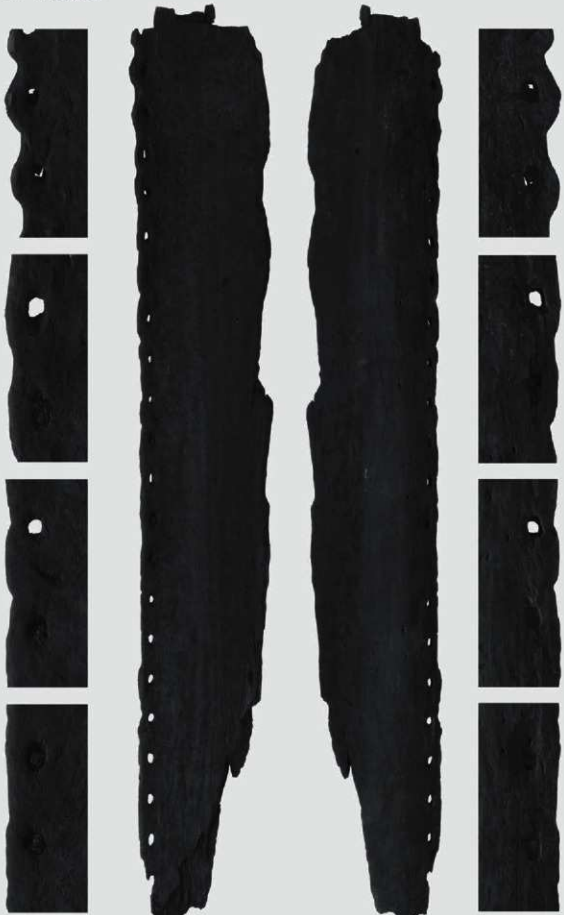
木製品等(5)

図版 44



木製品等(6)

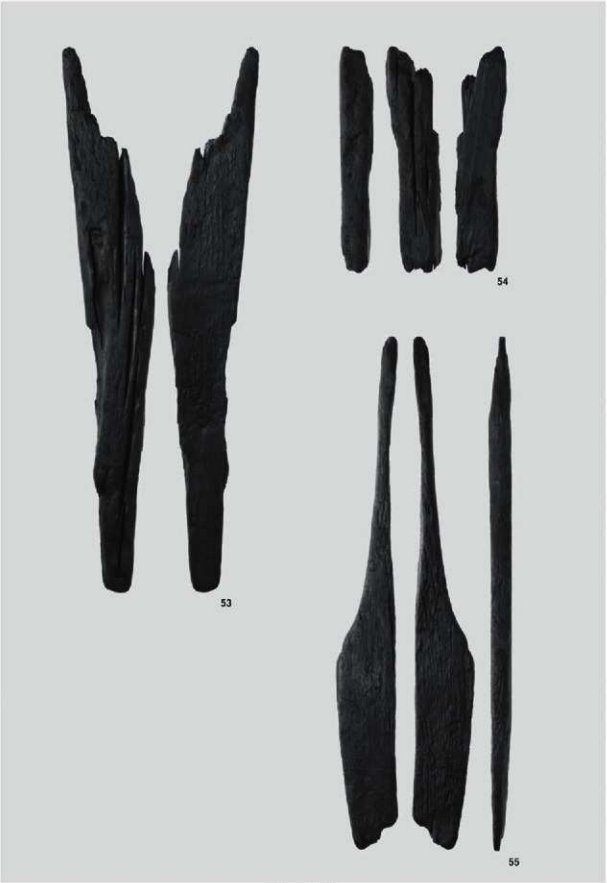
D14-1木製品集中



52

木製品等(7)

図版 46



木製品等(8)

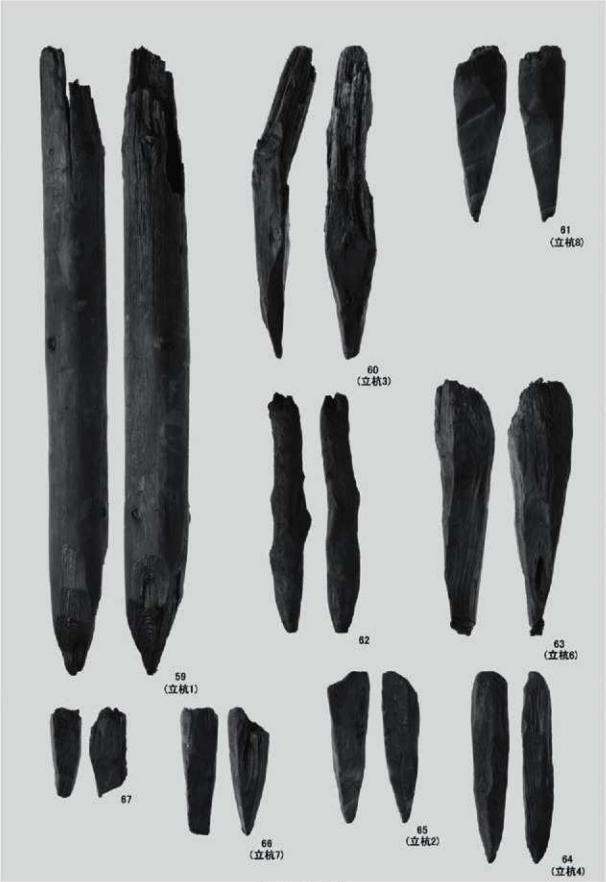
56

57

58
(立杭5)

木製品等(9)

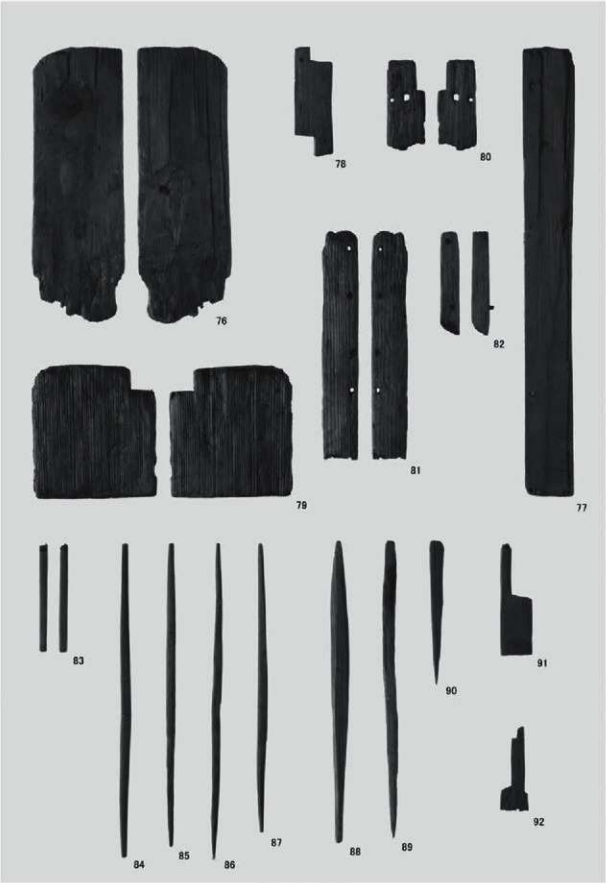
図版 48



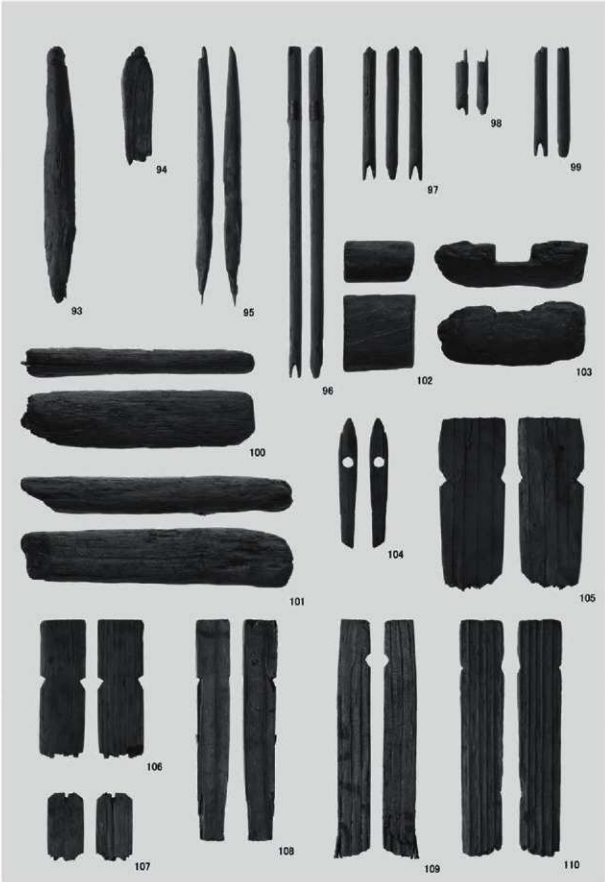
木製品等(10)

木製品等(11)

図版 50

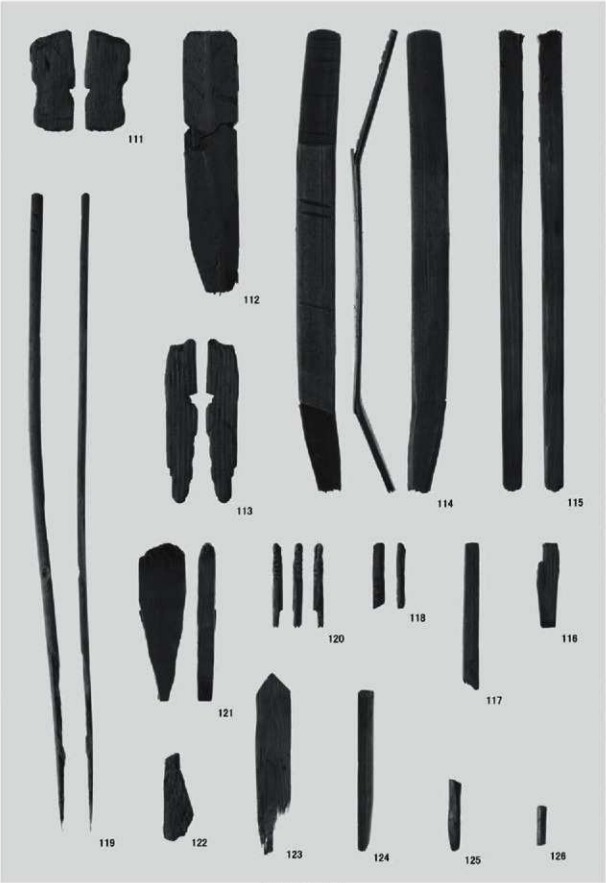


木製品等(12)

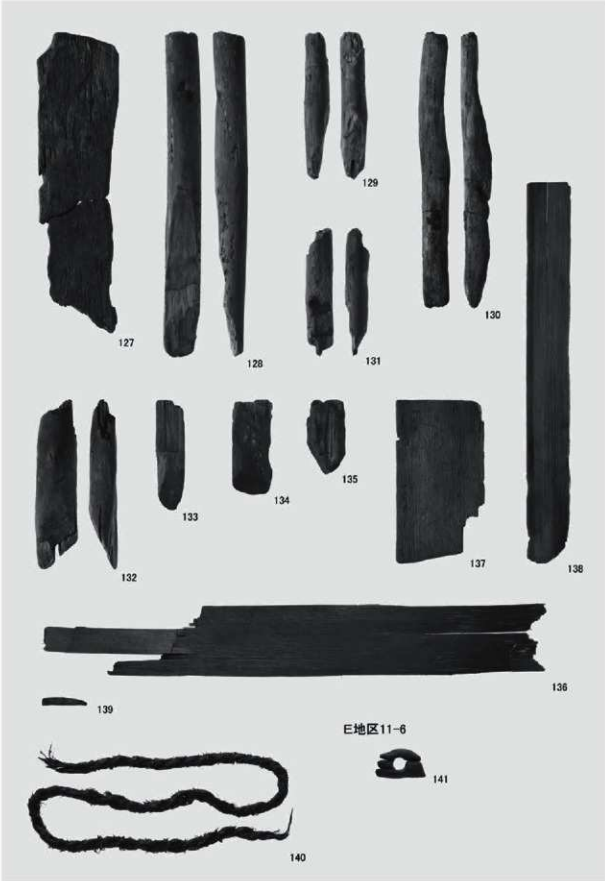


木製品等(13)

図版 52

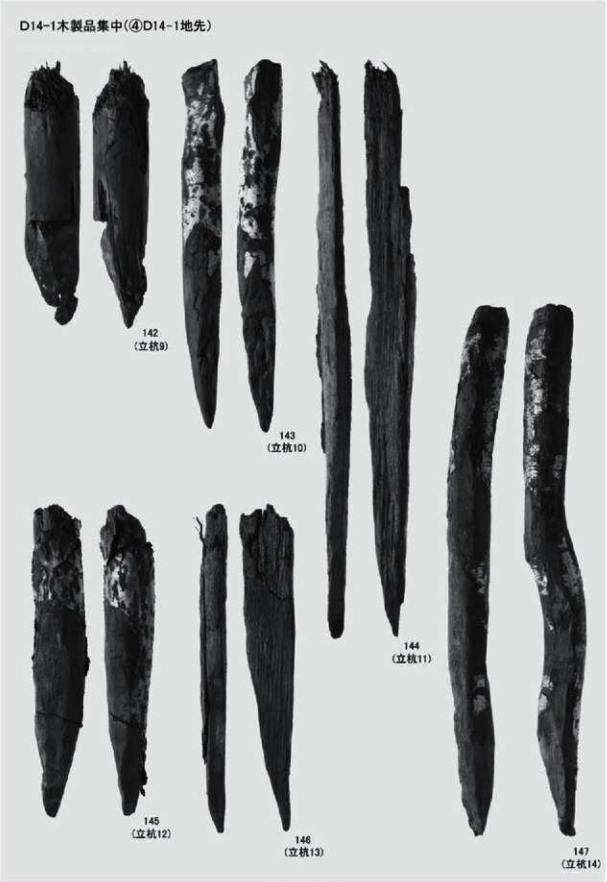


木製品等(14)

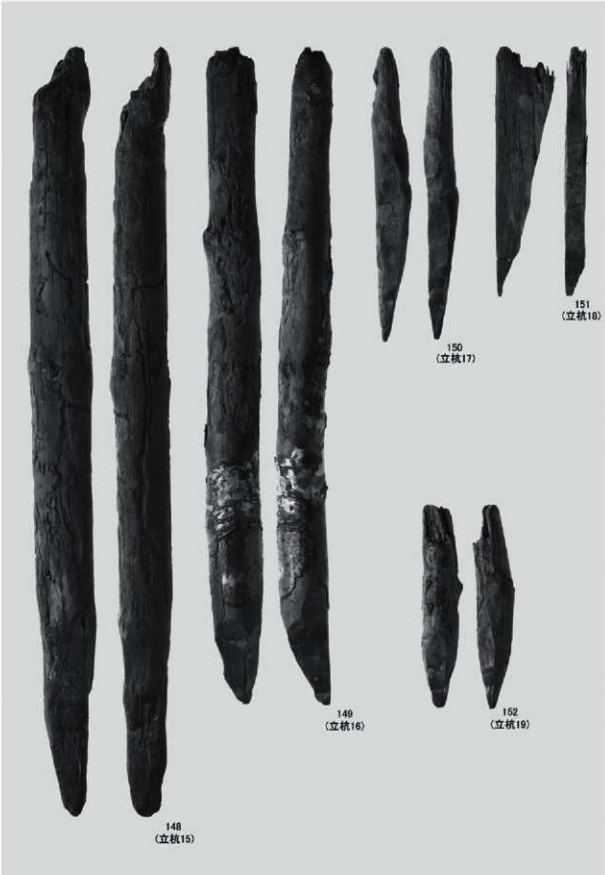

127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
E地区11-6
140
141

木製品等(15)

図版 54

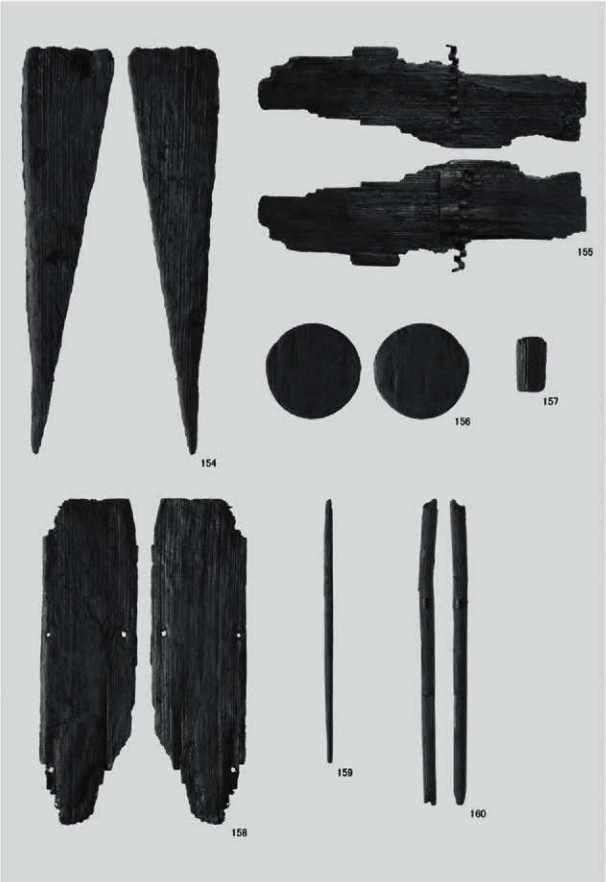

D14-1木製品集中(④D14-1地先)
142
(立杭9)
143
(立杭10)
144
(立杭11)
145
(立杭12)
146
(立杭13)
147
(立杭14)

木製品等(16)



木製品等(17)

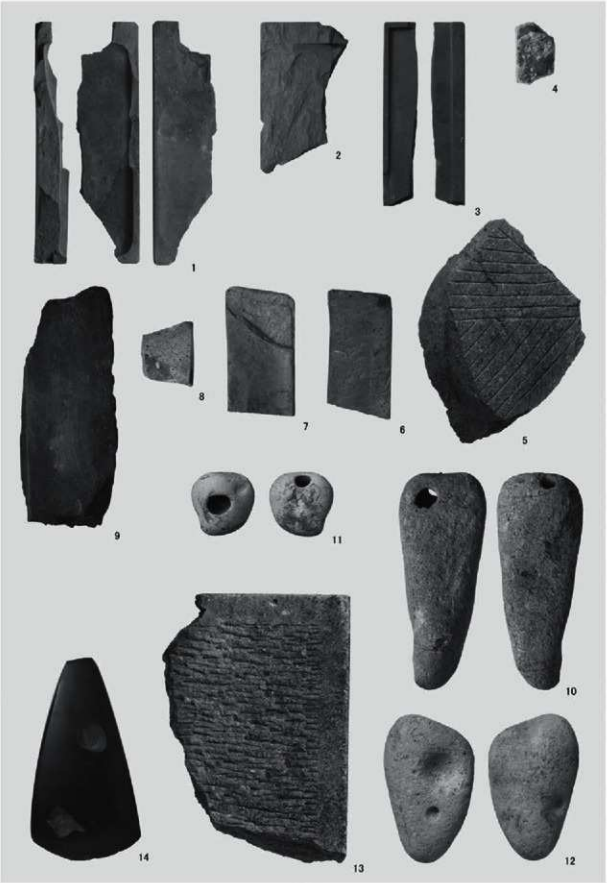
図版 56



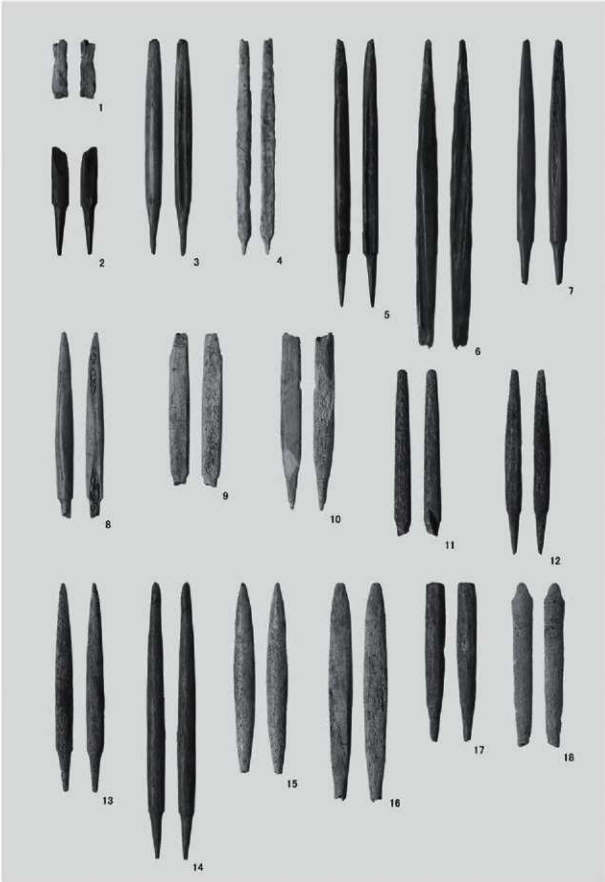
木製品等(18)

木製品等(19)

図版 58

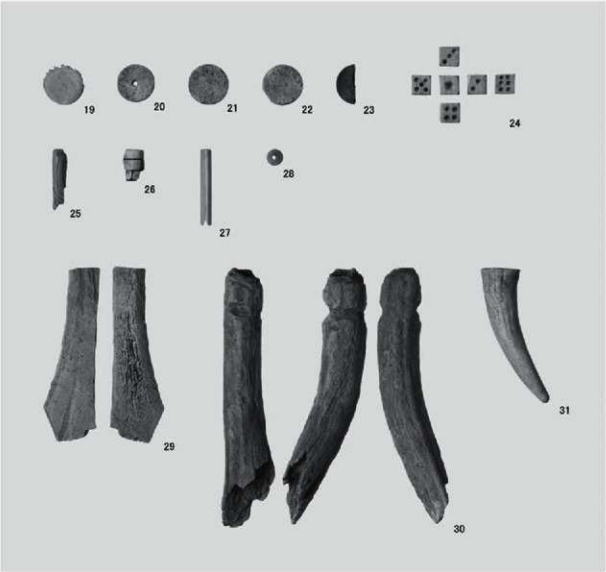


石製品



骨角貝製品(1)

図版 60



骨角貝製品 (2)

報告書抄録

ふりがな	まつまえちょう　ふくやまじょうかまちいせき(2)
書　名	松前町　福山城下町遺跡(2)
副 書 名	松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)
シリーズ番号	第377集
編者者名	新家水奈　菊池慈人　鈴木　信　立田　理　中山昭大　福井淳一　山中文雄
編集機関	(公財)北海道埋蔵文化財センター
所 在 地	〒069－0832　北海道江別市西野幌685番地1　TEL(011)386－3231
発行年月日	西暦2024年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	調査原因
ふくやまじょうかまちいせき 福山城下町遺跡	はっぷいどうまつまえぐん 北海道松前郡 まつまえちょうあかかつ 松前町字唐津 10-5・11-6・11-7・11-8・12・13-2・14-3・15-3・15-4・17-2・18-4・19-2・88-2・89-2・90-2・91-2・92-2・92-4	01331	B-02-029	41°25′37.5″ SP1700	140°06′21.1″	20220512～20220930 20230703～20230929	1,385	記録保存調査 (松前港線改良工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福山城下町遺跡	集落跡	中世・近世	石積1、 礎石18、 石列1、 柱1、 炉3、 溝1、 土坑42、 掘込9、 火事場整理穴1、 鍛冶関連 遺物集中1、 磁器片集中1、 木製品集中2、 立杭22、 柵1	陶磁器 金属製品 金属生産関連遺物 木製品 石製品 骨角貝製品 ガラス玉 動物遺存体	くぼ地や沢状地形から出土した16世紀中葉・後半～17世紀初頭の木製品を中心とする遺物、17世紀前葉の火災跡からまとまって出土した瀬州窯系磁器の破片、ねずみ鋳鉄破片を伴う18世紀前葉の炉と、金微粒子等が付着した坩堝を伴う18世紀前葉の炉、19世紀後半の火事場整理穴から出土した陶磁器をはじめとする大量の遺物。

要　約

発掘区は福山城跡から南西へ300～400m、松前町字唐津を通る道道松前港線（旧福山街道）沿いに位置し、福山城下町のうち、唐津内町とよばれた町人地の一部にあたる。令和4・5年度にわたる調査の結果、遺構は石積、礎石、炉、土坑等を104か所検出し、遺物は陶磁器、金属製品、木製品、石製品、骨角貝製品、ガラス玉、動物遺存体等が合計で約3万5,000点出土した。主な成果として、くぼ地や沢状地形から出土した16世紀後半～17世紀初頭の木製品を中心とする遺物、17世紀前葉の火災跡からまとまって出土した瀬州窯系磁器の破片、18世紀前葉の炉に伴う金属製品生産に関連する資料、19世紀後半の火事場整理穴から出土した大量の遺物が挙げられる。木製品には、漆塗椀、曲物、植側板、下駄等の和産物や、アイヌ文化に特徴的な板綴舟の舟敷の一部、挿酒器等があり、それらとともに出土した陶磁器、骨角製の矢中栓、動物遺存体と合わせて、城下町建設以前の松前の様子を研究するうえで重要な資料である。一方、瀬州窯系磁器や金属製品生産に関連する資料は、17～18世紀の唐津内町における商人・職人の活動を具体的に示すものとして注目される。また、火事場整理穴から出土した陶磁器をはじめとする大量の遺物は、19世紀後半の唐津内町における町人の暮らしぶりをうかがわせる興味深い資料と言える。

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第377集

松前町　福山城下町遺跡(2)

―松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書―

令和6(2024)年3月27日

編集・発行　公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　北海道江別市西野幌685番地1
TEL　(011)386-3231　　FAX　(011)386-3238
URL　http://www.domaibun.or.jp/
Email　mail@domaibun.or.jp

印　　刷　株式会社北海道機関紙印刷所
〒006-0832　札幌市手稲区曙2条3丁目2-34
TEL　(011)686-6141　　FAX　(011)676-6684